

論文

1 讀離騷

嗚乎。傷哉。讒人罔極也。屈原之事君也。可謂忠矣。而讒人間之。遂沈汨羅。余讀離騷。其辭悽愴而怨。其言婉雅而憂。呼天一聲。心腸寸斷。不覺流涕交頤也。凡人處順境也易。處逆境也難。如原之所處。可謂極難矣。而論者或曰不必死。或曰其死也遲。何論之容易也。噫嘻嗚呼。原之胸懷。誰語誰明。當時之人。誰知之者。後世之人。誰知之者。吁乎。嗟乎。可哀矣哉。余少也孤。落魄於彼。飄泊于此。飽歷世路之峻層。屢遇人情之反覆。當患難迫身。苦辛切體。欲語無語。欲告無告。他人不知痛痒者。非唯不悲之。反謔浪笑傲。況原之苦辛。非余之比。自非身罹憂患。親嘗辛苦者。焉能知其胸懷乎。於戲。余生千載之後。讀離騷而悲之。誰復於千載之後。知予之所以悲。而悲之者嗚乎。

此篇係二十三歲作

釈文

離騷を讀む

嗚乎。傷しきかな。讒人（告げ口をして人を陥れる）は罔極（きわまりがない）なり。屈原之れ君の事なり。忠

を謂う可し。讒人にこれを問わずして遂に汨羅に沈む。

余は離騷を讀んで其の辭の悽愴して怨む。其の言婉雅にして憂いは一聲天を呼ぶ。心腸寸斷涕は頤

に交も覺えず流れる。凡人（普通人）順境に處し易しところ。逆境また難し處また屈原の所處の

如く。極難を謂う可し論ずる者は曰う必死せず。或は曰う其の死また遲しと、何んぞ論は之れ容易な

り。噫嘻。嗚呼。屈原の胸懷誰か語りて誰に明さん。當時の人誰が之を知る。後世の人誰が之を知

る。吁乎。嗟乎。哀しむ可し。余は少きより孤なり。魄を彼において落さん。泊るこれ飄りて。

歷世峻層（山の峻しいさま）に飽き、屢ば人情の反覆に遇い、患難（憂い、悩み、難儀）身に迫るに當り苦辛切

にして體語らんと欲するも語無く、告げんと欲するも告る無く、他人に痛痒（痛みと痒み）は知らず。唯

だ之を悲しまずに非らずしまずに（悲しむ）。反讒して浪笑傲るも、況んや屈原の苦辛余の比に非らず、

非らずより身は憂患に罹り、親しく辛苦を嘗るは能く其の胸懷を知る。

余千載せんざいの後にも離騷りさうを讀んでて之を悲しむ。誰復た千載せんざいの後に。予之れを以て悲しむ所を知る。之を悲しむ嗚乎ああ。

（此篇二十三歳のものと推定）

〔解説〕

屈原（前三四〇 - 二七〇）は中国最初の大詩人。名は平へい、字は原げん。あるいは名は正則、字は靈均れいきんだとも云う。戦国時代の末、楚國の貴族の家に生まれ、懷王及び頃襄王けいじやうに仕えて三閭大夫さんりよ（昭、屈、景の三氏に司る）の官名になったが、讒言に逢つて放逐され、洞庭湖の辺りを流浪すること多年遂に絶望の果てに汨羅江へきわに身を投じて死ぬ。「楚辞」と呼ばれる朗誦体の詩は彼の創始になったもので後世の詩に絶大な影響を与えた。代表作は「離騷」「九歌」「天問」「九章」など。

「離騷」は憂いに遭う、あるいは別離の愁いの意。全篇九十三節、二千五百字に近い長編自叙伝詩である。

語釈

離騷りそう＝楚辞の編名、戦国時代、楚の屈原が王から信任されない憂いを述べたもの、離は罹、騷は憂いで、憂いにあうという意、一説に、追放された國から離れる憂いを述べたものという。嗚乎ああ＝感嘆詞。傷いたし哉や＝悲しく思う。讒人ざんにん＝告げ口をして人を陥れる。罔ぼう＝網、にんを束縛する、道理に合わないことを強いる。屈原くつげん＝楚の人、楚王の一族、楚辞の代表的な作者として有名。汨羅べきら＝屈原が身を投げて自殺した所。辭じ＝言葉。悽愴せいそう＝悲しみ傷む、寒さがひどく身に沁みる。怨えん＝怨む、恨めしく思う。婉雅えんが＝美しく淑やかで雅やか。憂ゆう＝憂う。心腸しんちやう＝心臓や腸。寸斷すんだん＝一寸刻み。流涕りゅうてい＝涙を流す。頤交いこう＝顎を振るわせて、顎をしゃくり上げる。順境じゆんけい＝順調な幸せな境涯。逆境ぎぎきやう＝逆に不幸な境涯。噫い＝嘆息の声、驚嘆の声。喟き＝感嘆詞、恨み悲しむ声。原げん＝屈原。胸懷きゅうかい＝胸中、胸の中の思い。吁う＝憂いのときの声。嗟さ＝感嘆または嘆き悲しむ声。魄はく＝魂、精神、人の肉体を主宰する陰の生気で、死後地上に留まる。飄ひょう＝風に吹かれ、ひらひらと漂う。歷世れきせい＝歴代の世。峻層じゆんそう＝峻しい山の層、厳しい。飽ほう＝飽きる。屢る＝屢々。人情にんじやう＝人の情け。反覆はふふく＝繰り返す。患難かんなん＝患う難儀。苦辛くしん＝苦さと辛さ、大変な苦勞。體たい＝身体。痛痒つうやう＝痛さと痒さ。反はん＝反対に。譁浪ぎやうろう＝戯れる、巫山戯る。笑傲せうたう＝あざ笑って威張る。患懼かんり＝病気に懼る、患う。辛苦しんく＝辛さと苦さ、大変な苦勞。嘗なめ＝味あつ、嘗て。戯たわむ＝戯れ＝おもしろく遊ぶ。千載せんざい＝千年。

2 讀隔靴論

詩曰。夷狄是膺。荊舒是懲。蠻夷猾夏。自古而然。々其毒天下。未有如洋夷之甚焉。夫洋夷之蠶食四方也。貪饕無厭。恃巨艦以猖獗。恃大礮而陸梁。耶教以誘之。財利以懷之。倏而來。忽而去。于西于東于南于北。無有定處。其為害。豈可勝數乎。是隔靴論之所以作也。滿清有洋夷之禍。自澳門居夷始。故首論之。蓋鹽氏之微意。於是乎可見矣。大抵庸人之情。苟且偷安。日又一日。及事成禍起。救之既晚矣。然則此僅々一小冊。關係天下大事者。不鮮少也。但恐讀者以為一場之談也。則為碧眼紅毛所辦其髮左其衽矣。

二十八歲作

積文

隔靴論を讀む かつからん よ

(隔靴論を讀む) かつからん よ

詩に曰う。戎狄是れ膺(征伐) じゅうてき 荊舒 けいじょ (荊は楚の國、舒は今の安徽省の辺りに在った國でどちらも周王朝初期には南方の異民族の國とされ

た）是れ懲す。蠻夷夏に狙つ（野蠻で悪賢い）。古より然り然るに其の天下に毒なる。未だ洋夷の甚だし
きたる如くに有らずとも夫れ洋夷の四方に蠶して食す。貪饕（凶悪者の例え）を厭する無し。巨艦を恃み以
て狙撃は大礮を恃みて陸梁（暴れ走り回る）耶教を以て之に誘う。財利は以て之を懷にする。倏に
して來たりて忽ちとして去る。西より南より北より東に、定處有りや無しや。其れ害を為す。豈數に
勝る可し。是れ隔靴論これを以て作す所滿清洋夷の禍有り。澳門（広東省に在る港都市でポルトガル領になっていた）
夷が始めて居してより。故にこの論が首まる。鹽氏の微意（聊かの心使い）是れ於てああ見る可し。大抵
の庸人（普通の人）の情は苟くも且つ倫安（一時のがれ）日又一日事成りて禍を起すに及ぶ。之を救うには既
に晩きかな。然れども此の僅々（僅かばかり）一小冊係わりて、天下の大事に關すること鮮少（少なくない）せ
ず。但だ恐れるは讀者を以て一場の談りとして。其の衽を左に其の髪を辮て碧眼紅毛を為すを。（洋
服を着て長髪を分けて西洋かぶれを怖れるの意）

二十八歳の作

語釈

詩^し詩^し終^{しゅう}。 隔^{かく}韓^{かん}論^{ろん}。 靴^{くつ}を隔^{かく}てる論^{ろん}。 夷^い狄^{てき}。 胡^こ、夷^い、戎^{じゅう}、外国人^{がいこくじん}を蔑^{めつ}視^しした言葉^{ことば}。 膺^{よう}。 征伐^{せいばつ}する。 荊^{けい}舒^{じょ}。 周^{しゅう}王朝^{わうてう}の頃^{ころ}の二^に国^{こく}、南方^{みなみかた}の異^い民族^{みんぞく}の國^{くに}とされていた。 懲^{ちやう}。 懲^{ちやう}りる、懲^{ちやう}らす。 蠻^{ばん}夷^い。 野蠻^{やばん}な夷^い狄^{てき}、外国^{がいこく}人^{じん}を蔑^{めつ}視^しした言葉^{ことば}。 猾^{かつ}。 口^{くち}の短^{たん}い犬^{けん}、脅^{おそ}す、懼^{おそ}れる。 洋^{やう}夷^い。 西洋^{せいやう}の夷^い狄^{てき}、西洋^{せいやう}人^{じん}。 蠶^{さん}。 蚕^{さん}のよう^{よう}に喰^くい散^{さん}らす。 貪^{どん}饕^{とう}。 貪^{どん}る、貪^{どん}り、欲^{よく}張^{ちやう}りて遂^{つい}に求^{もと}める。 厭^{えん}。 厭^{えん}、飽^あきる。 巨^{きょ}艦^{かん}。 巨^{きょ}大^{だい}な軍^{ぐん}艦^{かん}。 恃^し。 恃^しむ、恃^しみにして。 猖^{じやう}獗^{けつ}。 勢^{せい}いが盛^{さか}んで荒^あれ狂^{きやう}う。 大^{たい}礮^{ぱう}。 陸^{りく}梁^{りやう}。 暴^{ばう}れて走^{そう}り廻^{まわ}ること。 耶^{じや}教^{きやう}。 邪^{じや}な教^{きやう}え、邪^{じや}な宗^{そう}教^{きやう}。 懷^{かい}柔^{じゅう}。 倏^{しゅく}。 犬^{けん}が早^{はや}く走^{そう}るさま、忽^{いっ}ち、速^{すみ}やか。 豈^{あに}。 どうして、なんと。 滿^{まん}清^{しやう}。 滿^{まん}州^{しゅう}族^{ぞく}の清^{しやう}國^{こく}、清^{しやう}國^{こく}に充^みちる。 禍^か。 禍^かい。 夷^い居^い。 夷^い狄^{てき}が居^い住^ず。 蓋^{けい}。 思^{おも}うに。 鹽^{えん}氏^し。 微^び意^い。 僅^{わずか}かな意^い志^し。 大^{たい}抵^{てい}。 大^{たい}方^{ほう}。 庸^{よう}人^{じん}。 普^い通^{つう}の人^{ひと}。 凡^い人^{じん}。 澳^い門^{もん}。 アモイ、広^{くわ}東^{とう}省^{しやう}の都^と市^しにある港^{かう}の名^な、一^{いっ}八^{はち}七^{しち}年^{ねん}以^{もつ}来^{らい}ポ^ポル^ルトガ^ガル^ル領^{りやう}となつた。 苟^{こう}。 苟^{こう}も。 倫^{りん}安^{あん}。 秩^{しつ}序^{じょ}の安^{あん}定^{てい}。 晚^{ばん}。 遅^{おそ}い。 僅^{わずか}々^々。 非^ひ常^{じやう}に僅^{わずか}かな。 一^{いっ}小^{せう}冊^{さつ}。 一^{いっ}つの小^{せう}さな冊^{さつ}子^し。 一^{いっ}場^{じやう}。 その場^{じやう}限^{げん}り。 碧^{へき}眼^{がん}。 青^{あお}い目^め。 紅^{こう}毛^{もう}。 赤^{あか}い毛^{もう}。 衽^{じん}。 襟^{えり}、おくみ。 左^さ所^{じょ}。 左^さ側^{さく}。 辮^{べん}。 辮^{べん}髪^{はつ}。 清^{しやう}代^{だい}の男^{おとこ}子^この髪^{かみ}型^{がた}。

3 上青門先生書

某月某日。南部裕。再拜呈書青門先生下執事。先生今當要路。明良相遇。何欲不成致。君堯舜之上。何為難乎。小生幸生干明良相遇之時。欲學道行義。而不背名君崇天朝攘夷狄之精忠。立學弘道之道深意。是以不憚尊嚴。敢吐露情實。以祈先生之諒察。唯恐先生嫌無鄂々之風。而有唯々之態耳。頃者。官命繰連陳法。混洋夷法而用之。小生以為。雖卑賤如裕者。亦神州之民也。豈神州之民而為犬羊之奴隸可乎。夫吾君之所崇天朝也。天朝之所惡。所憾。所為。雖卑賤如裕者。亦神州之民也。豈神州之民而為犬羊之奴隸可乎。夫吾君之所崇天朝也。天朝之所惡。所憾。所為。所憾者。洋夷也。法其所惡。所憾。所攘之法。名其所惡。所憾。所讐。所攘者之名。公然而學洋夷。於義可乎。夫賤天朝之所賤者。惡天朝之所惡者。是崇天朝而敬吾君也。今也。重天朝所賤之洋夷以為師。學天朝所惡之洋夷以為法。棄我之服。服彼之服。變神州之風。化蠻夷之俗。無乃辱神州之國體乎。是以。苟學聖人之道。誦法孔孟者。當明聖人之道。以正華夷之分。而不甘為犬洋乃奴隸也。然則是崇天朝。而敬吾君。重中華。而抑夷狄也。夫若是乎。幾乎其為聖人之徒矣。此平生持此說。所以不立夷之下風也。及有今之命。以為。法夷此之法。名夷之名。以為犬洋之奴隸乎。則非道也。非義也。不崇天朝也。將不法夷之法。不名夷之名。不為犬洋之奴隸乎。則廢君命也。裕之進

退惟谷。因顧。君命固重。道義不輕。君命既重。天朝又重。不如以平生所持之說白官也。若以心之所不安者。阿諛順旨。是庸主之所不喜也。然則不獨以讒諂面諛之人自處。待名君以庸妄之主也。不敬莫甚焉。且名君良臣。不欲國中有阿諛無特操之人也。必矣。於是。十月廿四日。上書以辭入。綽練場學洋法。書達于今田君。君曰。忤旨或不可乎。龜尾文一。以君言告裕。裕曰。吾書辭無而意不達。吾今詳語吾意。夫人鼎鑪不可變者。道也。臨白刃不可易者。義也。苟離道棄義。則陷夷狄禽獸。故曰。道也者。不可須臾離也。有人于此。君命之曰。弑天子。天子不可弑也。弑天子非道也。君曰。殺而父。父不可弑也。父非義也。君曰。舍而所學聖人大中至正之道。學楊墨老佛天主之道。不可學也。學異端邪說非道也。由是觀之。非義非道。則雖君命。亦不可從也。然則天地自有一定之道。人物自有一定之義。天子不得不從焉。庶人不得不由焉。斯道也。則堯舜禹湯文武周公孔子之所傳。而吾之所學焉。尊周室而抑夷狄。春秋之法也。尊天朝而攘夷狄。神州之道也。故今學周孔者。當尊天朝抑夷狄。猶孔子之於春秋。痛正華夷之分。毫不假借也。孔子之作春秋也。諸侯用夷禮則夷之。今也不獨服夷服。法夷法。公然名夷名。曰西洋流。設使孔子筆于春秋。其謂之何。吾意。固非如火技者流。為洋和之辨。爭其長短也。欲正華夷之分。以行聖人之大道也。足下以吾言白今田君。君知吾欲行聖人之大道。豈不白官之理乎。方今良臣在上。如青門先生。則吾知其為人聰明公正。虛懷接

人。若吾言之是也。必喜曰。某之欲行古道也如此乃白吾君曰。某之欲行古道也如此。成其志以弘其道。吾君亦必喜曰。某之欲行古道也如此。不可使吾赤子為腥羶奴隸也。不得其當。雖十易之。不為病也。嚴然示華夷之分曰。禁學夷狄法然。則光明正大之道明乎上。而禮義廉耻之心興于下矣。若吾言之未盡善也。先生必哀其所不足曰。某之欲行古道也如此。不如白吾君成其志也。吾既知名君之志如彼。先生之為人如此。足下以吾言白今田君。豈有不白官之理乎。小生既告文一如此。又以為。吾上書揭大意。未悉其曲。不如以吾意詳白先生。先生察之。豈徒然而止哉。夫名洋夷名。法洋夷法。以華變夷。亂風俗。害名教。污神明之邦域。大略如向所陳。小生願終其說。伏惟。我神州開闢以來。未嘗受外夷之侮。而今及聖天子之躬。姦邪誤國。殆付社稷於犬羊。使神州坐陸沈宸衷之所憂。其苦痛何如也哉。苟為神州之民者。體宸意。敵王愾。痛哭流涕長大息。視洋夷猶讐敵也。而今之學洋夷者。公然名夷名。甘為犬羊之奴隸。恬不知恥。其亦何心哉。且也今之學洋夷者。以取長舍短為言。其言似公。實以成私。問其意則曰。彼器械精巧也。我不可敵也。夷不可攘也。不見毫有敵愾之意也。甚則遊說以稱彼美。使我士民生畏怖之心。故小生嘗曰。使吾在位。必自肅牆。何必碧眼紅毛而後為夷。夫學鄭聲者。其人必淫。好雅樂者。其人正。未聞操三弦其人不蕩者也。未聞學夷法其人不慕夷者也。是故。欲禁佛者。先人其人。火其書廬其居。而揭明道正教以道之。如此則可謂善

於禁佛者矣。苟不能如此。躬親簪其首。被袈裟。誦經。持念珠。戒人曰。雉髮省油梳。故吾取之。書則多奇言。故吾誦之。袈裟頗不俗。故吾衣之。念珠便下簪。故吾用之。如其道則異端也。不可用也。孰不笑其為亡人耶。故今之欲攘夷者。必先治根本。根本者何耶。人心是也。人心既夷。雖攘猶不攘。故不治根本而攘夷。猶追僧而不火經。夷之再來。幾何其不胥而為夷也。是故。今之治國家者。所宜先注心焉。危滿清洋夷之禍。非起於起之日。其禍已萌於康熙雍正之際。康熙雍正之際。唯知禁天主教。不知其他出於西洋者。一切禁絕之。故洋夷之邪說。暗壞人心。人心蠹蝕。既化為夷。其慕夷也久是以。及禍亂之起。一敗不支。朝廷雖有一二英傑如林則徐者。不能如之何耳。滿清覆轍。國家之所宜監焉。然則今之治國家者。如之何而化也。曰。其出西洋者。痛刈夷之。絕其本根。除其枝葉。正華夷之分。以明聖人之道。下令曰。西洋者夷狄也。覬覦之大賊也。神州之大讐也。服夷服。法夷法。名夷名。甘為羶之奴隸者。不敵王愾也。蔑天朝也。神州之民也。自今後。一切禁用夷法。苟下令如此。則華夷之辨。嚴然而立。人皆知夷之可賤可惡。而廉恥之心自生矣。既知廉恥。則人皆相語曰。吾神州是之民也。自有先王法服在。棄法服。服夷服。是叛天朝化夷狄也。神州自有神州陳法在。棄神州陳法。用洋夷陣法。是以華變夷也。且也以夷狄之名為名。公然語曰西洋流。甘為犬羊之奴隸。則污神明之邦域也。辱神孫之身體也。神州之身。而甘為犬羊之奴隸。神祖在

天之靈。其大州來攻。不足憂也。苟不能如此。用洋法。下令曰。彼服便操作。故吾用之。彼履利雨雪。故吾用之。彼陳法有寸長。故吾用之。為上者既棄我服。服彼服。屈膝犬羊。學彼法。低頭夷狄。講彼藝。靦然不愧。則為下者相告曰。西洋者夷狄也。而吾君師之。西洋者犬羊也。而吾大夫法之。西洋者天朝之大讐也。而君與大夫。皆師之法之。名讐名。名夷名。甘為犬羊之奴隸。君之與大夫之貴。旦不知恥。則吾儕小人。何所恥。如有洋夷來攻。全命而走耳。既已蔑天朝。而為彼奴隸。是無義無恥也。既已無義無恥。奉彼正朔固可。為彼屬國亦可。服彼服可。躡彼履可。學天主教亦可。弑君弑父。利于我。便于我。何所不為苟治國家者。棄禮義而貴便利。則其弊蔽。蓋乎此矣。是以。孟子之戒惠王。所以有上下交征利而國危之說也。是故。聖人之治國家也。必先正名明義。而勵之以廉恥。是以能使貧夫廉。懦夫立也。昔孔子忍渴於盜泉之水。曾參還車於勝母之間。皆惡其名也。古之聖賢。名之不美。猶且惡之。而今以神州之人。甘為腥羶之奴隸。吁亦可怪。且也今之洋夷。以奪人國家為事。蠶食四方不知厭。豈小盜哉。然則禁洋夷法。用神州陳法。則不立大盜大讐之下風。而名與義皆得宜。誰得而間然哉。夫國家之立陣法。宜正大。而不宜碎細。豈如洋夷碎細。而後為得矣哉。豈手足之所動。與鼓聲合。如娼妓舞。如俳優戲。飄々蕩々而後為得矣哉。且也兵機之妙。不可先傳。不在八陣也。不在六花也。如韓信者。驅市井小人。亦善戰。假使今之學洋陣者。精

鍊千日。豈能信驅市井小人者敵哉。設使孔明用六花陣司馬懿用八陳。孔明之勝也必矣。設使孔明用八陣。司馬懿用六花陣。孔明之勝也必矣。然則如孔明者。八陣亦勝。六花亦勝。如司馬懿者。八陣亦不能勝。六花亦不能勝。是知兵之勝敗。不在陣法之上矣。談兵拘々乎陣法器械之末者。未可與談兵也。然則今之立陣法者。欲正而大。名義皆正。而不使人立洋夷之下風也。若如是乎。則滅洋學之勢焰於將熾。迴神州之美風於既頹也。若熾洋夷之毒焰。以害神州之正氣。不獨神州之罪人。抑亦孔門之罪人矣。小生之持此說也久矣。先生如以此說為然。則白吾君。一洗腥羶之風習。振興神州之正氣。正華夷之分。人崇天朝如鬼神。賤洋夷如讐敵。然則聖人之正道自行。而洋夷之邪說無由入焉。嗚乎。如此乎。吾君之豐功盛烈。千歲垂青史。無愧古之聖王明辟矣。此則先生之所宜勉。而小生之所以有深望於先生也。若多掣肘者。先生亦不能如之何乎則使小生遂其志。善其身是祈。雖然。如獨善其身。則固非小生之所欲焉。唯冀先生勉旃。袷恐懼再拜。

元治元年甲子所作時年三十四

釈文

青門先生の書に上るたてまつ

某月某日。南部裕書す。青門先生下す執事げいを再び拜して呈す。先生は現在かなめ要の路に當りて。明良相遇めいりようあいあうは。何んぞ致すを成さざらんと欲す。君は堯舜ぎようしゆん之れ上りて。何んぞ難がたを為さん。

小生幸いここに明良相遇めいりようあいあうの時に生き。義を行い道を學ばんと欲す。名君に背かず天朝を崇めて夷狄を攘い精忠の學びを立てて道を弘め深意是れ以て尊嚴に憚らず。敢て情實じようじつを吐露し以て先生の諒察りやうさつを祈す。唯だ恐れるは先生は鄂々がくがくの風唯々の態ていに有して。頃者けいしゃ。官命練りて法を陳べて繰つり。

洋夷の法に混まぜてこれを用う。小生以て為さん。卑賤ひせん裕如きと雖も。亦た神州の民なり。豈あに神州の民犬羊の奴隸どれいの為に可ゆるすや。

吾が君の崇とつぶ所は天朝なり。天朝に悪しき所いか愾あたとなるところ攘はらうものは洋夷よういなり。法の悪しき所いか愾あたとなるところ攘はらうは法なり。名なのその悪しき所いか愾あたとなるところ攘はらうは名なり、公然と洋夷を學び、義に於て可ゆるすや夫れ天朝に賤いやししき所は賤いやしき。天朝に悪しきは悪しき。是れ天朝

を崇^{あが}めて吾が君を敬^{うやまつ}うなり。今また。天朝に賤^{いやし}しき所の洋夷を重んじ以^{もつ}つて師^{おそめ}めるを為す。

天朝に悪しき所の洋夷を學^{まな}びて以^{もつ}つて法と為す。我の服を棄^すてて彼の服を服^きて、神州の風を變えて、

蠻夷^{ばんい}の俗^{なづ}わしに化^{みな}す、無^{すなわ}して乃^{すなわ}ち神州の國體を辱^{はずかし}める苟^{いやく}も聖人の道を學^{まな}び。誦^{こうもつ}えて法は孔孟の

當に聖人の道を明^あす、以^{もつ}つて華と夷を分けて正し、犬洋の奴隸の為に甘んぜずは。然して則^{すなわ}ち天朝を

崇^{あが}め。吾が君を敬^{うやまつ}まい中華に重ねて。夷狄をそもそも。是^{こゝ}れ若^{ともが}き聖人の徒^{ともが}の為にそれ幾^{こゝ}う。此^{こゝ}れ

平生此の説を持^もつてるところ。以^{もつ}て洋夷の下風に立たず所なり。今の命^{いのち}有りて及び以^{もつ}て為^なす法の法

名は夷の名以^{もつ}て犬洋の奴隸則^{すなわ}ち道に非^{あら}ずなり。義に非^{あら}ずなり。天朝を崇^{あが}めずなり。將に夷の法を法と

せず。夷の名を名とせず。犬洋の奴隸に為^なさず。則^{すなわ}ち君命を廢^{すた}れるなり。裕のこれ進退して惟^{おも}うに谷^き

まる。因^よて顧^みみる。君命は固く重く。道義輕からず・君命既に重し。天朝は又た重し。以^{もつ}て平生の持

す所の説に如^しかずはここに官なり。若^しし以^{もつ}て心の安んぜずところは阿諛^{あゆ}順^{しん}う旨^{しめ}は。是^{こゝ}れ庸主^{ようしゅ}の喜ばず

所なり。然^{しか}するに則^{すなわ}ち諂^{てん}面^{めん}諛^うを讒^{そし}るは人の自^{みづか}かの處名君を待^{まち}し以^{もつ}て庸妄^{ようわ}の主なり。敬^{うやまつ}まわす甚^{こゝ}だ

しき莫^なれ。且^{かつ}つ名君良臣國中阿諛^{あゆ}あるを欲^ほせず特^{とく}繰^{そう}の人無^{みな}し必^{かならず}ずや是れより十月廿四日上書を以^{もつ}て以

て辭とし洋法を學ぶ繰練場に入る。

書をここに達して今田君曰く。旨に忤い或は可からずや。龜尾文一以て君は言い裕に告げて言つ。

裕曰く。吾が書辭蕪してを達せず。吾れ今詳しく吾が意を語る。夫れ鼎鑊に入れて變るは可からず

道は白刃に臨み易きは可からずは義なり。苟も道を離れ義を棄てて則ち夷狄に陥つは禽獸なり。

故にこ道なりは須臾も離る可らず。人有りて此れを君の命に曰く。天子弑して道に非ざるなり。

曰く父を殺して父を弑すは可からずなり。父を弑すは義に非ずなり。君に曰く舎は聖人大中正の道

を學ぶ所にして。楊墨老佛天主の道を學ぶ。學ぶは可からずなり。異端の邪說道に非らずを學ぶなり。

是れ由に之れ觀にて義に非ず道に非ず。則ち君命と雖も亦た従うは可からず。然り則ち天地自から一

定の道に有り。人物は自から一定の義有り。天子ここに従はずを得ず。庶人ここに由とせずを得ずと

も。斯の道なり。則ち堯舜、禹湯、文武、周公は孔子の傳つ所。吾れにしてこのここに學ぶ所周室

を尊ぶは夷狄を抑えて。なお春秋の法なり。天朝を尊び夷狄を攘うは神州の道なり。故に今の周孔

に學ぶは。當に天朝を尊び夷狄を抑えて猶お春秋よりの孔子の痛く華夷を分けて正し。毫して借り

は假にもぜずは孔子の春秋に作りなり。

諸候則ち夷の夷禮を用いて。今獨りならず夷服を服て法は夷法を公然と夷名を名し。曰く西洋流はと春秋に孔子の筆をして設け、それ謂うにこれ何んぞ。吾が意に固く火も技も流すの如きに非ず。洋和の辨えを為し。其の長短を争つなり。華夷を分けて正さんと欲す。以て聖人の大道を行なうなり。足下以て吾は言うを今田君に白す。君は吾が行わんと欲すを知らん聖人の大道豈白す官の理有らん。方に今良臣上る在り。青門先生の如く。則ち吾れ其の人の聰明公正を為すを知る虚懐人に接し。若し吾が言の是なるは必ず喜びて曰く。某は古道を行なわんと欲するは、此の如し乃ち吾が君に白して曰く。某の古道の行なわんと欲すなり此の如き。其の志を以て其の道に弘きを成す。吾が君亦た必ず喜びを曰く某は古道を行わんと欲すなり此の如き。腥羶の奴隸に為すは吾れ赤子を使しても可からず。其れ當に得られず十たび之れ易きと雖も病を為さず。嚴然と華夷の分るを示しここに。夷狄法を學ぶを禁じて然り則ち光明正大の道明らかにすることを上る。

禮義廉耻の心興りてここに下す。若し吾れの言未だ盡さず善きなり。先生必ず其の所に哀しみ足ざる

を曰く。某はその古道を行なわんとを欲すは此の如き。吾が君に白すに如かず其の志を成す。吾れ既に名君の志彼の如きを知る。先生これ人の為に此の如く。足下以て吾れは言う今田君に白す。豈官の理を白せず有り小生既に文にして告ぐ一たび此の如く。又た為を以て吾れ上書して大意を掲げ未だ其の曲りを悉さず。如かず以て吾が意を詳しく先生に白す。先生之れを察して豈徒然止まる哉。夫れ洋夷の名に名す法は洋夷の法華を以て夷に變じ。風俗を亂し害して名す神明の邦域を汚す。大略陳る所に向うが如し小生の願ひ其の説に終る。伏て惟れ我が神州開闢以来未だ嘗て外夷の侮を受けず。今に聖天子の躬に及んで姦邪國を誤り。殆ど社稷は犬羊に付す。神州坐して陸沈使しむ宸衷の憂る所。其の苦痛何如なり哉。苟も神州の民を為すは宸意を體し。王に敵するを愾り痛哭流涕長く大息す。當に洋夷猶お讐敵なるを視る今、洋夷を學び公然と夷名を名し。甘んじて犬羊の奴隸と為るを恬んじて恥を知らず。其れ亦た何んたる心哉。且つまた今この洋夷を學ぶは。長い舎を取して短かく以て言を為す。其の言は公を以て實に私す。其の意に問うは則ちここに彼の器械精巧なり。我が敵なるは可からず。夷攘は可らずなり。毫も敵愾の意の有るを見ず。甚だ則ち遊説以て

彼は美なるを称す。我が士民畏怖の心を生じせしむ、故に小生嘗て吾をして在位攘夷必ず蕭牆より
何んぞ必ず碧眼紅毛後にして夷を為す。夫れ鄭聲を學ぶは其の人は必ず婬、雅樂を好むは其の人を必
ず正し未だ聞かず。三弦を操る其の人は蕩せずと未だ聞かず。夷法を學ぶ其の人の夷を慕はずと。是
れ故に佛を禁ぜんと欲す先人其の人。火してその書其の居は廬、明道正教を掲げて以て之れを道とし。
此の如く則ち謂う可し善き佛を禁るより。苟も此の如くは能はず。躬は親の其の首を髡りて。袈裟
を被い。經を誦え念珠を持して人を戒めてここに。雉髮油を省いて梳る。故に吾れ之れを取り書し
て則ち奇言多し。故に吾れ之れを誦えて袈裟頗る俗せず。故に吾れ之れ衣念珠便ち簍に下る。
故に吾れ之れを用いて。其の道則ち異端の如きなり。用いる可からず。孰れ亡人其の為に笑はず。故
に今之れ夷攘わんと欲するは必ず先ず根本を治め。根本は何耶。人心是なり。人心既に夷攘うと雖も
攘はず故に根本を治めず夷攘い猶お。火せずして僧を追う夷は再び来たりて。幾何其れ夷の為に胥せ
ず。是れ故に今の國家を治めるは先ず心を注いで宜しき所、焉んぞ滿清洋夷の禍起こすに非ず起る
日に於て。其の禍は康熙雍正の際に萌える。康熙雍正の際だ唯天主教禁ずるを知れ知らず。其の他

西洋より出ずるは一切之れを禁絶し、故に洋夷の邪説暗に人心を壊し人心を蠹蝕既に化して夷を為す。其の夷を慕う久しく是れ以て禍亂の起るに及ぶ。一たび敗れるを支えず。朝廷一二英傑を有すると雖も林則徐の如くは則ち之れ何んぞ能はずが如く。満清覆轍國家の監に宜しき所なり。然るに則ち今の國家を治むるは之れ何んの如きして可なるや、ここに其の西洋を出ずるは痛く夷を刈り。其の本根を絶して其の枝葉を除き華夷を分て正し以て聖人の道を明かし。令をここに下し西洋は夷狄腥羶の奴隸と為すは王愾敵せず。天朝を蔑にするは神州の民に非ず。今より以て後に一切夷法を用うるを禁じ。苟も此の如き令を下して則ち華夷を辨て。嚴然と立して人は皆夷の蔑可し悪しき可しを知れ。廉恥の心自から生じ既に廉恥知り則ち人は皆相語りてここに。吾れ是れ神州の民なり。自から先の王法の服が在るに有りて。法服を棄てて夷服を服て是れ夷狄に化けて天朝に叛らうものなり。神州自から神州の陳べる法の在るを有す。神州の陳べる法を棄てて洋夷の陳べる法を用うるは。是れ華を以て夷と變えるなり。夷狄の名を名して以て公然と号して、西洋流に甘んじて犬羊の奴隸と為す。則ち神明の邦域を汚し。神孫の身體を辱める。神州の人神孫の身を甘んじて犬羊の奴隸と為す。

神祖^{しんそ}在りて天の靈其れ是れ何を謂^{おも}う、相戒めて犬羊の奴隸に為すを以て恥と為す、則ち自から固め國脈自から盛んになる、則ち五大州挙げて来攻は憂えるに足らず。苟も此の如きに能わず洋法を用うる。令^{おきて}を下しここに彼服操作して便^{すなわ}ち故に吾れ之れを用うる。彼の履^{くつ}は雨雪に利して故に吾は之れを用いて。上^{たてまつる}るを為すは既に我が服を棄て。彼の服を服^きて屈して犬羊に膝し。彼の法を學び頭を夷狄に低れて彼の藝を講じ。覩^{てんぜん}然として愧^{はじ}ず。則ち下者に為る。相告てここに西洋は夷狄なり。吾が君これめる西洋は犬羊なり。吾れ犬羊の法に西洋は天朝の大讐なり。君は大夫と共に皆之れ師^{おそ}め之の法讐名に名し。夷名に名して甘んじて犬羊の奴隸に為す。君の大夫と之れ責^{あした}び旦に恥を知らず。則ち吾が儕^{ともがら}は小人何れも恥る所。洋夷来攻有するが如きは。命を全^{まっとう}して走のみ。既に己に天朝をに蔑^{さげ}すまして彼の奴隸に為す。是れ義無く恥無く既に己に義も無く恥も無い。彼の正朔に奉ず固^{こか}可彼の屬國と為すも亦た可なり。彼の服を服^きて。彼の履^{くつ}を躡^はいて可なり。天主教を學ん可なり。君を弑^{しい}して父を弑^{しい}して。干^{かんが}我に利、干^{かんが}我便^{すなわ}ち何する所を為す。

苟^{いやく}も國家を治むるに禮義を棄て便利を貴ぶは。則ち其の弊蔽^{へいへいふた}蓋をしてここに至る。是れ以て惠王孟^{けいおう}

子の戒め^{いまし}上下交りて利を征^とる。國危の說以て有する所是れ故に聖人の國家を治める、必ず先の名を正し義を明し。之れに勵み廉恥^{れんち}を以て是れ能く貪夫廉^{どんふれん}を使しむ懦夫^{だふ}は立つなり。昔孔子^{こうし}渴いて盜泉^{とうせん}の水を忍び。曾參^{そうさん}は車にて勝母^{しょうぼ}を間に還えす皆其の名を悪^あしきなり。古の聖賢^{せいけん}之の名美せず。猶お且つ之れは悪^あし。今神州の人を以て甘んじて腥羶^{せいせん}の奴隸に為す。吁亦た怪しむ可し且つ今の洋夷人の國家を奪い以て事と為す。食四方に蚕して饜^あきるを知らず、豈小盜^{かな}哉然るに則ち大盜大讐の下風に立たず、名は義と皆宜^{ただ}しく得る誰れ而て間然^{かんぜん}哉。夫れ國家の法を陳べて立ち正大に宜^{ただ}す。碎細^{さいさい}は宜^{ただ}しからず。豈洋夷を碎細^{さいさい}の如く後に得るを為す哉。豈手足の動く所鼓聲と合して娼妓舞^{しょうぎ}の如し。俳優^{はいゆう}の戯れの如し。飄々^{ひょうひょう}蕩々^{たうたう}として後に得るを為す哉。且つまた兵機^{へいけい}の妙先に傳つる可からず。八陣に在らず。六花に在らず。韓信^{かんしん}の如くは市井^{しせい}小人^{こじん}を驅ける亦た善戰する。假に使しむ今の洋陣を學ぶは精鍊千日豈能く信^{しん}の市井^{しせい}小人^{こじん}は敵者^{かな}哉。設して孔明^{こうめい}六花の陣を用う司馬懿^{しばい}八陣を用う。孔明^{こうめい}の勝なるは必ずや説いて孔明^{こうめい}八陣を用う。司馬懿^{しばい}六花の陣を用う。孔明^{こうめい}の勝なるまた必ずや。然り則ち孔明^{こうめい}の如くそれ。八陣は亦た勝つ。六花は亦た勝つ。司馬懿^{しばい}如くそれ。八陣は亦た勝つ能はず。六花は亦た勝つ能

はず。是れ知る兵の勝敗を知る陣法の上に在せずや。兵を談り拘えて陣法の器械の末に拘まるは兵を談るに可からず。然して則ち今の陣法に立ちては正に大ならんと欲す。名義皆正にし洋夷の下風に立ちて人を使しめず。若し是れの如き則ち洋學の勢焰將に熾んなるより滅す。

神州の美風を既に類れ廻るなり。若し洋夷の毒焰に煽られて以て神州の正氣を害い。獨りならず抑そも亦た孔門の罪人なり。小生此れ説を持して久しきや。先生此の説然りと為して以て則ち君ここに腥羶の風習を一洗興して神州の正氣を振り正に。華夷を分けて使して人の天朝を崇び鬼神の如き。洋夷を賤さは讐敵の如し。然るに則ち聖人の正道自から行ない。洋夷の邪説を由無く入れられぬ。

嗚乎。此の如き。吾が君の豐功盛烈は千歳の青史に垂る。古の聖王辟に愧る無し。此れ則ち先生の勉むるを宜しき所、小生これ先生よりの深望有し以ての所、若し掣肘多く先生亦た何んぞ之の如き則ち小生其の志を遂し使めて。獨り其の身に善く則ち固く小生の所に非らず欲せんとす。唯だ冀わくは先生旃に勉められん。裕恐懼して再拜す。

元治元年甲子所作時年三十四歳

語釈

執けい＝ひざまずいて。勢せいい、植うえる。葬さう舜しん＝堯と舜の二帝あり人徳広く天下に行われた。情じやう實じつ＝実状。諒りやう察さつ＝推察し了解する。鄂がく々く＝率
 直に意見を述べて論争する。卑ひ賤せん＝身分の低いやしい。豈あに＝どうして、ねがう。奴どれい隸れい＝しもべ、下男、昔戦争で捕虜になったり、刑罰を受けたり売買
 されたりして、自由を認められず強制労働をさせられた人。崇あがめ＝崇拜、敬つ。愾き＝ため息、いかる。讐しやう＝仇、敵。攘じやう＝払う。洋やう夷い＝西洋の胡、戎
 夷。賤せん＝いやしい。蠻ばん夷い＝野蛮な胡、戎、夷。辱はづかしむ＝屈辱。苟いさしくも＝かりそめにも、もしも、いささか。孔くわん孟めい＝孔子と孟子。谷こく＝谷、窮まる。阿あ諛ゆ
 ＝おもねり、へつらう、こますり。順じゆん旨し＝趣旨に従う。庸よう主しゆ＝平凡な君主。讒ざん諂てん＝他人の悪口、告げ口を言つてへつらう。面めん談だん＝面と向かつておもねる、
 へつらう。庸よう妄わう＝平凡な嘘、出鱈目、妄りに。特とく繰く＝何時も固く守つて変わらない境。龜き尾び＝亀の尾。辭じ無む＝乱れて整わない言葉、自分の言葉や文章を
 謙遜して言ふ。鼎てい鑪ろ＝足の無い大釜、昔人の刑罰で釜ゆでにした。弑し＝臣や子が主君や、親を殺すこと、目下の人が目上の人を殺すこと。楊よう墨ぼく＝戦国時
 代の思想家とのこと、楊朱は個人主義、墨翟は博愛主義を唱えた。異い端たん＝正当でない教え、聖人の道でない別の学説。邪じや説せつ＝正道に背いた説。文ぶん武ぶ＝西
 周、春秋時代の文公、武公周公。孔こう子し＝儒学の始祖。周しゆう室しつ＝周の王室。春しゆん秋きゆう＝春秋時代。聰そう明めい＝聴いたり見たりすること、耳や眼が聡いこと、道理
 に明あきらいこと。公こう正せい＝社会の秩序を正す、公平に。虚きやう懷かい＝心に蟠りがないうこと。腥せい羶じやう＝生臭い。嚴げん然ぜん＝厳しいさま。禮れい義ぎ＝礼と義、人が実践において守
 る正しい道。廉れん耻ち＝心が正しく欲がなくて、恥を知る。悉しつく＝全て、皆。邦ほう域ぎ＝國境、国土の区域。開かい闢びやく＝天地の開け始め、世界のはじまり。嘗かつ
 ＝試みる、ひいて、これまでに、以前。姦かん邪じや＝よこしま、悪人。社しゃ稷しやく＝土地と五穀の神、古代のてんし、諸侯は、此の二神を宮殿の右に宗廟を左に祀
 り、国家の重要な守り神とした。陸りく沈しん＝陸地に沈む、人が世の中で姿を隠してること、世が乱れ亡びること、頑固で世の中の移り変わりを知らないこと。
 宸しん衷ちゆう＝天子の苦衷。宸しん意い＝天子の意志。痛いた哭く＝激しく嘆く、泣く。流りゅう涕てい＝涙を流す。長ちやう大だい息しつ＝大きなため息。毫ごうも＝少しも、僅か、細かい。畏い怖ふ＝
 畏れる、恐れ憚る。蕭しやう牆きやう＝門の内、垣根の内、身内。碧へき眼がん＝青い眼。紅こう毛もう＝赤毛。鄭てい聲せい＝周の一諸侯が建てた國で淫らな音楽が流行したので淫らの意
 に用つ。姪いん＝淫ら。雅が樂らく＝昔の正しい音楽、上品な音楽。蕩たう＝しまりがないう、みだす、やぶる、おぼれる。廬ろ＝家。躬み＝身体、みずから。髡こん首しゆ＝頭を剃
 る、坊主頭、髪を剃り落とす刑罰。袈け裟さ＝僧衣、肩から懸けて衣の上を被つ物、法衣。誦じゆ＝唱える。念ねん珠しゆ＝念仏の時手にかける数珠。雉ち髮はつ＝髪型。油ゆ梳しゆ

髪を油で梳く。籌さし数取り、数を数える竹の棒。孰しやくいずれ。腥羶せいぜん生臭い。禍わざはひ禍。康熙こうし清朝第四代の帝。雍正ようせい正しく助ける、抱く、和らぐ。萌もへ芽生える。蠹蝕くしょく木喰い虫が蝕む、虫に喰い荒らされる。禍亂わざはひらん禍と乱れ。英傑えいけつ優れた人物。林則徐りんそくじょ清代の政治家。満清まんしん清國に満ちる、満州族の国家清國。覆轍ふくてつひっくりかえった車の車輪の跡、先に失敗したためし、失敗の先例のたとえ。監かん鑑みる、手本とする、良く看る。宜よしき宜しい。覬覦きぐん身分不相応のことを望み願う。蔑さげすむ蔑視。辦べん弁える。公然こうぜんおおつらに。神孫しんそん神の子孫。天子てんし天子。身體しんたい身体。辱じやく屈辱、辱め。神祖しんそ天子の祖先。覲然てんぜん平気で人を見る、厚かましい。愧はじ恥。儕さいともがら、仲間。履躡ひんじう人の足を踏み付ける。弊蔽へいへい破れ隠す。蓋けだ思うに、なんぞ。惠王けいおう春秋時代の王。戒いまいめ訓戒。貧夫ひんぷ貧しい男。廉れん恥を知る、潔い。懦夫だふ意気地のない男、だめな男。渴かつ渴く。盜泉とうせん泉の水を盗む。忍しのぶ我慢する。曾參そうさん孔子の弟子、親孝行な人であつた。勝母しょうぼ曾參の母。閭りょ村の入り口、門。還かえす帰す。聖賢せいけん聖人、賢人。蠶食さんしょく蚕のように喰い荒らす。饜えん喰い飽きる。鼓聲こせい太鼓の音。娼妓しょうぎあそびめ、遊女、女郎。俳優はいゆう役者。戲ぎ遊戲、戯れ。飄々ひょうひょう風のふおくさま、彷徨い漂つ。蕩々とうとうとめどがない、ゆらゆらする、しまりがいい、みだす。韓信かんしん漢の高祖の臣、三傑の一人、股潜りで有名。市井しせいまち、市場、人の多く集まる処、庶民の住む処。驅く驅ける。司馬しば周代の官名で陸軍大臣。懿い立派に。司馬懿しばい仲達、西晋の高祖宣帝。拘々きうきう拘わるさま、好ましいさま、良いさま。勢焰せいえん炎の勢い。將しやうに正に、当に。滅めつす滅亡、亡くなる。熾し熾烈、盛んなさま。頽たい崩れる。迴かい巡る、廻る。毒焰どくえん悪い炎。煽あお煽動。抑おさも抑、抑える。孔門こうもん孔子の門下。崇あがめ崇拝、敬つ。明辟めいへき明君。愧はじ恥。豐功ほうこう勲功が豊富。盛烈せいれつ烈しく盛ん。千歲せんさい千年。掣肘せいちう邪魔にして人の行動を妨げる。冀きこいねがつ。旋せん周旋、斡旋。恐懼きようくおそれる、畏れかしこむ。

4 贈鹽谷古侯叙

惟文久三年。癸亥春正月監察鹽谷君古侯。將從公駕之京師。其友南部裕。贈之以文。曰。昔者文王之興鴻業也。地方百里。而三分天下。以有其二。其何為而然哉。詩曰。關々鳴鳩。在河之州。窈窕淑女。君子好逑。言先正其家。而後及天下也。然文王固未嘗為得天下。而脩其德也。曰。民吾赤子也。不可使吾赤子凍餒窮乏也。而吾國家。是天之命也。可以忽諸。是以。敬天之至。愛民之深。邇者悅。而遠者服。皇天眷佑。誕受厥命。所謂。至誠感神者乎。固非齊桓晉文輩以力假仁。而僥倖霸業於一時者之比也。孔子稱為至德者。為此之故也。文王既沒。武王周公繼之。以聖人之道。以致郁々之盛。自時厥後。聖王不作。周室日衰。孔子常慨之。欲為東周。及其宰中都。一年而四方則之。何其功之速而大也。孔子不去魯。其王乎。措矣哉。厥後及孟子之時。周道愈衰。孟子憂之。常說時王以王道。曰。雖有知慧。不如乘勢。雖有鐵器。不如待時。々王不唯不能用之。反迂之。故不得行其道於當世。而止矣。亦可惜矣。夫自孔孟沒以來聖人之道益不明。霧霾乎三千年。以至于今日。可勝嘆哉。嗚乎。古侯今日之時。以為何如時耶。比文王之時。為如何耶。孔孟之時。為如何耶。先是。丙午之歲。我公在江都。召晚香鹽先生。々々盛談兵。且

曰。公觀鴻之臺乎。公曰未。先生曰。最可觀者。公之歸也。將觀鴻之臺左右皆以為是奇觀也。至焉則寥寥古址。茫茫荒草而已。人皆瞠若。嗚乎。先生之有望於我公。蓋深矣哉。孟子曰。豪傑之士。不待文王而興。況保尺寸之封。有尺寸之士者。脩文德。施仁義。如文王。則合宇宙。鞭撻九有。豈以為難哉。嗚乎。古侯果知先生之所以有望於我公乎。果知之。則知今之時何如時也乎。嗚乎。今之洋夷。猖獗亦甚矣。今其不攘。天下不出數年。其服左衽。而其言侏儻矣。加之。比歲々豐。而米價如玉。殆不異於大凶荒。如此則不有外患。必有內變矣。而今之天下。真知其可憂者。蓋少矣。凡今之治國家也。剝民肉。而屯民膏。棄仁義。而嚴法令。不過為商鞅李斯刑名法律之奴隸耳。然而自誇於得人焉。所為。則曰。富國也。強兵也。問其富國之術。則曰。填某海。得田何萬頃矣。某地種楮。得利何百鎰矣。於櫪。得何萬金。於漆。得何千金。於酒。於薪。於炭。於布。於木綿。一年之所征。吾不知其何億鎰也。問其強兵之術。則曰。鑄大砲小銃者何千。造利槍長劍者何萬。且命士人。各繕甲兵。其命令之嚴。一國之堅甲。期月而成矣。嚴命士人。學文鍊兵。其督責之急。克勤無怠。國既富矣。兵既鍊矣。器械既備矣。一旦有緩急。何敵不可勝。退而視其民。顏有菜色。口有怨聲。曰。彼大砲我之肉也。彼長劍我之膏也。視其士人。瞋目切齒。曰。賣吾廬。鬻吾器。典妻衣。奪兒服。而漸成此一鑿矣。其在鬻舍之內。講武之場。有司之前。則揚聲誦孔孟。說仁義。揮手舞劍。

怒臂撚槍。足之蹈。合敵聲。頭之搖。合鐘聲。及其歸家。則如飢鳥之逸籠。久囚之出獄。或取竿。釣于水。或提籃。米于山。或說財利。談聲色。口未嘗及名教節義之事也。嗟乎。如此乎。吾未保其不倒戈而賣降也。夫古之所謂。富國強兵者。非此之謂也。散鹿臺之財。發鉅橋之粟。是也。露臺惜百金之費。而數免租稅。是也。不憂漏屋。而喜炊烟之起。是也。書曰。予有臣三千。惟一心。是也。詩曰。赳々武夫。公侯于城。是也。故萬民富於下。則國君安於上。倉廩充于上。則萬民困于下。未有民富而君不富者也。未有國富而兵不強者也。夫國之貧富。在民之窮與否。而兵之強弱。在民之服與否。是故。古之所謂。富國者。非倉廩充府庫盈之謂也。百姓足之謂也。古之所謂。強兵者。非有一二武夫如關張者之謂也。萬民一心之謂也。是以。治國如文王乎。真所謂富國強兵也。然則古侯之事我君。宜如周公且召公奭大公望畢公榮公大顛閔夭散宜生南适之於文武。則富國強兵何難之有。國富兵強。萬民一心。則舉五大州來攻。亦何足為憂也哉。且哉。今之大憂大患。不必在外夷也。駕御失宜。天下之人皆敵也。今之刺貴顯者。不必在櫻田也。有姦而不察。有惡而不知。黨於姦。而私於惡。匕首其在古侯之前乎。然大姦如紫。大惡如莠。奪朱亂苗。最為難辦。古侯熟察諸。嗚乎。所謂大姦大惡。或在士民之中。亦未可知也。古侯熟察諸。其在士民。不知之。猶可也。其在亦未可知也。古侯熟察諸。其在士人。予之知。猶可也。其在屬官。亦未可知也。古侯熟察諸。其在屬官。

不知。不明亦甚矣。而猶可也。其在同僚亦未可知也。其在同僚。不知。則謂之瞽而可矣。古侯熟察諸。夫本正而未正。源清而流清。道之理也。故先正同僚之非。而後及屬官。則屬官亦服古侯之嚴明公正曰。官民之无私也。如此。則一國之人皆曰。古侯之嚴明也。如此。古侯之公正也。如此。我君之得人也。如此。則文王之化。自內而及外。自邇而及遠也。亦不過如此。則是古侯之以古之道事我君也。然則關鵬麟趾之化。行之於今日。亦不為甚難也。嗚乎。

古侯出而在萬里之外。一旦逢犬羊之無禮。則翼我君之神武。以一戰塵之。及其歸也。代我君之明。先察於同僚。而後及屬官。先察於大臣。而後及小民。正本而及末。清源而及流。排姦除佞。以誕發潛德之幽光。是予之所以望於古侯也。裕之於古侯。固非一朝一夕之交。故於其行也。

作詩以戒之。其辭曰。坦々古道。蒺藜塞之。赫々大陽。浮雲蔽之。戒哉古侯。小姦除之。戒哉古侯。小善稱之。明々君明。古侯代之。

時年三十三

釈文

鹽谷古侯に贈るの叙
しほのや じゆい

惟れ文久三年（一八六三）癸亥の春正月監察鹽谷君古侯將に公駕に従いて京師（京都）にゆく其の友南部裕
こ きがい かんざつしおのや こじう こじが きよつすい
之れを贈り文を以て曰う。昔は文王の鴻業を興す地方を百里を三に天下を分けて以て其の二を有し
ぶんわう じりやう
て、其の何んぞ為して然るかな、詩に曰う。

關々鵲鳩

關々たる鵲鳩は
かんかん づきぎゆう

在河之州

河の州に在り。
なかす

窈窕淑女

窈窕の淑女は
やうちよう しよくしやう

君子好述

君子の好述たり。
くんじ じうじゆ

解説 鵲鳩もず はとの和やかな鳴き声は、河の州なかすに聞かれる。密やかで美しく教養が有つて上品な婦人は、

君子の良き連れ合い（配偶者）となる、の意。

先ず言つ其の家を正しそして後に天下に及ぶなり。然るに文王は固より未だ天下を得るを為すに、嘗みずして其の徳を脩めて曰う。「民は吾が赤子なり」と「吾が赤子は凍餒窮乏に使む可らず」（凍え飢える、衣食にこと欠く）として吾の國家を治める。是れ天の命なり。以て忽諸（忽ち）す可し。是れ以て天を敬つるの至り。民を愛し之れを深め、邇き者の悦びとして遠き者は服う。皇天眷佑（上帝を佑け眷みる）誕りて厥の命を受けて、謂う所、至誠は神に感ずるは固より齊桓晋文を輩とし力を以て仁を假る。倖にして霸業（諸侯の旗頭になる）一時に於て僥す（幸いを願つ）はこれに比べると、孔子は稱して至徳を為すは、これを為す故なり。文王は既に没し、武王周公之れを繼ぐ。聖人の道を以て郁々の盛（文化の香の高いさま）を致す。時に厥の後聖王は作さず、周室日に衰う。孔子は常に之れを慨き、東周を為さんと欲して、中都其の宰に及ぶこと一年そして四方之れに則り、何んぞ其の功は速く大なる。孔子魯を去らず、其の王措おいて矣哉（どうしようもない）。厥の後孟子の時に及び、周道愈いよ衰えて、孟子之れを憂う。常に時の王を説き王道を以て曰う。知慧（身に備わった賢さ）有ると雖も、勢に乗らずに如かず。

鐵器（田を耕す道具）が有り、雖、時を待つに如かず。時の王之れを用うるに能わず、唯だ之れを用うるに能わず。反いて之れを迂け故に其の道當世に於て行うを得ず。止めるや亦た惜む可しや。夫れ孔孟没より以來聖人の道益ます明らかならず。それ以來三千年に雲霧（盛んに雨が降り水が流れる）として以て今日に至り。嘆くに勝る可し哉。嗚乎。古侯今日この時を以て何んぞ時の如くに為なさん耶。文王の時に比べ何んの如きを為さん耶。孔孟の時に比べ何んの如きを為さん耶。先ず是れ丙午の歲。我が公江都（江戸）に在りて、晚香鹽先生を召されて、先生盛んに兵を談る。且つ曰う。公は鴻の臺を觀て公は曰う未だ先生に曰う。最も觀る可し公は歸りて、鴻の臺を觀て將に左右皆以て奇觀（変わった眺め）を為す。ここに至れば則ち寥々（寂しく閑かな）としての古址茫々の荒草已にして人は皆瞠るが若し。嗚乎。先生の望みありて我が公が於て蓋深矣哉（如何んともし難い）。孟子曰く。豪傑の士は文王を待たずして興し況尺寸の封を保つ。尺寸の土は有りて文徳を脩め仁義を施して文王の如し。則ち宇宙に合し鞭撻九有（九流）。豈以て難を為さんかな。

嗚乎、古侯は果す望み有りて、我が公は先生の所を知る、果して之れを知り則ち今この時は何如

ん時なり。

嗚乎、今の洋夷猖獗甚だしき今其れ攘せず天下數年に出ず。其の服左衽にして其の言は侏僂（外国語の意味不明なこと）なり。之に加え比べ歳々豊かなり。米價玉の如く殆んど大凶荒に於て異らず。此の如き則ち外患に有らず。必ず内變に有りや。今の天下眞に其の憂つ可しを知れ蓋して少なや凡そ今の國家を治るなり。民の肉を剝り、民の膏を屯めて、仁義を棄てて法令は嚴しく、商鞅、李斯刑名の法律の奴隸を為すに過ぎず。然るに自から得るに於て誇るを問う。その為す所則ち曰う。富國なり。強兵なり。問う富國の術それ則ち、某海を填て田何萬頃を得る。某地に楮（楮紙の原料となる低木）を種え、利は何百鎰を得る（金貨の重さの単位、二十四兩）。櫨（櫨漆の木）に於ては何萬金を得る。漆に於ては何千金を得る。酒に於て。薪に於て。炭に於て。布に於て。木綿に於て。一年これ征く所。吾が何億鎰なるをそれ知らず。其の強兵の術を問う。則ち大砲や小銃は何千鑄る。利は槍に長剣を何萬と造る。且つ士人に命じて、各甲兵（鎧と甲）を繕う。其の命令の嚴しさ、一國の堅甲（利兵）期月にして成るや。嚴しく士人に命じ文を學び兵を鍊る。其の督責の急克く勤めて怠り無く、國は既に富み、兵既に

鍊り、器械既に備わり、一旦有緩急何んぞ敵に勝る可からず。退いて其の民を視る。顔に菜色有り、口に怨聲えんせいが有り。曰う。彼の大砲我が肉なり。彼の長剣ちやうけんは我が膏あぶらなり。其の士人を視れば目を瞋いからせ齒を切りて曰う。吾が廬ろを賣り、吾が器きを鬻ゆし。妻衣てんを典てん（質入れ）し、児服を奪うばいて漸く此の一盤きんを成す。其れ鬻舎いりや（校舎）の内に在り講武かうぶの場は司の前に有り、則ち聲を揚げて孔孟こうもうに誦よみつ。仁義じんぎを説き手を揮ふるつて剣を舞う。臂ひじを怒らせて槍ひねを撚ねりて、足之れ蹈ふみむ。鼓聲こせいに合せ頭之れ揺ゆぎ、鐘聲しゆせいに合せて其れに及んで家に歸り、則ち飢鳥きちようの籠かごを逸いつするが如し。久しく囚とらえられて獄ごくを出る。或は竿さおを取りて水釣すいちようをして或は籃かごを提たえて山に、米或は財利たうりを説いて、聲色こわいろを談る。口には未だ名に及んで嘗じうみず教節義きうせつぎの事。

嗟乎ああ。此の如き吾れ其の戈ほこを未だ倒さずまた保たず降して賣り。夫れ古の謂所は富國強兵之れ謂いうところ非らず。鹿の臺に財を散じ、鉅橋きよきやうの粟しよくに發つかす。露臺ろたい百金の費おしを惜おしむ、數々ばいばい是れ租税そぜいを免じて漏屋ろうおくを憂うれえず、炊烟すいえんの起るを喜び是れ書して曰う。予は臣三千有りて是せり。詩に曰う、
「きようきよう 起々の武夫ぶふ、公侯于城こうこうじうじやう」是れなり。故に萬民富下に於て、則ち國君安上に於て倉廩そうりん（米倉）干上かんじやう

(盾)に充て、則ち萬民干下(盾)に困しみ、未だ民は富むに有らずして君も富まずなり。未だ國富まずして兵は強からず。夫れ國の貧富は民の窮否とに在り。兵の強弱民の服と否とに在り。是れ故に古の謂所富國は倉廩を府庫に充て盈てりてこれ謂うに非らず。百姓足りて之れを謂うなり。古の謂所の強兵は一二の武夫有るに非らず關張の如くは之れを謂うなり。萬民一心之れを謂うなり。是れ以て國を治めて文王の如き眞に謂所富國強兵なり。然るに則ち古侯之れ我が君の事、宜く文武に於いては周公且つ召公奭、大公望畢し公榮公、大顛閼は天くして散じ宜く生きる南宮适(魯の人、孔子の弟子)の如く則ち富國強兵何んぞ難きの有り。國富兵強萬民一心則ち五大州擧げて來攻亦た何んぞ(一本足)を為すに足らん、且つまた今の大憂大患外夷在りて必ずとせず。駕御宜失す天下の人皆敵なり。今之れ貴顯刺す櫻田に在り必ず姦(心がねじて正しくない)は有るを察せず。惡有りて黨を知らず。私に惡に於ては首其れ古侯の前に在る。然るに大姦索す如く大惡は莠(莠、臭い草、善に似て實は正しくない)の如く、朱を奪い苗を亂す、最も辨じ難しさを為す。古侯熟して諸を察し、

嗚乎。謂所大姦大惡或は士民の中に在り。亦た知る可からざり、古侯熟し諸を察し其の士民に在

り知らず。猶可^よしなる。其の士人在り亦た未だ知る可からざり。古侯^{ここう}熟^{じく}して諸を察して其の士人に在り。之れを知了猶可^よしなり。其の屬官^{しよくかん}在り亦た未だ知る可からざり。古侯^{ここう}熟^{じく}して諸を察して其の屬官^{しよくかん}在りを知らず。明らかにせず亦た甚だしきかな。そして猶可^よしなり。其の同僚^{どうりょう}在りてこれを知らず則ち之の誓^{めく}を謂^いう可^いし。古侯^{ここう}熟^{じく}して諸を察して夫れ本を正し、源を清して流れは清し道の理なり。故に先ず同僚^{どうりょう}の非を正して後に屬官^{しよくかん}に及び。則ち屬官^{しよくかん}亦た古侯^{ここう}に服しこの嚴明^{げんめい}公正^{こうせい}曰^いう。官民之れ私にせずは此の如し。則ち一國の人は皆曰^いう、古侯^{ここう}の嚴明^{げんめい}なりを此の如し。古侯^{ここう}の公正^{こうせい}なりを此の如く。我が君の人を得るなり此の如く。則ち文王の化す内よりして外に及ぶ。邇^{ちか}くよりして遠く及ぶ亦た此の如きに過ぎんずば、關鵲^{かんけん}麟趾^{りんし}（子孫に賢人の多い例え）の化之れを今日に於て行^いう亦た甚だ難きを為さず。

嗚乎、古侯出で萬里の外に在りて、一旦犬羊の無禮^{ぶれい}に逢^あつ。則ち我が君の神武^{じんむ}翼^{よく}以て一戰之れを塵^{みこころし}にし、其の歸るに及ぶなり。我が君の明に代つて先ず同僚^{どうりょう}より察して後に屬官^{しよくかん}に及び。先ず大臣より察して後に小民に及ぶ。本より正して末に及ぶ。源を清くして佞^{よこしま}を除き姦^{かん}を排して流れに及ぶ。

以て潜徳せんとくの幽光ゆうこうを誕發たんぱつさせて。是れ予め之れ古侯ここうより以て望む所なり。裕ゆたかの古侯ここうに於て固もとより一朝
一タの交に非らず。故に其の行いに於て、詩を作りて以て之れを戒め、其の辭に曰う。

坦々古道

たんたん ことつ
坦々たる古道

疾藜塞之

しつれい ふさ
疾藜之れを塞ぐ

赫々太陽

かくかく
赫々たる太陽

浮雲蔽之

ふうん おお
浮雲之れを蔽う

戒哉古侯

いましめ かな ここう
戒る哉 古侯

小姦除之

しょうかん
小姦 之れを除く

戒哉古侯

いましめ かな ここう
戒る哉 古侯

小善稱之

しょうぜん これ
小善 之を稱す

明々君明

めいめい くんめい
明々の君明

古侯代之
古侯 之に代る

時年三十三歳

語釈

鹽谷古侯しおんここう＝鹽谷鼎助、岩国藩士、藩校養老館で五竹より五歳年長、惟い＝これ、おもつに。癸亥きがい＝元治元年、一八六三。監察かんさつ＝諸官吏の違法を取り締まり、地方官庁の行政状態を視察して廻る官。公薦こうけん＝公の薦薦、参勤交代で諸侯の乗る薦薦。京帥きやうし＝天子の都、京都。文王ぶんわう＝周代の聖王。鴻業こうぎやう＝帝王の大業。關々かんかん＝鳥の和やかな鳴き声。鵬鳩ほうこう＝百舌と鳩。州す＝川の州、川の中に土砂が堆積して小嶋のようになった所。窈窕淑女ようてうしやうふ君子好述とある、窈窕宮殿などの奥深いさま、淑女女の淑やかで美しいさま。君子くんし＝才徳の在る人。好述こうしゆ＝好く述べる。脩める＝修める。凍餒とうじやう＝凍り飢える。窮乏きやうふ＝乏しく困窮。邇じ＝近い、近く。皇天かうてん＝大いなる天、天の敬称、天帝、上帝。眷佑けんぐ＝振り返って助ける。誕たん＝大いに。厥命くわくめい＝その命令。齊桓晋文さいくわんしんぶん＝春秋時代齊の桓公、晋の文公共にこの時代の五人の覇者の中。輩はい＝輩。所謂しいうゐ＝何を言いたいか、それだから。假にかり＝仮に。霸業はぎやう＝王と成る為の戦い。僥倖かうじやう＝思いがけない幸せ、これ幸い。孔子くんし＝儒学の始祖。至徳しとく＝至つて徳のある人。郁々いくいく＝香気の盛んなこと。厥後くわくご＝其の後。聖王せいわう＝聖帝、聖天子、優れた天子。武王ぶわう＝殷を滅ぼして周王朝を建國下天子。周公くわうくわう＝武王の弟で摂政として周の制度を創立二代目の成王を補佐した。聖人せいじん＝知徳の優れた最高的人格者。周室しうしつ＝周の王室。慨がい＝嘆く、嘆息。東周とうしう＝前四〇三より前二五六。中都ちゆうと＝宰さい＝司る、治める。魯ろ＝孔子の生まれた國。孟子もうし＝周の時代の指導者、孔子の後を継いで、其の説を發展させた、四書。周道しうたう＝周の政治。愈ゆ＝いよいよ。衰すい＝衰える。時王じわう＝時の王。王道わうたう＝王の執るべき道。知慧ちゑ＝英知。雖いへど＝けれども、これ、もし。鉉器けんぎ＝鋤、鋤、田畑を耕す道具。迂反ゐはん＝曲がり反する、回り道。當世たうせい＝此の世、今頃。孔孟くわんもう＝孔子と孟子。聖人せいじん＝聖者。霽靄せいあい＝霽、盛んに雪が降る、靄、大風が土砂を巻き上げる。古侯ここう＝鹽谷鼎助、語源は漢の昭平は元素の東陵公であったので古侯ここうという、彼が秦の滅亡後庶民となり長城の東で瓜を植えて貧しい生活をしてしたこと。丙午へいご＝弘化四年、一八四六。歳とし＝年。江都かうと＝江戸。

香鹽先生＝鹽谷鼎助、古侯。鴻之臺＝観る＝見る。奇観＝壯観、珍しい、不思議な眺め。寥々＝寂寥、寂しい。古址＝古跡。茫々＝広々としているさま。荒草＝荒れ草。瞠若＝驚き呆れ目を見張る。蓋＝思うに、むしろ、なんぞ。豪傑＝才知が衆に優れた人物。武勇が人に優れた人物。況＝まして、まして、ここに、ありさま、近況。文徳＝礼樂、礼節と音楽によって人々を心服させる徳、文教や学問による徳。脩め＝修める。仁義＝仁、親愛の心と義、道理に合うこと、道德の総称。宇宙＝四方上下と古今、宇は空間、宙は時間。鞭撻＝むち打つ、励ます。猖獗＝勢いが盛んで、荒れ狂う。攘う＝打ち払う、追い払う。左衽＝左衽、おくみ。侏儒＝中国西方の蛮人の音楽転じて外国語の意味、不明なさま、べちゃくちや。歳々＝年々。豐＝豊かに。大凶荒＝大変に穀物が実らない凶作、不作。外患＝外国から攻められる災い。内變＝内憂、内乱。米價＝米の値段。玉＝宝玉、真珠等。棄て＝棄却、捨て。法令＝法律と命令。商鞅＝姓は公孫、名は鞅、秦の孝公に仕え、於、商の地に封じられたので商鞅、商君とも言つ、秦の法律や土地制度を改め刑罰を厳しくした。李斯＝秦の政治家。刑名＝刑名學という学説、刑罰の名。法律＝標準となる定め、してはならない掟。奴隸＝下僕、奴昔戦争で捕虜になつたり、競馬杖尾受けたり、売買されて、自由を認められず強制労働させられ他人。富國＝国力が益こと。強兵＝軍備が増大する。膏＝肉と脂。屯＝屯、なやむ。填＝埋める、充填。頃＝半歩、歩幅の単位。楮＝楮、和紙の原料。鎰＝金貨の単位、二十両、一説に二十四両との説もある。櫛＝黄櫛、櫛、漆、果実から蠟をとる。利槍＝槍の方が利。長剣＝長い剣。甲＝鎧、甲。繕＝修繕。鑄＝鑄物。督責＝監督、督促の責務。一旦有緩急＝一度國に大事が起るならば。菜色＝青菜の色、青い顔を。怨聲＝怨む声。彼長剣＝あの長剣。我の膏＝自分の血と脂。目を瞋齒を切＝眦をあけて齒ざしり、怒り目を剥き齒をくいしばる。廬＝家。鬻＝粥、売。妻の衣典＝典、質入れすること、妻の着物を質入れすること。漸く＝やっと。一壺＝壺＝学舎、學校。講武＝武術の道場。司＝司る、上司。孔孟＝孔子と孟子。手揮＝手を揮い。臂＝肘、肱。燃る＝燃る。鼓聲＝太鼓の音。揺り＝揺り。鐘聲＝鐘の音。飢鳥＝飢えた鳥。囚＝囚われる。籠＝籠。逸＝逃げる。獄＝牢獄。水釣＝川で魚を釣る。籃＝魚を入れる籠。提げ＝提げて、持つ。竿＝釣り竿。聲色＝声を似せて。名教＝名分に関する教え、道德上の教え、聖人の教え、儒教の教え。節義＝節操と道義。嘗て＝嘗める、試みる、かつて、以前。嗟＝嘆き悲しむ声。戈＝矛、鉞、鉞。鹿臺＝鉅橋の粟＝殷の紂王の米倉の名。露臺＝天子の天文觀測の台。租税＝人民が収

入の一部分を政府に強制的に収めさせられるもの、年貢。免れ＝免除。漏屋＝雨の漏る家、あばら屋。憂えず＝憂いに思わない。
炊烟＝炊事の煙り。起々＝逞しい、勇ましいさま。武夫＝武士。武人。公侯＝爵位で公と候、身分の高い人。萬民＝人民、全てに国民。倉廩＝米倉。
府庫＝政府の倉庫。盈＝満ちる、充ちる、孕む。百姓＝農民。關張＝關羽と張飛。周公＝文王の子で武王の弟。召公奭＝周公と協力して成王を助け周王國を發展させた。大公望＝太公、父のこと、周の文王の賢臣呂尚を言う、呂尚が渭水の岸で魚釣りをしていたとき文王がみだし、我が太公が（父）待ち望んでいる人物だと喜び、太公望とよんだ、武王を助け殷の紂王を滅ぼし功によって齊の封じられた、転じて魚釣りを州流人、釣り好きな人。畢＝悉く、みな、終わる。公榮公＝大顛＝天散＝若くして死ぬ。宜く＝良い。南适＝孔子の弟子南宮适。文武＝文王と武王。大憂＝大きな憂い。大患＝大きな患い。駕御＝駕籠に乗る。貴顯＝身分が高く有名なこと。匕首＝匕首、短刀。大姦＝大悪人、心が拗けて正しく。紫の如し＝心が紫黒に熟＝好く考える、じつくりと。諸察＝諸諸のことを監察。櫻田＝桜田門の變。姦＝邪、淫ら。姦黨＝邪、淫らな徒党。莠＝はぐさ、水田に生え稲を害す、見た目は良くて実は有害なもの。大惡＝大悪人。屬官＝官吏。同僚＝仲間、友人。瞽＝目の不自由な人。嚴明＝厳しく明朗。公正＝公平で正しい。神武＝天子の先祖。翼＝輔翼、助ける。鷹＝皆殺し。佞＝阿る、諂う。誕＝大いに。潜德＝徳を包み隠す、世に知られない美德。幽光＝幽玄な光。裕＝五竹。行＝儒学の行。邇＝近い、近く。關關＝關關、百舌が鳴く。麟趾＝麒麟の跡。坦々＝平坦なさま。古道＝古い教え、道。疾榮＝はまびしを象った鉄又は木の武器。赫々＝赤い、明るい。浮雲＝浮き雲。戒＝訓戒。小姦＝小悪党。小善＝小さな善。明々＝明らか、明白。

予讀駿臺雜話。至其說離騷。喟然而嘆曰。善矣哉。鳩巢翁之說離騷也。誠如是乎。天下無為不善者乎。其言曰。離騷之要。在篇端數語。曰。帝高陽之苗裔兮。朕皇考曰伯庸。是言也。與六朝士大夫之誇門地。日本武夫之呼王孫者。大不同也。凡人之為不善。為忘祖先父母之故也。屈子以為。身以帝高陽為鼻祖。而以伯庸為皇考。為善人良家之後。則其言之惡。可以辱祖先父母。不獨身也。故一行。顧其祖。一言。思其親。忠孝之意至矣。予也。生蠻夷猾夏之時。其懷大耻。不獨原一身之不幸也。常以為。予也雖微。亦神州之民也。神州之民。而誰非神聖之苗裔者。然則貌焉。吾身。亦不可不重焉。每思洋夷之猖獗。不覺涕泗交頤。嘆曰。嗚乎。今日之時何如時耶。姦人誤國。使犬羊坐大。宸衷之苦楚。其何如哉。為之臣子者。恬然坐視之時哉。而今也。神州之民。神聖之苗裔。而服夷之服。法夷之法。名夷之名。屈膝犬羊。師之。甘為腥羶之奴隸者。滔々皆是。吁是何心哉。其無義無恥。一至于此乎。使其少知屈子之心。恥辱一身之為辱神祖。辱一身之為辱神州乎。則其無羞惡之心。或不至于此矣。昔者孟子之賢闢揚墨。不免好辨之名。予之不佞。尊天朝而抑夷狄。誦孔子之法於衆楚之間。人不以為狂。則以為妄。其苦心。比原何如也哉。嗚乎。

鳩巢翁。生千載之後。深知原之心。原也得知己矣。予也生于千載之後。其心與原諳合。原也邈矣。翁也逝矣。吾誰與語其胸懷哉。嗚乎。

此篇係三十四五歲作

釈文

駿臺しゅんだい 雑話ざつわ を讀むよむ

予「駿臺しゅんだい 雑話ざつわ」を讀むよむ。其れ離騷りせうの說に至る。喟然きげん（嘆息）して嘆きて善きかな。鳩巢翁きゅうそうおう（駿臺しゅんだい 雑話ざつわの著者）

離騷りせうの說は誠まことに是れ如く、天下てんかに不善ふぜんを為す者は無しの言に曰う。離騷りせうの要は篇端へんたんの數語すうごに在りて、

帝高陽みかたかひやう（太古みかたの天子てんしせんぎよくのこと）の苗裔びやうえい（遠い子孫）朕考ちんこう伯庸はくおうの曰くには。是の言は六朝ろくちやう士大夫しだふこれ門地もんち

に誇りほこ。日本武夫やまとたけるの王孫おうそんと呼び大同だいたうせず。凡人ふぜんの不善ふぜんを為す。祖先父母せんそふぼの忘れを為すは之れ故なり。

屈子くつし（屈原）以て為す。身は帝高陽みかたかひやうを以て鼻祖びそ（第一の子孫、最初に物事を始めた人）と為す。そして伯庸はくおうの皇考けいこうを

為す。善人良家ぜんにんりやうけの後に為す。則ち其の言行げんぎの惡しきは祖先父母せんそふぼを辱はづかしめ以てす可し。獨り身にせず故

に一つの行ないは其の祖を顧る。一言其の親思つ忠孝の意至りる。

予は蠻夷夏を猾すの時に生れ。其の大耻（大きな恥）を懷う。獨り原子一身の不幸にせず常に以て為す。

予なり微なりと雖も亦神州の民なり。神州の民にして誰が神聖の苗裔に非らず。然るに則ち藐んじ

ある吾身亦重からず可かざる。洋夷の猖獗（勢いが盛んで荒れ狂う）を思つ毎に涕泗頤を交も覺えず。嘆い

て曰う。嗚乎。今日この時何如なる時ぞ。姦人（心の邪な人）國を誤り。犬羊坐大に使して。宸衷（天子

の心の中）の苦楚其れ何如ばかりかな、この臣子為すは恬然（のんびり平気で）坐視の時なるかな。今神州の民

神聖の苗裔夷の服を服て、夷の法を法り夷の名を名して、膝を犬羊屈して、この師いるに甘んじて、

腥羶の奴隸を為す。滔々（盛んに乱れるさま）吁（嘆き疑う）是れ何たる心かな。其れ義無く恥無く一にここに

至る。其れ少しでも屈子の心を知れ。一身之れ神祖の辱しめ為す。一身の辱しめを知れ、之れ神州

の辱しめを為す。則ち羞惡の心無し或は至らず、昔者孟子の賢さ闢揚墨。之の辨えを好く免れず。

予は之の不佞天朝を尊び夷狄抑も、孔子の法を誦えて衆楚に問う。人は以て狂と為して為ざる。則

ち妄を為して其の苦心原子に比べて何如や。嗚乎。鳩巢翁千載の後生れ。その心深く原子の心を知

り。原^{げん}しなりを己に知り得る。予^よまた千載^{せんざい}の後に生れ。其^{その}の心原子^{げん}と諳^{かた}り合^あわん。原子^{げん}また邈^{はる}かなる。
翁^{おきな}また逝^ゆく。吾^{われ}れ誰^{たれ}とともに其^{その}の胸懷^{きょうかい}を語^{かた}らんかな。嗚^あ乎^あ。

(此篇三十四、五歳)

語釈

駿臺雜誌^{しゅんたいしじ}書名、五卷、江戸時代の儒者、室鳩巢の著、儒教中心の道德、政治、文学に関する随筆。離騷^{りせう}楚辞^{しじ}の編名、戦国時代、楚の

屈原^{くわん}が王に信任されない憂いを述べたもの、離^りは確、騷^{せう}は憂いで憂いにあうという意、いっせつに追放され國から離れる憂いを述べたものという。喟然^{きぜん}

「嘆くさま。鳩巢翁^{きゅうそう}」江戸時代の儒者、室鳩巢。不善^{ふぜん}「善でない、悪。端数^{たんすう}」半端な数。帝高陽^{ていこうやう}「太古の天子黃帝の孫で高陽國を建てたので高陽氏と

いう。苗裔^{びようい}」遠い子孫。兮^{けい}「主語や文の後につけて感嘆や強調の語氣を表す助字。朕^{ちん}」天子が自分のことを指す。皇考^{かう}「天子の亡くなった父、先代。

伯庸^{はくよう}」皇考。六朝^{りくちう}「三国時代の呉および南北朝時代の南朝の東晋、宋、齊、梁、陳の六王朝。大夫^{だいふ}」周代、天子、諸侯に仕えた官吏の身分の一つ。門地^{もんち}

「家柄、家格。誇る^{ほこ}」誇り、誇示。日本武夫^{にっぽんぶふ}」王孫^{おうそん}「王の孫、王の子孫。屈子^{くつし}」屈原をいう。鼻祖^{びそ}「第一の先祖、始祖、元祖、最初に物事を始めた人。

善人^{ぜんにん}」良い人。良家^{りやうけ}「良い生活をしている家庭、家柄の良い家庭。辱め^{はづかし}」屈辱。顧る^{かえりみ}「振り返る。忠孝^{ちゅうこう}」忠義と孝行。蠻夷^{ばんい}」野蛮な夷狄。猾^{かつ}」狡

猾、悪る賢い。原^{げん}」屈原。微^び」微禄。僅か、微小。雖^{いふども}「けれども。神聖^{しんせい}」人格の完全無欠なこと、後世時の天子を称えることは。藐^{ぼう}」姿形、

小さくて幽かな。洋夷^{ようい}」西洋の夷狄。猖獗^{しやうけつ}」勢いが盛んで荒れ狂う。涕泗^{ていし}」涙とともに鼻水がでる。頤交^{いこう}」顎をしゃくりあげて、泣く。恬然^{てんぜん}」平気な、

平然。坐視^{ざし}「坐って視る、何もしない。姦人^{かんじん}」心の邪な人、悪者。犬羊^{けんよう}」西洋人の蔑称。宸衷^{しんちゆう}」天子の苦衷。苦楚^{くそ}」苦しみむち打つ、楚、荊、にんじ

ん木、杖、むち打つ、昔師は弟子を訓戒するのになんじんぼくの杖を用いた。腥羶^{せいぜん}」生臭い、西洋人。奴隸^{どれい}」僕、下男、昔戦争で捕虜になったり、刑罰

を受けたり、売買されたりして、自由を認められず、強制労働させられた人。滔々とうたう水の勢い良く流れるさま。神祖しんそ偉大な功績のある先祖。天照大神の尊称、江戸時代、徳川家康の尊称。吁う感嘆詞。孟子もうし孟浩然、盛唐の詩人。賢けん賢人。揚墨ようもく戦国時代の思想家、揚朱と墨翟。關かん拓く、拓ける。辦べん弁える、弁じる。羞惡しゅうあく自分の悪い点を恥じ、人の悪い点を憎む。佞でい阿る、諂う、邪、口がうまい。天朝てんちよう天子の朝廷。夷狄いてき外国人。抑よく抑留、抑える、抑も。孔子こうし儒教の始祖、春秋を著わしたと伝えられる。衆楚しゅうち多くの人を、むち打ち訓戒した。誦しよ唱える。千載せんざい千年。知己ちき自分の心や値打ちを良く知ってくれる人。親友、知友。誼合あたいごう暗唱し合う、十分に心得る、熟達している。遑ぼう遥かに遠い、侮る。逝ゆく、逝去、死ぬ。胸懷きょうわい胸の思い、心の中、胸襟。

6 尊攘社人名錄序

恭惟。我神州天日之嗣。世御宸極。萬古無革命。而開闢以來。未嘗受外夷之侮也。及先帝之時。西荒蠻夷。數窺我邊。敢朶頤乎我神州。何夫無禮之甚也。先帝。天資英邁。聰明絕倫。乃洞燭彼奸。深慮堅冰之漸。因下攘夷之勅。當此之時。幕府無人。怖犬如虎。遂聽洋夷之請。或許互市。或建邪教寺。或將軍親與醜夷對座。請其參國政。甚則至於欲名神州以新亞墨利加。國家之污辱。醜夷之跋扈。其亦甚矣。當此之時。大小諸侯。頗唱勤王者有之。就中。如宗藩。上下盡忠以攘夷為事。先帝亦深依賴焉。既而宗藩再攘外夷。以慰先帝之宸衷。天下之人。於是乎。稍展眉稱快。嗚乎。殫血未乾。而小人間之。惜哉。於是乎。藩宗之志蹉跎。而先帝之志不成。無何。帝亦崩殂。豈非千載之遺憾耶。爾來大小列侯。無唱尊攘者。擁重兵。座而視犬羊之猖獗而已。於是。外夷亦益無忌憚之色。而今則胡兒橫行於華庫之地。腥羶之氣。殆遍輦轂之下。而無一。人有誰何者也。於是。外夷之勢焰日熾。而神州之士氣益不振。日甚於一日。故號稱武士者。唯夷狄是學。優孟衣冠不啻。以日本之刀。換洋夷之銃。以先王之禮服。換左衽之胡服。搥戎狄之鼓。學戎狄之陣。其心化為夷狄者。亦已半於天下矣。嗚乎。士氣之衰弱。外夷之猖獗。至今日而極矣。此

誠危急存亡之秋也。今而不救。神州其夷乎。夫喬木既蠹。而大風將至。内地半夷。而外夷方驕。將軍不攘之。列侯不膺之。天下英雄豪傑之士。亦袖手而旁觀。則神州之為外夷之有。將在近也。嗚乎。若舉祖宗之天下。座付犬羊之手。神祖先帝在天之靈。其謂之何。苟為之臣子者。豈旁觀座視之時哉。嗚乎。今之西洋者。不獨戎狄也。覬覦國家之大賊也。則非國家之大讐耶。然則人々當懷敵愾之心。而不可與共載天也。予也。慨乎外夷之陸梁也久矣。頃者頗得同志之士。日夕相會。講尊王之道。議攘夷之策。號曰尊攘之社。庶有觀感而興者。相俱戮力。以攘斥外夷。一洗羶風。以救神州之陸沈。則是上以繼先帝之志。中以承宗藩尊王攘夷之旨。下以奉吾君尊王攘夷之意。而行聖人尊王攘夷之大道正訓於今日也。其成與不。則在吾人所為何如耳。可不勉哉。慶應三年丁卯。夏五月。南部裕序

時年三十七

釈文

尊攘社人名録序
そんじょうしゃじんめいろくじょ

恭しく惟おもつ、我が神州天日からの嗣つぎきにして、世は御宸極ごしんきよくにおいて革命は萬古に無く、しかも開闢かいびやく以

來未だ嘗て外國からの侮あなどりを受けたことはなかつた。先帝せんていの時に及び西荒蛮夷せいこうばんいが我が邊あたりを數窺しばしばうかがうようになり、敢えて我が神州に朵頤だいたいするようになる。何ぞ夫れ無禮の甚だしきことなり、先帝は天資英邁にして聰明絶倫なり、彼の奸かんはそこで洞どうに燭しよくし、堅氷もこれ漸く深く慮おもんばかるようになり、因つて攘夷の勅が下された。此の時に當り幕府に人無く、犬を怖る虎の如く遂に洋夷の請こつを聴き、或いは互市を許し、或いは邪教寺じやくきょうしを建て、或いは將軍親く醜夷たういと對座して國政に參ずるを請こう。甚だしきはここに到りて、神州を以て新亞墨利加の名に加なさんと欲す。國家の汚辱醜夷おじよくしゆいの跋扈はつこそれまた甚だしきや、此の時に當り大小の諸侯、頗すこぶる勤王きんのう唱る者これ有り、ことに宗藩そふはんの如き上下忠を盡して以て攘夷じやういの事を為す。先帝亦た深く依頼され、既に宗藩をして再び外夷はういを攘はらう。以て先帝の苦衷を慰め天下の人ここにおいて稍しやうやく眉まゆを展ぶる。嗚乎、快なるを稱える。羶い血は未だ乾かずして小人これ間に惜しずしむ、宗藩そふはんの志しは躡おき時機を失う。先帝の志しは成らず、可べし無く、先帝亦た崩御される。これ千年に一度有るや無しの残念なことである。それ以来大小の列侯尊王攘夷を唱える者無く、兵をを重ねて擁ようし、座して犬羊の勢力が盛んで荒れ狂うを已に視る。是れに於て、外國の夷亦た益々

遠慮の色無く、今則ち胡兒は華庫かこの地に於てわが物顔で行き来する。腥羶えんにちさかの氣、殆ど天子の乗り物の下に逼る。そして何者が誰か有る一人も無く、是れに於て外夷の勢い焰日熾えんにちさかになる。しかも神州の士氣益々振るわず、日一日於て甚だしく故に武士は號稱する唯だ戎狄是れに學び、優孟衣冠ゆうもういかんし畜せず、日本の刀を以て洋夷の銃と換え、先王の禮服を以て左衽の胡服に換える。戎狄の鼓を搥ち、戎狄の陣に學び其の心は化して夷狄者いてき為す。亦た已に半ば天下に於いて、嗚乎、士氣衰弱し外夷の猖獗しょうけつは今日に至りて極まる。此の誠は危急存亡の秋なる。今にして救わずして神州は其れ夷かな、夫れ喬木きようぼく既に蠹むしとなる。そして大風至りて將に内地の半ば夷そして外夷は方に驕る。將軍これを攘はらはず、列侯これを膺うたず、天下の英雄豪傑の士、亦た手を袖にして旁觀。則ち神州の為に外夷これ有り。將に近くもに在るを將つて、嗚乎、祖宗の天下を擧げずに座して犬羊の手を付して、神祖先帝天の靈其のこれ何かんと謂う。苟もこれ臣子を為す者は、豈旁觀座視の時哉。嗚乎、今の西洋の者は獨りならず戎狄なり。覬覦きぐ國家の大賊なり。則ち國家の大讐に非らず耶。然れども則ち人々の敵愾てきがの心を懷なげうに當り、なり夫れは天に載せて共に与するは可からずなり。ここにまた嗚呼、外夷の陸梁りくりようを慨なげきて久

しきかな、頃者同志の士頗る得たり。日夕相會して、尊王の道義を講る。攘夷の策號して曰く、尊攘の社。庶ろ觀感して興ず者有り。相い俱に戮力以て外夷を攘斥し、羶風を一洗して以て神州の陸沈を救わん。則ち是の上先帝の志を繼がん。中に宗藩の尊王攘夷の旨を承り下して以て吾が君の尊王攘夷の意を奉らん。そして聖人尊王攘夷の大道正訓を今日より行つ也。其の成ざるとも。吾人の所に在りて何如を為すのみ。勉むる不にに可からず哉。慶應三年丁卯。夏五月。南部裕序

時年三十七

語釈

尊攘社そんじょうしや 五竹ごちくが尊王攘夷の同志との結社名 人名録じんめいろく 名簿なぼ 序じょ 文章の初めに。恭惟きやうい 〝うやうやしく思う。天日の嗣し 天照大神よりの嗣、天子。宸極しんきよく 天子の居所、またその位。世御せいぎよ 在位の世。萬古ばんこ 万年もの昔。太古たいく 革命かくめい 天命を改める、王朝が変わること。開闢かいびやく 天地の開け始め、世界の始まり。嘗てかつ 以前、前に。先帝せんてい 先の帝、孝明天皇。宸衷しんしゅう 天子の苦衷。西荒さいかう 西洋人の荒れ者。蠻夷ばんい 野蛮な夷狄。窺き 窺う。敢かん 宛にする、妄りに、勇ましい。朵頤たいい 顎を下げて物を喰うさま、朶だ 木の枝、動かす、頤い 天資てんし 生まれつき、天が人に授けた性質、天性てんせい 英邁えいまい 才能、知識の非常に優れてること。聰明そめい 聴いたり見たりすること、耳や目が聡いこと、道理に明いこと。絶倫ぜつりん 人なみ外れて優れている。奸かん 侵す、乱す、邪。洞燭どうしやく 洞窟の中の蠟燭、仄かな明かり。堅氷けんひょう 堅い氷。漸ぜん 漸く。深慮しんりょ 深い考え。攘夷じやうい 夷、狄、戎、胡、を追ひ払う。勅ちやく 勅語、詔。互市ごし 市場、貿易。邪教寺じやくきやうじ 基督教会。醜夷しうい 外国人を蔑視した語。對座たいざ 対面して坐る、對等に。新亜墨利加しんあめりか 新アメリカ。心懷しんがい 心に思ふこと。汚辱おじよく

汚し辱める。跋扈はつこ＝手強くて我が儘に振る舞う、のさばる、横暴。頗るすこぶ＝屢々、頻りに。勤王きんのう＝王室に忠勤を励む。中就なかんずく＝たくさん在る物事の中でもとり分けて。宗藩そうはん＝萩藩、長州藩。殫血たんけつ＝生臭い血。稍眉しょうみ＝稍や眉を。蹉跎さだ＝躓き時期を失う、不幸せて志を得ない、思うに任せない。崩殂ほうそ＝帝の殂落、書舞典より、崩御。千載せんざい＝千年。豈あに＝どうして、なんと、それ。遺憾いがん＝恨みを遺す、残念。気の毒。爾來じらい＝これ以来。尊攘そんじやう＝尊王攘夷。重兵じゅうへい＝火器を備えた兵。擁よう＝抱える。猖獗しやうけつ＝勢いが盛んで荒れ狂う。忌憚きたん＝忌み憚る、遠慮する。華庫かこ＝横行おつう＝我が物顔で行き来する。腥羶せいせん＝生臭い。勢焰せいえん＝火焰の盛んな勢い。熾し＝熾烈、激しい。輦轂れんこく＝天子の乗用車。逼ひつ＝逼迫、指し迫る。優ゆう＝優れる。孟ちやう＝孟子。衣冠いかん＝衣服と冠。正しい装束。畜し＝ただ、ただに。先王せんおう＝先帝、孝明天皇。禮服れいふく＝儀式の時に着る服装。左衽さてん＝左衽、おくみ。胡服こふく＝洋服。戎狄じゆうてき＝西洋人。鼓こ＝太鼓。搗た＝打つ、叩く。半ばなか＝半分。猖獗しやうけつ＝勢いが盛んで荒れ狂う。危急存亡ききんそんぱう＝危うくて差し迫っている、極めて危うく存続するか滅びるかが決まる大事なとき。秋と＝時、時期。喬木きやうぼく＝大樹、松杉檜等の高木。蠹こ＝木喰い虫。方あた＝今や、丁度今、本当に。驕きやう＝驕慢、驕る。攘はち＝打ち払う。膺よう＝胸、受ける、征伐する。英雄えいゆう＝才能。武略の非常に優れた人、英傑。豪傑ごうけつ＝才知が衆に優れた人物、武勇が人に優れた人物。旁觀ばうかん＝傍らで観ているだけ。座視ざし＝何もしないで坐って視ているだけ。覬覦きぐ＝身分不相応なことを臨む。大讐たいしやう＝大きな敵。讐き＝ため息、敵愾心、慨がい。陸沈りくちん＝陸地に沈む、人が世の中で姿を隠していること、世が乱れ亡びること。陸梁りくりやう＝暴れて走り廻ること。慨がい＝嘆く嘆息、憤る。丁卯ていぼう＝慶応三年、一八六七。南部裕ななべゆう＝南部五竹。尊王攘夷そんじやうじやう＝王室を尊び且つ夷狄を攘らう。

隨筆

7 桂翁墓誌銘

嗚呼。此桂翁之墓也。翁諱景晴。稱此面。號泊齋。父諱景道。有三男一女。長夭。次景光嗣。季即翁。一女夭。翁為人溫厚。能容人。口未嘗稱人之惡。至其善雖小必稱焉。年二十。為吏有功。官賜祿三石賞之。翁事親孝。家雖貧。常極滋味養之。而自奉儉素。故晚年頗致富。翁兄之妻。予姑也。予蚤喪二親。瑣々無告。姑閔之。躬親撫養。翁亦閔之。視予猶子。以嘉永二年夏四月。罹疾。以其冬十二月二十二日卒。享年七十有七。葬普濟寺山先塋。嗚乎。予自喪父母。至今十餘年。為翁所愛。情似父子。泣而為之銘。々曰

上有青松。下有片石。已乎桂翁。于安厥魄。

時年十九

釈文

桂翁墓誌銘

嗚呼。此の桂翁の墓。翁の諱は此面と稱し泊齋と號す。父の諱は景道三男一女有り。長は天（若死に）次は景光が嗣ぐ、季（末）は翁一女天す（若死に）。翁人は温厚を為し能く人を容れ、口に未だ人の悪くを嘗て稱せず。至りて其の善は小なりと雖も必ず稱せられ。二十年の吏（役人）に功有りて為す。官禄三石之れ賞を賜う。翁は親孝を事として家は貧しきと雖も。常に滋味之れ養うを極めて。自から奉じて俟素故に晩年は頻る富を致す。翁兄の妻予の姑（叔母）なり。予蚤く二親喪い瑩々（独りぼっち、孤児）告す無く。姑之を閔み躬身（親に代わり自ら）親しく撫養（慈しみ養う）翁亦之を閔みて予を視て子の猶し。嘉永二年夏四月を以て。疾に罹り其の冬十二月二十二日以て卒す。享年七十有七。普濟寺山先塋（墓）に葬る。嗚乎。予父母を喪いてより。今に至る十餘年翁の愛しむ所を為し。情は父子に似たる。泣いてこの銘を為す。銘に曰う。

上有青松 上に青松有り

下有片石

下に片石有り
へんせき

己乎桂翁

己に乎あ桂翁
あ けいおう

于厥魄安

于に厥れ魄を安ずる
こ そ はく あん

時 十九歳

語釈

景晴かげはる此面このおもて桂景晴けいけいはる五竹の少年時代を撫育した人。墓誌銘ぼしめい死者の生前の徳行、功績などを金石にしろした文章、墓に埋めるのを墓誌といい、墓誌の終わりにつけられた韻文を銘という。嗚呼ああ感嘆詞。翁おう桂翁けいおう景晴かげはる桂翁の名。泊齋はくさい景晴の号。諱き忌名。景道かげみち桂翁の父。長天ちやうてん長子が夭折、早死に、若死に。景光かげみつ次男。嗣つ継ぐ。天よう夭折、若死に、早死に。温厚おんこう優しくて情が厚い、暖かで穏やか。嘗てかつ前に、以前。雖いふまでもけれども、たとい。滋味じじ滋養と美味。自奉じほう自ら奉じる。俸禄ろうりく賜るたまわ下賜。蚤そう蚤のみ転じて、小さい、子供。喪そう喪失、喪う、死ぬ。鶯々けいけい鳥が飛び巡る、一人ぼっちで頼るところがないさま。撫養ぶよう撫育、撫で養つ。関あわれ憐憫、憐れむ。疾罹じつり疾病に罹る。享年きやうねん天から受けた年数、寿命、息長らえた年数で死後にいう、行年。普濟寺山ふさいじさん桂翁の墓のあるところ。先塋せんえい先祖代々の墓。卒そうおわる、尽きる、死ぬ。葬ほう埋葬する、死体、骨を土中に埋め収める。青松せいそう青い松。片石へんせき石の欠片。己すでにもう。厥けつその、それ、額ひくずく。魄はく魂魄。安あん安らかに、安

吾徒以文相會者于茲有年矣号曰鹿鳴社今茲嘉永三年正月日會于逍遙之樓一壺之酒一盤之肴相對以歡飲焉酒已酣欲暮者暮琴者琴或嘯或哦暢然怡然由々然各樂其樂也遂命善画者圖之而各為之序昔宋時某々公會于西園當時以為美談彼諸公者吐辭為文下筆為小雖園林一時之遊而人嘖々稱之宜乎其名施於後世也今也口吟於六藝之文人以為迂闊手披於百家之編而於世不濟於用公私無耶取信言出而見笑於列殆不異國子先生也但幸得為太平之民間暇無事糟糠有食檻穽有衣一飽一暖無求無嘗唯文墨是娛雖自知其迂闊其樂也不改雖自知孺散弄翰也未止而今此圖之成也亦援筆以為序云爾

釈文

鹿鳴社雅集図の序

吾れ徒に文を以て相會するは、茲に有年（数年）号んで曰う、鹿鳴社今茲に嘉永三年正月日會して、逍遙（満足する）これ樓の一壺の酒一盤の肴に、相對して以て歡飲する、酒は己に酣わ、暮にせんと欲し暮は琴にせんと欲す、琴或は嘯き或は嗽暢然（各人が伸び伸びと）怡然（歡び楽しむ）、由々然（満足なさま）、各の樂しみは其れ樂しみなり、遂命善き画は図の各之れをて之れを為すの序に、昔宋時（前二八六年代）某々公會西園當時美談を為す、彼の諸公は吐辭文の下筆（すぐ書いて文書にする）為して章を為し、園林一時の遊びと雖も人は嘖々（口々に褒めそやし）称してこれ宜しく其の名を施して後世より、今なる口吟六藝の文より人は以て為す、迂闊（回り口説く事実にあわない）に手をした百家の編より世に於て済されず（成し遂げられない）、公私に用いて町取（耳垢を取るほどの価値）る無し、信言（誠ある言葉）出ずるは見て笑う列ねて殆ど異ならず國子先生なるは、幸いにも太平の民間暇を為して無事、糟糠食有り、檻樓の衣有り一飽一暖求める無く、嘗むは唯だ文墨是れ娛しみ、自から其の迂闊を知り其の樂しむと雖も、改めず自からそれ擣すると雖

も散じて弄翰なり、未だ止まずして今此の図之れ成る、亦た援筆以て序を為して爾に云つ。

語釈

鹿鳴社ろくめいしゃ 南部五竹が主宰した社中。雅集図がしゅうず 雅な集いを図る。序じ 順序を追って述べる、序文、はしがき。焉えん いくんぞ、なんぞ、これ、ここに、疑問反語に意を表す。酣たけなわ 真つ盛り、闌て 暮 晡しゅう 口ずさむ。哦が 詠む、詠つ、小声で詠んだり詠つ、口ずさむ。暢然ちやうぜん のびる、長くなる、伸び伸びする、文章や言語などの意味がよく通じるさま。怡然いぜん 喜ぶ、楽しむ、和らぐさま。由々然ゆぜぜん 自得のさま、得意なさま。吾徒わがこ 我ら、我が仲間。茲こゝ ここに。會かい 會す 会合。樓ろう 樓閣、高殿。一壺いちい 一つの壺。一盤いっばん 大皿、お盆、一皿。于う ここに、これ、発辞の助字。逍遙しょうよう 伸び伸びとしてまんぞくしたさま。肴さかな 酒のさかな。歡飲かんいん 歡談しながら飲む。樂らく 娛樂 楽しみ。諸公しよこう 諸君、皆さん。辭じ 言葉。吐は 吐き。吐露とろ 云つ。雖いふとも けれども、たとい、としても、確定の助字。園林えんりん 造園した林。嘯々さくさく 鳥の鳴く声、喧しいさま、口々に褒めそやすさま。後世ごせい 後の世、後年。口吟こうぎん 口で吟じる。六藝りくぎ 士の六種の教養科目、礼楽、射禦、禦は馬を禦すの意、書、教。文人ぶんじん 文章、文にたずさわる人。迂闊うくわん 回りくどくて事実に当てはまらない、世事に疎い、うっかりする、不注意。披ひら 披露、広げる。百家ひゃくか に 多くの学者、沢山の家。編へん 文章、書物。済すま 済まない、申し訳ない。耶や や、かの疑問。信言しんげん 信じて言う、実の言葉。異國いこく 外国。太平たいへい 平和。糟糠そうかう 酒の糟と米糠。檻らん 檻、ぼろぼろの着物。つずれ。衣い 一つの着物、衣服。一飽いっほう 飽食、満腹、飽きる。一暖いっぬ 暖まる。文墨ぶんぼく 文人墨客。娛こ 娛樂、楽しみ。濡ぬ 浸す、しみ込ませる、染める、揉む。翰かん 筆、手紙、書簡。弄たわむ 戯れる、もて遊ぶ、侮る、弄す、楽しむ。援筆えんぴつ 筆をとって字を書く。爾じ のみ、しかるに、唯それだけ句末の助字修飾語にそえる助字、卒爾、近い、爾。

吾公。嗣世之三年。立學右文。民之疾者。去之。民之苦者。除之。於是。風移俗易。士民咸和。乃命構樓於尾津海濱。扁曰觀海。命臣裕作文以記之。夫觀海之樓。背青山吞蒼海。遠望預山。近眺仙島。若夫汀草長而蒼々。渚柳秀而青々。鷺鷥集州。鳬鷖眠沙。波靜瀾恬。海色如黛。遠翠遙青。帶烟橫靄。此春之佳者也。蘆花如雪。蒲葉戰風。雨霽雲盡。天無纖翳。而月出於島嶼之上。皎然照波。珠玉一面。玻璃千里。茫茫乎無有際涯。此秋景之佳者也。其他。時換景變。奇賞百出。不可具狀。公政務之暇。來登此樓。焚香煮茶。仰而望。俯而觀。其樂也。蓋洋洋焉矣。夫樂亦不一。有不肖者之樂。有聖賢之樂。昔者。楚王登強臺而望崩山。其樂忌死。遂盟強臺而弗登。曰。後世必有以高臺陂池其亡國者。可謂能知所戒矣。雖然。其為樂也。獨樂其樂也。此非聖賢之樂也。孟子曰。文王以民力。為臺為沼。而民歡樂之。謂其臺。曰靈臺。謂其沼曰靈沼。樂其有麋鹿魚鼈。文王之樂。與民同之也。此聖賢之樂也。文王與民同樂。是以自樂且樂。而民亦樂其樂也。楚王夫與民同樂。是以自樂其樂。而民夫樂其樂也。故楚王弗登強臺。而。無益於民。文王為靈臺。而民歡樂之也。由此觀之。國之廢興存亡。在與民同其樂與不耳。不在登與弗登也。

是故。古之聖王。無不與民同其樂者。今公之為樂也。其亦在茲歟。嘉永四年辛亥。二月日。臣裕謹撰。

時年二十一

釈文

かんかいろうつき
觀海樓記

吾公嗣世しせい（嗣子が世を嗣いで）三年、立学右文りつがくうぶん（学問を重んずる）民の疾やまいは之れを去け、民の苦みは之れを除き、
是れ於て風は移り俗は易し士民は咸和して乃ち命みなは尾津海濱すなわに於て樓おすを構え扁かいひんく曰く。海を觀ろつて臣かま裕ひらたに文しんを作ることを命しりぞず以て之を記す。

それ海觀そうの樓ろうは青山そうかいを背し蒼海のを呑み、遠く預山よざんを望み近く仙島せんとうを眺むれば、夫れ汀草ちやうそう長くして
蒼々じやうじやう（草がさかに生い茂っている）たり、渚なぎさの柳は秀ないで青々ろえいたり、鷺鷥ろえいは州に集まりて鳬鷗ふあうは沙に
眠る、波は静かになみは大きくうねり、海色かいしよくは黛まゆすみの如く遠く翠みどりは遥かに青く、烟けむり帯おびて靄あやを横
たえて、此れ春の佳き景なり。蘆花るかは雪の如く蒲葉ほようは風おのに戦はき、雨は霽はれて雲は盡きて天に纖翳せんあつ（僅かな

臺も無し（なし）。而て月於て島嶼（しまう）の上に出る。皎然（きうぜん）と波を照す。珠玉（しゆぎく）一面。玻瓈（はり）千里。茫々（ぼうぼう）と際涯（さいがい）有や無し。此の秋景之佳者（か）也。其の他。時換り景變る。奇賞（きしやう）百出。具狀（ぐじやう）可らず。公政務の暇。此の樓（ろう）に來り登る。香を焚き茶を煮。仰ぎ而て望む。俯（ふし）て而て觀る。其の樂也。蓋（けだし）洋洋（ようよう）矣。夫れ樂亦一ならず。不肖（ふしやう）の者之樂有（あり）。聖賢（せいけん）之樂有（あり）。昔者。楚王強臺（そおうきやうたい）に登り而て崩山を望む。其の樂死忌（い）む。遂に強臺（きやうたい）に盟（めい）而て登らず。曰く。後世（こうせい）に必ず高臺（かうたい）陂池（はち）以て其の國亡（し）ぶ者有（あり）。能く戒む所知る謂（い）う可（べ）し矣。然りと雖（いえど）。其の樂為す也。獨り其の樂樂也。此の聖賢（せいけん）の樂に非らず也。孟子曰く。文王民の力以て。臺（たい）為す沼（し）為す。而て民の樂之歡ぶ。其の臺（たい）謂（い）う。靈臺（れいだい）曰く。其の沼（し）謂（い）う靈沼（れいし）曰く。其の麋鹿（みりく）魚鼈（ぎやへつ）有（あり）樂。文王の樂。民與に之同じ也。此の聖賢（せいけん）の樂也。文王民と與に同じ樂。是れ以て自且（みづか）つ樂樂。而て民亦其の樂樂也。楚王夫れ民與に同じ樂。是れ以て自其の樂樂。而て民夫れ其の樂樂也。故に楚王強臺（そおうきやうたい）に登らず。而て。於て民益無し。文王靈臺（れいだい）為す。而て民樂歡ぶ之也。此の由之觀る。國の廢興存亡。民與に其の樂同ならず與（よ）に在り。登る與に在らず登らず也。是れ故。古の聖王。其の樂同じ民與にあらず者無し。今公の樂為す也。其の亦茲（こゝ）に在り。嘉永四年辛亥（しんがい）。二月日。臣裕謹撰（しんゆうきんせん）。

時年二十一

語釈

語釈
觀海樓記「五竹が藩公に命じられて記した。嗣世^{しせい}世を継いで。立学^{りつがく}學問を広め奨励。右文^{うぶん}學問を尊び重んじる。風移^{ふうい}風俗が変わり。
俗易^{ぞくえき}平凡、なみになり易い。咸和^{かんわ}皆遍く和らぐ。乃^{だい}汝、即ち、其処で。樓^{ろう}二階家以上の建物。尾津^{おす}地名。海濱^{かいひん}海岸。海辺。構^{こう}構える、構築^{こさく}。扁^{へん}扁額、平たい札。門戸にかける札。臣^{しん}家臣。裕^{ゆか}五竹。觀海^{かんかい}海を観る。蒼海^{そうかい}青い海。吞^{どん}吞む。預山^{よざん}山名。仙島^{せんとう}鳥の名。汀草^{ていそう}渚に生える草。萋々^{せいせい}草が盛んに生えるさま。鷺^{さぎ}鷺。鷺^{さぎ}鷺。亮^{あきら}真鴨。鷗^{おう}鷗。沙^さ沙。砂。瀾怙^{らんご}瀾。大波、怙^ご頼る、宛にする。海色^{かいしき}海の色。黛^{まい}黒。翠^{すい}緑。烟^{えん}煙り。煙り。靄^{あい}靄。蘆^ろ蘆。渚^{さしづ}波打ち際、砂浜。霽^{せい}雨が晴れ上がる、晴れる。盡^{じん}尽きる、何も無い。纖弱^{せんじやく}僅かな曇り。島嶼^{とうしょ}島、小島。皎然^{けうぜん}色の白さ、明らかなさま。玻珠^{はしゅ}七宝の一つ、水晶の類。茫々^{ぼうぼう}広々と。際涯^{さいがい}最果て、限りなく。佳^か佳い。奇賞^{きしょう}珍しさ、不思議さを褒める。百出^{ひゃくしゅつ}沢山出る。珠玉^{しゅぎよく}朱色の玉。具状^{きじょう}具体的な状況。俯^ふ伏して。蓋^{たいてし}おもつに、これなんぞ。洋々^{ようよう}広々と。不肖^{ふせう}賢くない、愚か、父祖に似ないの意、謙遜の自称。聖賢^{せいけん}聖人と賢者。楚王^{そおう}楚の國の王。強臺^{きやうたい}物見櫓。後世^{ごせい}後の世。高臺^{かうたい}物見櫓。陂池^{はいち}ため池。忌む^い人の感情を害する、嫌う。盟^{めい}盟約、約束。誓^{ちか}う。雖^{いかに}けれども、たとい、これ。臺^{たい}台。麀鹿^{ぶかく}トナカイと鹿。野卑^{やひ}な人。魚鼈^{ぎょべつ}魚とスッポン。靈臺^{れいたい}魂の在る所。周代、天文。氣象の観測に用いた物見台。廢興^{はいきう}國の興るか廃止か。存亡^{そんぽう}存在か滅亡か。與^{とも}に共に。辛亥^{しんがい}嘉永四年、八五一。臣裕^{しんゆたか}家臣南部裕。謹撰^{こんせん}謹んで撰。選^{せん}び記録する。

10 阿琴墓誌銘

姊諱阿琴。幼而慧敏。天資絕俗。丰采清麗。肌膚皙白。世人稱為秋水之白蓮。十歲喪親。為姑所養。姑親教女巧。一見便能之。雖老婦不能及焉。紡績之暇。姑自教讀書。一見不復忘。年才十有四。讀佛經。有省覺人生如幻。深歸佛乘。一日持阿彌陀經一卷。及觀音經一卷。至邑妙覺院。乞僧。僧見其妙齡。驚嘆曰。娘子妙齡歸道。成佛曷疑。既而晨昏誦經。念佛不已。姑戒之曰。汝年猶少。今非念佛之時。待老大而後為之可矣。姊曰。人生無常。此身如朝露。朝難料夕姑何出此言耶。姑服其言。亦不奪其志。爾後誓曰。念佛必至百萬。及至卒日。遂滿數。某月日遘疾。越九月九日。疾愈篤。自知其死。念佛不絕。迨息將絕。西向瞑目。手頻屈指。口猶喃喃。頗耳聽之。呼阿彌之聲。嫋々不絕如縷。姑問屈指何事。曰以代念珠耳。言畢宛然而逝矣。嗚乎哀哉。年才十有七矣。祔于正覺寺先塋。嗚乎世有不幸如予者耶。四歲喪考。五歲喪妣。亡何亦喪姊矣。嗟乎何其不幸之甚也。俯仰今昔。不堪泣血之漣如也。攬泣銘之曰。

父兮。母兮。先汝逝矣。姊兮。姊兮。先吾逝矣。人匪金石卒其逝矣。

此篇係二十三四歳作

匪蹈襲。匪鑿空。塵々廿四字。自心肺流出。盡骨肉死生。無窮之感使讀者不覺泣下。

釈文

阿琴墓誌銘
あこと ぼし めい

姉の諱は阿琴。幼なくして慧敏（聡く賢い）天資（生まれつき天が人に
いみな こと けいびん てんし

授けた性質）絶俗（俗、人とは異なる）丰采は清らかにして麗しく肌膚は皙白（星のごとく、また白く）。世の人は秋水
ぜつぞく ほうさい うしな こ きひ せつぱく しゅうすい

の白蓮を為すと稱す。十歳に親を喪い姑（叔母）養い為す所。姑親から女巧（機織り裁縫）を教る。一見し
びゃくれん すなわ いうと ほうせき いんま こ こと じょうう

て便ち能くして。老婦と雖も能くに及ばず。紡績の暇に姑自ら讀書を教え。一見して復た忘れず。
すなわ いうと ほうせき いんま こ

十四歳で佛經を讀み。人生幻の如く有りと覺り。深く佛乘に歸し。一日阿彌陀經一卷及び觀音經一
むら みょうがくいん ぶつじやう き ひとみだきやう かんのおんきやう

巻を持ち、邑の妙覺院に至りて。僧の訓誥を乞う。僧は其の妙齡を見て驚嘆して曰う。娘子妙齡
むら みょうがくいん こんご せんし せうたん ねんぶつ や

にして道に歸す。成佛は曷ぞ疑わん。既にして晨昏（朝に夕に）經を誦えて、念佛を已めず。姑は
じょうぶつ なん しんこん とな ねんぶつ や こ

之を戒て曰う。汝の年は猶お少く。今から念佛の時に非らず。老大を待つて然る後に之を為す可し。姉は曰う。人生無常此の身は朝露の如し。朝に夕を料り難し姑は此の言に何にも出せず、其の言に服う。亦其の志を奪わず。爾後誓つて曰う。念佛は必ず百萬に至る。卒日（死ぬ日）に至るに及び。遂に數を満し。某月日疾に邁い九月九日越して疾愈よ篤く（病氣が重くなり）。自から其の死を知り。念佛は絶えず。息は將に絶えんとすに。迨ぶも西向瞑目手は頻に指を屈す。口は猶お喃々（口数多く）耳に頻にして之を聴く。阿彌を呼ぶ聲は嫋々（音声が弱々しく声が細く長く途切れない）絶えず縷（細々と述べる）の如し。姑は指を屈して何事かと問うに曰う、以て念珠に代りての言で宛然（恰も丁度）逝く。嗚乎。哀しいかな。年十七歳にしてここ正覺寺の先塋に附す。嗚乎。世に不幸有り予如きは四歳で考を喪い五歳で妣（女兄弟の中の長女）を喪い。何んで亡す亦姉を喪う。嗟乎何んで其の不幸の甚だしき。俯して今昔を仰ぎ。泣血は漣の如くに堪えず。泣いて攬（引き取る）し之を銘して曰う。

父や母や。汝は先いで逝く。姉や姉よ。吾に先いで逝く。人は金石に匪らず卒して逝く。蹈襲に匪ず（常道を行ひ古いしきたりに従うのではない）

鑿空に匪ず（新しく道を切り開くでもない）

塵々廿四文字「前行の原文」「父兮母兮姉兮姉兮先吾逝矣人匪金石卒其逝矣」を云う。心肺より流れ出

る。骨肉の死生に盡きて。窮り無きを之れ感ず。讀む者を使って覺えず泣き下る。

此篇二十三、四歳

語釈

阿琴＝五竹の姉。墓誌銘＝死者の生前の徳行、こうせきなどを金石に記した文章、可化に埋めるものを墓誌といい、墓誌の終わりに付けら

れた韻文を銘という。諱＝忌み名、忌む、嫌う、口にするのを嫌う、かくして云わない、憚る、懼れる、戒名、慧敬＝聡い、賢い、聡知恵がある。

天資＝天分の資質。絶俗＝俗にはない。丰采＝姿、美しい姿。清麗＝清く麗しい。肌膚＝肌と皮膚。皙白＝明らかに白い、明るい、賢い。世人＝世間の

人。秋水＝秋の澄きった水、全て清らかな物のたとえ、人の心、研ぎすました刀剣。白蓮＝白い蓮の花。喪＝喪う、死ぬ。姑＝伯母、叔母。女巧＝裁

縫、炊事など女の仕事とされて居た物全て。紡績＝糸を紡ぐ。佛乘＝歸す＝帰依。阿彌陀經＝無量の意、慈悲深い如来の名浄土宗、真宗のお経。

観音經＝菩薩の一つ慈悲の化身といわれ、ぼさつのうち最も広く信仰されている、阿彌陀如来の左脇士、のお経。邑＝村、里。妙覺院＝寺名。訓詁＝

文字の昔の意味の解釈、古訓。妙齡＝若い年頃、うら若い。驚嘆＝驚き嘆息する。成佛＝佛に成る。曷＝間違ひ無し。晨＝あした、早朝。昏＝黄昏、

日暮れ。誦＝唱える。念佛＝佛を念じる、波阿弥陀仏を唱えることを唱名念仏といい、正座して佛の姿を念じ思い浮かべるのを觀想ねんぶつといい、

佛の本質の理を觀じるのを實相念仏という。戒＝諭す、訓戒。汝＝お前、そなた。雖＝思うに。娘子＝娘の子。人生＝人としてこの世に生きるこ

と、人の一生。無常＝定めがない、人生の儚いこと。朝難＝朝病につき。夕料＝夕べに死す。老大＝大人老人になり。爾後＝その後。數滿す＝満願。

疾^{しつ}邁^{まい}病^{びやう}に遭^あう、まみえる。疾^{しつ}疾病^{じつびやう}。愈^ゆいよいよ。篤^{とく}重^{おも}い、重態^{じゆうたい}、危篤^{きとく}。迨^{たい}及^{およ}ぶ、至^{いた}る、まで、願^{ねが}う。瞑目^{めいもく}目^めを瞑^くる。頻^{しきり}に頻繁^{しんぱん}に。
 猶^{なほ}未^なだ。喃喃^{なな}々々^{なな}くどくど話^わす、くどくど喋^{しゃ}る。願^{ねが}懇^{こん}ろに、長^{なが}く、長^{なが}い。阿彌^{あみ}阿彌^{あみ}陀^だ。嫋々^{じやうじやう}風^{ふう}がそよぐ、しなやかで美しいさま。縷^る糸^い筋^{しん}糸^い。
 すじのよつに細長^{ほそなが}い、つすれ、詳^{しょう}しい。念珠^{ねんじゆ}数珠^{すしゆ}。畢^{ひつ}終^{しゆう}わる。逝^ゆく逝^ゆ去^こ。正覺寺^{しやうがくじ}阿琴^{あこと}の墓^ぼのあるところ。先塋^{せんえい}先祖^{せんぞ}の墓^ぼ。袝^ふ會^{かい}わせまつる、
 先祖^{せんぞ}の墓^ぼに子孫^{しそん}と合祀^{がうし}する。喪^{そう}喪^{そう}つ、死^しぬ。嗟乎^さ感嘆^{かんと}または嘆^{なげ}き悲^{かな}しむ声^{こゑ}。嗚乎^あ感嘆^{かんと}詞^し。考^{こう}父^ふ、亡父^{わうふ}。妣^ひ母^ぼ、亡母^{わうぼ}。俯^ふ伏^ふせる、伏^ふして。漣^{れん}。
 大波^{たいは}、さざ波^は、涙^{なみだ}を流^{なが}すさま。泣攢^{きゆうさん}泣^なき取^とり集^あめる、引^ひき取^とる。姊^し上^{じやう}の姉^{あね}のこと。兮^{けい}主語^{しゆご}や文^{ぶん}の後^{のち}につけて感嘆^{かんと}や強調^{きやうてう}の語氣^{ごき}を現^{あらわ}す助字^{すけじ}、訓^{くん}。
 読^よみには普通^{ふつう}読^よまない。金石^{きんせき}金^{きん}属^{じゆく}と意^い志^し、鐘鼎^{しやうてい}と石^{いし}碑^ひ。匪^ひはこ、非^ひず、彩^{さい}のあるさま。蹈襲^{たうしゆ}古^こいしきたりにそのま^まま従^{したが}う、従^{したが}来^{らい}の決^{けつ}まりを堅^かく守^{まも}る。鑿空^{さくくう}空^{くう}の穴^{けつ}の意^い、空^{くう}に穴^{けつ}を明^あける。心肺^{しんぱい}心^{しん}臓^{ざう}と肺^{はい}。骨肉^{こつにく}骨^{こつ}と肉^{にく}、肉親^{にくしん}、親兄弟^{しんけいだい}。死生^{しせい}生^{せい}と死^し。窮^{きゆう}窮^{きゆう}る尽^{じん}きる。泣下^{きやうか}泣^なき崩^{くづ}れる。
 塵々^{ちんじん}ほんの僅^{わずか}か。

11 都家寓居記

若水先生。宅之西南隅。有一茅屋。甚小。室僅容膝。壬子秋。余憮而寓焉。室之東北。為農家隔離。見黃菜青麥。居然有郊野之趣。西南則錦屏山。蒼然出于槿籬之上。使人有塵外之想也。籬旁有三櫻樹。其一。花大而竊黃。其一花小而白。其一。花極大。白而帶紅。千瓣下垂。光彩照人。最可愛也。一日置酒。招先生。時櫻花盛開。酒酣。先生指花告余曰。是吾九華翁所愛也。每花開。翁輒來觀之。吟詠樹下。低徊不忍去。今年花則有。而人則亡矣。言畢潛然。蓋九華翁。為先生之親友。甚愛櫻花。嘗著櫻話一卷。而以客冬下世云。余乃謂先生曰。人生聚散悲歡。亦何常之有。余幼而失怙。貧窶不能自給。遂賣廬。已亥寓于松氏之室。壬寅寓于桂氏之室。壬子秋。遂來寓于此。屈指忽已二年矣。向之來時。萎然而枯者。今皆欣然而榮矣。蕭然而黃者。今皆燁然而華矣。萬物得時。莫不發榮滋長。而余則瓢飲簞食。貧困如舊。一琴一書。依然故吾也。嗚乎。余十餘年間。三遷其居。而貧困如舊。則自今以往。漂泊無所底止。未知明年又在何處。此花可得復見乎否。相視愴然。遂酌及哺而別。余有感于身世。遂錄酒間語。以為寓居記。時嘉永六年癸丑。春三月初五也。時年二十三

釈文

都家寓居の記（都志見家に仮住まいの記）

若水先生宅の西南の隅一茅屋が有り。甚だ小さく室は僅かに膝を容る。壬子の秋余は僦りて寓す室の東北は、籬を隔てて農家を為し黄菜青麥を見る。居然り郊野の趣有り。西南は錦屏山蒼然として干槿（沢山の木槿）籬の上を出る。塵外の想い有りを人に感じさせる。籬の旁らに三櫻樹有り、其の一つ、花は大にして竊に黄色、其の一花は小にして白なり。其の一つ花は極て大きく白にして紅を帯る。千瓣垂れ下り、光彩照り人は最も愛す可し。一日酒を置き先生を招く、時に櫻花は盛開にして酒は酣なり、先生花を指し余に告げて曰く、是れ吾れ九華翁の愛す所なり。花が開く毎に翁は輒來して之れを觀る。樹下で吟詠低徊して去を忍びず。今年の花は則ち有りて人は則ち亡しなり。言い畢えて潜然たり九華翁は先生の親友を為す。甚だ櫻花を愛し嘗て櫻話一卷を著す。客冬以て下世して云う。余はそこで先生に謂い曰く、人生は聚散悲歡にして亦た何んぞ常に之れ有り。余は幼くして怙を失う。貧窶にして自給を能はず。遂に廬を賣り。巳亥に松氏の室に寓す。壬寅に桂氏の室に寓す。

壬子じんしの秋遂に此れ來り寓ぐうす。指を屈すること忽ち己に二年なり。向いの來る時、萎然いぜんとして枯かれ、今は皆欣然きんぜんとして榮るなり。蕭然しょうぜんとして黄はそれ今皆燁然ようぜんとして華なり。萬物は時を得て榮えて滋長じを發せず莫れ。余は則ち瓢飲ひょうたんしよく筆食して、貧困むかし舊の如し。一琴一書は依然として故に吾なり。嗚乎。余は十餘年間其の居を三遷す。貧困ひんこんは舊の如し。則ち今より以て往く、漂泊ひょうはくは底止る所無し。明年又た何處に在るや未だ知らず。此の花復た見得可しや否や。相視る愴然そうぜんとして遂に酌くみ嘯くに及びて別れる。余の身は世に感ず有り。遂に酒間の語を録し以て寓居の記を為す。時に嘉永六年癸丑きちゆう。春三月初五なり。時年二十三

語釈

都家寓居記といけいぐき＝都志見家に仮住まいの記。若水先生じくすいせん＝都志見若水。壬子じんし＝嘉永五年一八五二。僦きう＝雇う、雇われる、借りる。寓ぐう＝宿る、仮住まい、身を寄せる。籬り＝生け垣。黄菜おうさい＝黄色の野菜。青麥せいばく＝青い麦。居然きょぜん＝居ながらにして。郊野の趣きやうのしゆ＝郊外の野のさま。錦屏山きんべいざん＝紅葉で錦の屏風を巡らしたような山。蒼然そうぜん＝青々としたさま。槿籬きんり＝木槿の生け垣。槿きん＝木槿、葵科の落葉低木。夏秋に一重又は八重の紅紫色、または白色の花を開く。人塵じんじん＝人間の煩わしさ。旁はう＝傍らに、側に。竊せう＝密かに。千瓣せんぱん＝千の花弁。沢山の。下垂かすい＝下に垂れ下がる。光彩こうさい＝光鮮やかに、彩り。盛開せいがい＝満開。酣たん＝酒を飲んで楽しむ、酒宴のさなか真つ盛り。九華翁きゅうかおう＝玉乃九華。瀟校養老館教授、五竹の師。樹下じゆか＝櫻樹の下。吟詠ぎんえい＝詩を吟じ詠む。低徊ていかい＝あちこち行き来してあたりをみまわす、彷徨う、立ち去り難く歩き回る。畢ひつ＝終わり、尽くす。潜然せんぜん＝密やかなさま、心を静かに落ち着かせる。蓋たし＝

思つに、むしろ、なんぞ。轍來ちようらい＝即ち何時でも直ぐ来る。嘗てかつ＝試みる、これまでに。聚散しゆさん＝集まったり散る。悲歡ひかん＝悲しんだり喜んだり。貧糶ひんせう＝貧しいことが屢々。廬ろ＝家。已亥いがい＝天保十年、一八三九。萎然いぜん＝悄然と萎れたさま。貧困ひんこん＝貧しく困窮。舊きゆう＝昔のように、旧。枯者こ＝枯れる、落ちぶれる。欣然きんぜん＝欣快、喜ぶさま。蕭然しょうぜん＝ひっそりと物寂しいさま。燦然さんぜん＝輝く、輝かしいさま。榮滋えいじ＝益々栄える。瓢飲ひょうたんしよく＝瓢飲、一筆食、一瓢飲、云々在り。瓢＝酒や水を入れるもの、ひさご。簞たん＝竹で編んだ飯櫃。漂泊ひょうはく＝あちこちと漂い泊まる。愴然そうぜん＝悲しみ傷むさま。晡ひ＝夕方、日暮れ、夕飯を食べる頃。癸丑＝嘉永六年、一八五三。

12 野翁采風蘭圖

上有岸々千丈之長松。下有溟々萬仞之深淵。中則巉巖峭壁。不知其幾十尋也。而風蘭生焉。有一翁。被褐腰籃。繩于松根。垂繩于絕壁而下。如欲采風蘭者。嗚乎亦危矣哉。翁之命。懸于一條之繩。一失手足。則骨且弗可索矣。太史公曰。天下穰々。為利往。信哉。翁之采風蘭。足以纔糊口。而不顧其身之危。一何至此也。然以余觀之。翁其有未可笑者乎。煬帝之被弑。豈興于徒都之日耶。明皇之蒙塵。豈始于郎當之時耶。自達人觀之。沈香看花之時。蜀道之禍。已及其身矣。龍舟張樂之日。宇文之劍。既在其吭矣。而夫二帝者。以為雖天堂莫及焉。亦可憫耳。且也。七日關白。三日將軍之類。史不絕筆。則其危比翁為甚。而如翁者。未嘗聞其有隕命於深淵者也。然則彼大廈廣堂。危於一條之繩。噫。

此篇係二十二歲作

釈文

野翁風蘭采るの圖

上の岸々に千丈の長松有り、下に溟々（薄暗い）萬仞の深淵有り。中は則ち巉巖（岩が嶮しく高く）峭壁（切り立った嶮しい崖）。其の幾十尋（一尋は六尺、一、八二米）か知らず。風蘭生じている一翁有りて、褐（粗末な着物）を被て籃を腰に、松の根に縋りて、を絶壁に縋りて垂れ下りての、如きは風蘭を采らんと欲す。嗚乎亦た危きかな翁の命一條の縄に懸りて、一たび手足を失しなえば、則ち骨は索す由もなし。太史公（周代の官長）曰く。天下穰々（豊かなさま）利を得るを為す信せるかな。翁の風蘭を采るは以て纔かに口糊（生活の足しにする）に足す。其の身の危きを顧りみず。一つに何んぞ此に至る、然るに余は之を觀て未だ笑うに可からず。煬帝（隋の二代の皇帝）これ弑（身分の下者の殺される）被むる。豈千の都に徒りて興じる、この日明皇の蒙塵（天子が変事に難を避けて都から逃げ出す）。豈郎當（だらしない）の時に始まり。達人（達人）之れ觀てより沈香花を看る時、蜀道の禍（四川省の蜀道の危険な道、暗に玄宗皇帝の西幸を戒めた）己に其の身に及ぶ、龍舟（天子の乗る船）に樂を張るこの日、宇文の劔既に其の吭（喉元）に在り。夫れ二帝は以て為す天堂（天上の宮殿）と雖も及ぶ

に莫^{なか}れ。亦た憫^{あわれ}む可し且つまた七日關^{かん}白^{はく}。三日將軍^{たぐ}の類^るい。史は筆^{でつ}を絶^{ぜつ}せず。其の危^{あやう}き翁^おに比^ひべて甚^{かつ}だしく翁^おの如^{ごと}く未^なだ嘗^{かつ}て命^{めい}は深^{しん}淵^{えん}に隕^おちるそれ有^あるを聞^きかず。然^{しか}しながら則^{すなは}ち彼^かの大^{たい}厦^か廣^{くわう}堂^{たう}。一條の繩^{あやう}に於^おて危^{あやう}し。噫^{ああ}。

此の篇係二十一歳作

語^ご釈^{しやく} 野^や翁^う 野^やに下^{くだ}つた翁^う 風^{ふう}蘭^{らん} 蘭^{らん}、ふじばかま、菊^{きく}科^かの多^た年^{ねん}生^{せい}の草^{くさ}、秋^{あき}に紫^{むらさ}色^{しき}のはなを開^{ひらく}く、香^{かう}草^{そう}。采^{さい}る 採^{さい}取^と。岸^{がき}々^ん 岸^{がき}の高^{たか}いさま。千^{せん}丈^{ちやう} 大^{だい}変^{へん}に高^{たか}く長^{ちやう}い形^{けい}容^{よう}。長^{ちやう}松^{しょう} 長^{ちやう}大^{だい}な松^{しょう}。溟^{めい}々^{めい} 暗^{あん}い。萬^{ばん}仞^{じん} 尋^{じん}、高^{たか}さや深^{しん}さを測^{はか}る単^{たん}位^い、一^{いっ}尋^{じん}は七^{しち}尺^{せき}。深^{しん}淵^{えん} 深^{しん}い淵^{えん}。嶋^{さん}巖^{がん} 巖^{がん}山^{さん}が高^{たか}く嶮^{けん}しい。峭^{せう}壁^{へき} 切^きり立^たつた嶮^{けん}しい崖^{がき}。幾^{いく}十^{じゅう}尋^{じん} 幾^{いく}十^{じゅう}尋^{じん}。尋^{じん}は七^{しち}尺^{せき}。一^{いっ}翁^う 一^{いっ}人^{にん}の老^{らう}人^{にん}。褐^{かふ} 粗^そ末^{まつ}な着^{ちやく}物^{ぶつ}、ぬの、荒^あく^くて粗^そ末^{まつ}な布^ふで作^{つく}つた衣^い服^{ふく}。籃^{らん} 籠^{ろう}、大^{だい}きい籠^{ろう}、竹^{ちやく}の籠^{ろう}。松^{しょう}根^{こん} 松^{しょう}の根^{こん}。絶^{ぜつ}壁^{へき} 切^きり立^たつた崖^{がき}。索^{さく}す 搜^{そう}索^{さく}。探^{たん}す。弗^ふ 失^{しつ}つ、ず、あらず、否^ひ定^{てい}の助^{すけ}字^じ。太^{たい}史^し公^{こう} 穠^{じゆう}々^{じゆう} 豊^{ひさ}かなさま豊^{ひさ}穠^{じゆう}。纒^{ざい} 僅^{けん}かに、少^{せう}し。口^{こう}糊^こ 口^{こう}に糊^こする、粥^{しやく}を嚙^かる、転^{てん}じて生^{せい}活^{かく}をす。煬^{やう}帝^{てい} 隨^{ずい}の第^{だい}二^に代^{だい}の皇^{かう}帝^{てい}高^{かう}祖^そ文^{ぶん}帝^{てい}の第^{だい}二^に子^し、豪^{かう}華^わを好^{かう}み土^ど木^{もく}工^{こう}事^じを起^{おこ}した^たが、負^お担^{たん}に苦^くしむ国^{こく}民^{みん}の反^{はん}感^{かん}を以^{もつ}て遂^{つい}に臣^{しん}に殺^{ころ}され^た。弑^{しつ}被^ひる 臣^{しん}が天^{てん}子^しを殺^{ころ}すこと。豈^あ どうして、なん^ど。徒^た日^{じつ} 徒^たに日^{じつ}を過^かす。明^{めい}皇^{かう} 明^{めい}君^{くん}、皇^{かう}。蒙^{もう}塵^{じん} 世^せ間^{かん}の煩^{わづ}わしいこと^を被^ひる。郎^{らう}當^{たう} 衣^い服^{ふく}がだ^だぶ^ぶして体^{たい}に合^あわな^いさ^ま、駝^た裸^ら子^しが無^ないさ^ま。達^{たつ}人^{にん} 広^{ひろ}く道^{だう}理^りに通^{とお}じた人^{にん}。学^{がく}問^{もん}や技^ぎ芸^{げん}に熟^{じゆく}達^{たつ}した人^{にん}。沈^{ちん}香^{かう} 熱^{ねつ}帯^{たい}に産^うする香^{かう}木^{ぼく}、唐^{たう}代^{だい}の宮^{きやう}中^{ちゆう}にあつたあずま^{あずま}の名^な。蜀^{しやく}道^{だう}禍^か 三^{さん}国^{こく}時^じ代^{だい}蜀^{しやく}の地^ちに建^{けん}てた候^{こう}国^{こく}の禍^か。龍^{りゆう}舟^{しゆう} 天^{てん}子^しの乗^{のり}る舟^{しゆう}、舳^{しゆう}先^{せん}に龍^{りゆう}の彫^{てう}り物^{ぶつ}があ^る。樂^{がく}張^{ちやう} 音^{おん}樂^{がく}會^{かい}。宇^う文^{ぶん} 煬^{やう}帝^{てい}を弑^{しつ}した臣^{しん}。吭^{かう} 喉^{こう}元^{げん}。天^{てん}堂^{たう} 天^{てん}上^{じやう}の宮^{きやう}殿^{てん}。唐^{たう}の則^{そく}天^{てん}武^ぶ后^{こう}の建^{けん}てた宮^{きやう}殿^{てん}の名^な、骨^{こつ}相^{しやう}術^{じゆつ}で、額^{がく}の上^{じやう}部^ぶをい^いつ、極^{ごく}樂^{がく}世^{せい}界^{かい}。雖^{いふ} け^けれども、た^たとい。莫^{なか}れ 無^なかれ。憐^{あへ}れむ 憐^{あへ}憫^{もん}。關^{かん}白^{はく} 国^{こく}政^{せい}にちて天^{てん}子^しに奏^{そう}上^{じやう}する前^{まへ}に、然^{しか}るべき重^{じゆう}臣^{しん}に其^{その}意^いを通^{とお}じて申^{まを}し上^{じやう}げ^げる、國^{こく}、天^{てん}皇^{かう}

を補佐して政務を執行した重職。
嘗て^{かつ} 前に。
深淵^{しんえん} 深い淵。
隕者^{いんしゃ} 落ちる者。
大厦^{たいか} 大きな家建物。
廣堂^{こうどう} 広くて大きい堂。
噫^い 嘆息、驚嘆の声。

13 題蘭亭帖

章子厚。日臨蘭亭一過。蘇子瞻晒之。謂從門人者。終非家珍。謝肇淛非之。當矣。然在今日。墨跡多贗。其真者。亦數經摹勒。山陰面目。十無一存矣。見此等帖。且夕臨摹。一向泥着則愈去愈遠矣。

以下二十四五歲作

蘭亭宴會之人。王羲之謝安謝萬等。合四十三人。皆當時名賢。各有述作。而今人獨知有羲之文而已。蓋羲之既以好文章。壓倒時輩一番。加之。以千古未曾有之書。是以名愈顯耳。

王羲之。為普末第一人物。然在當時。推謝安。余以為不然。羲之超謝安万万。今人徒知貴其書。蓋書名掩之耳。

此文。駁莊子一死生齊彭殤。發無限感慨。極有見解。此羲之之所以遠過時輩也。蓋。當時貴老莊。無有不以一死生

齊彭殤為達者。獨義之生于貴浮虛之世。和而不流。卓然有超人之識。故其發而見于文章者如此。

釈文

蘭亭帖に題す

章子厚には日に蘭亭に臨して一過する。蘇子は瞻て之を晒う。謂う門人を従いて終に家珍に非ず。

謝肇淛は之に非ず。當に然り今日に在りて墨跡は贋(偽物)多く、數は摹勒(真似て書いたもの)を経る。山陰

(山陰は王羲之を指す)面目(体面、さすが)十に一も存在せず。此れ等の帖(書の手本)を見て旦夕(朝晩)に臨摹(手

本を見て真似て書く)一向泥着(本物にはなれないの意)則ち愈よ去つて愈よ遠くなるものである。

以下二十四五歳作

解説

蘭亭帖は蘭亭は亭の名。帖は王羲之の筆跡で習字の手本となつてゐるもの。晋の王羲之ら名士四十二

人が永和九年三月三日浙江省紹興市の南西會稽山陰の蘭亭に集まり曲水の宴を行つたときの詩集の

序文の筆跡が現代までも「蘭亭帖」^{らんていじょう}として書を学ぶものの手本となっている。

章子厚^{しょうしこう}、蘇子^{そし}については確かなところ確証は困難。

謝肇淛^{しゃちょうせい}＝明の学者。福建省の人で博学者で「書」が巧みであった。

蘭亭宴會^{らんていえんかい}の人。王羲之^{おうぎし}謝安^{しゃあん}謝万^{しゃまん}等合せて四十三人、皆當時の名賢^{めいけん}各述作^{じゆつさく}有^あす。今人獨^{ひとり}り羲之^{ぎし}の文を有るを知り、羲之^{ぎし}の文章^{ぶんしょう}を好み以て、時輩^{じはい}を壓倒^{あつとう}して一番之に加えて、千古^{せんこ}未曾^{みぞう}有^あの書は以て是れ名^{いよ}は愈^{いよ}よ顯^{けん}なる。

王羲之^{おうぎし}。普^{しん}末^{まつ}の第一^{だいいち}の人物^{じんぶつ}を為^なし。然るに當時に在りて、謝安^{しゃあん}を推して余は以て然りとせずを為^なし、羲之^{ぎし}は謝安^{しゃあん}を超えて万々^{ばんばん}（絶対）なり。今人^{こんじん}の徒^{ともが}ら其の書の貴さを知る。書名^{しよめい}は之^{これ}を掩^{おほ}つ。

此の文。莊子^{そうし}（莊周の尊称）に駁^{まじ}りて一死生^{しせい}は彭殤^{ほうしょう}（長命と短命）齊^{ひと}しく感慨^{かんがい}限り無きを發^はす。極^{けん}める見解^{けんかい}有

り。此の羲之の以て遠く時輩を過ぎし所、當時老莊（老子と莊子ともに道家）に貴く、達する為す彭殤は一死生に齊しく不やを有りや無しや獨り羲之生れて浮虚の世に貴し。和して流されず。卓然（高く抜きん出ているさま）人の識を超ゆる有り。其の發するところ文章に見るは此の如し。

語釈

蘭亭帖＝蘭亭序、行書で名高い。章子厚＝蘭亭＝亭の名、蘭亭帖、蘭亭記の王羲之の筆跡で、習字の手本、蘭亭記の晋の王羲之ら名士四十二人が三五三年三月三日の節句に蘭亭に集まり、曲水の宴をしたときの詩集の序、王羲之の作蘭亭集序。臨み＝臨席、その場に行く。一過＝さっと通り過ぎること。蘇子＝瞻る＝見る。晒＝嗤う、あざ嗤う。謝肇淛＝明の学者博學で書画巧みであつた。墨跡＝筆跡。贗＝贗、偽物。摹勒＝文字は文章を模し、写し、文字を刻み付ける。山陰＝王羲之のことのこと。面目＝其の人に与えられた、世間の高い評価、メンツ。帖＝書き物、はりふだ、ピラ、書き物の手本。摹＝模す、写す。一向＝まるつきり、てんで、全く。泥着＝泥が着く、着きなすむ。愈＝いよいよ。王羲之＝晋の書家、字は逸少、官名により王右軍とよばれる、書道に優れた、日本への影響も極めて大きく、奈良、平安時代の書は全てかれの流れをくんでおる、作品では楷書の樂毅論、黃庭經、行書の蘭亭序、草書の十七帖などが名高い。晋末＝晋の末期。人物＝人の性質、人柄、優れた人。宴會＝酒宴、楽しむ、宴、の會。謝安＝晋の名臣。謝万＝名賢＝名高い賢人。述作＝著作。蓋＝思うに、なんぞ。文章＝あや、礼樂、れいせつと音楽や制度など、國の文化を形成しているもの、文字を連ねて一つの纏まった意味を述べたもの。倒時＝倒れた時。輩＝仲間。壓し＝抑える、抑えつける、他を抑えて。千古＝千年の昔。未曾有＝未だこれまでになかつたこと。顯＝顯著、明か。万々＝掩＝覆つ、閉じる。莊子＝莊周の尊稱、書名莊周の著者、戦國時代の道家の學者、孟子と同時代の人で終生仕えず、自然に帰れと首長し、孔子の思想に反対した。彭殤＝長名と短命、彭は彭祖殤は若死にのこと、殤祖。齊駁＝等しく良し悪し

を論じ誤りを直す。感慨かんがい〓深く観じて心が奮いたつたり、嘆いたりする、感動して憤激する。見解けんかい〓物事の道理を視て覚る、意見の建て方。時輩じはい〓時の仲間。老荘らうしやう〓老子と莊子。死生しせい〓生るか死ぬか。齊せい〓等しく。浮虚ふきょ〓ふわふわと虚しい。卓然たくぜん〓高くぬきんでいるさま、高く優れているさま。

14 櫻花頌

東方之英。扶桑之精。凝而成。蒸而生。骨水晶。髓玉瑛。香而清。明而輕。沈香之亭香兮楊貴妃醉未醒。九華之帳
暗兮李夫人影自明。花之無情。猶欲頌城。人而有誠。可感神明奈何萬物之靈。使爾獨壇美名。大丈夫生而名不向異
域轟。魂魄死而為日本獨立之櫻。

二十八歳作

釈文

櫻花頌
おうかしよう

東方の英は扶桑の精、凝成して蒸して生ず。骨水の晶は髓玉の瑛。香は清く。明らかにして輕
く、沈香の沈水亭それ楊貴妃酔つて未だ醒ず。九華の帳暗く李夫人影自ずから明らかなり。花の無情
猶お城に願ならんと欲す。人に識有するならば神明を感じず可し、奈何せん萬物の靈、爾獨り美名

を壇ほしいままにし使だいじょうぶて大丈夫生いいきして名は異域とどろに向こんぱくつて轟どくりつかず。魂魄死こんぱくして日本獨立どくりつの櫻を為す。
二十八歳作

語釈 櫻花頌おうかしやう 桜花を称える、褒める。東方とうほう 中国の東の方。英えい 美しい花、花房、名譽。扶桑ふうそう 扶桑のあるところ、転じて日本。精せい 心、魂、真

心、生命の根源。凝きやう 凝らす、固める、集中する。蒸じやう 蒸す。骨水晶こつすいしやう 骨は水晶。髓玉の瑛えい は脂肪状に凝固。沈香亭ちんかうてい 唐代に宮中のあすまやの名。

楊貴妃 唐の玄宗皇帝の愛人。醒さめ 酔いから醒める。九華きゅうか 宮室や器物の美しい飾り。帳とばじ 垂れ幕、垂れ布、玉帳、蚊帳。李夫人りふじん 玄宗皇帝の皇后。

自明じめい より明か、自ずから明か。願ねん 懇ろ、願、長く、長い、高い。神明しんめい 神、人の心、精神。奈な いかん、いかんせん、いかんぞ、どうしようもな

い。萬物の靈ばんぶつのたま 全ての物の中で最も靈妙なものの。爾じ 汝、お前、その、これ、しかり、そのとつり、のみ。美名びな 美しい名、有名、高名。無情むじやう 定めが

ない、心がない、真心がない、情けが無い、儚い。大丈夫 意志が強く、立派な人。異域いいき よその土地、外国。轟とどろ 名前が遍く知れ渡らない。魂魄こんぱく

魂、靈魂、人が死ぬと、魂は天に上り、魄は地上に留まるといふ。獨立どくりつ 一人で立つてゐる、人の力を借りず自分の力で身を立てる、一人立ち。

獨立 明末の医師で志士、清の戦いに敗れ日本に亡命、明室の再興を願うが成らず剃髪して僧籍に入る、岩国藩主吉川広嘉公に招かれて持病の治療に

かの錦帯橋の架構の構想に大いなる寄与をした。

15 韓信出跨圖

韓信出跨。便王于齊。張良履足。漢以為帝。皆以能忍乎難忍也。然信能忍乎出跨。不能忍乎齊國之利。故致良狗之烹。漢帝能忍乎履足。不能忍乎呂氏之愛。故致牝雞之晨。不忍乎可忍。而忍乎不可忍。皆兩失之。近者。伊井氏屈膝犬羊。而喪其元。神州亦隨而陸沈。是亦忍乎不可忍者。嗚乎。江山不異。腥羶之氣滿眼。是吾人不可忍之時也。與全性命從西戎。寧為魯連蹈東海。

此篇係三十歲作

釈文

韓信かんしんまた跨いすぎ出いするの圖

韓信かんしんまた跨いすぎ出いする。便すなわち齊せいの王ちやうりやうの張良ちやうりやうの足はかを履はかし、漢かんは以もつて帝ていを為なす。皆みな能よく忍しのび難がたきを忍しのび以もつて然しかして信しんじて能よく跨またぎ出いすでて忍しのぶ、齊國せいこくの利しを忍しのぶに能よはず、故ゆゑに良狗りやうこの烹ほう漢帝かんてい能よく足あしに履はかくを忍しのび、

呂氏ろしの愛に忍しのぶ能はず。故に牝鷄ひんけいの晨しん忍しのぶ可し、忍しのばず忍しのぶ可らざる忍しのぶ、皆みな兩つながら之を失つ。
近者きんしや（近頃）伊井氏いゐ膝ひざを犬羊けんように屈くつして其の元を喪うしなう。神州亦た随したがいて陸沈りくちん（世が乱れて亡びる）する。是れ亦た忍しのぶ可らずして忍しのぶ。嗚乎いひやう。江山くわんざんは異ならず。腥羶せいぜんの氣眼きがんに滿みつる。是れ吾人忍しのぶ可らずの時なり。性命せいめいを全まっして西戎まつとうに従したがつこと、寧魯連むしろるれんに為なして東海とうかいに蹈はひる。

此篇係三十歳作

語釈

韓信かんしん＝漢の高祖の臣、蕭何、張良とあわせて三傑とされる、謀反の罪で殺された。跨出こる＝股をくぐる。齊王せいおう＝太公望呂尚。張良ちやうりやう＝漢の高祖の名臣。足履そくろ＝足を踏む。忍しのび＝忍耐。信しん＝韓信。齊國せいこく＝周の太公望呂尚が建てた國。良狗りやうこ＝良い犬、はかりごとの巧みな謀臣のたとえ、良狗烹りやうこほう。烹ほう＝煮る、料理、煮殺す、釜茹かぬでの刑。漢帝かんでい＝劉邦。呂氏ろし＝呂后の一族。牝鷄ひんけいの晨あした＝牝の鷄が夜明けを知らせる。伊井いゐ＝井伊直弼幕末の大老彦根藩主、將軍繼嗣問題で一橋派と対立、勅許を待たず日米修好条約を調印、反対派を大弾圧した。世に安政の大獄、万延元年（一八六〇）桜田門外の變で水戸浪士に暗殺された。犬羊けんよう＝西洋人を侮蔑して呼ぶ。喪さう＝喪つ、死ぬ。陸沈りくちん＝陸地が沈む、人が世の中で姿を隠していること、世が乱れ亡びること、頑固で世の移りくありを知らないこと。江山くわんざん＝川と山、山河、ひろく國土をいう。腥羶せいぜん＝生臭い。性命せいめい＝万物が天から受けたそれぞれの性質、生命。全西戎ぜんせいじ＝全西洋の夷狄。寧ねい＝むしろ、安らか、なんぞ、どうして、の助字。魯仲連ろちゆうれん＝戦国時代齊の人、節操の優れた人物であつた。東海とうかい＝東方の海。蹈たう＝蔓延はひにる、水が漲る、水が広がる。

16 書長井雅樂詩歌後

長州。長井雅樂。有寵見用。去歲大賜祿。予聞之。嘆曰。若雅樂。或不得其死乎。座客皆笑之。獨川子道以為信然。今茲癸亥二月。有客。携雅樂詩一首國風三首來。示予曰。雅樂。今月六日賜死。此其絕命之辭也。時門生讀書。一童子偶誦白樂天太行路篇。至朝承恩暮賜死。予不覺泣下者數行。謂客曰。嗚乎。雅樂之不得其死。固不足怪也。予於樂天詩。大有所感焉。予於雅樂。無有半面之識。而知其不能全終者。無他。唯即其建議之邪正云爾。因記。古人見執玉之高卑。以斷其人之一生。恰如龜卜。何也。蓋亦不過即失其中正而察之已。動乎四體者。猶可以斷一生。況發於其言語文章者乎。程子云。凡讀史者。讀其半。掩卷須思惟。某事以後果何如。復開卷讀之。所思與所讀不爽。則學問之增進可知。予於今日事。亦用此法。往々不爽如此。因以謂。察其機之所動。雖千里之外無半面之識者。如見其肺肝然。故人之一言一行。固不可苟焉已。且夫。雲從龍常也。若龍遇雪而見。雲見蛇而起。皆非其時也。是以有亢龍之悔也。然則所謂妾顏未改君心改者。亦由妾擇其夫之不精歟。況其顏非國色者乎。遂書其所感。以自警。并以示子道。々々以為何如。

時年三十三

釈文

長井雅樂の詩歌の後に書す

長州長井雅樂寵み有り用うるを見る。去歲大祿を賜わるを予は之を聞き嘆いて曰う。雅樂の若き或は

其の死を得ず。座客皆之を笑う、獨り川子道以て信じて然りを為す。今茲に癸亥二月客有りて、雅樂

詩一首國風（和歌）三首携えて來たる。予に示して曰う雅樂今月六日死を賜う。此れは其の絶命の辭な

り。時に門生書を読み、一童子偶ま白樂天の「太行路」篇を誦えて、朝に恩を承り暮に死を賜う。

予は覺えず泣き下りて數行（涙がはらはらと幾筋か落ちる）客は謂つて曰う。嗚乎。雅樂これ其の死を得ず。

固くなに怪しむに足らずなり。予は樂天の詩に於て大いに感ずる所有り。予は雅樂に於て、半面の識

（一寸した顔見知りであること）にして其の終りを全うするを能はず。他に無く唯だ其の建議の邪正を即ち云

う。因つて記す。古人の玉の高卑を執らえて、以て其の人の一生を斷つ。恰も龜卜の如く何んぞなる。

亦た其の失うに過ぎず、その中の之を察して已む。四體に動く猶お一生を斷じ可し。況んや其の言語
文章を發するは程子云う。凡そ史を讀むは其の半を讀んで、卷を掩う思惟（考える）。某し事の以後
果して何如復た卷を開いて之を讀む、思う所讀む所ともに爽ならず。則ち學問の増進を知る可し。予
は今日の事に於て亦た此の法を用う。往々にして爽やかならずは此のし。因つて以て謂う。其の機こ
れ動く所を察して、千里の外と雖も半面の識無くも、其の肺肝（心の奥底）を見る然るに、故人の一言一
行固くなにも苟にも可しにせず、且つ夫れ雲は龍に従うは常なり。若し龍雪に遇うをして見るにして、
雲蛇を見るにして起つ。皆其の時に非らず。是れ以て亢龍の悔（天上に昇りつめた龍は後悔する。極めて尊貴な地位に
在る者は慎まないと失敗する恐れがある）なり。然り則謂う所妾顔（腰元の顔）未だ改めず君心改めるは亦た由し其の
夫れ妾擇（腰元を選ぶ）之れ精しくせずや。況んや其の顔は國色（優れている形容）に非らず遂に其の感ずる
所を書いて以て自警（自分を戒める）并せて子道に示す。子道以て何如を為す。

時年三十三歳

解釈

白樂天「たいこう 大行の路みち」篇。とは白樂天（七七八〜八四六）晚唐の大詩人の「新樂府五十首」の「其の十、夫婦に例えを借りて、君臣関係が終わりを善くし難いのを風刺した」詩

（参考）たいこう 大行の路みち。三十二古詩体の後半十四行の詩文から

人生莫な作婦人身な 人生まれて婦人の身と作る莫なかれ

百年苦樂由他人よ 百年の苦樂 他人に由る

行路難こうなん

難於山がた 山よりも難し

險於水けわ 水よりも險し

不獨人間夫与妻 獨り人間の夫と妻とのみならず

近代君臣亦如此か 近代の君臣も亦た此くの如し

君不見左納言右内史さなごん 君見ずや左納言 右内史うないし

朝承恩

あした 朝に恩を承け

暮贈死

くれ 暮に死を賜う

行路難

こうろ 行路難

不在水

水に在らず

不在山

山に在らず

只在人情反覆間

はんぶく 只だ人情 反覆の間に在り

語釈

長井雅樂ながい うた 萩藩士、百五十石に三百石の加増を受け家老格煮引き上げられて、直ぐ先の長井建白書、孝明天皇が和歌を添えて賞したもの、朝廷の空気の急変で、建白は下げられて雅楽は即刻帰国謹慎を命ぜられた、翌文久三年二月六日私邸で切腹した、君恩二報イント欲スレド業イマダ央ナラス自ラ羞ズ四十五年ノ狂即今成仏予ノ意ニ非ズ願クバ天魔國光ヲ補ケヨ、と辞世に詠んだ遺恨の死であつた、享年四十五歳、墓は萩、北古萩の海潮寺にある。詩歌しうが 詩と歌、龍りゆう 寵愛、用見ようけん 登庸、去歲きそねん 去年、昨年、大祿たいろく 高祿、賜たま 賜つ、下賜、信然しんぜん 信じるさま、癸亥みがい 元治元年一八六三、雅樂うた 長井雅樂、國風こくふう 和歌、携えたづさ 携帶、持參、絶命ぜつめい 命を絶つ、辭じ 辭世、偶ぐ 偶々、白樂天はくんでん 白居易、中唐の詩人、有名な詩に長恨歌がある、太行路たいこう 河南、河北、山西省にわたる大山脈えの路、誦じゆ 誦す、唱える、大きな声で詠む、泣下なみづか 泣き涙を流す、數行すうかう 幾筋も、樂天らくてん 白樂天、建議けんぎ 意見を申し上げる、建言、邪正じやせい 邪か正、古人こじん 昔の人、玉執ぎやくし 優れた人を執る、龜卜きふく 占い、蓋けだし 思つに、中正ちゆうせい 中庸で正しい、高卑かうひ 高いか卑しいか。

四體^{しだい}＝四肢^{しがい}。猶^{なほ}＝まだ、やはり。一生^{いっしょう}＝その人が生まれてから死ぬまでの全時期。況^{いは}んや＝況^{きよう}、まして。言語^{げんご}＝言葉。文章^{ぶんしょう}＝あや、礼樂、礼節と音
樂や制度など、國の文化を形成しているもの。程子^{ていし}＝北宋の学者、程^{てい}二^につと程頤^{てい}の二兄弟。卷^{えん}を掩^{えん}＝卷^{えん}を閉じる。思惟^{しゆい}＝考える、思いはかる。須^す＝求め
る、用いる、すべからく、しばし。爽^{そう}＝爽やか。増進^{ぞうしん}＝増し進める。千里^{せんり}＝遠い所。半面^{はんめん}＝半分、片側。識^{しき}＝知る。雖^{いふども}＝けれども、たとい。肺肝^{はいかん}＝肺
と肝臟。苟^{こう}＝苟も。亢龍^{かうりゆう}＝天上に昇りつめた龍は後悔する、極めて尊貴名地位に在る者は、慎まないと失敗するおそれがある。妾顔^{じやうがん}＝妾の顔
夫擇^{そく}＝夫を撰ぶ。歟^や＝気が安らか、か、や、の疑問感嘆の助字。國色^{こくしき}＝國の様子、趣、國風。自警^{じけい}＝自ら警戒する。并^{へい}＝併せて。子道^{しどう}＝川子道。

17 書漁隱圖卷後

錦水漁父。與盤山樵夫交善。漁父有雄辨如懸河。人不能屈之。樵夫口訥。似不能言者。然至其相對議古今論道德。漁父未必辨。樵夫未必默。人亦以為怪焉。漁父常慨乎風俗頹敗將變左衽之風。本乎春秋尊王抑夷之法崇王室。揭正道。而痛闢西夷之邪說。毫不假借也。故世。奉洋說者。惡之如仇讐。千毀百謗日至。漁父特立乎衆楚之間。獨行乎古之道。而無有撓色。於是乎。世人慕漁父之高風者亦多。從游者。日滿門。世人稱之。曰白沙先生云。漁父一旦。投筆擲硯。隱于荻蘆之間。以釣魚為事。如將終身焉。或曰。不欲與犬羊奴立。故望々然而去也。或曰。在壘之上九。衆方有為。而獨不事王侯。高尚其事。漁父以之。或曰。在坤之六四。括囊。无咎无譽。漁父以之世人皆不能知其志也。而樵夫獨知其志云。一日。漁父。釣于錦川之上。樵夫過之曰子樂漁耶。漁父笑而不答。投竿而歌曰。俯兮見魚躍。仰兮見鳶飛。月皎々而出風颯々吹衣。文王既逝矣。孔顏不可希。取竿詠而來。取竿詠而歸。樵夫和曰。采薪朝入雲。歌聲響白雲。采薪夕出雲。歌聲響白雲。出雲又入雲。颯々氣凌雲。持來欲贈君。風吹散白雲。翌日。漁父寄此圖。以示樵夫。因書其後而返之。乙丑仲冬望後一日。樵夫書于白雲洞。

釈文

漁隱圖卷の後に書す

錦水の漁父盤山の樵夫ともに交りて善く、漁父は有りて雄辨懸河の如し。人之れに屈して能はず。樵夫口は訥にして言は能はずに似たる。然れども至つて其れ相對して、古今の道德を論じて議す。漁父未だ必ず辨ぜず、樵夫未だ必ずしも默せず。人は亦た以て怪しむを為す。漁父常に風俗頹敗將に左衽の風に變ぜんとするを慨く。春秋尊王抑もとして夷の法を本王室を崇め正道を掲げて痛く西夷の邪説を闢くを毫（少しも）も假借（大目に見る）せず。世故（世の中のこと）これ洋説を奉ずるは、之れ惡で仇讐（敵）の如き、千毀百謗（いくらでも謗るそしり切れない）日ごと至る。漁父は特に衆楚（多くの人の）間に立つ。獨り古の道を行き、撓色（曲げる）の有りや無しや。是れ於て世人は漁父の高風を慕う亦た多く、従いれ遊ぶは日に門に滿つ、世人之れ稱して、白沙（東澤瀉のこと）先生と曰く云う。漁父一旦筆を投げ硯を擲ちて、

荻蘆（荻や蘆の水生植物）の間に隠れて、釣魚の事を為し以て終身將うが如し。或は曰う犬羊奴と欲せず
 立して。故に望々然（恥じるさま）として去る。或は曰う蠱（人に害を与える）の上九（易の六爻のうち一番上の陽の爻）
 の在り。衆は方に為す有りて獨り王侯の事とせず、尚お其の事を高くして、漁父之れを以て或は曰う。
 坤の六四（大地に二者を並べる）括囊咎るを無し譽を无め、漁父之れを以て世人皆其の志を知るを能はず。樵夫
 獨り其の志を知つて云う。一日漁父錦川の上に釣る。樵夫之れを過ぎりて曰う、子は漁を楽しむや、
 漁父笑つて答えず。竿を投げて歌つて曰う。俯して魚の躍るを見め、仰いで鳶の飛ぶを見め月皎々
 と出る。風は颯々は（吹くさま）衣を吹く。文王は既に逝き孔顔（孔子とその弟子の顔回）希うは可からず。竿
 を取つて詠じて來たる。竿を取つて詠じて歸る樵夫は和して曰う。薪を采りに朝に雲入り、歌聲は
 白雲に響く。薪を采りて夕に雲出をで、歌聲は白雲に響く雲を出で又雲に入り、颯々の氣（世間離れがし
 て掴まえどころがない）雲を凌ぎ持ち來りて君に贈らんと欲す。風は吹いて白雲は散ずる。翌日漁父此の圖を
 寄せて以て樵夫に示す。因りて其の後に書して之を返す。
 乙丑仲冬望後一日。樵夫白雲洞ここに書す。

時年三十五

語釈 漁隱^{りょいん} 漁をして世を隠遁する。 圖卷^{ずかん} 書物、巻物。 錦水^{きんすい} 錦川。 漁父^{りよふ} 漁師。 釣り人東澤瀉のこと。 盤山^{ばんざん} 盤國山。 樵夫^{しょうふ} 樵。 南部五竹のこと。

と。 交善^{こうぜん} 良好い交際。 雄弁^{ゆうべん} 弁が立つ。 懸河^{けんが} 川の流れ、淹。 訥弁^{とつべん} 口が下手。 道德^{とくどく} 人のふみ行すべき正しい路、道義。 辨ず^{べんず} 弁える、弁論。 風俗^{ふうぶく}

「習わし、風習、身なり、服装。 類^{たい} 崩れる、剥げ落ちる。 慨敗^{がいはい} 類敗を嘆く。 左衽^{さぜん} 左衽、おくみ。 春秋^{しゅんしゅう} 春秋時代。 尊王^{そんおう} 王室を尊敬する。 抑夷^{よくい}

「夷狄を抑止する。 王室^{おうしつ} 王家。 崇^{すう} 崇拜。 正道^{せいどう} 正しい道。 西夷^{さいい} 西洋人。 邪說^{じあせつ} 邪な説。 闢^{へき} 開く、開ける、避ける。 毫^{こう} 細い髪の毛、少し、僅か。

假借^{かじやく} 容赦、大目に見る、借りる。 洋說^{ようせつ} 西洋の説。 惡^{あく} 悪い、強い。 仇讐^{きうしゅう} 敵。 仇^{きう} 千毀^{せんき} 千毀す、多く毀す。 百謗^{ひやくぼう} 百の誹謗、多くの誹謗。

衆楚^{しゆしよ} 皆を訓戒する、むち打つ。 撓色^{たうしき} 撓む様子、弓なりに曲がる、怯む。 擲^{てき} 投擲、投げ出す。 荻蘆^{てきりょ} 荻と蘆。 釣魚^{ちうぎょ} 魚釣り。 犬羊^{けんよう} 西洋人を侮蔑

した言葉。 望々^{ぼうぼう} 眺め、見晴らし。 蠱^こ 穀物につく虫、人の腹の中の虫、人に害をなすもの、損なう、乱す。 衆方^{しゆほう} 多くの方。 王侯^{おうこう} 帝王と諸侯。

坤^{こん} 土、大地、皇后、母、妻。 括囊^{かつのう} 袋の口を閉じる、括りまとめる、ひとまとめ、口をつむぐ、知能をかくす。 咎^{とが} 咎、咎める、禍。 无^き 息が詰ま

る、咎める。 譽无^{よき} 譽れ、名誉と咎め。 有無^{ゆうむ} あるなし。 錦川^{きんがわ} 錦帯橋の懸かる川。 過^と 過り、立ち寄る、訪れる、去る、過ぎる。 漁樂^{りょらく} 漁の樂。 漁^{りょ}

魚釣り。 俯^ふ 伏せる。 兮^{けい} 主語や文の後につけて感嘆や強調の語氣を表す助字、訓読では普通読まない。 鳶^{とび} 鳶。 颯々^{さつさつ} さつと風が吹く。 皎々^{けうけう} 白い、

真つ白。 文王^{ぶんおう} 春秋時代周の王、善政をした明君。 逝^ゆ 逝去。 孔顔^{こうがん} 孔子の弟子顔回。 希^{のぞ} 希む。 希望。 望む、ねがう。 和^な 和。 薪采^{しんさい} 薪取り。

凌^{しの} 凌駕、越える。 乙丑^{おつし} 慶応元年一八六五。 仲冬^{ちゅうとう} 陰曆の十一月、冬の真ん中の日。 白雲洞^{はくうんどう} 南部五竹の号。

紀行文

18 寄馨堂書

馨堂足下。自分手於西嶺以來。一日三秋。思望曷已。不佞以今月八日。自赤關揚帆。至于內裡。是日也。天晴風順。舟行甚疾。舟及海心。風俄起。波濤如山。時々飛散。入舟中。瀕人衣。人皆以笠捍之。既而風彌甚。濤彌大。如虬龍之鬪。如鼉鼉之走。舟動搖不定。舟中之人。面無人色。甚則至于為嘔吐。同遊杏所。亦以衣袖掩面。不能開眼。而予獨體中清爽。意氣自若。東望周洋。西眺玄海。前觀二豐之諸山。後顧長州之諸山。吟懷豁如。神氣雄壯。快甚。于平生不好登舟。々々則未及數十武。目眩發嘔。如醉如醒。而今日與平生大異如此。實可怪矣。蓋海若風伯。示此奇怪變幻俾。予文章長進者非耶。但憾不與足下同觀焉耳。既而舟達于大裡。則日既夕矣。倉皇趣小倉而宿焉。其翌發小倉。趣赤間。途中見山下松柏陰林。其下蓋有孝子正助墓云。予平生聞忠臣孝子之事。感激不能自己。但憾日暮程遠不得往弔耳。翌日發赤間。過香椎八幡祠。々前有長松臨高岸。至松下憩焉。則紫溟在眼。風恬波靜。瑠璃一碧。茫々乎不見際涯。有青松白沙。橫截蒼海者一百里有奇。不問而知其為海之中道。假使足下目之。必有佳作。不佞不得詩。負勝景者不少。迂途趣名島。得見所謂帆檣石者。石大二圍。長可五丈。斷為八。處々有鐵箍痕。傳神后征韓

時之帆槩化石矣。予雖不知其然平否。決非人為之所能也。聞又卽化石者。時潮盈不得見焉。乃趣箱崎。過十里松者。云是豐公在名護屋時。千利休烹茶松下。以進豐公。因名焉。乃賦詩云。休叟遺芳春翠濃。林間吟到夕陽春。豐家已遂茶烟滅。千古唯看十里松。十二日發霸家臺。過都府樓遺趾。石礎數十猶存。樓之傑構可想焉。拾殘瓦數枚。懷古愴然者久之。既而過觀音寺。堂宇已傾仄。猶有木像三座存焉。鏤金零落。出寺。謁菅右府廟。夕宇巖々然。金碧奪目。廟下飛來梅。老幹槎枒。花開如雪。古香馥郁。樹下低徊久之。忽聞觀音寺鐘聲殷々報夕。因憶相公都府樓唯看瓦色一聯。反復吟之。不覺泫然泣下。嗚乎公之在謫居也。柴荆寂寥。寺在近而獨聞鐘聲。樓在近而唯看瓦色。其幽鬱可知矣。而今則柴荆變巖々之高堂。府樓化為田畝。物之變態如此。遂賦詩一章而去。十有五日。入熊城。十有八日。寓于韃邨書屋。諸生四十餘人。勸學不懈。弦誦之聲。琅々徹壁。自昧爽至夜半而止。諸生之刻苦。雖出于天性乎。抑亦先生之教導所使然也。名下果虛土云。足下之好山水也。與不佞同。足下之好文章也。亦與不佞同。但憾此遊之與足下同之耳。故欲具記所經之名山勝水及古趾奇事。使足下如親遊其地。然筆拙不能寫其萬一。若夫耶馬溪霧州溫仙等諸名山。不佞未得遊其地。他日若得遊焉。則記而寄之耳。餘期後雁。伏以自愛。

以下四篇寓木門時之作時年二十八

釈文

馨堂に書して寄す

馨堂足下。西嶺手を分けてより。

一日三秋の思い望みて曷んぞ已に今月八日を以て詔らず。赤關より

帆を揚てここに内裡に至る。是れ日天晴れて風順いて舟行甚だ疾し。舟は海心に及びて風俄かに起

り波濤は山の如く。時々飛散して舟中に入り人衣に瀕り人皆笠を以て之れを捍ぐ。既にして風彌りり

その濤彌大きく。虬龍の鬪いの如く鼉鼉これ走るが如し。舟の動揺定らず。舟中の人面に入色

無し。甚だしく則ちここに至りて嘔吐を為す。同に遊ぶ杏所は。亦た面を掩い衣の袖を以て眼を開

くも能わずして。予は獨り體中清爽意氣自若東に周洋を望み西に玄海を眺める。前に二豐の諸山を

観る。後に長州の諸山を顧みる。吟懷豁如。神氣雄壯快甚だしくも。平生登舟を好まず。登舟

則ち數十武にも及ばずして。目は眩み嘔を發し酔うが如く醒めるが如く。今日は平生と大きく異る此

の如く。實に怪しむ可し。蓋して海は風伯の若し。此の奇怪を示して幻俾に變る。予文章を長く進め

るは邪に非らず。足下と同一に觀せざるせざるをを憾み既に舟はここ大裡に達す。日は既に夕に倉皇小

倉に趣きて宿る。其の翌小倉を發ち。赤間に趣き途中山下松柏の陰林を見る。謂うに其の下孝子正助の墓を有するかな。予は平生忠臣孝子の事を聞いて感激自己に能はず。但し憾みは日暮れて程遠く弔に往くを得ず。翌日赤間を發ちて香椎八幡祠を過ぎる。祠前長松有りて高岸に臨み松下に至りて憩う。則ち紫溟眼に仕する風は恬らか波は静かに瑠璃一碧茫茫として際涯を見ず。青松白沙に有りて。蒼海を截ちて横たわる一百里も有り奇しきあり。問はずして其の海の中道を為すを知る。假に足下これ目にして必ず佳作を有す詩を得ず。佞ず勝景を負つて名島に趣き。帆の檣石謂う所を見るを得る。石は大きく二圍長さ五丈ばかり斷ちて八つに為す。處々鐵箍痕有り。傳う神后征韓時の帆檣石に化したか。予は其れ然りか否やは知らずと雖も。決めて人の為す所に非らず能くところなり。聞くことは又た槩の化石は時に潮が盈ちて見得ず。そこで箱崎に趣き十里の松を過ぎる。云う是れ豊公名護屋に在りし時。千利休茶を烹る松下に似たる。豊公に進ぜして。因つて名す。乃ち詩を賦して云う。

休叟遺芳春翠濃

休叟の遺芳 春翠 濃やかなり

林間吟到夕陽春

りんかん ぎん いた せきやう すす
林間 吟じて到れば夕陽の春く

豐家己滅遂茶烟

ほうけ すで と さえん めつ
豐家 己に遂げて茶烟 滅し。

千古唯看十里松

せんこ せんこ
千古 唯だ十里の松を看る

「七言絶句上平声二冬韻」

十二日霸家臺（博多）を発ちて。都府樓の遺趾を過ぎる。石礎數十猶お存りて。樓の傑構想う可し。殘瓦

數枚を拾う。古く愴然之れ久しくを懷つ。既に觀音寺を過ぎて堂宇已に傾仄猶お木像三座存する有り。

鏐金零落して寺を出でて。菅右府廟を謁える。廟宇疑々然金碧目を奪う。廟下飛來の梅老幹槎枒花

開いて雪の如し。古香馥郁樹下低徊すること之れ久しく。忽ち觀音寺の鐘聲殷々々を報せる。相公

都府樓唯が瓦色一聯を看る反復之れを吟じて覺えず泫然泣き下る。嗚乎公の謫居に在りしの。柴荊

寂寥寺は近くに在り獨り鐘聲を聞く。樓は近くに在りて唯だ瓦色を看る其の幽鬱知る可し。そして

今則ち柴荊が變りて疑々の高堂に為り。府樓化して田畝になる。物の變態此の如し。遂に一章詩を賦

宮宅杏所^{みやけきよ}医者^{いしや}で南部五竹^{なんぶごちく}の西遊^{せいゆう}に同行した人。清爽^{せいそう}清らかで爽やか。周洋^{しゅうよう}周防灘。玄海^{げんかい}玄界灘。二豊^{にほう}豊前と豊後。長州^{ちやうしゅう}周防と長門の二州^{しゅう}、山口県。懷^{かい}想う懷かしむ。懷^{かい}豁^{かく}開ける、広い、広々としたさま。懷豁^{かいかく}心が広い、度量^{りどく}が大きい、懷^{かい}が大きい。發嘔^{はつおう}嘔吐する。醒^{せい}酩^{めい}酩^{めい}蓋^{けい}思つに、なんぞ。風伯^{ふうはく}風の神。奇怪^{きがい}怪しい、不思議。變幻^{へんげん}幻のように、忽ち現れ忽ち消えること、変化の早いこと。俾^ひしもべ、睨む、横目で見える、従つ、せしむ。憾遺憾^{かん}残念に思ふ。大裡^{だいり}内裡^{ないり}と同意。倉皇^{そうわう}慌てるさま、あたふたするさま。赤間^{あかま}福岡県宗像市赤間。香椎八幡^{かしはちまん}福岡市東区、戦の神。祠^し祠^し。恬^{てん}安らか、物事に甘んじて心がさばさばとしている、あつさりしている、へいきなさま、静かなさま。瑠璃^{るり}紺青色の美玉^{みぎよく}、七寶^{しほ}の一つ。一碧^{いっへき}青^{せい}色。際涯^{さいがい}果て、限り、限界。茫々^{ぼうぼう}広々と果てしないさま、ぼうつとしてはつきりしない。白沙^{はくさ}白い沙。蒼海^{そうかい}青い海。截^{さい}切る。途迂^{とゆう}途中で迂回する。帆樑^{はんりやう}帆柱。鐵箍^{てつこ}鉄のたが。神后^{しんこう}神功皇后。征韓^{せいかん}韓国を征伐。桀^{しやく}權、舵、櫓、舟を漕ぎ奨める道具。盈^{えい}集める、孕む。豊公^{ほうこう}豊臣秀吉。名護屋^{なごや}秀吉朝鮮出兵の前線基地、佐賀県。千利休^{せんりきゅう}茶の宗匠。烹^{ほう}煮る、煎じる。休叟^{きゅうそう}千利休、翁、老人。遺芳^{いほう}死後に立派な物を残す、名聲、詩文、書画などを言つ。春翠^{しゅんすい}春の翠。豐家^{ほうけ}豊臣家。茶烟^{ちやえん}茶煙り、烟。千古^{せんこ}千年の古くから、大昔より。霸家臺^{はかた}博多、砦、城。都府樓^{とふろう}都よりの出先機関の建物。遺趾^{いし}遺された跡。樓^{ろう}樓閣、建物。傑構^{けつこう}傑作な構え、立派な構え。懷古^{かいこ}昔を偲ぶ、懷かしむ、想う。愴然^{そうぜん}せつなく悲しむさま。堂宇^{どうう}堂の軒。傾仄^{けいへつ}傾く。鏐金^{りやうきん}艶のある金色。零落^{れいらく}落ちふれ、剥げ落ちる。菅右府廟^{かんでふらう}右大臣菅原道真公の廟。謁^{えつ}訪れる、まみえる、身分の高い人に会つ、拝謁。廟宇^{びやうう}廟の軒。巖々然^{がんぜん}高く拔きんでるさま、じつとそそり立つさま。金碧^{こんへき}金色と青色。廟下^{びやうか}廟の下。飛來^{ひらい}墩とんで来る。老幹^{らうかん}老樹の幹。榀材^{さざ}ギザギザの枝が細かく入り乱れ突き出るさま。古香^{こかう}昔の香り。馥郁^{ふいく}香りの高く立ち込めるさま。低徊^{ていかい}立ち去り難くあちこちと歩くさま。殷々^{いんいん}雷や車の音の轟くさま、にんが心で泣きわめく声の大きいさま、憂えるさま。相公^{さうこう}一聯^{いっれん}一連の。憶^{おく}記憶、想い起こす。泫然^{げんぜん}涙をばらはらとながすさま。泣下^{きゅうか}涙を流す。謫^{たく}責める、咎める、左遷する、官位を提げて遠くに送る。謫居^{たくきょ}左遷されたその住まい。柴荊^{さいけい}柴や荊。寂寥^{せきりょう}寂しい、奥深くて広く寂しい。疑々^{ぎぎ}高く聳えるさま。府樓^{ふろう}役所の建物。田畝^{でんちう}田や畝。幽鬱^{ゆううつ}奥深く鬱蒼。熊城^{くまじやう}熊本城下、市街。鞆邨^{いそむら}木下鞆邨、熊本藩士、藩校時習館訓導、五竹の師。書屋^{しよや}学舎。寓^{いふ}寄寓する、仮の住まい。諸生^{しよせい}諸

学生。勸學かんがく〓 学問を励まし奨める。懈かい〓 怠る、怠ける。弦誦げんじう〓 張った大きな声で読む。琅々ろうろう〓 金属や玉が互いに触れて鳴る音のさま、鳥の清らかな囀り。味爽ばいそう〓 朝の暗いうち。刻苦こくく〓 非常な努力をする。天性てんせい〓 生まれながらの性分。虚士きよし〓 空虚の士、うわべだけの人。古趾こし〓 古の跡。奇事きじ〓 珍しい事、不思議な事。具記ぐき〓 具体的に記す。後雁こうがん〓 雁は後に必ず帰って来る。木門もくもん〓 木下韃靼いそんの門。

火之後州。多崇山峻嶺。而阿蘇為第一。阿蘇在熊城東北。六十里而遠。山蓋生硫黃。故山上常燃。出白烟。々出處有池。曰御池。々々而下。里許。有堂。曰本堂。距蘇山東北。九里。為宮地。々中有祠廟。曰阿蘇宮。比堂。極廣大。彫鏤之美。精緻可驚。祀健盤龍命。司祠者。曰大宮祠。々々之先。為速瓶玉命。崇仁之時。為阿蘇國造。速瓶玉即健盤龍之子也。子孫世掌其職。以至于今。戰國時。阿蘇氏多蓄兵馬。雄長一方。故其家。藏古帝王詔宣。及古名將書牘。極多。又藏一寶刀。號螢丸。其所最秘云。余之在後肥。欲遊阿蘇且觀詔宣寶刀之類者久矣。一日。聞木先生。與宮司善。謀諸先生。々々告其意宮司。々々諾。於是。戊午四月三日。與友人某々同。遊阿蘇。是日大霧。出府城東門。霧小霽。自城至大津。老杉夾路。森々成列。午後踰二重嶺。々高而嶮。左右山皆童。青草蒼々然。多放馬牛。或立。或眠。或乳。或嚙草。自得閑舒。可畫。踰嶺下者。數十步。流汗成珠。不堪熱。乃脫衣。着單衣。據石而臥。則蘇山當面前。白烟瓢空。臥而看之。自有太上隱者之趣。乃出紙筆。摸山而去。日夕至內牧犬塚某家宿焉。某設酒飯。侍之甚優。酒間談及。近村民得一蟲類蛇。四足而爪。重斷而重齒。莫知其為何物。或曰龍子也。

飲及夜半而寢。四日。起。則日已三竿矣。巳時。辭犬塚。至宮地。途中遇雨。及阿蘇宮。則雨止。而雲未霽。祠前有鷄。成群。皆雄。云以雌雞來放之。皆化為雄。謁神畢。過宮司宅。其門扉朽柱頹。殆欲倒。其堂至廣。桐楹撓仄。聖壁頽壞。屋茅亦處々陷凹。上生青松數十株。其零落可知焉。敲扉。則一老翁出迎。延余坐。々定。奴捧茗而出。少頃。有一人。捧兩函而來。置之几上。几下展。曰觀焉。余近。老翁開一函。則多南朝以來詔宣。中有題後奈良帝宸翰者。尤高古。書以假名。字體婀娜。而辭柔婉。極似出于椒房妃嬪之手。蓋帝託椒房。以詔宮司也。又開一函。則將軍教書。居多。菊池大友。応酬之書。亦頗多。又有稱足利尊氏髻文者。絹素。方二寸。書以細楷。書麗而辭簡。蓋密納諸髻中以來。以募兵者也。其餘。蠹書充棟。不遑寓目。余請觀寶刀。曰天陰則禁觀。待晴而可。乃辭而出。宿宮地旅舍。五日大雨。既不得登蘇山。又不得觀寶刀。坐雨岑寂殊甚。某々曰。晴不可期。吾則趣矢部。乃辭去。余與仁鄉。留待晴。午後。命酒。相對覓句。至夕而止。六日雨晴。觀寶刀。々々長三尺三寸五分。入柄處。一尺一寸有奇。廣一寸余。厚三分餘。左右鏤刀形。下起入柄處之半。上至距鋒一寸。又距刀形一分。循刀形鏤一小渠。右旁鏤梵字二劔一。左旁鏤如護摩者二。長三寸許。入柄者一分許。刀質帶紫色。而刃白。刃文如蕨芽。自鋒下四寸許。刃小缺。相傳。其先惟澄。用之于多々良之戰。奮勇大戰。刃缺者數處。少頃見有螢來止缺處。異而舉扇撲之。

一螢隨手墮地。視之乃刃之缺者也。餘則皆合如故。由是得螢之名。或曰。其墮而在地者。熒々如螢。故名焉。其入柄處。銘曰。永仁五年三月一日來國俊。實希有神物也。觀畢辭而去。過防中。訪山內某。夕煮鷄卵。暖酒。炊飯。食之。食畢。登蘇山。夕多黃精續隨子獨活。其他。異卉奇草。挾路而生。余謬本草。不能盡知也。山復有石呼硯者。長可六尺。廣稱之。上有一孔。如硯。又聞有呼皿者。狀似皿。逢一老夫。問其所在。曰既過之矣。忽見四山俄頃起雲。蓊々然至脚下。余笑謂仁鄉曰。我與子共登白雲。以仙乎。相顧而笑。此至本堂。日已西昃。堂下有茶店。々主尼余曰。自此以上。國法禁西後登攀。乃下。趣湯谷。路行山背。絕無人跡。日已暮矣。淒然神悲。忽聞空際。攄然有聲。驚視之。有怪禽。頡頏空中。須臾裊霄而去。路旁有獨活。極肥大。共拔之。得數莖。既而至一廣豁處。多放牛馬。仁鄉曰人家將近。行數十步。果有黃茅數屋。有溪底。即湯谷也。谷出溫泉。浴焉者頗多。余乞宿。即主人引至一茅樓。進以飯羹。焦臭不食。樓屋破壁壞。座見星辰。溪風入坐。寒甚。乃沽酒。切所得獨活。和酢食之。味甚香美。飲畢就睡。夜半酒醒夢驚。杜鵑聲繞屋不已。卿思泉湧。不能複寢。耿耿達曙。七日。早晨再登阿蘇。是日大霧罩山。纔辨蹊路。己時至本堂。霧漸霽。自堂自上。山不生一草。石皆焦赭。行數百步。霧復起。及至御池。霧愈深。忽聞人語在近。而不見其人。少頃見二老夫來。甲語乙曰。吾登此者數矣。池中或現五色水。或沸。或躍。或燃。

或生烟。或發聲如雷。今日霧深皆付不見。可憾耳。言訖即下。余亦下。至茶店。喫午飯。畢。霧忽霽。又上。霧又生。然不甚深。髣髴辨池水。深不測。周迴里許。絕壁万仞。臨之。神悸股栗。若一失足。則生墮于焦熱地獄。真可懼矣。余再登。而五色之水。則不能見也。乃賦一詩而下。十數步而霧復霽。顧見白烟生池上。油々然。余謂仁鄉曰。雲霧變幻。不常亦太甚。乃高吟貧交行而下。取路於本堂右。路甚險。未時。至一溫泉。名地獄。浴者極多。余亦浴焉。溫泉上。數十步。有大屋八九。設鐵釜數百。煎礬。余乞得兩大礮。屋上岩石間。處々噴烟。就而視之。硫黃之氣薰蒸而上也。熱不可近焉。硫氣着石。成黃色。石旁多硫黃。可拾。嗽溪流。味酸澁。帶礬氣。不可飲也。溫泉旁有茅屋。乃往而宿焉。八日天晴。發地獄。取道於其右。至滴珠。亦有溫泉焉。茅屋四五間。在溪間。有小瀑布。懸于林木之間。琤然而鳴。清涼可掬。至黑川。過石砮。數十步。有瀑布。名曰數鹿流。絕壁蒼崖。左右相圍。上有樹木。鬱然叢生。瀑布懸其間。霏々噴雪。其聲如雷。轟轟然而下。匯成碧潭。濺沫散亂其上。白碧相映。奇不可狀。余至樹陰。藉草而坐。取腰間所插龍笛弄之。聲震林木。響破蒼崖。瀑笛相和。如淵龍一吟雲起雷奔。曲闌。不忍去。憩焉者久之。午後至大津。喫蕎麥麵。飲濁酒。出驛顧。見來路。則蘇山隱見於行杉之間。依々如送余者。余亦縵々。駐節指之。謂仁鄉曰。是我與子。昨日所遊。而今則髣髴見之於天際。我與子。各千里異鄉之人也。此遊。豈可復哉。

我與子。各歸其國。間居獨處時。憶起此遊。則蘇山千里。君千里。我亦千里。我欲見君。不可復見。君欲見我。不可復見。我與子。欲見蘇山。亦不可復見。當此時。其感慨何如哉。昔羊叔子。常遊硯山。百姓為建碑焉。望者皆墮淚。今我與子。此遊雖不可常。亦將記此遊以示君。々歸鄉之後。展吾記而對之。悲昔遊之不可復。感少年之若夢。歎老之將至。淚潸然將墮之。豈翅墮淚之碑而已哉。遂作遊蘇山記。以示仁鄉。于時戊午四月八日。也

釈文

阿蘇山あそさんに遊ぶあそぶを記す

火の後州しごうしゅう「肥後の州」崇山すうざん峻嶺しゅんれい多く、蘇山そさんは第一だいいちを為す、阿蘇あそは熊城くまじょう（熊本）の東北に在りて、六十里遠

く山は硫黄生いおうせいじ故に山上は常に燃え、白烟出はくえんでて烟出けむりる處に池が有り御池ごちという、御池を下ると里許さともと

に堂が有り本堂という、蘇山そさんの東北を距はなれて九里宮地くじ駅えき（宿場）を為す。駅中に祠廟しじまう（神社）が有りて、阿蘇あそ

宮と曰う。堂に比べて極めて廣大くわうだいで彫鏤ちやうりくの美精緻せいち（緻密で細やか）は驚く可しである。

健盤龍命けんぱんりゅうのみことを祀まつり祠を司るは大宮祠だいくうし、宮祠の先は速瓶玉命はやみかたまのみことを為し、崇仁すじんの時に阿蘇あその國造くにのみやつこを為

し、速瓶玉は即ち健盤龍の子なり。子孫世に其の職を掌る以て現在に至る。戦国の時阿蘇氏多く兵馬を蓄えて長く一方に雄し、故に其の家古く帝王詔宣を藏すに及び、古の名將の書牘極めて多く、又一寶刀を藏す、螢丸と號す、其れ最も秘に云う所、余は之れ後肥に在り阿蘇に遊ばんと欲し、且つ詔宣寶刀類は久しく觀る、一日木先生に聞き宮祠と善く諸先生と謀らい、諸先生其の意を宮司に告げ宮司諾う（承諾、承知）是れ戊午、一八五八、四月三日、友人の某々と共に阿蘇に遊ぶなり。是の日大霧なり府城東門を出る、霧は少し霽れて城より大津に至る。老杉路を夾み森々列を成して、午後二重嶺を踰ゆ二重嶺は嶺高く峻しく、左右青草萋々（生い茂る）多く馬牛を放し、或は立つて或は眠り、或は乳或は草を嚙む、自から閑舒を得る畫に可し、嶺を踰えて下ること數十歩、流汗珠を成し熱さに堪えず、衣を脱して單衣を着て石に據りて臥す。

蘇山前に當りて白烟空に飄えるを臥してこれを見る。自から太上隱者の趣を有す、そこで紙筆を出して山を摸して去る。日夕（夕方）内牧犬塚某家に至りて宿る。某酒飯を設けて之れに侍らせる甚だ優なる酒間談に及びて近くの村民が一蟲蛇類を得る。四足にして爪重斷重齒、それ何物を為すか知る

莫^なれ。或は曰^いつ龍の子なりや、飲^のみ夜半に及び寝^{やす}む。四日起きてみれば日は己^{さん}に三竿^{さんかん}（竿三つの高さ、八時頃）時に犬塚を辭して宮地に至る。途中雨に遇い阿蘇宮に及んで雨は止むも、雲未だ霽^はれず祠前に鶏有りて、群を成し皆雄^{おす}にして雌^め雞來りて、ここに放せば皆化して雄^{おす}に為すと云う。神に謁^{えつ}して宮司宅を過^{よぎ}る。其の門扉は朽ちて頽^ない柱は殆ど倒れんとしている。其の堂は至つて廣く。桐や楹^{のき}撓^{はし}扞^た仄^は壁^{はく}（白壁）頽^{たい}壞^{かい}し、屋茅亦た處々^{おくぼう}陷^{しよ}凹^{しよ}の上青松數十株を生ずるも、其の零落^{へいらく}知る可し。扉を敲くと一老翁出で通^りじ余を延いて坐し、坐定まりて奴茗^{やつめい}（遅取りの茶）を捧^たげて出で、少頃^{しやうく}一人で待つと、兩函^{りやうかん}を捧^たげて來たり、これを几上^{きじやう}に置き几下^{きか}の苦^{くる}に展^{ひら}げて曰^いう、觀^{かん}れ、余苦^{くる}に近^{ちか}ずくと老翁^{らうおん}は一函^{いつかん}を開^{ひら}く南朝以來^{なんちやう}の詔^{しよ}宣^{せん}多く、中に後奈良帝宸翰^{ごならいでい しんかん}と題する有りて、尤も高古^{かうこ}のものは假名^{かな}を以て、字體^{じたい}は婀娜^{あな}（しなやかで美しい）柔婉^{じゆうわん}（素直で淑やか）極めて椒房^{しやうぼう}妃嬪^{きひん}の手を出で以て、帝が椒房^{しやうぼう}に託^{たく}す宮司^{みやうし}の詔^{しよ}なり。又一函^{いつかん}を開くと將軍教書多く居^{しめ}て、菊池大友^{きくちおおとも}応酬^{おうしゅう}の書亦た頗^{すこ}る多く、又た足利尊氏^{あしかがたかうじ}の髻文^{けいぶん}と稱^{なづ}くものあり。絹素方^{けんそ}二寸細楷^{さいかい}で書^{しよ}は麗^{うめわ}しくして辭^じは簡諸^{かんしよ}髻^{けい}中に密納^{みつな}以來以て兵を募^もり。其の餘蠹書^{としよじゅう}充棟^{ちゆうとう}（虫の喰つた書物が沢山ある）寓目^{いうもく}（注目して読む）に違^{ちが}ず。（時間と暇がない）

余は寶刀ほうたうを觀るを請うと、天陰てんいんの時は觀るを禁ず。晴を待て可しと云うので、辭じして宮地の旅舎に宿る。五日大雨なり蘇山に登るを得ず、又寶刀ほうたうを觀るをことも得ず、雨に坐して岑寂しんじやく殊に甚だしく、某々は曰う晴れを期す可らず、吾れ矢部に趣き辭去じして、仁郷に留まりて晴れを待つ、午後酒を命じて相對して句覓くへきして夕に至り雨は止む、六日晴れて寶刀ほうたうを觀る。刀の長さ三尺三寸五分柄に入る處一尺一寸奇有り、廣さ一寸余り厚さ三分餘り左右に刀形を鑤ちりばめてあり、下の柄に入る處の半ばを起す上に鋒一寸距へだてて至る。又刀形一分を距てて、刀形を循りて一小渠を鑤めくり右旁に梵字ふんじ一劔一鑤ほり、左旁に護摩しまの如くの鑤ほりが二つ、長さ三寸ばかり柄に入る一分ばかり、刀質紫色を帯びて刀は白くして、刃文蕨芽じんもんの如く鋒きつさきより下四寸ばかり刃が小さく欠け相傳う。其の先は惟澄これすみが之れを戰に用い、勇を奮い大戰し刃缺は數處、これを多々良の戰に用い、少頃して螢が來り缺し處に止る有るを見る。異にして扇を擧げて之れを撲うつ、一螢手に隨したがいて地に墮おつ、之れを視て乃ち刃の缺は、皆合す故の如く是れを由に螢の名を得て或るは曰う。其の墮おちて地に在るは熒々けいけい（光り輝く）螢の如く故に名す。其の柄に入る處の銘に、永仁五年三月一日來國俊實希有神物なり。

觀て辭して去りて防中を過ぎ、山内の某を訪う、某は鷄卵を煮て酒を暖め、飯を炊く之れを食す、食して蘇山に登る。山に黃精（藥草）に續き随いて子獨活（山うど）多く、其の他異弁奇草路を挟んで生じ、余本草（藥草）に朦く尽く知るに能はず、山に復た硯と呼ぶ石有りて、長さ六尺廣く之れ稱すべし。上に一孔有り硯の如く、又皿と呼ぶ有るを聞く、状は皿に似ている、一老夫に逢い其の在る所を問うと、既に之れを過ぎていと云う。忽ち（次第に）見る四山俄頃（俄に、急に）雲起りて、蓊々然（盛んに）と脚下に至る。余は笑つて仁郷に謂う、我子（我と君）と共に白雲に登り仙人かな。相顧みて笑う、本堂に至りてみれば日は已に西昃（西に傾く）堂下茶店有り、店主余に近ずきて、此れより以上國法で西後の登攀することを禁ず、曰うので下りて湯谷に趣く、路は山背を行くも。人跡は絶えて無く日は已に暮れ、凄然神悲しく忽として、空際に攄然（物が割れたり裂けるような音）の聲有るを聞く驚き視れば怪禽有り。頑（かたくな）に空中に頑（飛び上がる）須叟（少しの間）裊霄（空に飛ぶ）して去る、路旁に獨活有り極めて肥大共に之れを抜き數莖を得て一廣豁（廣い所）の處に至る。牛馬を多く放してる、仁郷は人家が近しと曰う、數十歩行くと果せるかな黃茅（藁葺きの家）數屋有り、溪底に有り即ち湯谷なり。谷に温泉が出る。浴する者は

頗る多く、余は宿を乞つ、主人は引いて一茅樓に至り、飯羹（飯と汁）を進んぜるも焦げ臭く食せず。樓屋の壊れ破壁に座して星辰を見る。溪風坐に入りて寒さ甚だしく、そこで酒を沽い得たる所の獨活を切つて、酢に和して之れを食す。味は甚だ香り美しく飲んで睡りに就く、夜半酒醒めて夢に驚く、杜鵑（不如歸）の聲屋を繞りて已せず（絶望）。卿思（二人で思ふ）泉湧複た寝るに能はず。耿耿（安らかならず）として曙に達す。七日早晨再び阿蘇に登る。是の日大霧山に罩る、纔かに蹊路を辨て、時己に本堂に至る。霧漸く霽れて堂より上の山に一草も生せず。石は皆焦赭（焼けた）行くこと數百歩霧復た起りて、御池に至るに及び霧は愈よ深く、忽ち（漸く）人語近くに在るを聞くも、其の人を見ずして少頃して二老夫來るを見る。甲は乙に語り曰う「吾れ此れに登るは數なり、池中五色の水現れ或は沸き、或は躍り或は燃え或は烟りを生じて、或は聲を發して雷の如く、今日は霧深く昏くて見えずに憾む可し」と言ひ訖えて下りゆく、余も亦た下りて茶店に至り午飯を喫す。霧は忽ち霽れて又た上る、霧は又た生じて然るに甚だは深くせず、髣髴（ぼんやりと）池水を辨ける水深くして測れず、周廻すること一里ばかり、絶壁万仞之れに臨み神悸れて股栗（怖さで肌に粟が生じる）若し一つ足を失すれば、生きて焦熱の地獄に墮つ、

眞に懼る可し。余は再び登りて五色の水を見るをまた能はず（出来ず）そこで一詩を賦して下る。十數歩をして霧は復た霽れて、顧り見ると白烟池上に生ず、油々然（水が緩やかに）なり。余は仁郷に謂う「雲霧變幻常ならず亦た太さ甚だし」と高く貧交行（杜甫の詩）を吟じて下る。路は本堂右に取る路甚だ険しく、未時（午後二時前後）一温泉に至る。地獄を名し浴者極めて多く、余亦た浴して温泉を上りて數十歩大屋八九有り。鐵釜數百を設けて煎礬（明礬作り）余二つの大礬（大きな石の塊）を乞い得て、屋上の岩石間の到る所から烟りの噴く、蒸に就いて之れを視る、硫黄の氣薰蒸して上る、熱く近づく可らず、硫氣石に着いて黄色を成す。石の旁ら硫黄多く拾って、溪流に嗽いで味をみる酸渋く、礬氣（硫黄を含む）を帶びて飲む可らず。温泉の旁らに茅屋有りてそこで往の宿、八日天氣晴れて地獄を發つ、道は其の右に取りて、滴珠に至ると亦た温泉有り。茅屋四五間溪間に在り小瀑布（滝）有り、林木の間に懸りて嵒然として鳴る、清涼掬む可し、黒川に至り石缸を過ぎ、數十歩行くとまた瀑布有り。名して數鹿流と曰う、絶壁蒼崖左右相圍み上に樹木有り、鬱然と叢生し瀑布其の間に懸る。霏々（雨や雪が激しく降るさま）雪を噴き、其の聲雷の如く轟轟然として下り、漚（滝壺）は碧潭を成し濺沫（泡や飛沫）散じて亂れ白碧相映

じて奇（美）なり、余樹陰に至り草を藉にして坐し、腰間に插してある龍笛を取りて之れを弄ぶ、
聲は林木に震えて響き蒼崖を破りて、瀑布に相和して淵龍の如く一吟雷起り曲に奔り闌む、去るを
忍びず憩うは之れ久しく、午後大津に至り蕎麦麵を喫して濁酒を飲み、驛を出て顧り來た路を見れ
ば、蘇山を見るも杉の間に隠れ依々（離れ難く）余を送るが如し。余亦た縋々（懸ろに）箆を駐めて之れを指
して仁郷に謂う。我は子（仁郷のこと）ともに、昨日遊ぶ所を今髣髴として天際を見た。我子とともに各千里
の異郷の人で此のような遊は再び有るだろうか、我子とともに各其の國に歸り間居獨處の時、此の遊
びを憶い起し、蘇山千里君千里、我亦た千里（千里は極めて遠いの意）我れ君を見たいと思うが復た見るこ
はできまい。君も我を見たいと思うても復た見ることはできまい。我子とともに蘇山をたいと思うな
ら、その時に當り其の感慨はどうだろうか、昔羊叔子は常に硯山に遊び百姓碑を建てるを為す。皆
涙を墮とすを望む、今我子と此の遊ぶを常には可とせずと雖も、亦た將に此の遊びをせんとす記して
以て君に示す。君郷に歸りての後に吾れに記して之れに對して展られよう。昔遊復た可とせずを悲し
み、少年の夢の若く感ず老の將に至らんことを歎き、淚潸然將にこれ墮ちる。「翅の墮つ涙に碑す

る己おのれかな」遂に蘇山に遊ぶを作すを記し以て仁郷に示す。

時戊午ぼし四月八日

語釈

蘇山に遊ぶ記 阿蘇山に登るの記。後州 肥後。崇山 宗教的な山、信仰の山。峻嶺 峻しく高い山や嶺。阿蘇 阿蘇山。熊城 熊本城。

下、市街。六十里 ここでは周里一里六丁、日本里は一里三十六丁、故に約十里、約四十キロのこと。蓋 思うに、なんぞ。硫黄 火山地帯に産する

黄色の鉱物。白烟 白い煙り。烟 煙り。祠廟 神を祀る祠、廟。廣大 広くて大きい。彫鏤 金属に彫刻したもの。精緻 精密で緻密。健盤龍命 健甕龍命

安蘇神社の祭神、神武天皇の孫。祀る 祭る。祠司者 神官。大宮祠 神官、宮司。速瓶玉命 宮司の祖先。崇仁の時 崇神天皇の頃。國造 國造

上代、一国を統治した、世襲の地方長官。世掌 世襲。雄長 雄者で長者。古帝王詔宣 古代の天皇の詔書。古名將 古くからの名將。書牘 文書、

書き物、札書。寶刀藏す 一振りの名刀、宝刀を所蔵。螢丸と號す 宝刀の名。謀り 諮り、相談。諾 承諾。戊午 安政五年、一八五八。霽 晴れ、

雨が上がる。森々 森林然と。踰 越える。嶮 嶮しい。茸々然 草木が青々と茂るさま。閑舒 ゆつたりと、遅い、のろい。單衣 單衣、浴衣。

を着る。據り 縋る、寄り掛かる。臥 横臥、寝る。飄 飄然、漂う。太上 最も優れていりこと、最上。三皇五帝の最も優れた時代、上皇。隱者 世を避けて隠れている人、世の中を見捨てた者、隠士、仙人。蟲蛇類 は虫類、蛇。重斬 上下の歯茎。重齒 上下の歯。莫れ ない、しては成らな

い。龍子 龍の子。日巳に三竿矣 日はもう竿三本もの高さに昇る。皆雄 皆雄。雌雄 雌の鶏。神に謁 神に拝謁、詣でる。畢終 畢終、遂に、悉く。

柱頗 長い柱。桐 軒、庇、まぐさ。楹 丸く太い柱。撓 撓む、曲げる、曲がる、撓める。仄 傾く、傍ら、側、仄か、微か。望壁 白土の壁。類 類

剥げ落ちる、崩れ落ちる。屋茅 屋根の茅。亦處々 所々。陷凹 落ち凹み。零落 凋落。敲 叩く、ノック。延坐 延坐敷の下座に座る。坐定り 座席が

決まり。奴 小僧。茗 茶、遅く採った茶。兩函 二つの箱。几上 床几の上。几下 床几の下。苦 苦、苦筵、敷物。展 展示、広げて見せる。

一函＝一つの箱 南朝＝後醍醐天皇の一三三三より一三九二 詔宣＝天子の命令 後奈良帝＝一五二六 宸翰＝天子の宸筆、真筆、文書、手紙 高古
 最も古い。書假名以て＝仮名文字で書いてある。字體＝字体 形 婀娜＝女の姿のしなやかな美しいさま、ゆつたりとした上品なさま。辭＝言葉 柔婉
 素直で淑やかなさま。椒房＝皇后の御殿、転じて皇后、山椒は暖気と良い匂いをあたえた実を多く結ぶので、子孫が多くなると言う意味で、御殿
 の壁に塗り込んだという。妃嬪＝妃、天子に仕える女官。蓋＝思うに、確か。託＝委託、頼む。詔＝詔書 菊池＝菊池武敏、武重、没後弟の武士
 が幼少で継いだ。大友＝氏時と貞順。応酬＝人に応対する、人から来た手紙に返事を書く。頗る＝頻繁に、とても。足利尊氏＝室町幕府を起こした初
 代將軍、後醍醐天皇を後に隠岐に流し南北朝の争いを起こした。髻文＝もとどり、たぶさ、みずらを添えた起請文 絹素＝白絹 書細格＝細かい楷書
 書麗＝文字が綺麗 辭簡＝言葉が簡素、簡單。密に＝内密に。諸髻＝諸々の髻、たぶさ。募＝募集 蠶書＝書物が虫に喰われる。充棟＝棟に充ち
 る、建物に一杯に。寓目＝目をつける、注目、囑目。遑＝忙しい、慌ただし、い急ぐ。寶刀＝名刀、宝刀。天陰＝日陰、曇り。辭去＝辞去 岑寂＝深
 山の静寂 句覓＝詩人が苦心して良い句を探し求めること。鑊＝刀の彫刻 鋒距＝切つ先までの長さ。循＝巡る、したがう。小渠鑊＝小さな溝状の彫
 刻。梵字＝古代インドの文字。護摩＝焼く、意、真言宗に秘法の一つ、火を焚いて佛に祈り、一切の煩惱、悪業を焼き払う行事。蕨芽＝蕨の芽。惟澄
 阿蘇神社の神官阿蘇氏は惣領惟時と弟の惟澄とが争っていた。多々良＝多々良浜の戦い、福岡市箱崎付近で、尊氏と九州最大の後醍醐党との戦い。撲
 る＝叩く、払う、殴る。随い＝従う、沿って。熒々＝光り輝くさま、つやつやしたさま、千紗名光のさま。墮る＝落ちる。來國俊＝名刀工。畢＝終わ
 り、悉く。黄精＝薬草の名。子獨活＝小さな独活 異弁＝変わった花弁。奇草＝珍しく不思議な草。朦朧＝暗い、おぼろ、月の光がぼんやりと。四山＝四
 方の山、四国の山。俄＝急に。蒨々然＝草木が茂るさま。西晨＝日が西に傾く、夕陽。西後＝今の午後六時以後。登攀＝登り攀がる。凄然＝寒く厳し
 いさま、物寂しく傷ましいさま。神悲＝神秘、人知ではかり知れないような不思議なこと。空際＝空の果て。攄然＝境界を付けたように、ハッキリ
 と。怪禽＝怪鳥。頑＝目鼻だちがハッキリしない、頑丈な。空中＝空の中程。韻＝鳥が飛び上がる、乱れる、真つ直くな首筋 須臾＝少しの間、暫く。
 擗霄＝雲を駆け飛び回る。路旁＝道ばた。獨活＝独活。肥大＝大きく太って。廣豁＝広々と開けた所。黄茅＝黄色な茅。数屋＝数戸、数軒。溪底＝谷

底、茅樓ぼうちう、茅葺ぼうちうきの家。飯羹はんかん、ご飯と肉と野菜を混ぜ煮た吸い物。樓屋ろうおく、家の屋根。星辰せいしん、星や月。溪風けいふう、谷の風。
 沽酒こしう、買った酒。香美かうび、良い香りと美味。醒さめ、醒める。杜鵑とくわん、ホトトギス。繞めぐり、巡る。まどつ、かこむ。卿きやう、故郷。里こ、耿々けいけい、光輝くさま、明るい、心が安らかでない。曙あけぼの、夜明け。早晨そうぜん、朝早く。罩と籠、魚を捕る竹籠。網あみをかけ、覆さいつ、僅さか、少し、稍。蹊路けいろ、小道。近道きんどう、漸ようく、やつと。霽せい、晴れる。焦緒しやうしよ、赤く焦げる。愈ゆ、いよいよ。烟けむり、煙り。憾かんず、残念。遺憾きく、訖きう、終わる。終える、止める、遂に。午飯ごはん、昼飯。喫き、食べる。髣髴ほうふつ、さながら、良く似たさま。仄ひか、ハッキリしないさま。池水ちすい、池の水。辨わえ、判る。絶壁ぜつぺき、切り立った断崖。万仞ばんぜん、一万尋。尋は八尺、約二、四米。神悸しんき、神を畏れ、心臓がドキドキする、胸騒ぎ。股栗こすつ、足が震えおののく。懼おそれる、懼れる、おそれる。焦熱しやうねつ、熱く焦げる。地獄じごく、罪惡を犯した者が死後に行つて種々の苦しみを受ける所。墮おる、落ちる。白烟はくえん、白い煙り。油々然ゆゆぜん、水や雲が緩やかに流れるさま。變幻へんげん、幻のように、忽ち現れ忽ち消えること、変化の早いこと。貧交ひんかう、僅かな交わり。高吟かういん、声高らかに吟じる。未時みじ、今の午後二時頃。鐵釜てつぷ、鉄の釜。礬ばん、硫酸を含んだ鉱物、綠礬、明礬、染料や薬品にする。煎せん、煎じる、煮詰める。兩大礪りやうだいがい、両手で抱える大きさの塊。處々しょしょ、所々。烟けむり、煙り。噴ふく、硫氣りゅうき、硫黄の氣。硫黄いおう、火山地帯に産する黄色の鉱物。薰蒸くんじやう、燻し蒸す。嗽しやう、うがい。礬氣ばんき、硫酸を含んだ空氣。茅屋ぼうちう、茅葺きの家。滴珠てきしゆ、滴が玉のよう。溪間けいかん、谷間。小瀑布しょうばくふ、小さな滝。懸かる、懸崖のように流れ落ちる。潏然せいつぜん、清涼せいりやう、清く涼しく。掬くむ、掬う、推量。石缸せきかう、石橋、水中に置いた飛び石。瀑布ばくふ、滝。數鹿流すうらくりゅう、滝の名。絶壁ぜつぺき、断崖、切り立った壁。蒼崖そうがい、青い崖。匯わい、水が巡り集まる。碧潭へきたん、青い淵。濺沫せんまつ、飛沫を注ぐ、水をさつと振りかける。轟轟然こうこうぜん、車が音を立てて走るさま、凄ひげい大きな音。鬱然うつぜん、草木の茂るさま、氣の塞がるさま。叢生そうせい、草が群がり生える。霏々ひひ、雨や雪の激しく降るさま。白碧はくへき、白と青。相映あひあえ、互いに調和して映える。樹陰じゆいん、木陰。藉草せきそう、草で編んだ敷物。腰間ようかん、腰に、帯に。龍笛りゅうてき、龍笛。弄ろうす、吹く。瀑布ばくふの音。相和あいわす、調和する。淵龍えんりゅう、淵に棲む龍。一吟いちいん、一つ吟じる。雷奔らいほん、雷が走る。曲閑きよくかん、曲の終わり、止む。蕎麦そば、蕎麦。麵めん、麵類。濁酒だくしう、白酒、濾して無い酒。縋々けんけん、まとわりつく、捲く、丸めて縫つ。節駐せつちう、杖を止めて。節せふ、杖にする竹。天際てんさい、天の果て。千里せんり、遠い所の意、人名。異鄉いしやう、故郷がそれぞれ異なる。豈あた、どうして、なんと。感慨かんがい、深く感じて心が古い立ったり、嘆いたりする、感動して憤激する。何如いか、いかが、

どんな。羊叔子^{ようしゆくし}。硯山^{けんざん}。硯石の山。遊^{ゆう}。登る、行く。百姓^{ひやくしやう}。農民^{のうじん}。碑^ひ。立石、日陰によって時間を計るための石柱、宗廟に建てかけ生け簀を繫ぐ。石柱、いしぶみ、故人の事跡を称えて後世に伝えるために文章を彫りつけた石。雖^{いえども}。けれども、たとい。潜然^{さんぜん}。心を深く潜める。翅^し。ただ、翼、羽。戊午^{ぼし}。安政五年、一八五八。仁郷^{じんかう}。五竹の友人。

20 雲仙岳紀行

温泉為岳。鎮西巨鎮也。山上冰雪常在焉。其高可知。戊午夏。余在熊府。與天草岳吉甫語。及温泉吉甫曰。僕家隔海對岳。春靄秋月。朝烟暮靄。奇態難狀。尤與冬日觀雪為宜。方雪霽雲散。玉山突出蒼海中。宛乎望天仙于霄漢。未嘗不神往焉。常欲躋攀以探其幽秘。而未果。足下豈有意乎。於是與吉甫謀。以六月十二日。買舟於高橋。航島原。舟中望雲仙烟並浩蕩中。已覺其有異。此夜月色晴朗。雲仙立金波閃爍中。殊為奇觀。夜半驟雨。十三日大雨。舟達森城。宿高某家。十四日。入江置酒招余。痛飲及晚。相携步月眉山下。眉山即雲仙山脉。東奔峙於森城者。清秀蒼鬱。風景可掬。十五日晴。邂逅島原助教某訓導某於洵美亭。對酒言詠。及晚而去。十六日晴。朝發森城。訪三室里正篁墩。十七日晴。伊藤千里觴余其亭。千里聞余登温泉。謂余曰。僕近家事鞅掌。經數日。則得閑。欲為導者。肯留不。余曰。然則幸甚。遂宿焉。十八日晴。十九日晴。過篁墩千里。訪觀水亭。廿日晴。訪森山里正雨香。酌酒賦詩。及夜而去。宿觀水亭。廿一日。朝小雨。廿二日陰。過篁墩。廿三日雨。會于挹芬堂。廿四日晴。廿五日晴。廿六日晴。與千里及其門人文哉。鷄鳴發三室。味爽至森山。見一山前橫。是為九千部。昔有一僧。學禪未省。誓曰。

登此山。讀經至一萬部。而後不得道。乃還俗耳。至九千部。有省。因名焉。取路其右。過松尾。經千々石。午時。至一酒店。喫所齎搏飯。食畢。而行數百步。山蹊頗嶮。炎日如燬。流汗透衣。一步一喘。十步一憩。未時。至一乘院。々空海所勸也。寺旁有号地獄者。倩難僧導之。既而至一処。地中噴烟。硫氣撲鼻。僧指曰。是為清七地獄。昔有清七者。墮之而死。進十步。得一石碁。曰三途大河無明橋。過碁十數武。逢山石磊々如劒戟。曰是号劍山。々下有池。其色如藍。為染戸地獄。如酒。為酒家地獄。如酢。為酢舖地獄。為不孝地獄焉。有閼牆地獄焉。閼牆比諸不孝。烟勢熾甚。余乃笑曰。不弟之罪。何甚於不孝耶。相顧輒然。又有姦夫地獄。烟勢更甚。千里戲僧曰。姦淫之罪。何甚於不孝耶。僧曰。君其問阿闍梨。其他。八萬地獄。雀地獄。殺生地獄。難產地獄。妄語地獄等。種々為名目。觀畢。投寺旁客舍。々前有温泉。浴罷呼杯。主人取酒瓶。浸温泉中。不煩薪火。而酒自暖矣。各傾數杯而寢。廿七日晴。倩一導者。登普賢岳。取路客舍左。穿林而下。有平地。曰池原。經夫婦石下。進數百步。山路峴路。旁多異卉奇草。落英繽紛。進至山肩。暫憩。下臨不測深谿。導者取巨石轉之。草卉被摩。窄々而下。遙而無聲。唯見如飛蝶而已。少陵云。轉石驚魑魅。非虛語也。路循溪而右。々俯深溪。左則十丈怪巖。簇々欲仆。神悸目眩。運足極遲。進數里。路愈嶮惡。渴甚。路旁異草。午時猶有露。乃就寢舐之。甘香徹心肺。既而逢一大巖。屹立如門。長可十丈。

呼為鬼門。過其左。登數十步。地稍平。無草木。又十數武。路甚小。狀如馬鬣。左右皆溪。股栗難前。又進數十步。得坦地。有一石竈。安普賢菩薩像。竈後。蒼崖如屏風。号風巖。高十丈許。上生茂樹。鬱蒼然。旁有小樹懸焉。樹皆露根。泉自石罅出。過石角木根。滴々而下。受以一石泓。余輩渴甚。就泓更飲。殆盡。乃踞巖下。出糧食之。且食望一目千里。九州可摩。忽見山腹生雲。遙々粘海而飛。不知其所之。天飊吹衣。飄々欲仙。有鶯鳴幽谷中。如聞仙樂。使人不忍去。導者促曰。遠路且嶮。難久息。行數里。至冰谷。深林陰森。不見日色。清涼徹骨。導者指一石窟曰。此窟有冰。四時不消。近歲土人夏日取水鬻之。三四日前猶有焉。恨客來少晚也。余輩以為或存片塊。入窟索之。無有。寒氣透膚。遍身生粟。不可久留。乃出而去。愈進。樹逾茂。老幹古藤橫路屈曲榉材。蟠根縱橫。如龍爪攫石而起。怪石詭巖。磊砢塞路。如夜叉角。如象之牙。如虬。如螭。如虎豹。蹲踞岩頭。出木股。行數十步。青茅塞谿。其深及肩。行人唯見頭。余戲曰。諸君為飛頭蠻乎。數百步。至鬼神谷。々々多老槐。鬱然遮天。進數十步。一風穴。徑可一尺。余輩。更風于穴。冷甚。又行數十武。路右有峯。号國觀岳。上載石筍。長十丈許。導者曰。此岳有天狗。棲焉。登則失人。又曰。自此行數十步。路極嶮惡。如登天。称曰親跡。攀葛。躡岩。喘々然而上者。數十步。漸至頂。々々有茂林。々々盡海見。導者曰。是皺洋也。布帆點白。如鷺。風景可掬。因坐頂上。眺者久之。空氣清

爽。如八九月候。紅日可摘。而不煩扇笠。又行數十步。得妙見岳。上有妙見像。下則又至池原。午時歸客舍。洗脚於溫泉。被襟而臥。有異蟲。鳴于屋後松林中。其聲清涼可喜。余奇而問之主人。主人曰。土人呼寒々蟬。以聲得名。又蟬屬獨此山有焉。廿八日午後。衝雨下山。迂途。觀鮎返瀑布。昏黑至有馬里正高木某家。某沽酒擊鮮侍之。飲畢就睡。廿九日雨。晦日雨。朝與千里文哉別。余自遊鎮西。得三勝區。曰阿蘇。曰海中道。曰溫岳。阿蘇高則高矣。然無幽邃之趣。海中道平而遠。清而麗。譬如幼妙處女。難與十尺壯夫並論。獨溫岳高秀。幽而深。仙藥生焉。嘉樹茂焉。宜脩長生。宜為肥遯。故會心不在彼。而在此。噫。古之君子。用則行。舍則藏。許由隱于箕山。伯夷陰于首陽。伯陽隱于會稽。四皓陰于商山。謝安于東山。思邈于太白山。圖南于華岳。朱栲亭于武夷。或守道。或脩仙。其清潔高尚何如哉。余也。世辱微祿。上不能裨益於世。下不能決然引去。對溫山。徒有慚愧耳。今欲與溫山別。豈無懸々乎懷哉。詳記諸經光景。傷溫山之不可復見也。

釈文

雲仙岳紀行
うんぜんだけ きこう

温泉岳を為す鎮西（九州の古名）の巨鎮なり。山上の氷雪は常に在りて其の高さを知る可し。戊午の夏

温泉岳を為す鎮西（九州の古名）の巨鎮なり。山上の氷雪は常に在りて其の高さを知る可し。戊午の夏

余は熊府に在りて天草岳甫吉と語り。温岳に及び吉甫は曰う、僕家は海を隔てて岳に對し、春靄秋月

朝烟暮霞と奇態（美しさ）は述べ難く尤も冬日雪を觀るに宜しく、雪霽れて雲散じて宜しく方に玉山

（雲仙岳）蒼海の中に突き出る。玉山は宛ら天仙千霄漢を望む（天に昇った仙人が空から見ようだちういみ）未だ嘗

て神も住まず常に幽秘深く、躋攀せんとすると未だ果せず、足下（貴殿）と登ろうではないかと云う。

是れに吉甫某しと謀り、六月十二日高橋に於て舟を買めて島原に航る。舟中から雲仙の烟浪浩蕩を

望む、己に其の異なること有するを覺える。此の夜月色晴朗雲仙金波（光り輝く）の中に立ち、殊に奇

觀（立派な眺め）を為す。夜半驟雨（俄か雨 激しい雨）となる、十三日は大雨となるも舟は森城に達し、高某家

に宿る。

十四日は入江某し余を招き酒を置し。痛飲晩に及び相携えて月に眉山の下を歩く。眉山即ち雲仙山脉

東に奔り森城より峙つ、清秀蒼鬱（青々とこんもり茂る）の風景は掬う可し。（両手で掬いあげたい）十五日晴れ

島原助教某しと訓導某しと洵美亭で邂逅（逢う）する。酒に對して言詠晩に及んで去る。

十六日晴れ、朝に森城を發つて三室里の正簞墩を訪ねる。十七日晴れ、余伊藤千里と其の亭に觴（酒を酌む）す。千里余に温山に登ることを聞き、僕近家事鞅掌（仕事が多い）のため數日を経て則ち閑を得て

導者（道案内）を為さんと欲す。肯（あ）えて留めず余は曰う、然り則ち幸甚なりと遂に宿る。

十八日晴れ、十九日晴れ、簞墩の千里を過ぎりて觀水亭を訪ねる。廿日晴れ、森山里の正雨香を訪ねて、酒を酌み詩を賦して、夜に及んで去つて觀水亭に宿る。廿一日朝小雨、廿二日陰り、簞墩を過る。

廿三日雨千挹芬堂にて會う、廿四日晴、廿五日晴、廿六日晴、千里及び其の門人文哉と與鷄鳴三室を發つて味爽森山に至る。一山前横を見る、是れ九千部を為し、昔一僧が有りて、禪を學び未だ省かず

誓つて曰う、此の山に登る經を讀むこと一萬部に至る。後に道を得ずそこで還た俗に九千部に至る。

省みるに有りて名に因りて、路は其の右を取り松尾を過ぎ、千々石を経て午時一酒店に至り、齋所搏飯を喫す（持って来た握り飯をたべる）。食畢りて行くこと數百歩山蹊頗る嶮しく、炎日燂くが如く汗は流れて衣

を透す。一步一喘、十步一憩、未時(午後二時頃)一乘院に至る。院空海翔の所なり。寺の旁らに地獄と号ぶところ有り。雖僧は離れてこれに導きゆく、一処地中烟を噴いて硫氣鼻を撲つ、僧は指して曰う是れ清七地獄と為す。昔清七有りて之れに墮ちて死す。十歩進んで一石砦(水中の飛び石)を得る。三途大河無明橋と曰う、砦五歩過ぎる十數歩、山石磊々(石や岩がごろごろと)劔戟の如くに逢う。曰う是れ劔山と号ぶ、山下に池が有り、其の色は藍の如く染戸地獄を為す。酒の如く酒家地獄を為す。酢の如く酢舗地獄を為す。不孝地獄有り。閼牆地獄有り。閼牆不孝諸に比べ、烟勢熾なること甚だし。余そこで笑い曰う不悌(兄や目上の人に従わない)の罪何んぞ甚だしきは不孝よりかな。相顧りみて輒然たり又た姦夫地獄有り。烟勢更に甚だしく、千里僧に戯れて曰う、姦淫の罪は何んぞ不孝より、何んぞ甚だしきかと僧は曰う、君其れは阿闍梨に問えと。其の他八萬地獄、雀地獄、殺生地獄、難產地獄、妄語地獄等種々名目を為すを觀畢りて、寺の旁らの客舎に投ず。舎前に温泉有りて浴し罷んで杯を呼ぶ、主人酒瓶を取りて、温泉の中に浸して薪火を煩せずして、酒は自から暖まる。各數杯を頤にして寝る。廿七日晴れ一導は、つづいて普賢岳に登る。路は客舎の左を取りて、林を穿つて下れば平地がなる池

原と曰う、夫婦石の下を経て數百歩進むと山路は崎嶇（山路の険しいこと）なり。路旁に異弁奇草多く、落英
繽紛（花びらが盛んに散る）の中を進んで山肩に至りて暫く憩う。下を臨ると谿は深く不測を恐れる。導者巨石
を取り之れを轉して、草弁を披靡（草を靡く伏す）して罕々（落ちつかない）として下る。遙かして聲無く唯だ
飛蝶の如くに見える、己に少陵（杜甫）石を轉して魑魅（山や沼にいる化け物人面獸身で人を迷わせる）に驚くは虚語
に非らず。路は溪を循りて右に左に深い谿に俯せて左を見れば十丈の怪巖が簇々（群がり集まる）として仆
れんとしている。神悸目眩（心怖れて眼が眩む）足の運びは極めて遅くなり、數里を進みて路は、愈よ嶮惡
になり渴き甚しく、路旁の異草は午時猶お露有りて、そこで之れを舐める、甘香心肺に徹る。既に二
大巖に逢う、屹つこと門を立てたる如く、長く十丈ばかり呼んで鬼門と為す。其の左を過ぎて、數
十歩登ると稍平地となり草木は無く、又十數武（武は半歩）進むと路は甚だ小さく、状は馬鬣（馬の鬣）
の如く左右皆深で、股栗前み難し。又進む數十歩にして坦地（平地）を得る。一石龕有り、普賢菩薩像
を安んじる、龕後は蒼崖の如く屏風巖と号ぶ、高さ十丈許り上に茂樹生じて、鬱蒼然として旁に小樹
懸りてあり、樹は皆根に露泉石罅（石の割れ目隙間）より出ずる。石角木根を過ぎ滴々（滴が滴り落ちる）落ちる

を受けて一石の泓いっせき おうにおいて、余輩よはいの渴かわくこと甚おつしく泓おつにおいて飲むこと盡かんきず、そこで巖下がんかに踞すくまりて糧かてを出し之れを食べる。且つ食べる一目千里望みて、九州を摩さんぶくすばかり忽ち山腹に雲が生ずるを見る。遙々海に粘りついて飛ぶ、いつの間やら天飊てんびよう（天に吹きささぶ大風）は衣を吹いて飄々仙にならんとする。鶯うぐいすが幽谷ゆうくの中に鳴き仙樂せんがく（仙人の音楽）を聞くが如し。人を使って去るに忍びずも導者は促うながす。遠路且つ嶮えんろ けわしく久しく息も難しと云う、行くこと數里氷谷に至る。深林陰森は日色を見ず、清涼は骨に徹とある。導者一石窟を指して此の窟に氷が有ると云う。四時しじ（一年中）ず。近歳土人が夏日氷を取りて鬻ひさぎ（売る）之れ三四日前のもの猶おに有りつて、恨客來たるも少晩きなり。余輩も片塊を為さんと窟に入りて之れを索さがす。有るは無し。寒氣膚に透る遍身粟を生じて久しく留ることならず。そこで出て去り愈いよいよに進む。樹は逾いよいよ茂り老幹古藤が路横にありて屈曲榲材くつきよく さが（細かく角張つて）蟠根はんこん（根が蟠つて）は縦横にして、龍爪りゅうさの如く石を攫つかんで起つ。怪石詭巖磊砢かいせき きがんないらい（石や岩がごろごろと）と路を塞ふさぎ、夜又角の如く象の牙の如く、虬きゆうの如く螭みずちの如く、虎豹の如し。岩頭を蹲しゃがみ躡ふみつけて木股をて、行くこと數十歩にして青茅せいちが谿たにを塞ふさぐ、其の深さ肩に及ぶ、行人の唯だ頭を見る、余戯れて曰う諸君の飛頭蠻を為すと、數百歩

で鬼神谷に至る。谷には老槐多く鬱然として天を遮ぎる。進むこと數十歩一風穴あり、徑は一尺ばかり余輩更に穴風甚だ冷たく、又行く數十武路の右に峯有り。國觀岳と号ぶ、上には石筍を載く石筍の長さ十丈許り、導者は曰う、此の岳は天狗を有して棲む。登りて先人を失う、又曰う此れより行くこと數十歩は、路極めて嶮惡で天に登るが如し。称す親跡葛を攀りて岩を躡みつけて、喘々（呼吸が途絶えがちになる）として上ること數十歩漸く頂に至る。頂に茂林有林盡きて海を見る。導者曰う是れ皺洋なり。布帆點々と白く鷺の如く、風景掬む可し因つて頂上に坐して、眺るは之れ久しく、空氣清爽八九月の候の如く紅日（太陽）摘む可し。扇笠を煩わせず又行くこと數十歩妙見岳を得る。上に妙見像有りて下は池原に至る。午時客舎に歸えりて脚を温泉に洗い、襟を被つて臥す。異蟲有りて屋後の松林の中に鳴く、其の聲清涼にして喜ぶばかり、余奇なりとして之れを主人に問う。主人曰う土人（土地の人）は寒々蟬と呼ぶ、名を得て聲を以て又蟬屬して獨り此の山に有り。

廿八日午後は雨を衝いて山を下る、途を迂りて鮎返しの瀑布を觀る。昏黒有馬の里高木某し家に至り、某し酒を沽（かう）い鮮を撃して之れに侍る。飲み畢て睡りに就く。

廿九日は雨、晦日も雨、朝千里文哉と別れて余鎮西に遊ぶ。三勝区を得て曰く阿蘇曰く海中道曰く温岳
 阿蘇高く則ち高い。然れど幽邃（静かで奥深い）の趣は無し。海中道は平らかにして遠く、清く麗しく譬
 ると幼妙處女の如く、十尺の丈夫並論するは難し。獨り温岳は高く秀幽にして深く、仙藥生じて嘉樹
 茂脩宜しく肥遯（俗世を離れる）を為す。故に會心彼在せずしてここに在り。噫。古の君子は用を
 行い、舍則ち藏すして許由（中国伝説の隱者）は箕山に隠れ、伯夷（舜の時代の人）は首陽に陰れ、伯陽は會稽に
 隠れ、四皓ここに商山に隠れる。謝安（晋の名臣）は東山に隠れ、思邈は太白山圖南華岳に、朱栲亭は
 武夷或は守道或は脩仙、其の清潔高尚は何如かな。余はまた世は微祿を辱なく上るに能わず。（出来
 ない）益を世に於て稗う下りて決然引去するも能はず。温山に對して徒に慚愧（恥じる）有るに、今温山
 と別れんと欲して、豈懸りて懷の懸る無しかな。詳かに経る所を光景を記して、温山の復た見る可
 らずを傷むなり。

語釈

雲仙岳 長崎県。紀行 旅行中の出来事や見聞を記す。又其の文。温泉岳 温泉の出る山、雲仙岳 鎮西九州。巨鎮 大きな山、中心鎮

めとなる山。山上＝山の頂、山の上。冰雪＝氷と雪。戊午＝安政五年一八五八。熊府＝熊本城下。天草＝熊本県。岳甫吉＝人名。吉甫＝岳甫吉。春露
 春の露。秋月＝秋の月。朝烟＝朝の露。暮霞＝暮れの霞み。奇態＝珍しく。不思議な。変わったさま。状難し＝形状、言い表し難い。雲散＝雲が
 散り、晴れる。玉山＝美しい山のたとえ。蒼海＝青い海。天仙＝天の仙人。霄漢＝大空の意。蒼穹、躋攀＝よじ登る。幽秘＝奥深く密やかな。豈＝ど
 うして、その。買舟＝舟を貸し切る。航す＝航海、舟で行く。雲仙＝長崎県に在り。烟＝露、煙り。浩蕩＝広大なさま。水の広々としているさま。月色
 月の色。晴朗＝曇りのないさま、晴れ渡るさま。金波＝波が太陽に照らされて金色に輝くさま。閃爍＝閃き輝く。奇観＝珍しく不思議な眺め。
 夜半＝夜中。驟雨＝にわか雨。痛飲＝思い切り酒を飲む。相携え＝提携。眉山＝宋の蘇軾の郷里の名、同名の山。山脉＝山が筋になって連なる。東奔
 東に走る、森城＝森城下。峙す＝対峙。清秀＝清らかで秀でている。蒼鬱＝青く鬱蒼と。風景＝景色や風俗。掬む＝推し量る。助教＝助手。訓導
 教え導く、明や清代書く府州縣に置かれた教員、旧制小学校の教諭。洵美亭＝亭の名。邂逅＝思いがけず巡り会う。詠む＝詩を詠む。三室＝地名。＝
 簞墩＝簞＝たかむら、竹、竹藪。墩＝丘。堆い、集まっているさま。觴＝杯、酒を飲む。觴。執筆＝仕事が多く服装を整える閑がないこと。肯
 き＝肯定。過る＝行く、通過、旅する。雨香＝雨に香る。觀水亭＝亭の名。挹＝汲む、とる、集める、引く。芬＝香ばしい、草が生えて香氣
 を漂わす。會＝会う。味爽＝夜の明け方、暗さが明るさに変わるとき。乃＝即ち、其処で、まさに。還俗＝仏門僧籍から俗世に還る。齋所＝もたらす
 もつてくる、もつていく。饒別、搏飯＝うつ、たたく、とらえる、にぎりめし。喫す＝食べる。畢＝終わる。山蹊＝山間の谷。頗る＝非常に、かなり。
 嶮＝嶮しい。炎日＝炎熱の日。燬＝焼く、焼ける。流汗＝汗を流す。空海＝平安初期の高僧、唐の長安に学び、帰国後、高野山に金剛峰寺を縦、真言
 宗を広めた、弘法大師。初所＝築く、始める創る。寺旁＝寺の傍ら。地獄＝罪惡を侵した者が死後に行つて種々の苦しみを受けるという所。難僧＝若い
 僧、小僧。倩＝美しい、口元が愛らしい。地中＝地の中。噴烟＝噴出する煙り。硫氣＝硫黄の氣。喘＝喘ぐ。憩＝休憩。憩つ。未時＝今の午後二時頃。
 一乗院＝院の名。撲＝殴る、叩く、打つ。石缸＝石橋。水中の飛び石。三途大河＝死者が冥土へ行く途中、死出の山を越えてから渡る川、善人は橋を、
 軽い罪人は浅瀬を、悪人は深い所を渡ると云つ。無明橋＝善人は橋を渡る。晝々＝ごろごろと折り重なるように辺り一面に。劒戟＝剣と枝のある鉞。缸

石橋、水中の飛び石。劍山、山の名。藍、藍、蓼科の一年生草、青色の染料をとる。酒家、飲み屋。酢舗、寿司屋。閑牆、同じ垣の中で争つ、内輪
 もめ、兄弟喧嘩。烟勢、煙の勢い。熾、熾烈、盛んに。輾然、巡る、廻る、反転、軋る。姦淫、男女の淫らな行い。客舎、旅館。
 舎前、旅館の前。浴罷、浴びるのを止める、中止。杯、盃、酒を呑む。酒瓶、酒を入れる瓶。薪火、薪の火。煩さず、面倒をかけずに。自暖、自然に
 暖まる。姦夫、悪人、人の妻と密通する男、まあとこ、まぶ。殺生、頃祖こと生かすこと、生き物を殺すこと、むごいこと。難産、難しいお産。
 妄語、出任せを云う、出任せ名言葉、偽りをいう。種々、色々。名目、褒め称える、名指して注目する、物事の名称、ことわざ、口実として利用する
 ことば。頗、長い、丈が高い、懇ろ、至る、傷ましい。普賢岳、山の名。客舎、旅館。穿ち、穴を開ける、掘る、突き抜ける。山路、山の道。崎嶇、
 険しい山、山が平らでない。路旁、道ばた。異弁、変わった花弁。奇草、変わった草。落英、花びらや花房が落ちる。繽紛、乱れる、纏れる、過ぎる、
 もつれ乱れる。烟勢、煙の勢い。阿闍梨、衆僧の模範となる高僧。天台宗、真言宗で僧の学位。暫憩、暫くの休憩。谿、谿谷。導者、道案内。巨石、大
 きな石。草弁、草花。被摩、分ける、砕く、細かくする。罕々、飛蝶、飛ぶ蝶。少陵、小さな丘。魑魅、山や沼に棲むという化け物、人面獸身。虚語、
 虚ろな言葉。循り、したがう。溪、谷川。怪巖、巨大な巖。簇々、群がる、集まる、簇。仆欲す、倒れそう。神悸、神を畏れ敬う。目眩、目が眩む。
 運足、歩く、足を運ぶ。愈、いよいよ。嶮惡、嶮しくて悪い。甘香、甘い良い香り。心肺、心臓と肺。徹す、透、沁みる。屹立、高く聳え立つ。稍、少
 し、僅か。股栗、足が震えて足が竦む。前難、前に進むのが難しい。状、状態。馬鬣、馬の鬣。坦地、平坦地。石竈、石で作った神仏を安置する小
 箱。普賢菩薩像、遍く衆生を彩度する菩薩の像、白い象に乗った姿が画かれている。安、安置、安んじる。龍、龍のさま、受ける、盛る、寺の塔、神仏
 を安置する小箱。蒼崖、青い崖。屏風、風よけに用いる家具、室内の仕切、装飾などにも用いる、衝立。風巖、風に曝された岩。旁、そばに。小樹、
 小さな樹木。懸る、下がる、懸かる。泉石、泉水や石。鏝、石角、石の角。木根、木の根。一石泓、石の窪みで水が深い、淵。余輩、我が輩。茂樹、
 樹木が茂る。鬱蒼然、青々と茂るさま。滴々、滴る。渴、渴き。泓、水が深い、淵。巖下、巖の下。踞、蹲る、しゃがむ。糧、食糧。
 摩可、優れる、大きい、多い。山腹、やまの中腹。遙々、遙かに。海粘、海の波が緩くうねるさま。天飊、旋風、つむじ風。幽谷、深山幽谷、深い山

奥の寂しい谷。仙樂^{せんがく}＝仙人の音楽。促し^{うなが}＝催促。飄々^{ひょうひょう}＝風に吹かれて軽く舞い上がるさま。遠路^{えんろ}＝遠い道、遠くから。嶮^{けん}＝嶮しい。氷谷^{ひやう}＝氷の谷。
 深林^{しんりん}＝深い林。陰森^{いんしん}＝森の陰。日色^{にっしき}＝太陽。清涼^{せいりやう}＝涼しく清々しい。石窟^{せきくつ}＝石の洞窟。窟^{くつ}＝洞窟。四時^{しじ}＝四季、何時も、年中。近歳^{きんさい}＝近年。夏日^{なつひ}＝夏の日。鬻^{しやく}＝粥、ひさぐ、売る。片塊^{へんかい}＝塊の欠片。索^{さく}＝探す。膚^ひ＝皮膚。遍身^{へんしん}＝全身。粟^{りつ}＝寒気のため肌が粟立つ。樹逾^{じゆ}茂る^も＝樹木がいよいよ茂る。
 老幹^{らうかん}＝老樹、大木の幹。古藤^{ことう}＝古く大きい藤の木。路横^{ろぎやう}＝道の横。屈曲^{くつぎく}＝曲がりくねる。様材^{さうざい}＝細かく角張って突き出る。蟠根^{はんこん}＝根が蔓延る、蟠る。
 縦横^{じゆうぎやう}＝縦に横。龍爪^{りゆうしゆ}＝龍の爪。攫^{じやく}＝掴む、握る。怪石^{かいせき}＝奇怪な石。詭巖^{かいがん}＝脆い巖。磊砢^{らいこ}＝転がす、転ばす、石がごろごろ重なるさま、心が広く小さなことに拘らないさま。夜叉^{やじや}＝凶悪で人を害することもあるが、正しい仏法を守護する鬼神。虬^{きう}＝きゅう、龍の子で角があるとのこと。蛭^ち＝みずち、雨竜、黄龍、角のない雌の龍。虎豹^{こへう}＝虎と豹。岩頭^{がんとう}＝岩の頂。蹲躡^{とんじゆ}＝つくばう、しゃがむ、蹲る、踏む、履く、人の足を踏み付ける。木股^{きこ}＝地名。谷^が＝谷川。飛頭^{ひとう}＝高い頭。蠻^{ばん}＝野蛮、蛮人。鬼神谷^{きんしんが}＝谷の名。老槐^{らうかい}＝老樹の槐、豆科の落葉高木、家具器材として用いられる。鬱然^{いつぜん}＝鬱蒼と。遮^{しや}＝遮断。國觀^{こくかん}＝山名。石筍^{せきじゆん}＝鍾乳石が堆石して筍状になったもの。載^{のせ}＝積載。葛攀^{かはん}＝葛によじ登る。岩躡^{がんじゆ}＝岩を踏みつける。喘々^{ぜんぜん}＝喘ぎ喘ぎ。茂林^{もうりん}＝茂った林。天狗^{てんく}＝星が地上に落ちて居ぬの形になり、炎を上げるみの、隕石から想像された怪物、國、人の形をして居り、鼻が長く、空中を自由に飛ぶ怪物。棲^す＝棲む。棲息^{せいしき}＝海^{うみ}の波のうねるさまが皺のように見える。布帆^{ふはん}＝帆掛け舟。點白^{てんはく}＝点々と白く。風景^{ふうけい}＝風俗と景色。清爽^{せいすう}＝爽やかで清い。紅日^{こうにっ}＝太陽。摘^つ＝採る。扇笠^{せんりつ}＝扇と笠。煩^{わづ}＝煩さず。面倒^{めんどう}＝面倒を掛けず。妙見^{みょうけん}＝國土を守り、苦悩を除き、諸願を叶えさせる佛の像。妙見^{みょうけん}＝山名。午時^{ごじ}＝昼時。客舍^{きやくしや}＝旅館。脚^{あし}＝足。襟被^{えりぎ}＝襟に首を埋め。臥^が＝横臥、寝る。異蟲^{いじゆう}＝変わった虫。屋後^{おくご}＝家の後ろ。清涼^{せいりやう}＝涼しく清々しい。寒々^{かんかん}＝寒々。蟬^{せみ}＝名。蟬屬^{せみぞく}＝蟬の仲間、親類。衝^つ＝強行。途迂^{じゆ}＝回り道。鮎^{あひ}＝鮎返し＝魚切、鮎の遡上の限界。瀑布^{はふど}＝滝。觀^み＝視る。昏黑^{こんこく}＝黄昏が暗く。酒沽^{しゆこ}＝酒を賣う。鮮擊^{せんげき}＝刺身やなますを食べる。侍^じ＝侍る。晦日^{みづか}＝月末。三勝^{さんしやう}＝三つの名勝区。阿蘇^{あそ}＝山名。海中^{うみなか}＝福岡市東区。温岳^{おんたけ}＝雲仙。幽邃^{ゆうすい}＝奥深く寂しい幽玄。千里^{せんり}＝人名。文哉^{ぶんや}＝人名。清^{せい}＝清々しい。麗^{れい}＝麗らかな。警^{たえ}＝警える。幼妙^{ようみゆう}＝若々しい。處女^{じよ}＝乙女。丈夫^{そうぢゆう}＝壮年の男。高秀^{かうしゆう}＝高く秀でる。幽^{ゆう}＝幽かな。仙藥^{せんやく}＝仙人の薬、靈藥。嘉樹^{かじ}＝良い樹木。長生^{ちやうせい}＝長生き。脩^{しゆ}＝修める。宜^{よし}＝良い。肥遯^{ひびん}＝逃れる、隠れる、去る、逃げる。噫^い

「感嘆詞」 許由きよゆ 中国古伝説中の隱者、天子の堯が位を譲ろうとしたのを断り、身をかくした。會心かいしん 心の中で覺る、心に適う、箕山きさん 伯夷はくゐ 舜の時代に礼を司取った人。首陽しゅやう 伯夷が武王を諫めたが聴き入れられず、首陽山に行つて餓死した。伯陽はくやう 老子の別名。會稽かいけい 山名、春秋時代に越王が呉王に會稽山で破れた故事。四皓しほ 東園公、角里先生、綺里季、夏黃公の四人の老人、秦末の乱を避けて商山に隠れたが、高祖が太子を廃位しようとしたとき、張良の招きにより太子を補佐板ので、高祖は廢位を諦めた。商山しょうざん 山名、四皓の隠れた所。謝安しゃあん 晉の名臣、字は安石、武帝の時建昌縣公に封じられた。東山とうざん 晉の謝安が隠れた山。思邈しへつ 遙かに遠い思い。太白山たいはくざん 山名。圖南とうなん 大事業を企てるたとえ、鵬ほう というおおきな鳥が翼を羽ばたいて九万里も空高く舞い上がり、南の海に飛ばうとしたとえ話。華岳かたけ 山名。朱栲亭しゅこてい 亭名。武夷ぶゐ 武帝。脩しゆ 修める。清潔せいけつ 潔く清々しい。高尚こうかう 上品。微祿びろく 小祿。辱じよく 屈辱、恥ずかしい。稗ひ 補う、益、布を継ぎ足す。決然けつぜん きつぱりと。徒いふ に漫然と。慚愧ざんかい 恥じる。光景こうけい 有様。狀態じたい 傷み。悲しむ。復たまた 復える、又。

21 衆芳亭記

南竹十数竿繞屋而蕭然者永野實耶衆芳亭也予之游天草也一日過實町擊鮮置酒属亭記於余々問其所以名曰桃李牡丹之天艷梅花水仙之清潔凡小薦異葩之不知名遍種多養以求唯是壳花翁郭橐駝之事而吾衆芳非此之謂也春日之遲々春服既成携童子提酒壺出亭游山之阿爛者吾芳也水之浜^{しづみ}者吾芳也池塘之烟巖角之雲莫往而非吾芳也对芳而酌々而歌醉而臥覺而歸行無牽止無尼唯吾耶欲余於是喟然曰奇哉亭也王侯貴人其國万乘其対封万戸可謂大矣然而日座深宮穆々如也言則左史動則右史出則從者護車絡繹塞路雖欲窮山阿經水浜縱觀芳如實耶得乎獨實耶主掌大之園能有天地間衆芳較諸彼孰失吾今而知求富貴之為惑矣噫實耶真所謂与造物游者吾願与焉乃拳觴而歌曰

逢此春日之遲々兮、今吾不樂兮負芳菲、踏彼芳草之青々兮、与子携手兮歌而歸

釈文

しゅうほうていき
衆芳亭記

南竹十数竿屋を繞りて蕭然（物寂しく）、永野實耶の衆芳亭なり、予は天草に遊び、一日ここに過す實耶、擊鮮置酒（鮮魚と酒を準備して）以て成す、此の衆芳亭に屬して記す。

余は其の名する所について問いに曰う、桃李牡丹の天艶梅花水仙の清潔の外の小葩異葩これ名知らず、遍ねく種え多く養い以て、唯いるを求めてにの花う売る、翁の郭橐駝（植木の名人、駱駝のように腰がまがっているので云う）の事を吾（親愛の意を籠めて云う）が衆芳亭と之れ謂うに非ず、春の日遅々春の服既に携え成す童子（子供）が酒壺を提げて亭を出て、阿爛（寺のこと）に游山（遊ぶこと）是れ吾が芳ばしきなり、水の浜が玉の光りのように璨（輝く）吾が芳ばしきなり、池塘（堤）の巖角これ雲に烟りる、往く莫れ芳ばしきに、対して酒を酌み酔いて歌い、臥して覚め帰り行く牽し止める無く、尼く無く唯だ吾が實耶余は是れ喟然（嘆息、感心する）せんと欲す曰う奇なるかな亭なり、王侯貴人其の國万乗（一万台の兵車を徵発して領有できる領土の君主）其の万戸を封ずることを謂う可しこ大なり、然るに日に座す深宮（奥深い宮殿）穆々（恭しく）の如し、言に則ち左史が動き則ち右史が出でて車を護るに従い、絡繹路を塞ぎ（左史は天子の行動の記録係り右史は天子の発言の記録係りが天子の乗った車を護り人や馬の行列が続いて路を塞ぐ）、山の果てまで河を経るその水浜に縦い観るよ

うな芳しき如くである、獨り實耶主掌じやうしやう（一人で支配する）のの大いなる園能く、天地の間に有し衆芳諸、
彼孰得孰失に較べて吾れ今にして知る富貴ふうきを求めるを為す惑まどう、噫ああ、實耶真まことの所謂いう、万物を創造する神は游者と吾が願いずくい焉んぞ、乃ち鰯さかすきを挙あげて歌つて曰いう。

逢此春日之遅々兮 此れ逢う春の日 遅々たり

今吾不樂兮負芳菲 今 吾れ樂しまずして芳菲ほうひに負そむく

踏彼芳草之青々兮 彼の芳草ほうそうのこれ青々せいせいたるを踏ふむを

与子携手兮歌而歸 子しと手を携たずさえて歌つて歸らん

書釈 衆芳亭記しやうほうていき＝亭の名の由来。竿かん＝竿、竹。屋おく＝家。繞めぐる＝巡る、周りを取り巻く、廻り。蕭然せうぜん＝物寂しいさま。永野えい＝姓。實耶じや＝名。衆芳亭＝

亭の名。天草あまのくさ＝遊ぶ。訪あそれる、旅、行く。擊鮮げきせん＝新鮮な魚を食べる。置酒おきしよ＝買った酒。属しやく＝依頼、頼まれる、委嘱。亭記ていき＝亭の記事、亭の謂われ。曰いく＝云つ、述べる。桃李とうり＝桃とスモモ、自分が引き立てたり推薦したりした者、そのようにされた立派な人物、門人、桃李を植えれば夏に木陰で休み秋に実を食べる事が出来るという古語に元図区、桃や李は別に口をきて人を招くことはしないが、よい花や実があるから、にんが争つて来て、その下に自

然に道が出来る、徳のある人には自然に人が心服するたとえ。牡丹^{ぼたん}花の名、深見草^{ふかみくさ}。天艶^{てんえん}若々しく艶やか。梅花^{ばいか}梅の花。水仙^{すいせん}水中の仙人、戦国時代の屈原など、草花の名。清潔^{せいけつ}清らかで潔い。凡小^{ぼんしょう}全て小さい。葩^は花。遍^{あまね}く隅から隅まで。翁^{おきな}老人。郭蒙^{かくもん}植木の名人、郭は姓蒙^{たけだ}はらくだ、背が曲が隆起して作田に似ているから蒙^{もん}馳^ちという通称になった。衆芳^{しゅうほう}香りを集めるの意。春日^{しゅんじつ}春の日。遅々^{ちぢ}遅れるさま。春服^{しゅんぷく}春の着物。童子^{どうじ}童子供。酒壺^{さけつぼ}酒瓶、酒を入れる壺。提げ^さ提げて、持つて。携え^{たづな}携行、携える、持つて。游山^{ゆうざん}山に遊ぶ、行楽。ピクニック。阿爛者^{あらんぢや}梵語、静かな所に意。寺。芳^{ほう}芳しい香り。璨^{さん}玉の光るさま、玉の光。池塘^{ちやうたう}池の堤。土手。謂^いう云う、述べる。薦める^{けり}推薦。烟^{けり}煙。巖角^{いんかく}岩角。莫^{なかれ}無かれ、無い、夕暮れ、暮れ。酌々^{しやくしやく}酌をするさま。牽^ひ引き、引く。臥^が横臥、寝る、伏せる。尼^{じつ}、昵懇、親しい、尼。耶^や、かの疑問。喟然^{きぜん}嘆くさま。奇^き珍しい、奇しくも。王侯^{おうこう}帝王と諸侯。貴人^{きじん}官位身分の高い人。万乘^{ばんじやう}一万台の兵車、その兵を徴発することの出来る領地を有する君主、原則としては天子。封^{かう}封じる。万戸^{まんこ}一万戸。謂^いう云う述べる。深宮^{しんきゆう}宮殿の奥深く。穆々^{ぼくぼく}態度の麗しいさま、恭しいさま。左史^{さし}昔天子のそばに仕えた記録係。左史は天子の行いを記した。右史^{うし}昔天子のそばに仕えた記録係。右史は言葉^{ことば}を記した。從者^{じゆうしや}お付きの者。護^{まも}護る。護衛、守る。絡繹^{らくえき}人馬の往来が続くさま、連なり続くさま。塞路^{さいろ}路を塞ぐ。雖^{いふまでも}唯、助字解説、確定の助字、けれども、仮定の助字、たとい、としても、これ、発語も助字。窮欲^{きゆうよく}す窮まる。山阿^{さんあ}山の隅。水浜^{すいひん}水辺。縱觀^{じゆうくわん}自由に観る、存分に観る。芳^{ほう}芳しい香り。主掌^{しゅしやう}主に司る、代表支配人。大園^{だいえん}大きな庭園、植物園、農園。能^よ能く、良く。天地^{てんち}天と地。諸較^{しよかく}べ諸々と比較。孰^{しやく}いずれ。失^{うしな}う無くする。富貴^{ふうき}富貴と貴人。惑^{まど}う迷う、迷い惑う。噫^い嗚呼、感嘆詞。真^{しん}の本当の。造物^{ぞうぶつ}造物主の略、万物を創造する神。遊ぶ^{あそ}訪れる、旅、行く。与^{とも}共に。焉^{えん}いづくくぞ、なんぞ、疑問反語の意を表す、これ、ここに、これより、これに句末に用いる助字、か、や疑問反語の意を表す。乃^{だい}なんじ、それがし、すなわち、そこで、上を受けて下文を起こす助字、なんぞ、語調を整える助字。觴^{さう}杯。盃^{はい}盃。挙^あ挙げ、上げる。春日^{しゅんじつ}春の日。遅々^{ちぢ}遅いさま。兮^{けい}語調を整える助字に用いる、韻文の句末、または中間にあつて余情をそえる、感嘆を表す。樂^{たのし}まず樂しまない。芳菲^{ほうひ}芳しい蕪に似た根葉を食用にする、菲は薄い、粗末な。踏^ふむ踏む、歩く。芳草^{ほうそう}芳しい草。青々^{せいせい}青々と。子^し甲田威郷。与^{とも}共に。手携^{ていず}え手携、一緒に。

14 遊岩戸記

橘南溪。西游記載。溯玖麻川者七里。在神瀨岩戸。天下第一奇處也。余在東肥。數以問人。無有知之者。一日逢上村某。談及此。某云。吾嘗游焉。蓋有距佐敷三里餘處。真奇處矣。戊午秋。予有日隅之行。因道佐敷。遂得觀岩戸云。九月十有八日。晴。朝發佐敷。過金丸。己牌。至神白木。山路崎嶇。人跡至少。午牌。至長祖口。問津一老翁。曰。舟子即吾。刺刀渡玖麻川。々極急流。有千里一日之勢。翁操篙至巧。絕流而前。一瞬之際。刀達岸。登岸而左者數十步。得一大林。々皆楓楠。老幹輪囷離奇。鬱葱蓋天。穿林而進。碧蘚滿地。如展青氈。行者二十武。得一大石山。山上林木蔚薈。旁有瘦樹。懸焉。苔蘚被之。蒼々然。下有一大峒。是為岩戸。鍾乳下垂。纍纍然。有如乳房者。有如懸瓢者。有如蜂房者。有如懸劍者。有如垂拳者。有如伸十指者。異態萬狀。愈出愈奇。洞中安一小祠。々旁有二奇品對立。中開上合。欲合而不合。經崑間而入。洞中暗黑。中有一大穴。極深。臨穴凝睛。則十尋之底。有炯然者。蓋水也。滴露如雨。循乳石而下。落深穴中。鏗然成琴瑟聲。餘韻隱々滿洞中。如雲門咸池一時並起。余聽而樂之。坐石上者久之。取筆題名石上而出。則夕陽在山。小鳥數十。遙悲鳴于山上林木之際。余疑一足鳥也。偶逢

賽祠者。問之。果然。或曰。是鳥一足也。故以為名。或曰。否。其一短而小。有如亡。故名焉。噫。是山也。以在深山之中。僻鄉之間。其奇如此。而土人猶有不之知者。有類乎岩穴之士不得時者。記之者。傷好山而無知者也。

釈文

岩戸いわとに遊び記す

橘南きつなんの溪けいに西游せいゆうして記載きざいする。玖麻川くまがわを溯さかのぼるそれ七里にして神瀬岩戸しんせいわとが在り。天下第一の奇處なり。

余は東肥ちつひに在りて。數を以て人に問う。之れを知る者有る無し。一日上村某に逢う。此の談に及び某

は云う。吾れ嘗あそつて遊ぶ。蓋し佐敷さしきは距へだつ有り三里餘の處に真に奇處きしよなり。戊午ぼへの秋。予は日隅にちぐうに之

れ行く有り。因に佐敷さしきの道を遂に岩戸いわとを觀るを得て云う。九月十有八日。晴。朝佐敷さしきを發つ。金丸を

過りて己に牌はいは神白木に至る。山路さんろは崎嶇きくにして人跡は至りて少し。午牌じはい。長祖口に至る。津つの一老

に問う。翁ふなこ曰く。舟子ふなこは即ち吾れ。刀を刺し玖麻川くまがわを渡る。川は極て急流にして千里一日の勢が有り。

翁の操る篙こうは至りて巧せうに絶流ぜつりゅうを而て前に。一瞬の際に刀は岸に達す。岸に登り而て左にそれ數十歩。

一大林を得る。林は皆梗楠なり老幹の輪囷は離奇にして鬱葱と天を蓋う。林を穿ち而て進む。碧蘚は地に滿ちて青氈を展るが如し。行くそれ二十武。一大石山を得る。山上の林木は蔚蒼たり旁に瘦樹が有り。懸る苔蘚は之れを被る。蒼々然として下に一大峒が有り。是れ岩戸と為す。鍾乳が垂れ下り。鼎鼎然として乳房の如きそれ有り。瓢の懸る如きそれ有り。蜂房の如きそれ有り。剣の懸る如きそれ有り。垂拳の如きそれ有り。十指を伸すそれ如き有り。異態は萬状にして愈いよ出で愈いよ奇なり。洞中に一小祠を安じ。祠の旁らに二つの奇岳が有り對立して中を開け上を合す。合すを欲すも而て合はず。岳間を経て而て入る。洞中は暗黒にして。中に一大穴が有り。極めて深し。穴に臨み眼を凝す。則ち十尋の底なり炯然としてそれ有り。蓋し水なり。滴る露は雨の如し。乳石循り而て下る。深穴の中に落す。鏗然と琴瑟の聲が成り。餘韻は隱々として洞中に滿ちる。雲門咸池が一時に並び起るが如し。余は聽き而て之れを樂む。石上に坐すそれ之れ久し。筆を取りて名を石上に題し而て出る。則ち夕陽は山に在り。小鳥が數十と遙かに鳴く山上の林木の際に悲しや。余は疑う一足の鳥なり。偶たま祠竇に逢うそれ之れを問う。果然。或は曰く。是れ鳥は一足なり。故に以て名を為

す。或は曰く。否。其の一短は而て小にして亡う如き有り。故に名を噫あ。是れ山なり。深山の中に在り以て僻郷の間に其の奇は此の如し。而て土人は猶お之れを知らず者有り。岩六の土は時を得ずそれ類す有り。之れを記すそれ。山を好み而て知るそれ無く傷むなり。

語釈

遊旅する。岩戸記＝岩戸の記事。橋南＝蜜柑の採れる南。溪＝溪谷。西游＝西方に旅する。記載＝記し載せる。玖麻川＝熊本県八代港の河口より溯り市房ダムに至る。遡上＝流れの逆に上る。神瀬岩戸＝熊本県、玖麻川沿い。東肥＝東肥後。游＝旅する。佐敷＝熊本県芦北町。奇處＝珍しい、不思議な所。戊午＝安政五年、一八五八。日隅＝日向國、大隅國。牌＝名札、表札。門に功績を記した札。門。山路＝山道。崎嶇＝山路が平らでなく峻しい、山が峻しい。午牌＝牌を後にして、門を後にして。津＝港、船着き場。舟子＝船頭。篙＝竿、舟竿、舟を押し進める竿。絶流＝激流。櫂＝二レの木。楠＝楠。老幹＝年代ものの木の幹。輪困＝曲がりくねるさま。離奇＝抜けて、連なりつき珍しい不思議。鬱葱＝青々と茂るさま。蓋つ＝塞ぐ、覆い、被せる。穿ち＝あなを明ける、穿孔。碧鮮＝青い苔。青氈＝青い毛氈、青い敷物。展る＝広げる。蔚薈＝草木の茂るさま、雲の盛んに湧くさま。瘦樹＝瘦せた樹木。苔鮮＝苔。蒼々然＝青々としたさま。峒＝山の洞窟。鍾乳＝鍾乳洞。鼎鼎然＝石や岩がごろごろと重なり合つてるさま。乳房＝瓢＝瓢箪。蜂房＝蜂の巣。垂拳＝拳を垂れる。十指＝両手の指。異態＝変わったさま。異なるさま。愈＝いよいよ。奇＝珍しく、不思議な。小祠＝小さな祠。安＝安置。祠旁＝祠の傍ら。奇岳＝珍しく不思議な岳。岳＝山にある大きな岩、岩。嶺＝對立＝對に立つ、向かい合つて立つ。岳間＝岩の間。經＝経る、経て。洞中＝洞の中。暗黒＝真つ暗。十尋＝十尋。尋は約七尺。炯然＝光の明かなさま、くつきりとしている。蓋＝思つに。乳石＝鍾乳石。循り＝巡り。鏗然＝鐘をつく音、かかんとした音。琴瑟＝琴と大琴。静か。餘韻＝鐘などをついたときに、後に残る響き。隱々＝憂えるさま。

傷むさま、幽かではつきりしないさま、寂しいさま。夕陽せきやう〓夕陽ゆつひ、夕日くさく。偶ぐう〓偶然しざい。祠し〓お祭りまつりで、参詣人さんぎにん、参拝者さんぱいしや。果然かせん〓果たして。深山しんさん〓深山、
 深い山。雲門うんもん〓黄帝わうていのとき作られたという音楽の名。咸池かんち〓神話で、太陽が水浴するという天上の池、黄帝が作った音楽の名。僻郷へききやう〓僻村へきむら、僻地へきち。岩穴がんけつ、
 岩穴がんけつ。好山こうざん〓山を好む良い山。傷むいたむ〓哀しむ、悲しむ。類るい〓たぐい、同類。

戊午冬某日南子游延岡逆旅主人有米顛癖出一奇石示余曰此石似行滕瀑布吾邑勝景行滕為最瀑布高數十尋廣數十丈而純石為山々頂有一金松託根巖間老幹挺然而上者三尺許忽然而折々而屈々而曲枝之所走根之所迸如龍如虬蜿蜒交錯鬱然蓋大盤石々平坦如砥莓苔生焉上下一碧蒼然絕塵真奇絕也然路嶮不易登欲登之者非攀龍角躡馬鬣不能不幸失足則陷不測長為谷底之鬼僕之游行滕也獲此石於溪間携而歸朝夕摩挲者年所手沢着石自然生潤沢矣余受而觀之石大如拳密質赭色皺成折帶宛乎倪迂筆法矣余平生愛画山水最喜雲林及目此石恍乎神往蠟屐已決矣其夜原子齎酒肉來訪余於旅館酒間談及行滕原子曰僻鄉蚩有佳景不歷名士品題焉得而顯哉吾子幸為吾一游而記之予唯々其翌早起顧瓶酒猶余矣乃盛于瓢掛于枝飄然出旅館則天已明矣午時至高埭遙見一山露頂於烟嵐中不問而知其為行滕也未得達其麓青松紫楓老檜枯木交加錯雜密々成林々下多小蹊由一蹊而進里許蹊漸小落葉埋蹊々殆不可弁余以為誤路矣直出林而去又得一蹊而進蹊亦漸小余以為亦誤矣乃脫行李而憩石上忽聞伐木之響丁々出幽谷余以為且行問樵夫耳乃尋斤声而去

行里許果得樵夫曰第行無有岐路又行里許林忽然而絕山屹然而立瀑布淙然而下々有一巨石坦然而橫高一丈長可三丈可座而游余上而座々而仰則瀑布自天來触石角碎而散成千百珠玑又合為一條而下瀑左右有危岳老樹蒼然而懸焉瀑之上有瘦而如苔竄然而立者熟視之古松之雜枯木也天風時過紛雨天華異而視之乃松釵之落也好景幽趣一々可掬余於是悠然而頽飄陶然而樂之已而夕陽西頽林鳥啾然而鳴溪颿颿然而悲使人蕭然而髮之暗然而魂消也乃出谷而去只恨短景促人不得目所謂金松者也夫柳之山得子厚而顯矣惜乎有若景而無若筆也雖然使予頽然而醉陶然而樂者原子之酒与山也豈可無記焉乎安政五年戊午某月日記

釈文

行滕こいつに遊び記すあそ

戊午ぼしの冬の某日ぼうじつ南子延岡なんしのへおかに遊ぶあそ、旅館主人は米顛癪べいてんへき（山水の凝り性）有り、一奇石いちきせきを余に示し曰う、此の石は行滕こいつの瀑布ばふ、吾が邑むらの勝景しょうけいとして最たるを為す、高さ数十尋ひろで廣さ数十丈なり、純石じゆんせきは山を為す山頂さんちようには一金松いちきんしょうの、根を巖間がんかんに託たくし、老幹ろうかんは挺然ていぜん（長い枝先）として上は三尺許り、忽然こつぜんと折れ折れて

いるところは屈り屈つて曲つた枝の所、龍の如く虬の如し、蜿蜒（蛇などがうねり動くさま）と交錯（入り乱れて）鬱然としている、大盤石の石、石は平坦砥の如く莓苔（苔の類）生て、上下一碧蒼然絶塵真に奇なりこと絶なり、然れど路嶮しく登らんとするならば、龍の角に馬の鬣を躡んで攀じるようなものであるう、足を失なわなければ幸いである、則ち不測に陥ちては長えに谷底の鬼の僕に為す、これ行滕に遊びなり、此の石を獲りて溪間より携えて帰り、朝夕に摩挲（手で撫でる）して年所手沢着き石は、自然に潤沢を生ずる。

余は受けて之れを観る石の大きさは拳の如く、密質赭色で皺は折帯を成し宛ら、倪の迂り筆法が、余は平生は画を愛す山水最喜の雲林、目に及びこの石恍とりとして、神は已に獵屐（採りに往くこと）を決める。

其の夜原子酒肉を齎して来訪する、余は旅館に於て酒間談りて行滕に及ぶ、原子は曰つ僻郷佳景有ると雖も、名士品題に歴せず、顕らかに得られるかな、吾と子は幸にも一游を為す、之れを記す唯々（はいはいと）其の翌早起し、瓶酒を顧みれば猶お余りあり、瓢に盛り瓢を枝に掛けて、飄然と旅館

を出る天は己に明るく午時高桎に至る、遙か見る一山露頂烟嵐（山露、霧）の中、問はずして其れを知る
は行滕なり、未だ達せず其の麓、青松紫楓老い檜の枯木交錯（入り乱れる）し雑を加える、密々（細かいさ
ま）と林を成し林の下に多少の蹊一蹊より進むこと一里許り、蹊は漸く小さくなり落葉蹊を埋め殆ど辨
からず、余は路を誤り直ちに林を出て去り又た、一蹊を得て進むと漸く小さく、余は亦た誤りを為
す、行李（荷物）を脱して石上に憩う、忽聞く伐木の響丁々（木を切る音）たり、余は幽谷を出て行き、樵夫
（樵）に問う、斤声を尋ねて去り行くこと一里許り、果せるかな樵夫の曰う、岐路有りて又行くこと一
里許り、林は忽然と山を絶して屹然（高く峙つ）、瀑布立ちて淙然（水が流れるさま）と下る、下に一巨石有り坦然、
高さ一丈可り長さ三丈可りに横たわる座るべし余はその上に座して遊び、座して仰ぐ、瀑布は天より
来りて石に触れ角を砕き散じて、千百珠玑（丸い玉と角ばった玉）又合す左右に下瀑一條為し、危岳老樹蒼然
として懸り、瀑の上に瘦て有り苔は矗然（高く聳える）が如く立つ、熟視すればこれ古松の枯木雜る、天風
時に過ぎて紛雨天華異なり、之れを視てば松釵（松葉が釵のようだから）の落るなるの、好景幽趣を一つ一
つ掬む可し（手で掬う）、余は是れ悠然と飄を傾けて陶然として、これを楽しむ己にして夕陽西に頽むき、

林鳥多く嗽然として鳴き、溪は颯が颯然（盛んに）として人を使って悲しくさせ蕭然（物寂しく）と、髪立ちて暗然（暗くなり心が塞ぐ）と魂が消えるようである、乃ち谷を出て去る、只だ恨むは景色人を促して得ず、目する所謂（い）に金松は、抑も山なり原子頭（あきらか）に得る、惜むらくは若き景有りて若き若き筆無くは然りと雖も、頽然（たいぜん）（酔うてくずれするさま）として陶然（とうぜん）（うっとり）と酔うに酔て樂しむは原子の酒と山なり、豈記す可き無し。

安政五年戊午某月日記す

語釈

行藤記＝行藤の山に記す。行藤山＝宮崎県延岡市郊外の山、標高八三二米。戊午＝安政五年、一八五八。某日＝ある日。南子＝南部五竹。延岡＝日向。逆に＝反対に。逆行。遊ぶ＝訪れる旅、行く。旅主人＝旅館の主人。米顛の癖＝山水を愛す心が氣狂いじみた凝り性の癖。一奇石＝一つの珍しく不思議な石。曰く＝云う、述べる。行藤＝山名、行藤は、むかばき、脚絆のこと。吾邑＝自分の村、里。勝景＝景勝。瀑布＝滝。尋＝長さや高さを測る単位、周代は八尺、日本では六尺。純石＝全部が石。山頂＝頂上。一金松＝松。巖間＝岩の間。託し＝預け託す。老幹＝老いた大木の幹。挺然＝突き出るさま。忽然＝忽ち、突然、急に。折々＝折れるさま。屈々＝曲がるさま。進る＝走る、勢い良く流れる、避け逃れる。龍＝龍。竜。虬＝水竜。蜿蜒＝うねうねと曲折してささま、うねうねと曲折したり動くさま。交錯＝入り乱れる。鬱然＝鬱蒼と茂るさま。蓋＝おもつに、不確かなことを推定する助字、これ、助字解説、なつmぞ、反語の助字。大盤石＝大きな一枚岩。平坦＝平らな。砥＝砥石。莓苔＝苔。焉＝いずくんぞ、なんで、

疑問反語の意を表す、これ、ここに、これより、これ句末に用いる助字、か、や疑問反語の意を表す。一碧＝蒼い、青い。蒼然＝蒼いさま。絶塵＝塵を断つ、世俗を断つ。真に＝本当に。奇絶＝珍しく不思議な。攀＝よじ登る、登攀。龍角＝龍の角。躡＝踏む。馬鬣＝馬の鬣。陷ち＝陥落、墜ちる。測れず＝測れない。鬼僕＝鬼の使い、死に神。獲る＝捕獲、獲る。溪間＝谷の間。携え＝携える、持つ。摩挲＝手で撫でる。年所＝年を経て。手沢＝手による光沢。潤沢＝光沢が潤い。密質＝密實な性質。赭色＝赤い色。皺成＝皺に成り。折帯＝折った帯のように。宛も＝丁度。倪倅＝ややかよわく。筆法＝筆使い、書法、流儀。平生＝普段、日常。山水画＝山と水の景色、風景の絵。雲林＝雲と林、雲の中の林。恍乎＝恍惚、ウットリと。往く＝行く、往く。蠅屐＝履き物。已に＝既に。酒肉＝酒や肉。齋し＝持参、もたらす、与える、渡す、贈る、餞別。來訪＝訪ねて来る。酒間＝酒の間。談＝談話。原子＝人名。曰く＝云う、述べる。僻郷＝田舎、辺鄙な、山の中。蚩う＝笑う。佳景＝佳い景色。名士＝才徳の優れた人、有名な人。品題＝物の題。歴さず＝順序立てない、経ない。顕れ＝現れる、顕れる。吾＝我、五竹。子＝一游＝訪れる、旅、往く。瓶＝酒瓶。顧る＝思う、反省する。乃＝なんぞ、それがし、すなわち、そこで、上を受けて下文を起こす助字、なんぞ、語調を整える助字。于＝ここに、これ発字の助字、文首文中の用いる助字、に補語場所を示す、を、補語を示す、と、接続を示す、より、から比較場所を示す、おいて、か、かま文末にあつて疑問感嘆を示す。飄＝飄筆で作り酒や水を入れる容器。飄然＝風に吹かれるように、ふらりと。午時＝昼時。高埜＝地名。麓＝山の裾、麓。頂＝頂上。露れ＝露出。烟る＝煙る。嵐＝強風。紫楓＝紫の楓。老檜＝老いた檜。枯木＝枯れ木。交錯＝入り乱れる。密々＝密林、ぎつしりと繁茂。成林＝林と成る。小蹊＝小道。由＝徑由。漸く＝やつと。一蹊＝一つの小道。里許＝里の所。落葉＝落ち葉。蹊々＝小道が多く。弁る＝見分ける。誤り＝間違ひ。憩う＝休む憩。伐木＝木を伐る。響＝音響、音と響き。丁々＝木を伐る音、碁を打つ音、琴を奏でる音、鳥の鳴き声、その他色々な音の形容。幽谷＝幽かな谷。樵夫＝樵の人。乃＝なんじ、それがし、すなわち、そこで上を受けて下文を起こす助字、なんぞ語調を整える助字。尋る＝聞く、訪れる。斤声＝斧の音。曰く＝云う述べる。岐路＝分かれ道。忽然＝忽ち、突然、急に。屹立＝屹立、きつとして立つさま。瀑布＝滝。淙然＝水の流れるさま、また、その音。一巨石＝一つの巨大な石。坦然＝平坦なさま、平らなさま。自＝自から。瀑＝激しい雨、滝。水しぶきを上げるさま、水が湧き立つさま、瀑流、飛泉、懸瀑、飛

瀑 落瀑 左右 左と右。危岳 危険な巖、峻しい岩。老樹 老いた樹木。懸る 架かる、懸かる。瘦る 痩せる、細くなる。凜然 潤すさま、ゆうは
 文包み、文袋、書物を入れる袋、衣服に移り香がする、潤す。珠玑 丸くない珠玉、星の名、北斗七星の第三星。蒼然 青々としたさま。一條 一筋。
 熟視 良く見る、目を凝らし見る。古松 古木の松。雜 雜然、諸々の。枯木 枯れた木。天風 天の風。紛れ 乱れる、入り乱れる、もつれる。天華
 雪の別名、天下の妙花。異る 違つ。松釵 松葉。釵は簪、松葉は簪に似ているから。好景 好ましい光景景色、佳い景色。幽趣 幽かな趣。一々
 一つ一つ。掬む 掬う、推量。悠然 ゆつたりとしたさま。頗 長く、長い。飄陶 飄々と陶然、ふわふわと風に舞い上がりそうに酔ったさま。樂
 娛樂 楽しみ。己に 既に。既に 既に。夕陽 夕日。啾然 鳴く、鳥や虫などの悲しげな鳴く声、口ずさむ。溪 谷。飄飄然 旋風がさつと吹くさま。蕭然
 寂しそつなさま。暗然 暗いさま。魂消る 驚く。短景 良くない景色、足りない景色。恨む 怨む、恨む。促し 促進、催促。謂つ 云う述べる。
 金松 金色の松。子厚 人名。顯る 顯れる。惜む 惜しい。若景 足りない景色。若筆 足りない筆、未熟な筆。雖 唯。然り 其の通り、さ
 よつ。頽然 崩れるさま、酔って倒れるさま。陶然 酔ったさま。原子 人名。与 共に。豈 あに、どうして。焉 いずくんぞ、なんぞ。乎 よ、
 や呼びかけの言葉か、な感嘆を表す、ああ、か、や、ぎもん、反語を表す形容詞につけて強く状態を表す、にを、より、場所、時間、目的比較を表す。
 戊午 安政五年、一八五八。

24 米良紀行

戊午冬。南子將游米良。以某月日。宿玖麻客舍。問主人以米良行程。主人曰。米良道路嶮惡。且五穀不生。土人只食稊稗甘藷之類。屋亦矮小。無家可宿。距此七十里。有稻荷祠。司祠者。家差寬廣。游米良者。多就而宿焉。余以路險而晷短。非早行不能。其夜戒糧。以夜半發湯前。時月色晴朗。霜氣逼人。行里許。有一溪。入溪里許。得又路。偶見樹下有一木表。白而書曰。右走米良。墨痕猶新。林下暗黑。然髣髴辨字。自此溪路至小。行十數步。有高山。既踰之。則又有二山。相對而立。滿山生樹。路在山腹。其小纔通一人。落葉沒鞋。其深可三尺。移步漱々有聲。宿鳥為之驚起。路左右。古木槎枿。偶見巨蟒橫於前。駭而駐杖熟視之。老樹影也。行樹間二里許。行聞遙籟度谷底。蓋溪水聲也。及樹絕。而路稍大。里許。路又小矣。而羊腸達谷底。下者半。遙聞鷄聲。覺人家不遠。既達谷底。有兩三破屋。寒燈漏壁。耿耿如星。足音蹻然響谷。村厖吠月不已。沿流而下者二里許。思睡。因脫行李。臥月。鄉夢纔結。寒風一陣。忽然夢斷。則月未沈。霜氣滿衣。皎然如雪。身在米良幽谷深山中矣。因謂。此游非不得已者。單身深夜。落萬里之外荒山之間。忽然而斃。則家人悲痛如何哉。為之慘然者久之。又行一里許。天明矣。大霧罩山。

午前漸霽。山無平地。人家多剝平山復而住之。既而得山溪稍闊處。有人家數十。茅屋蕭然。又行里許。路又嶮。溪水自兩山間瀉。急流如箭。觸石而吼。崖石皆成長斧劈斲法。溪路或沿亂石而過崖下。或蹈巖頭而行山復。山石崩頽處。橫木於巖角。以通路。木已半朽。或生耳。或生苔。蹈之鬆然脆。木片碎而散。飄々遙入溪水中。恐其折而墮。進步為遲。路旁有異卉奇艸。見朱實纍々。垂於枯枝。有翠鳥。恰々止于危巖。好山怪石。應接不遑。目有山。又恐失足陷不測。目在足。又恐失好山。既而路絕。攀巖角。蹈亂石而過。忽逢一危巖露頭角於峭壁巖然斜出其上。有丹楓黃葉。錯松檜中。溪風偶起。楓葉片々。散落溪水中。奔湍翻錦。疑是桃花片。自洞口流出。覺仙鄉不遠。山少平地。焚草弁。種菜簞於木根岩間。採菜服者。多抱樹身。捆巖角而下。人家極少。十山一家。百溪十室。終日行幽谷中。逢人甚少。酉時達稻荷祠。乞宿。炊飯。羹菜。煮山榘供之。其翌早起。辭祠而去。自此至佐土原。路稍不嶮。只行幽谷森林中。嗚乎。寂寞幽谷。蕭條深山。彼有何娛樂而安此土耶。豈以生乎寂死乎寞。不知寂之為寂寞之為寞。不知惡衣食之為惡衣食耶。然視彼蠹々起。蚩々寐。不知道德仁義為何物。則太古之民亦不過如此。抑亦快活矣。吾嘗讀老子怪其言之過激。今而吾知其有為而發矣。

釈文

米良紀行

戊午の冬南子（南部裕）は將に米良に游ばんとす。某月日を以て玖麻客舎に宿りて、主人に米良の行程を問う主人曰う、米良の行程は道路嶮惡にして、且つ五穀は生えず、土人只稗稗（大稗と草稗、つまらぬ穀物）甘藷の類を食し、屋は亦矮小（粗末で極く小さい）にして宿る可き家は無しなり。ここより距てること七十里稻荷祠有り。祠を司る家はやや寛ぐには廣く、米良に遊ぶには多く宿に成す。余は以て路は険しくとも晷あしが短く、早ぐに非ず能はずに行く、其の夜糧（弁当、携帯食糧）を戒て、夜半湯前を發つ。時に月色は晴朗なるも霜氣人に逼り、行くこと一里ばかり一溪有り。溪に入りいち里ばかり又路を得る。偶ま樹下に一木標有るを見る、白くして書は右米良に走く、墨痕猶お新しく林下暗黒然として髣髴（ぼんやり）にして字を辨（判読する）ける。これより溪路は至つて小くなり、行くこと十數歩に高い山有り。既に之を踰えると又二つの山有り。相對して立つている、満山樹を生じ路は山腹に在るも、甚だ小さく纔に一人通れる。落葉鞋に没す其の深さ三尺ばかり。歩を移して行けば漱々聲有り、

宿鳥の驚き起きたる。路は左右み古木榎材（細く突き出ている）。偶ま巨蟒（大蛇）前において横たわるを見る。駭き杖を駐め之れを熟視（充分に注意して良く見る）老樹の影なり。二里ばかり樹間を行く、行くこと谷底を度り遙か籟（魚）が聞える。それは溪水の聲なり。樹は絶し路は稍や大きくなるも、一里ばかりで路は又小さくなり、羊腸（曲がりくねって）谷底に達す。下る半ば遙に鶏の聲を聞える、人家遠からずを覺えるも既に谷底に達す。二三軒の破屋有り。寒燈（寂しげな燈火）壁に漏れ耿耿（明るく）星の如く、足音蹙然（足音のするまま）谷に響く。村の吠が月に脛える己は流に沿つて下ること二里ばかり、睡りたく因つて行李を脱ぎ、月に臥し郷夢纔かに結ぶも、寒風一陣忽然夢を斷つ。月は未だ沈まず霜氣衣を滿つ。皎然雪の如く、身は米良の幽谷深山の中に在り、因つて謂う。此の遊び己に得せず非らず。單身深夜萬里の外に落ち荒山の間に、忽然斃れたならば家人の悲痛いばかりかと、慘然として久しく又行くこと一里ばかり。天明け大霧山に罩める、午前漸く霽れても山には平地無く、人家多くは山を削りて平かにして住む。山溪稍や闊く處を得て、人家數十軒有り。茅屋（茅葺きの粗末な家）蕭然（物寂しい）又行くこと一里ばかり、路は又嶮しく、溪水は兩山の間から瀉ぎ、急流は箭の如く、石に觸れて吼える、崖石

皆長い斧の劈皴へきしゆん（ひび割れて裂けたような）法きまりを成す。溪路けいろの亂石らんせきに沿つて崖下がいがを過ぎり、或は巖頭がんとうを蹈ふんで山腹ほうたいに行き、山石崩ほうたひ（崩れた）の處木は、巖角がんかくに横たわりて路に通じ、木は半ば朽ちて或は茸生じ或は苔を生じている。之を蹈ふんで鬆然しやうぜん（髪を乱し）を脆くじけやすく木片は碎けて散じ、飄々ひようひよう遙か溪水中けいすいに入り、其の半ば朽ちた木は折れて、墮おちるを恐れて進む歩は遅くなる。路旁ろほうには異弁奇艸いへんきそう有り。朱實しゆじつ纍々いらいを見る枯枝に垂れて翠鳥じりり有り。恰々きがん（鳴き声のさま）危巖きがんに止る。好山怪石應まさに接して遑いとまなし。目は山有り又足を失いて、不測おに陥おちるを恐れて目は足に在り。又好山を失うを恐れる。既に路は絶し巖角がんかくに攀よじりて、亂石らんせきを蹈ふんで過ぎる。忽ち一危巖きがんの頭角とうかくより峭壁しやうへき（切り立った険しい崖）が巖然ぎぜん（一際高いさま）斜しやめに露あわれる。其の上で出逢う、丹楓黄葉たんふうひやう有り松檜しょうかいの中に錯まちわる。溪風偶けいふうたまま起り楓葉ふうよう片々へんへん落ち溪水の中けいふつに散る。奔湍錦ほんたんを翻ひるがえして、疑うは是れ桃花片々とうかへんへんかと洞口くうくうより流出りゅうしゅつす。仙郷せんきやう遠からずを覺える。山は平地少まれにして草莽そうへんを焚たいて、菜簍さいぶく（大根、すずしろ）は木の根や岩の間に種うえて、菜簍さいぶくを採るの多くは樹身がんかくを抱く、巖角がんかくの下で搥つかみとる。人家は極めて少なく十山一家百溪十室で終日幽谷しゅうこくの中しゅうを行く。人に逢うこと甚だ少まれにして、酉時ゆうじ（午後六時頃）稻荷祠いなりじに達する。宿乞やどこい飯を炊き菜を羹あつもの（汁）にしてこれ

に山椒を供えて煮る。其の翌日早く起きて祠辭して去る。これより佐土原に至る。路は稍や嶮しか
らず、只幽谷森林の中を行く。嗚乎。寂寞（寂しく閑かな）幽谷 蕭條（物寂しい）深山において彼（村人）何の
娛樂有りや此の土耶（耶は感嘆の意を表す助字）に安んずるは以てああ寂しく死すあ寞しくはないだろうか、寂
これ寂を為し寞を為すを知らず。悪衣食は之れ悪衣食を為すを知らずや、然り彼 蠹々（虫が蠹くような）
と起ちて視る。蚩々（愚かなさまと嗤い）と寐り。道德仁義を知らず何物を為す。則ち太古の民亦此の如く
に過ぎず。抑も亦快活な吾嘗て老子を讀み其の言の過激を怪む。今にして吾れ其の有するを知りそ
してこの地を發つなり。

語釈 米良紀行 米良に旅した紀行文。米良 米良の庄、山間部の僻地、宮崎県西米良村。戊午 安政五年一八五八。南子 南部五竹。游 旅する。
玖麻 熊本県に有る川。客舎 旅館。米良 地名。行程 行動の予定。嶮惡 嶮しく悪い。五穀 國、米、麦、粟、稗、豆。稗稗 犬稗と木賊稗、つ
まらぬ穀物、転じてつまらぬ物のたて。甘諸 サツマイモ。矮小 小さい、短小。稻荷祠 稻荷の祠。七十里 周里は一里六丁、日本里は一里三十六
丁、約四十七キロ。司祠者 祠を司る者、神官。寬廣 広くゆつたり。路險 道が険しい。晷短 日の光が短い。糧 食糧、弁当。戒 用心して備え
る、戒める。夜半 夜中。月色 月の光。晴朗 晴れ渡つて。霜氣 霜の寒気。逼 迫る。偶 偶然。樹下 樹木の下。墨痕 書いた墨の痕。猶新 猶新
しい。髣髴 さながら、良く似たさまほのか、はっきりしないさま。辨ず 弁える、判る。溪路 谷沿いの道。踰 越える。纔 わずか、少し。鞋 草

鞋 漱々＝漱く、洗う、口を漱ぐ、うがいをする。 榱材＝細かく角張って突き出るさま。 巨蟒＝大きな蟒蛇。 駭＝驚く。 駐＝止める。 熟＝熟視。 籟
 松籟、風の音。 蓋＝思うに、なんぞ。 溪水＝谷の水。 稍＝稍。 羊腸＝羊の腸のように長く曲がりくねる。 兩三＝二つか三つ。 破屋＝屋。 寒燈＝寒々
 とした灯火。 耿然＝あきらか、明る、光る。 窅然＝足音、恐々とそとあるさま。 厖＝大きい、豊か、厚い。 吠＝吼える、犬が泣く。 行李＝柳や
 竹で編んだ荷物をいれる物。 臥＝横臥、寝る。 纒＝僅か、少し。 忽然＝突然、急に。 皎然＝白い、真つ白なさま。 幽谷＝幽かな谷。 深山＝深い山。 單身
 一人。 深夜＝夜遅く。 萬里＝一万里、とても遠い。 荒山＝荒々しい峻しい山。 斃＝倒れて死ぬ。 悲痛＝痛い悲しみ、非常な悲しみ。 如何＝どうして。
 惨然＝惨めなさま。 天明＝月明かり、月光。 罩＝覆う、籠、魚を捕る竹の籠。 霽＝晴れ。 山溪＝山奥の谷。 闕處＝開けた所。 茅屋＝茅葺きの家。 蕭然
 ひっそりと寂しいさま。 瀉＝水を注ぐ、流す、吐く、掛ける。 剉＝削る、刈る、平らにする。 吼＝咆哮、吼える。 崖石＝崖の石。 長斧＝長い斧。 劈＝
 裂く、引き裂く、分ける。 皴＝皴、皴。 法＝傾斜の角度、方法。 亂石＝散らばった石。 崖下＝崖の下。 箭＝矢竹、矢がら、篠竹、矢。 巖頭＝岩
 の頂。 崩頹＝崩れ剥げ落ちる。 耳生え＝茸生え。 巖角＝岩の角。 鬆然＝髪が乱れるさま、明らか、荒い、緻密でない。 脆＝脆い、弱い。 飄々＝ひら
 ひらと風に吹かれ舞上がるさま。 墜＝落ちる。 路旁＝道ばた。 異弁＝変わった花弁。 奇艸＝珍しく変わった草。 朱實＝朱の実。 蕤々＝葛、蔓草、まことわ
 りつく。 恰々＝鳥の鳴くさま。 危巖＝危ない巖。 應接＝應對。 逆＝慌ただし、忙しい。 陷＝陷落、落ちる。 攀＝よじ登る。 頭角＝頭が他より出て居る。
 峭壁＝峻しく屹立した壁。 巖然＝山が一際高いさま、一際優れて居るさま。 斜＝ななめ。 丹楓＝丹色の楓、紅葉した楓。 黃葉＝黄色の葉。 松檜＝松と
 檜。 錯＝錯誤、混じる、交える、メッキ。 溪風＝谷の風。 楓葉＝楓の葉。 翠鳥＝緑の鳥。 片々＝ひらひらと。 落溪＝谷に落ちる。 奔＝迸る、流れる、
 奔流。 湍＝早瀬、たぎる、渦巻く、水が激しく流れる。 翻＝ひらひらと翻り。 桃花片＝桃の花びら。 洞口＝洞穴の入り口。 流出＝流れ出る。 仙郷
 仙人の郷。 草弁＝草や花弁。 焚き＝燃やす、焚き火。 菜蔬＝菜に大根。 捆＝捆む。 終日＝一日中。 幽谷＝幽かな谷。 西時＝今の午後六時頃。 宿乞
 い＝宿を頼む。 菜羹＝菜を煮る。 祠辭＝祠を辞去。 佐土原＝地名宮崎県。 寂寞＝寂しく静かなさま。 蕭條＝物寂しいさま。 深山＝深い山。 娛樂＝
 喜び楽しむ、楽しみ。 豈＝願つ、どうして。 寂＝寂しい。 死生＝死と生。 冥＝静か。 蠢々＝蠢く、虫がごそごそと動くさま。 蚩々＝嗤つ。 寐＝寝る、

眠る。道德^{たいてく}＝人のふみ行すべき正しい道、老子の説いた道と徳。仁義^{じんぎ}＝仁、親愛の心と義、道理に適うこと、道德の総称。太古^{たいこ}＝大昔。抑^{よく}＝抑も、抑留、
抑える。快活^{かいかつ}＝楽しみ、楽しい、快樂、さっぱりとした性質で元気の良いこと。嘗て^{かつ}＝以前に。老子^{らうし}＝周代の人、姓は李、名は耳字は伯陽、道家の祖と
される。過激^{かげき}＝激しすぎる。

山氣日夕佳是五柳先生之詩也蓋采菊東籬之際悠然而仰即夕陽晚入紫氣一抹氤氳乎南山之面於是乎有適乎先生之心而作矣何處無山何日無夕唯靜者能知靜中趣噪進盲動者雖易三世焉得而言之哉先生不競榮利不樂紛華退而居于環堵之中中淡知泊如言詠自娛以全晚節千載之下想見其為人如光風霽月此詩雖出乎偶然而天真發露恰稱其為人予故嘗曰是先生自道也丹邱藤楷甫取於其詩以名其樓曰夕佳屬記於予予与楷甫相識于千里外羈旅之中則其樓未得登也未登而記之豈不亦難乎雖然先是余游西肥逍遙乎丹邱野略知其地勢丹邱之為地左右皆山也其山清秀而其地幽靜雖未知与潯陽之山孰佳然於幽人高士肥遯棲遲之地為宜想楷甫日之夕觀易已終開樓窗詠先生之詩則山色浮動落幽窗間於是乎先生之心有適乎楷甫之心矣因取其詩以名焉或曰其詩之佳有適乎楷甫之心故名焉或曰其景之佳有適乎楷甫之心故名焉嗚呼是真知楷甫者乎哉余雖未登其樓而知其意不專在其景之与詩也是以不辭而為記楷甫名模沈靜好讀書不喜喋々殉世者其志蓋在晚成云

釈文

夕佳樓記
せきからうき

山氣日夕に佳し是れ五柳先生「陶淵明」の詩なり、菊を采る東籬の際悠然として、夕陽を仰ぐ日はうすら
さんきにちせき よ こりゆうせんせい
ぎ晩に入りて紫氣一株の氤氲（氣の和らぐ）南山の面これ先生の心に適う作なり。
くれ しき いっしゅう きんた

何処にも山無く何れにも夕無く唯だ静かに能く静中の趣を知る、噪進（忙しく進む）盲動（無闇な行動）三世
えいり きそ ふんか そつしん
易きと雖も焉くんぞ得て言う之れ、先生の榮利競はず紛華を退いて樂します、環堵（小さな狭い家）の中に
いす
居いて淡泊を知り言詠自から娛しむが如し、以て晩節は千載の下想い見る、其の人の為す光風霽月の
すま たの ばんせつ せんざい おも こうふうせいげつ
如し此の詩の出ずること、偶然と雖も天真發露恰も其の人の為すを称す、予は故に嘗みに曰う是れ
くうぜん てんしん はつろ あたか じゆん
先生の自からの道なり、丹邱藤楷（仙人の棲む処藤で作った階段）用取し其の詩以て名し其の樓に曰う日夕佳
たんきゅうとうかい
し属して記す、まえもつて楷甫と与えて相識るす。
かいほ あいし

ここに千里の外羈旅（旅の）の中則ち其の樓に未だ登るを得ず、未だ登らずして之れを記す豈亦た難し
せんり きりよ らうつ
からずらずや、然ると雖も先ず是れ余が西肥に遊び逍遙（のびのびして満足）、丹邱の野路略其の地勢を知
せいひ あそ しやうよう たんきゅう ほぼ ちせい

り丹邱たんきゅうの地さゆう左右を為す皆これ山なり、其の山の清きに秀いでて其の地は幽静ゆうせい（奥ゆかしくひっそりとしている）、未だ知らずと雖も与ともに潯陽しんよう（五柳先生の土地）の山はいずれも佳く然るに人里離れて静かに暮らしている人や人格が高潔な人々が心にゆとりをもつて俗世間を逃れて気楽な生活をしちるところ（肥遯棲遲ひとんせいぢ）、冥想を為し楷甫かいほの日に是れ夕陽觀易くして終わる。棲窗を開きて詠む先生の詩則ち山色浮動幽窗の間に落つ是れ、先生の心に適う楷甫かいほの心かな、因つて其の詩を取りて以て名し、或は其の詩は誰が適うや、楷甫かいほの心故に名して、嗚呼ああ、是れ其の楷甫を知る楷甫かな、余は其の楼には未だ登らずと雖も、其の意専らにせずとも知る、其の景と詩と是れ以て辞せずこの記を為す、楷甫かいほの名を模し沈靜讀書を好み、喋々ちやちや（口数多く喋る）世に徇るを喜ばず其の志しは晩成に在り。

へ考察や五柳先生こと陶淵明の心境こそ自分の求めようとする人生ではないかと、また五柳先生こそ現実の仙人ではないだろうかと、仙人の住む家は藤で作った楷きがあると云う伝説から想い重ねて、この人こそ現実の仙人の始まりと云う意で「楷甫かいほ」と敢えて識して表現したものと考察される。

〔参考〕

五柳先生「飲酒」二十首の中の五首

結廬在人境

いおり
廬を結んで人境に在り

而無車馬喧

しか
而も車馬の喧しき無し

問君何能爾

よ
君に問う何んぞ能く爾と

心遠地自偏

おのず
心遠く地自から偏なり

採菊東籬下

と
菊を採る東籬の下

悠然見南山

ゆうぜん
悠然として南山を見る

山氣日夕佳

さんき
山氣日夕に佳し

飛鳥相与還

飛鳥 相与に還る

此中有真意

しんい
此の中に真意有り

欲辨已忘言

べん
辨ぜんと欲して已に言を忘れる

(解説)

人里に廬いおりを構えているが、役人どもの車馬の音に煩わされることわれない。(どうしてそんなことがあり得たのだ)とお尋ねか。なあに、心が世俗から遠く離れているため、ここも自然と僻地の地に変わってしまうのだ。東側の垣根のもとに咲いている菊の花を手折りつつ、ゆつたりとした気持ちで、ふと頭をもたげると、南方遙かに廬山のゆつたりとした姿が目に入る。山のたたずまいは夕方が特別素晴らしく、鳥たちが連れ立って山のねぐらに帰って行く。

この自然の中にこそ、人間のありうべき真の姿があるように想われる。しかし、それを説明しようとしたとたん、言葉などもう忘れてしまった。

語釈

夕佳楼記ゆうかろうき＝楼の記事。山氣さんき＝山の空気、山の気配。日夕にせき＝日に夕に。佳かい＝佳、佳い、良い。五柳先生ごりゅうせんせい＝陶淵明、家の門前に五本の柳を植えて五柳先生と自称した。蓋はて＝思つに、不確かなことを推定する助字、これ、助字解説、なんぞ、はんこの助字。采さいす＝採る、栽培。東籬とうし＝東側の生け垣、竹を組んで巡らした垣根。際あわ＝脇、側。悠然ゆうぜん＝ゆつたりと落ち着いたさま、長閑なさま、陶潜、飲酒詩、采菊東籬下、悠然見南山。夕陽せきやう＝夕陽、夕日。晚えん＝暗い。紫氣しき＝暗い気。一抹いちまつ＝筆の一刷毛、一なすり、一寸、僅か、多少、弦楽器を演奏するとき、一度弦を押さえて抑揚をつける。氤氲いんうん＝気

の盛んなさま、気の和らぐさま、声の調子が良いさま。南山＝終南山の略、藁嶺。乎＝よ、や、呼びかけの言葉、かな、かな感嘆を表す。面＝面す。
 盲動＝考えもなく行動する。噪＝早い、慌ただし、急ぐ、騒ぐ、喧噪、噪る。趣＝さま、風情、味わい、急いで行く、向かう。雖＝唯、助字解説、
 確定の助字、けれども、仮定の助字、たとい、としても、これ、発語の助字。焉＝いづくんぞ、なんぞ疑問反語の意を表す、これ、ここに、これより、
 これにくまに用いる助字、か、や、疑問反語の意を表す。采利＝繁栄と利益、采達と名利。競はず＝競争しない。紛華＝派手で華やか、賑やか、繁華。
 環堵＝垣根を廻す、家の周りを垣根で塞ぐ、遮る。淡中＝淡い中。自娛＝自ら楽しむ。晩節＝晩年、晩年の節操、末世、末年、時代の終わりのころ。千載
 「千年。想い＝思い、想い。光風＝光景と風景。霽月＝晴れた月。偶然＝偶々、丁度。天真＝自然のままで飾り気のないさま。発露＝現れる、現す、現
 れ。恰も＝丁度、ぴったり。嘗て＝以前、前に。曰く＝云う述べる。丹邱＝仙人の棲む所、昼夜常に明るいという國、戦国時代の地名。藤梧＝楼＝楼
 閣、夕佳＝夕べに佳い。属＝委嘱、頼む。楷甫＝一点一画をきちんと書く法又その書体、手本。与＝共に。相識＝互いに知る。于＝ここに、これ発
 字の助字、文首文中に用いる助字、に、補語場所を示す、を、補語を示す、より、から、比較場所を示す、おいて、か、かな、文末に
 あつてぎもん感嘆を表す。千里＝約四千キロ。羈旅＝旅に繋ぎ止める。豈＝あに、どうして疑問反語の助字、なんと感嘆の意を表す、それ、その、ほと
 んど助字解説。西肥＝西肥後。逍遙＝伸び伸びとして満足したさま、のんびりと気ままにぶらつくさま。遊ぶ＝訪れる、旅、行く。乎＝よ、や、呼
 びかけの言葉、かな、か、感嘆を表す、ああ、か、や、疑問反語を表す、形容詞につけて強く状態を表し、に、を、より、場所、時間、目的、比較を表
 す助字解説。略＝概略。地勢＝土地の状態、山、川、平野などの形勢。左右＝左に右。清秀＝清らかで秀でる。幽静＝幽かで静かな。潯陽＝唐代の地
 名、いまの江西省九江県、その付近の揚子江を潯陽江という。孰＝いずれ、つまびらか。佳然＝佳いさま。幽人＝ひっそりと暮らす人、人里離れて静
 かに暮らす人。高士＝人格が高潔な人、品行の優れた人。肥遯＝心にゆとりをもって俗世間から逃れる。棲遲＝憩つ、気楽な生活をする、静かに生活す
 る、隠退する。觀易＝見易い。棲む＝棲息、住む。窗＝窓。詠む＝詠む、詠じる。山色＝山の色、山の風景、景色。浮動＝ふわふわと動く。幽窗
 「幽かな窓、寂しい窓。適＝佳く適う。景＝風景、光景、景色。嗚呼＝感嘆詞。真＝真に、本当に。楼＝夕佳楼。与＝共に。辞さず＝断らない、帰

らない。模しも〓模写もが、写す。沈静ちんせい〓静かに修まる。讀書どくしょ〓書を読む。喋々ちやうちやう〓口数多く喋る。殉世じゆんせい〓世のために殉じる。蓋けだし〓思うに、不確かなことを推定する助字、これ、助字解説、なんぞ、反語の助字。晩成ばんせい〓遅く成る。

傳曰。深山大澤。必生龍蛇。余之遊肥後也。果得魁偉之士數人焉。其最年少。而有寄才者。熊府早川子規乎。子規為人。敦篤喜文。絕遊謝交。杜門讀書。翛然自樂焉。一日謂余曰。昔三代之盛也。厥禮。冠婚葬祭。厥器。簠簋豆。可謂備矣。厥樂。韶虞象武。厥器。笙簫琴瑟。可謂雅矣。厥書。三墳五典詩書易。可謂正矣。是故古之君子。所見非簠簋則籩豆。所聞非簫笙則琴瑟。所讀非三墳五典則詩書易。是以非辟無由入古之君子所以養德可謂至矣。世衰道微桑間濮上。於是乎作。俳優侏儒。於是乎作。異端邪說。於是乎作。然詩書未亡。禮樂猶存焉。及秦坑儒焚書。先王之道。幾熄矣。自漢而降。世愈降。道愈污。其有禮樂。亦叔孫之禮樂耳。甚則簫笙雜簞策。琴瑟和羯鼓。雅樂與胡聲。相混。不可以奏于宗廟矣。至于今日。則三絃之調急聲淫者。戲劇之笑人泣人者。及佛老之虛無妄誕。洋夷之異說淫巧。凡惑人悅人者。無所不有。桑間濮上。俳優侏儒。楊朱墨翟。不啻也。可勝嘆哉。夫三代之禮。至矣。盡矣。三代之樂。善矣。美矣。而不可復見焉。演戲雜劇。我不好也。急管繁絃。我不喜也。邪說淫巧。我不取也。我有弊廬。足以蔽風雨矣。我有蔬食。足以免餓矣。我有弊衣。足以禦寒矣。有此三足。又奚外求。食吾食。衣吾衣。々

而暖。食而飽。々而讀吾書。峨々乎聳於前者。太古以前之山歟。決々乎流於前者。大古以前之水歟。颯然而至者。非萬古之風乎。皎然而來者。非萬古之月乎。對萬古之風月。面萬古之山水。而讀萬古之書。是與羲皇稷契。且暮相遇也。何樂加焉。當此之時神融氣旺覺有浩然塞于天地之間者豈非是大素之初一元氣乎若使此氣無餒乎西山之餓亦甘焉。而況其他乎然則世人呼我。為首陽之餓士亦可。呼我。為陋巷之寒士亦可。呼我。為葛天之民亦可。呼為。為無懷之民亦可。譽之何益。毀之何損。我則登吾堂。爰食。爰飲。爰寢。爰讀書。淡乎。泊如。爰養吾素而已矣。因名堂曰養素。請為之記。岩國南裕。奇其言。謂之曰。善哉。子規蓋幾乎道矣。子之言足以為記矣。余又何言。

安政五年戊午春三月念二。于鞆邨書屋。

以下五篇寓木門之作時年二十八

釈文

養素堂記

つた 傳えて曰う深山大澤必ず龍蛇が生ず。余は之れ肥後に遊ぶなり。果して魁偉の士數人を得る。其の

最年少にして寄才有りそれ熊府の早川子規なり。子規の人と為りは敦篤にして、文を喜び遊びを絶ち交りを謝し。門を杜して書を読み翛然と自から樂しみ、一日余に謂い曰く。昔三代の盛なり、厥の禮は冠婚葬祭、厥の器は簠簋籩豆を備うと謂う可しなり。厥の樂は韶虞象武。厥の器は笙簫琴瑟は雅と謂う可しなり。厥の書は三墳五典詩書易を正に謂う可しなり。是れ故に古の君子は見る所簠簋籩豆に非らず則ち聞く所簫笙琴瑟に非らず、則ち三墳五典を讀む所に非らず則ち詩書易是れ以て辟は由無く非らず。古の君子の徳を養うことと謂う可しに至る。世は衰え道は微に桑間濮上にして是れを作すに於て俳優侏儒（身長の低い小人を昔士侯貴族の家で芸人俳優にした）。是れを作す異端邪説是れを作す然しながら詩書末だ亡びず、禮樂猶お存して秦は書を焚き儒に坑するに及ぶ。先ず王の道幾く熄なり。漢より而て降る。世は愈いよ降る。道は愈いよ汚し。其の禮樂有るも亦た叔孫の禮樂に基だしく簠簋籩簞に雜り琴瑟羯鼓に和し。雅樂と胡聲と相混りて可らず宗廟に奏でて今日に至る。則ち三絃の調べ急聲淫なるは戯劇の人の笑い人の泣くそれに及んで佛老虛無妄誕洋夷の異説淫巧凡そ人を惑し人を悦ばずは有る所無し。

桑間濮上、俳優侏儒は楊朱墨翟と対立した。「楊朱岐に泣く」楊朱が岐（岐路 分かれ道）を見て人間の心も向かう方向で善と惡とに大きく別れることを知り泣いたという故事）に當ならずなり。嘆き勝る可しなり。夫れ三代の禮。至るなり。盡るなり。三代の樂は善なり。美なり。而て復た見る可からず。演戲雜劇を我は好まずなり。急管繁絃は我れ喜ばずなり。邪説淫巧は我れ取らずなり。我れに弊廬が有り。以て風雨を蔽い足すなり。我れに蔬食が有り。以て餓を免れ足すなり。我れに弊衣が有り。以て寒禦を足すなり。此の三足が有り。又た奚外に求む。吾れ食を食し。吾れ衣を衣る。衣は而て暖にして食は而て飽にして飽は而て吾れ書を讀む。峨々として前に聳るそれ。太古以前の山は歟。決々として前者は流れる。太古以前の水は歟。颯然と而て至るそれ萬古の風に非らず。皎然と而て來るそれ萬古の月に非らず。萬古の風月に對し。萬古の山は水に面す。而て萬古の書を讀む。是れ羲皇稷契與に。且つ暮に相遇うなり。何んぞ樂を加える。此の時に當り神融の氣旺は浩然として天地の間を塞ぐそれ有るを覺る、豈是れ大素の初一の元氣に非らず、若し此の氣に餒無し、西山の餓は亦た甘し。而て況んや其の他、然り則ち世人は我れを呼ぶ。首陽の餓士は為す亦た可なり我れ呼ぶ。陋巷の寒士と為す亦た可なり我れ呼ぶ。葛天の民と

為すも亦た可なり呼び為す。無懷の民も亦た為す可し。之の譽は何んの益。之れ毀す何の損。我れ則ち吾れ堂に登る。愛食。愛飲。愛寢。愛書を読み。淡に。泊る如し。愛吾れ素を養い而て已になり。因に堂の名を養素と曰く。之の記を請い為す。岩國南裕。其の言は奇なり之れ謂い曰く。善哉。子規は蓋し幾道なり。子の言を足し以て記を為すなり。余は又た何んぞ言つ。安政五年戊午春三月念二。ここに韡邨書屋

以下五篇木門に寓す之作る時年二十八

語釈

養素堂記 素を養う堂の記。傳 口伝、伝える。深山 深い奥山。大澤 大きな沢。谷 龍蛇 龍と蛇。肥後 熊本県。魁偉 身体が大きく立派。奇才 才がある。熊府 熊本。早川子規 人名。篤 篤い、人情が厚い、誠意がある。敦 厚い、真心が厚い。子規 早川子規。杜 門を閉ざす。脩然 物事にとられないさま。早いさま。厥禮 厥、その、それ、その禮。冠婚葬祭 元服して冠を被る、結婚式、葬式、祭礼。厥器 その器。簋 祭器で黍を盛って供える。簠 祭器で穀物を盛って供える。籩 竹製で果実を盛って供える。豆 木犀で塩等を盛る。韶虞 舜帝の音楽。夔樂 夔、象武 武に似せる。笙 笛、管楽器の一つ、十九管ある、または十三管ある。簫 笛、竹管を横に並べて作つた笛二十四管。琴 瑟 琴の大型のもの。雅 雅。厥書 其の書。三墳五典 太古の書物の名。古い書物の意味しる。詩書易 詩経、書経、易経。辟 除く、退ける、止める。桑間濮上 桑間濮上の音、淫靡な音楽、桑間は濮水のほとりの地名、濮上は濮水のほとり、何れも河南省、此の地方の音楽は淫乱であつたといわれ

る。俳優はいゆう 役者。侏儒しよじゆ 短小、短い、小人。異端いたん 正統でない教え、聖人でない別の学説。邪説じせつ 正しくない説。禮樂れいがく 礼儀と音楽。中国では古くから、礼は社会の秩序を整え、楽は人の心を和らげる物として、政治上特に重視された。礼樂記より。秦しん 秦國。坑儒きつじゆ 儒者を穴に。焚書ふんしよ 書を燃やす。熄そく 消える、休む、埋もれ火、終わる。愈ゆ いよいよ。叔孫しよくそん 叔孫通、漢代の博士で劉邦高祖が皇帝の位についたとき、漢の朝廷の儀式、制度を定め、漢王朝の權威を高めた。筆策ひつさく 雅樂の樂器。羯鼓けこ 胡の太鼓、ばちで両面を叩くもの。雅樂ががく 昔の正しい音楽上品な音楽、平安時代以後宮中で行われた音楽。胡聲こせい 胡の聲。與よ 共に。宗廟そうぼう 祖先の御靈屋、國家。奏そう 奏上、演奏する。三絃さんげん 絃が三本の樂器。佛老ぶつらう 釈迦と老子、仏教と老子の教え。調急てうきふ 調子が急で高い。聲淫せいゐん 声が淫ら。戲劇げきぎ 芝居、演劇。虛無こむ 道家の根本原理である道のこと、何も無くて目に観ることのできないもの。妄誕ぼうたん 出鱈目、偽り。淫巧ゐんこう 淫らで巧みに。楊朱ようしよ 戦国時代の思想家で個人主義を唱えた。墨翟もくたく 戦国時代の思想家で博愛主義を唱えた。啻し 唯、只。演戲えんぎ 芝居を演じる。雜劇ざつぎ 雑多な劇。急管きふかん 急に笛を吹く。繁絃はんげん 頻繁に絃を引く。邪說じせつ 正しくない説。弊廬へいろ あばら屋、自分の家を謙遜という。蔬食そしょく 蔬菜の食事、粗末な食事。餓が 飢餓。弊衣へいゐ 粗末な着物。寒禦かんぎよ 寒さを防ぐ、防寒、防御。奚外けいがい 中国東方の種族名。飽ほう 飽きる。峨々がが 山の高く峻しいさま。聳そびえ 聳え立つ。太古たいこ 大昔。颯然さつぜん さつと吹く風のさま、音。萬古ばんこ 一万年もの昔。大變だいへん 古くより。皎然けうぜん 真つ白なさま、明らかな。羲皇ぎかう 伏羲の尊称、王羲之の略称。稷契しやくけい 堯舜に仕えた二人の名臣。稷は農業を司り、周の祖先となり、契は教育を司り、殷の祖先となつたと、伝えられる。神融しんじゆう 神に通じる、神と一つになる。氣旺きわう 旺盛、氣が盛んな。浩然こうぜん 広大なさま、ゆつたりとしたさま。塞ふさ 塞く。穴や道を塞ぐ。首陽しゆやう 周の初め、伯夷と叔齊が餓死したという山。陋巷ろうきやう 狭い街路、貧民街、路地裏。寒士かんし 身分の低い人、貧しい士、人。葛天かつてん 中国の神話上の帝王の名、教化をしなくても世の中が治まつたという。無懷むゐ 中国の伝説上の帝王の名。爰えん ひく、たすける、ここにかえる。堂どう 公事を行う場所、建物、高殿、表座敷。養素ようそ 素質を養つ。鞞邸いそん 木下鞞邸。肥後の藩士、五竹の師。書屋しよおく 学舎。戊午ぼし 安政五年一八五八。

書簡文

27 送枝公素遊京師序

大凡形於兩間者。日月星辰山川草木。皆我師也。如名山大川。清淑秀特之氣所凝焉。而造物者最盡巧焉。故文學章者。最可以為師焉。夫山之左右相顧者。文之照應也。水之分為兩派者。文之雙關也。山之或起。或伏。忽大。忽小。文之頓挫起伏也。水之轉而折。屈而曲。文之曲折也。仰觀於高。俯察於深。莫一非文章矣。世之人。知出之於心而書之於紙者之為文。而不知山水亦有文也。子厚之文。峭峻。東坡之文。一瀉千里。則峭峻之山。即一篇子厚之得意文也。一瀉千里之水。即一部東坡集也。是以。觀名山大川。即子厚東坡之佳處備焉。不獨子厚東坡佳處備。古今名家之佳處。皆備焉。是故欲學文章者。莫如師名山大川也。而今之游四方者。雖逢名山大川。漫然過之。逢師而不師焉。而別求其所謂師者而學焉。故其文遂不能巧也。蘇轍云。百氏之書。雖無所不讀。然皆古人之陳迹。不足以激發其志氣。故決然捨去。求天下奇聞壯觀。過秦漢之故都。恣觀終南嵩華之高。北顧黃河之奔流。可謂先獲我心矣。余之持此說也。久矣。而未敢告人也。吾友公素。博學好文章。蓋其志漸至於古之立言者也。今茲十月廿一日。將游京師。吾以為公素而後可以告矣。既告。又謂之曰。以君之才之美而胸畜芙蓉之雪。腹貯東漢之潮。發為文。著為章。

斐然。炳然煥然煥々然。及其歸也。吾知其無敵矣。往哉。

時年二十一

積文

枝公素京師に遊ぶを送る序

大凡は兩間よりの形に、日月星辰山川草木みな我が師なり。名山大川の如く清淑秀いで特に氣凝

す所なり。造物最も巧を盡す。

故に文章を學ぶには、最も師と為す可し。夫れ山の左右を相顧りみて文の照應させるなり。水はこれを分けて兩派を為す文の雙關なり。山これ或は起ちて或は伏して、忽ち大きく忽ち小さく、文これ頓挫して起伏なり。水これ轉りて曲折なり。於て高きを仰ぎ觀て俯せて深を察す。文章一つに非らざる莫れ。世人知るはこれ心により紙に書いて文に為する。山水また文有るも知らず。

子厚の文峭峻東坡一瀉千里則ち、峭峻の山即ち一篇子厚得意の文なり。一瀉千里の水即ち一部

東坡とうはくの集しふなり。是れ以て名山大川たいせんを觀て即ち子厚しう東坡の佳處かいとを備ほわる。子厚しう東坡の佳處かいと備ほわる獨りならず。古今の名家佳處めいせんみな備ほわる。

是れ故に文章は學まなばんと欲ほす名山大川たいせん師しに如ごとかず莫なれ。今の四方に遊あそぶは、名山大川めいざんたいせんに逢あわずと雖いえども。漫然まんぜんと之れを過すぎ師に逢あいて師を知らず。しかも別わかれて師の謂所いひところを求めて學まなび、故に其の文遂いへどに巧たくみに能あたはず。蘇轍そてつは云いふ、百氏ひやくしの書しよを讀よみまざる所無なしと雖いえども、然りて皆古人の陳ちんべた迹しきその志氣しきを激發げきはつし以て足らず。故に決然けつぜんと捨すて去り天下奇聞壯觀きふんそうかんを求めて、秦漢しんかんの故都ことを過すり恣しに終南しゆうなん嵩しう華かの高たかきを觀みて、北に黃河くわがの奔流ほんりうを顧かへる、我が心に先さきず獲えて謂可いひべし。余の此の說せつを持もて久ひさしきかな。未だ敢て人に告つげず、吾が友の公素博學こうそはくがくにして文章を好み、思おもうに其の志を至らしめるは古よりこよりの立言たつごんは斬きしなり。今茲こんしに十月廿一日、將に京師きやうしに遊あそばんとす。吾れ以て公素こうそに告つげる、既に告つげる又た之れを謂いつて、ここに君の才の美うしきを以て芙蓉ふふの雪ゆきに胸き奮ふんし、東漢とうめいの潮うしほを腹貯ふくちし發はして文ぶんに為なさん。著章ちやうを為なし、斐然ひぜん、炳然へいぜん、烺然りやうぜん。烺々りやうりやう然ぜん。其の歸かへるに及およんで。吾れ其の敵てきなしや往いくがよし。

時年二十一

語釈

枝公素しこうそ 玉乃公素、又は枝多門、五竹の藩校養老館での学友、維新後官につき世履と名乗り、大審院長に栄進、明治の法曹界の重鎮として今大岡の名を欲しいままにした。没後の明治二十二年七月に「五龍先生文詩」が刊行された、其の文中に（藩老某君遊学熊本序）に南部五竹の記述あり。

京師きやうし 天子の都、京都。大凡おおよそ 大体、おおまかに。兩間りやうかん 双方の間。日月にちげつ 太陽と月。星辰せいしん 星、星座。星宿さんしゆく 山川さんせん 山と川。草木そうもく 草と木。名山めいざん 有名な山。大川たいせん 大きな川。清淑せいしゆく 清らかで淑やか。特秀とくしゆ 特に秀でる。凝ぎやう 眼を凝らす、じつと看る。雙關そうかん 漢詩、文章を作る時の修字法。頓挫とんさ 行き止まる、挫ける、転じて文章や音楽の勢いが急に変わる。起伏きふく 起きたり伏せたり、凸凹。俯ふ 伏せる。莫な 莫れな ない。子厚しこう 人名。峭峻しょうけん 山が高く峻しい、気高く優れてる。東坡とうは 湖北省の一名、蘇軾が流されて其の地に在り東坡居士と号した。一瀉千里いつせきせんり 遠浅の海岸で潮が引けば露れる処、限りなく広い入り江。雖いへ けれども、たとい。漫然まんぜん 取り留めのないさま、注意しななさ、そぞろに。蘇轍そてつ 蘇軾の弟、兄の軾を大蘇、弟の轍を小蘇と言う。百氏ひやくし 百人の学者。陳迹ちんせき 跡を述べる、自分の考えの跡を述べる。志氣しき 志と氣力。激げき 激しく。決然けつぜん きっぱりとしたさま。奇聞きぶん 不思議な、珍しいこと。壯觀さうかん 大きな立派な見物、盛んな眺め。秦漢しんかん 秦と漢。故都こと 古い都。終南しゅうなん 陝西省にある山、南山、秦山とも言つ古寺や名勝が多い。嵩すう 河南省の名山、嵩山と華山。黄河くわが 中国第二の大河。奔流ほんりゅう 迸る流れ、急流。獲う 獲つ、捕獲、獲る。恣觀しよく 欲しいままに観る。博學はくがく 広く学ぶ、広い学識がある。芙蓉ふよう 芙蓉の花。富土山ふどさん 東漢とうい 東方の海。潮ちう 潮。汐し 著章ちやくしやう 文章を著はす。斐然ひぜん 彩あや 彩あや があり美しい。炳然へいぜん 明らかな、明るいさま。烺然らうぜん 燃えて明るい。烺々然らうらうぜん 慈あや 慈あや しむさま、眼をかけるさま燃えて明るいさま。

28 送二宮子德之浦賀序

夫洋夷之朵頤乎我東方者。久矣。或請互市。或乞米穀。以覘我虛實。而以我無撓屈之色也。未有敢恣兇悍者也。今茲嘉永六年癸丑夏日。洋夷以巨艦十數艘來。覬覦乎我浦賀之濱。泉岳寺。在浦賀之地。幕府命我公。遣兵守焉。吾公使臣某々。友人子德亦與焉。將行。南子酌酒盈觴。而屬之曰。夫浦賀者。我咽喉之地也。洋夷不至他處。而至此地。蓋彼既熟乎吾地理。其志豈易測哉。一旦有緩急。子其勉旃。我東方雖國富兵強。而昇平二百年于今矣。士民未有實歷戰鬪之場者也。以未實歷之兵。富彼實歷之兵。其勢極難矣哉。況彼火器之精巧。諸邦之所不及。方其巨礮震天。大煩轟地也。霹靂一聲。百軍兵。悉為粉壘矣。我士雖勇。我民雖猛。吾恐不能不其膽為之落也。子將何術禦之。子博學而多識。必有臨機應變之術。一旦有緩急。子其勉旃。乃酌而歌曰。西洋醜虜何貪饕。一葉遙度萬里濤。休怖犬洋如虎狼。休祈風伯使其勞。醜虜若敢恣陸梁。百萬醜虜一時麀。々畢洗刀東海水。電光依然日本刀。

時年二十三

釈文

二宮子徳之浦賀に送る序

夫れ洋夷やうい之我が東方とうほうを朵頤だい者。久く矣。或は互市ごいち請い。或は米穀まいこくを乞い。以て我が虚實きよじつを覘てん。而て我に撓屈たうくつの色無し以て也。其の兇悍きようかんを敢恣かんし者有り未だ也。今茲こゝに嘉永六年癸丑夏日。洋夷巨艦きょかん十數艘すうそう以て來る。我浦賀の濱を覬覦きぐ。泉岳寺。浦賀の地に在り。幕府我公に命じ。兵を遣り守る。吾公臣某々を使う。友人子徳亦共に。行く將に。南子酒なんしを酌觴しゃくじやうを盈す。而て之屬しよく曰く。夫れ浦賀者。我が咽喉いんこうの地也。洋夷他處に至らず。而て此地に至る。蓋彼既に吾地理を熟。其の志豈測り易し哉。一旦緩急いつたんかんききう有り。子其の旃勉せんむ。我東方國富み兵強と雖。而て昇平しやうへい今二百年矣。士民戰鬪の場實歴者有る未だ也。實歴未だの兵以て。彼の實歴の兵に當る。其の勢い極て難矣哉。況彼の火器の精巧せいこう。諸邦の及ざる所。其の巨礮方きよほうに天を震わす。大煩地に轟く也。霹靂一聲。百の軍兵。悉く粉塵ふんじんと為す矣。我士勇と雖。我民猛と雖。吾恐る能はず其の膽之為す落ず也。子何の術で之禦將ぎやうに。子博學而て多識しき。必ず臨機應變の術有り。一旦緩急いつたんかんききう有り。子其の旃勉せんめ。乃酌而て歌曰く。西洋の醜虜何に貪饕たんとう。

一葉遙に渡る萬里の濤。大洋の怖虎狼の如く休す。祈る風伯其の勞休す。醜虜若敢恣陸梁。百萬の醜虜一時に麀。麀畢刀を洗う東海の水。電光依然日本刀。
時年二十三

語釈 洋夷〓西洋の戎夷。胡〓東方。東の方。浦賀。朵頤〓頸を下げ物を食べようとするさま。互市〓市場。貿易。請い〓要求。米穀〓米や穀物。虚實〓嘘か真。胡〓窺う。覗く。撓屈〓撓み屈する。兇悍〓凶悪で精悍。敢恣〓敢えて欲しい儘にする。巨艦〓巨大な艦船。十數隻。覬覦〓身分不相応な夢御望み願う。遣り〓派遣。子德〓二宮子徳。小太郎。梅花。超海。浦賀に出張の時に勝海舟につき洋式兵術を学ぶ。南子〓南部五竹。酌〓酌む。觴〓觴、盃。酒杯をあげる。盈〓盈す。満ちる。屬〓委囑。頼まれる。中間。同類。咽喉〓喉もと。蓋〓思つに、なんぞ。雖〓けれども、たとい。豈〓ながう、どうして、それ。一旦緩急〓一度國に大事が起これば。子〓子徳。旃〓周旃。昇平〓平和、世の中が穏やかに治まっていること。太平。實歴〓實際に経験した。火器〓銃や砲。精巧〓精密で巧みな。諸邦〓諸國。巨礮〓巨大な砲。方に〓丁度その時に。霹靂〓急に激しく鳴る雷音。雷鳴。軍兵〓軍や兵。粉糝〓粉砕。膽〓肝。胆力。禦〓防御。防ぐ。多識〓知識が多い。臨機應變〓その場に臨み状況の変化に応じて、物事をうまく処理する。醜虜〓外国人を卑しんで呼んだ言葉。貪饕〓貪り喰う。渡る〓渡る。萬里〓一万里。濤〓波濤。大洋〓外国人を卑しんで呼んだ言葉。怖〓怖し。虎狼〓虎や狼。風伯〓風の神。神風。陸梁〓暴れ回る、欲しい儘に振る舞う。麀〓皆殺し。畢〓悉く。東海〓東の海。電光〓稲妻。依然〓矢張り、元のまま、昔を恋い慕つさま。樹木が茂るさま。

29 送帆足子德歸豐後

大丈夫。不得行道於一世。則當立言於千載。行道於一世。其本志也。立言於千載。不得已也。故古之立言也。多出於困阨輒軻流離顛沛之餘。文王拘於羑里。而周易作。孔子不用於時。而脩詩書。作十翼。屈平被讒。而賦離騷。老聃憤世。而有道德經。國語出失明之後。史記成於腐刑之餘。此數君子者。道雖尊乎。言雖美乎。方其在世也。抑亦可謂窮矣。余小也孤。鞠養姑氏。纔得存活。姑氏多蓄書。日夕讀之。略通大意。竊不自揣。有慕乎古聖人之道焉。亡何。姑氏卒。於是乎。身無所依賴。朝摘藜藿。以充饑。夕集螢雪。而讀書。以至於今日矣。一日奮然以謂。世之論閎閎也尚矣。處今之世。欲行古之道。是北轅越週耳。況余犬馬之齒已及而立。今而如此。則前途可知矣。今我不自為圖。白首治經。兀々守陳迹。生為山中之餓士。死為無名之鬼。則徒自苦耳。於是乎。欲周覽名山大川博交磊落魁偉之士觀風於諸國有所述作以倣古之立言者。歲之二月。遂為鎮西之遊。邂逅豐後帆足子德後肥韞邨書屋。子德。為人溫厚。有才藻。每文章成輒示余。請是正。久而好情愈篤。歲之五月。將歸鄉。既告別。又求余文辭。余乃告之曰。余也無求於世者。而子則有求於無求之余。自非求益之厚焉。能如此哉。惜哉。余力薄才拙。不能酢子之求也。

雖然。子之請。豈可默而止哉。我聞日出。世不乏於明良。子之先人。西嶂先生。以博學著作。名于天下。亦嘗被登庸執政。子春秋鼎盛。勤而不已。必有所成。天欲使子行道於一世。一家出兩相。未可知也。天欲使子立言於千載。一家出兩儒。亦未可知也。若得行道乎。其施治如先人而可。若其不行也。退而守文。如先人而可。遇不遇命也。無辱先人斯可。余之有志于立言。子業已知之。其成與不。雖余不能知也。子之有志于行道。余業已知之。其得與不。雖子不能知也。然則余與子不可不自愛惜焉。但恐他日。余有所愧于子。今者余之告子。止于此。欲登彥山探耶馬之溪久矣。其遊也。不在今秋。必在明春。必以子為東道之主。果得相見乎。猶將欲有所告子。々其待之。無限感慨。讀之滲人肺腑。行文之妙。如入窈窕之谷聽幽眇之音。真是廬陵

眞訣

積文

帆足子德豐ほあし しとく ぶん後に歸るを送る序

大丈夫。道は一世に於いて行うことを得ず。則ち言は千載せんざいよりの言を立てて當り。道には一世により

行^ゆう其本の志^しなり。言^{こと}は千載^{せんざい}より立てて已^やに得^えず故^ゆに古^この立言^{りつごん}なり。困^{こん}陋^{ろう}、轆^{れき}軻^か、流^{りゅう}離^り、顛^{てん}沛^{ぱい}の餘^いに
出^でず。羗^{きやう}里^りに於^おて文王^{ぶんわう}拘^こえ周^{しゅう}易^{えき}作^なす。孔^{かん}子^じ千時^{せんじ}に用^{もち}いず詩^し書^{しよ}を脩^{おさ}めて十^{じゅう}翼^{よく}を作^なす。屈^{くつ}平^{へい}讒^{さん}られて
離^り騷^{そう}を賦^ふして老^{ろう}聃^{たん}憤^{ふん}世^{せい}道^{どう}徳^{とく}を經^{けい}る有^あり。国^{こく}語^ご失^し明^{めい}の後^ごに出^でず。史^し記^き腐^ふ刑^{けい}の餘^いりに成^なす。此^この數^{すう}君^{くん}子^し
は道^{どう}は尊^{そん}しと雖^{すい}も、言^{こと}は美^みなると雖^{すい}も方^{はう}に世^{せい}に其^{その}れ在^ありて抑^{おさ}そも亦^{また}た窮^{きゆう}を謂^いう可^べし。余^あは小^{せう}ときよ
り孤^{ひと}り。姑^{しやう}氏^{ていめ}に養^{やしやう}われて鞠^{そだ}つ。纔^{わす}かに存^{そん}活^{かつ}を得^える。姑^{しやう}氏^{ていめ}書^{しよ}の蓄^{しやく}え多^{おほ}く日^{にち}夕^{せき}之^を讀^よむ。略^{はく}ぼ大^{だい}意^いを通^{とお}
じ。竊^{せつ}いなや自^{みづか}ら揣^{はか}りて古^こ聖^{せい}人^{じん}の道^{どう}を慕^もう有^ありて。心^{こころ}は何^{なん}んぞ姑^こ氏^しの卒^{そつ}是^{こゝ}れ於^おて身^みを依^よ頼^{らい}する所^{ところ}無^な
く。朝^{あさ}に藜^{れい}藿^{かく}を摘^つんで以^{もつ}て饑^うえに充^あて、夕^{ゆふ}に螢^{けい}雪^{せつ}を集^{あつ}めて書^{しよ}を讀^よむ以^{もつ}てこゝに今^{けふ}日に至^{いた}る。一^{いつ}日^{にち}奮^{ふん}然^{ぜん}
と謂^いう。世^よの閥^{はふ}閥^{はふ}を論^{ろん}じ尚^{なほ}お今^{けふ}の世^よに處^あして古^こ道^{どう}を行^なわんと欲^{ほつ}す。是^{こゝ}れ北^{ほく}轅^{えん}越^{えつ}週^{しゅう}。況^{いは}んや余^あ犬^{けん}馬^ま
の齒^は己^{こゝ}に立^たつに及^{およ}んで此^{こゝ}の如^{ごと}し。則^{すなは}ち前^{ぜん}途^と知^しる可^べし。今^{けふ}我^{われ}れいなや自^{みづか}ら圖^ずるを為^なさん。白^{はく}首^{しゆ}經^{けい}を
治^ちめて兀^に々^にと陳^{ちん}迹^{せき}を守^{まも}る。生^なきて山^{さん}中^{ちゆう}の餓^が士^しを為^なさん死^しして無^な名^{めい}の鬼^きに為^なさん。則^{すなは}ち徒^たらに自^{みづか}ら苦^く
しむのみ。是^{こゝ}れに於^おて名^な山^{さん}大^{だい}川^{せん}を周^{しゅう}覽^{らん}せんと欲^{ほつ}す、博^{はく}く磊^{らい}落^{らく}魁^{かい}偉^いの士^しに交^{かう}りて諸^{しよ}國^{こく}の風^{ふう}を觀^{かん}て述^なべ作^な
さん有^あす。

倣ならいて古の言に立ち歳はこれ二月遂に鎮西ちんぜいの遊を為す。豊後帆足子徳ぶんご ほあしとく あに近いここに肥後の韃邨書屋いそんに
邂めぐりあう。子徳人温厚に才藻さいそうを有し。文章成すを毎に輒いつも余に示す。是れ正に請う久しく好情いよ愈いよ篤あつ
く。歳これ五月將に郷に歸り。既に別れを告げ又た余の文辭を求める。余は乃ち之れに告げて曰く。
余また世に求めるもの無し。子徳則ちこれ余の求め無に於いて求め有す。これ厚く求めるに非らず能
く此の如し哉かな。惜しむ哉かな。余力薄く才拙子徳の求めに酢むくる能はず然りと雖も。子徳の請い豈默すべ
きか止める哉かな。我は聞く日出ひじにて明良に世は乏しからず。子徳の先人西嶺先生博學著作を以てここに
天下に名す亦た嘗て執政に庸に登せらる。子徳春秋しとくしゅんじゅう鼎かなえに富み勤めて已れず必ず成す所有り。天は
道を一世より子徳に行なわ使めんと欲す。一家は兩相りょうさう出て未だ知る可からず。天は千載せんざいより立言子
徳使しせんと欲す。一家兩儒りょうじゆに出て。亦た未だ知る可からず。若し道を行なうを得て其の先人の如く
施して治む可し。若し其れ行はず退いて文を守る先人の如くに可し。遇う遇はずは命めいなり。先人を辱はづ
かしめること無く斯かくも可よし。

余の志ここに立言有り。業は已に知るは之れ其の成いる不なと雖も余は知るを能はず。子徳の志有るをこ

ここに道を行ない余の業は已に之を知る。其れ不^{いな}と得る子徳と雖も知るを能はず。然して則ち余と子徳と自から愛惜は可からず。但だ恐るは他日余は子徳に愧^{はず}かしめる所有り。今余之れを子徳に告げてここに此れを止める。彦山に耶馬^{やば}の溪^{けい}を探りて登らんと欲す久しきかな。其の遊今秋在りや不^{いな}や必ず明春に在り。必ず子徳を以て東道の主^しを為す。果して相見を得ん猶お將に子徳に告ぐ所が有るを欲す。子徳之れを待たれよ。感慨限^{かんがい}り無く之れを讀んで人肺腑^{じんはいふ}に滲^{にじ}み。文の妙を行ない。窈窕^{うてうたう}の谷に入り幽眇^{ゆうびょう}の音を聽かん。眞に是れ廬陵の眞に訣れる

語釈

帆足子徳^{ほあしこてく} 日出藩家老帆足万里の養子、百九十石を与えられた、藩學訓導、五竹の木門時の若き友人。豊後^{ぶんご} 豊後の日出藩大分県。千載^{せんざい} 千年。困^{こん} 困り破れる、崩れる。轉軻^{かんか} 車の行き悩むさま。流離^{りうり} 流れ離れる。顛沛^{てんぱい} 躓き倒れる、咄嗟の時。文王^{ぶんわう} 周の文王。堯里^{きやうり} 夷、中国西部の蛮族。拘^{こう} 拘留、拘る。周易^{しよくい} 五經の一つで易經。脩^{しゆ} 修める。十翼^{じふよく} 易經の本文を詳しく解説した物。老聃^{らうたん} 老子の名。抑^{おさ} も抑、抑留、抑える。姑氏^{こし} 姑、父の姉妹、伯母、叔母。纔^{さい} 僅か、少し。鞠養^{きくよう} 養い育てる。竊^{せつ} 密かに。自揣^{じすい} 自ら推し量る。卒^{そつ} 没す、死ぬ。藜藿^{れいこく} あかぎの葉と豆の葉、粗食のこと。饑^き 飢饉。螢雪^{けいせつ} 苦心して勉学に励むこと。閥閱^{はつえつ} 功績と経歴。宋以後功績を書いた二本の柱を門前に建て左に柱を閥右の柱を閥と言った、立派な家柄、門閥。北轅越過^{ほくえんこくわ} 車の長柄を北の轅に向けて南の越の國に行こうとする、志と行動が一致しない。白^{はく} 建白、上位の人に意見を述べる。首經^{しゆけい} 易經の卷首。兀々^{くわくわく} 一心不乱に努力する。陳迹^{ちんせき} 跡を追いつ述べる。餓士^{がし} 飢餓の士、貧乏な士。周く^{あうな} 広く

全て、隅から隅 名山大川 名高い山や大きな川。 覧 観る。 磊落 心が大きく、小事に拘らない。 魁偉 優れて偉い人。 倣う 人に倣い真似る。 鎮西
筑紫、九州。 鮮邨 木下鮮邨。 邂逅 思いがけなく出会う、喜ぶさま。 才藻 才知と文藻、詩文の才能の豊かなこと。 輒 即ち、忽ち動かない。 愈篤
「いよいよ篤く。 薄才」才に乏しい。 雖 けれども、唯、これ。 子 子徳。 春秋 春秋時代。 鼎富 贅沢な暮らし。 天道 天の道。 兩相 助け合
補佐する、二人の家老。 千載 千年。 兩儒 二人の儒者。 遇 幸せ。 不遇 不幸せ。 命 運命。 辱 辱め、恥ずかしい。 屈平 屈原。 讒 讒言、悪口
を言つて告げ口する、誹る。 離騷 戦国時代、楚の屈原が王から信任されない憂いを述べた。 斯 此の、是、即ち。 感慨 深く感じて心が奮いたつた流
嘆いたりする、感動して憤激する。 肺腑 肺腑、心の奥底、急所。 窈窕 山水、山路、宮殿などの奥深いさま。 幽眇 小さく遙かに寂しい廬陵 地名、
宋の欧陽修、文天祥。 眞訣 眞の道。 眞の訣れ 本当の別れ。

30 送佐藤文水歸後豐

嗚乎。窮之甚。而可痛。志之篤。而可憐者。吾佐藤某耶。某自後豐。負笈。短褐蕭然而來。受業於韃村木先生。々々門人。不為少。某日為之執爨。以自給。其爨也。手卷。立竈前。且讀且爨。日夕。則携卷出簷下。至字不辨而止。余每見之。悲痛感激。為之泣下。噫。夫世之。目不知丁。不辨仁義道德為何物者。往々坐高堂而重茵。食甘滋。飲醇釀。燕玉滿房。糸竹沸堂。宴安逸樂。以度日。是何脩而然也。而使有志如某者。窮乏至于此極者。亦獨何哉。不知大道果喜斯道耶。果不喜斯道耶。將憐若人耶。將不憐若人耶。吾甚惑焉。孟子曰。天將降大任於是人也。必先苦其心志。勞其筋骨。餓其體膚。空乏其身。繇是觀之。貧賤憂戚。焉不知以玉汝成乎。某勉哉。父母之咎其子。非惡而然。恐其為不善人也。不與之甘甜味。恐其生疴病也。非不欲使其食之也。故與甘甜味以止啼廢咎箠而長其傲者。是姑息之愛。而非愛之至也。今天之於某。豈亦愛之至者。非耶。某勉哉。同病相憐。人之情也。余也。世之所謂窮人也。以值窮人。何不之憐耶。況某之窮。而志之篤乎。假使予多財乎。吾衣于汝。吾食于汝。俾汝遂其志乎。千金百鎰。亦所不吝焉。獨若予之窮而又窮。我躬不閱乎。某之歸也。不能以為購。乃贈以詩曰。

鬱々松柏。雪霜寒之。困于疾藜。其享有時。彼以其富。我以吾義。金石相和。歌者是誰。

釈文

佐藤文水豊後に歸るを送るの序

嗚乎、窮きわまりて之れ甚し志の篤あつき痛む可し、憐あわれむ可しや佐藤某それがし、某し豊後より笈きゅうを負い短褐たんかつしやうぜん蕭然として來る。韓村木先生いそん もくより業を受けて、先生門人少なからずを為す。某日之れを為す爨かまどに執きて以て自給し、其の爨かまどの竈前そうぜんに立ち巻かを手たずさに且つ讀み且つ爨かぎ、日夕則ち巻たずさを携えんかえて簷下えんかに出て、字を辨わけずして止どまりて至く。余は之れを見る毎に悲痛感激して泣たに下る。

噫ああ 夫れ世の目の丁ちやうを知らず、何物も為さん仁義道德も辨わけず。往々にして高堂こうどうに坐して茵しきものを重おもね、甘滋醇釀かんじじゅんじやうを飲いず、燕玉房えんぎよくぼうを満みちす、糸竹堂しちくに沸うたげかして宴あんいつに安逸樂あんいつしむ。以て日度りて是れ何んぞ脩おさめて然り、某しの如く志有りて使せしむ、窮乏きうふしく此の極に至り亦た獨り回かえる哉。斯の道の大道果おさす喜びを知らず果して斯の道を喜ばず、將に若人憐ぎやくじんあわれむべし。吾は甚だ惑まどつ孟子曰く、天は將に大

任是の人を降せんとす。必ず先に其の心志の苦しみ、其の筋骨の勞れ其の體膚の餓え、乏しく其の身に空しく是れ^{したが}繇いて之れを觀て、貧賤憂戚汝成りて玉不^{いな}を知れ。某し勉める哉。父母の咎^{むち}其の子悪しきに非らず然れども、善人を為さず之れ甘甜とせず、疴病の生ずるを恐る具に之れを食して欲せず^{かんてん}に非らず。故に甘甜^{かんてん}と以て咎^{ちすい}箠を廢して啼くを止どめ、長く傲^{あこ}るは是れ姑息の愛にして愛の至りに非ず。今天の某しに愛の至るは勉むなり。

同病相憐むは人の情なり。余なり世の謂^{おも}つ所の窮人^{きゆうじん}なり。以て窮人^{きゆうじん} 窮人に値して何んぞ憐れま^{あわ}ず、況んや某しの窮^{きゆう}は志の篤^{あつ}にして、假にも多財^{たさい}を予え使めて、吾が衣を汝に吾が食を汝に其の志を遂げて俾^しむ。千金百鎰^{せんきんひやくいづ}亦た吝^{おし}まず所獨り窮^{きゆう}にし窮^{きゆう}の若く、我が躬^みは閱^{けみ}せず某し之れ歸るなり。贖^{はなむけ}に為すことも能はず。ここに詩を以て贈る。

鬱々松柏

鬱々たる松柏^{うつつうつつまけ}

雪霜寒之

雪霜^{せつそう} 之れ寒し^{さむ}

困于疾藜

困^{くる}しき疾藜^{しつれい}

其享有時

其れ享^{すす}める時 有り

彼以其富

彼は其の富を以て

我以吾義

我は吾が義を以て

金石相和

金石^{こんせき} 相和^{あいわ}して

歌者是誰

歌うは是れ誰ぞ

語釈

後豊^{ごほう} 豊後^{きゅうご} 窮^{きゆう} 窮まる、困窮。簞^{あづ} 簞^{あづ}く 人情が簞い、誠意が有る。憐^{あわれ}む 憐憫。筴^{きやう} 筴^{あひ}、筴箱、書物等を入れて背負つ竹製の箱。短褐^{たんこく}

ぬのこ、短く荒い粗末な着物。蕭然^{しょうぜん} 物寂しいさま。木先生^{もくせい} 木下^{きのした} 軒村^{けんむら}。爨^{さん} 執る かしく、炊く、飯を炊く、かまど。竈^{かまど} 竈^{へつ}。携^{けん}え 携行、持

つて。簷^{えん}下^か 軒下^{けんか}。辨^{べん}ぜず 弁^{わきま}えず、知らず。泣^な下^か 涙を流す。噫^あ 嗚呼。目^め丁^{てい} 物事の筋目。仁義^{じんぎ} 仁、親愛の心、義、道理に適つこと、道德の総

称^{しょう} 道德^{たいてく} 人のふみ行つべき正しい道、道義。往々^{おうおう} つねずね、屢々、時々、時として。高堂^{こうたう} 立派な表座敷、父母、他人の家の敬称。茵^{いん} しとね、寝

床、敷物。甘滋^{かんじ} 甘く滋養のあるもの。醇釀^{じゅんじやう} 良く熟した味の濃い酒。燕玉^{えんぎよく} 玉に似て非なるもの。燕^{えん} 燕、酒盛り、くつろぐ。房^{ぼう} 部屋。糸竹^{しそく}

琴の類と笛の類。宴安^{えんあん} 心がくつろいで楽しむ。逸樂^{いつらく} 気儘に楽しむ。日度^{にど} 日に何度も。脩^{しゆ} 修める。窮乏^{きゆうふ} 乏しく困窮する。惑^{まど}つ 迷つ。斯道^{しど}

此の道、聖人の道、その人が携わつてゐる技芸や学問の道。筋骨^{きんこつ} 筋肉と骨。勞^{いたは}り 大切に、自愛。體膚^{たいふ} 身体と皮膚。餓^がし 飢える。繇^{ゆう} 揺れる、よ

つて、従つ、遥か遠い。貧賤^{ひんけん} 貧しく賤しい。憂戚^{ゆうせき} 憂い傷む。筵^ち むち。甘^{かん} 甘い物。簞^{すい} むち。簞^{すい} 筵^ち。多財^{たさい} 分限者、金持ち。俾^ひ しもべ

召使い、せしむ、させる、従つ、睨む、横目で観る。千金せんきん〓千両。百鎰ひやくいっ〓貳四十両。吝りん〓ケチ、吝嗇りんしやく。躬み〓身体。閱えうさず〓看ない、顧みない。贖じん〓餞、
贈る。鬱々うつうつ〓鬱蒼と。松柏しょうはく〓松と柏。蒺藜じゅうい〓はまびし、藥草、はまびしを象った鉄又は木の武器、忍者用。享きやうす〓享受、受ける。金石こんせき〓金と石。相和あいわ
す〓調和。

31 送海賀某歸秋月序

海賀某秋月人也。有學問。喜文章。旁精于拳法。余與之相識于後肥。蓋魁偉之士也。某之歸鄉也。過余乞一言。余乃告之曰。子好拳法乎。吾以拳法論之。邑之人。川子道。嘗語余云。藤井某。妙于拳法。立人于壁後。隔壁擊地。立者應聲而仆。少頃。又擊地。仆者忽焉甦。僕異之。求聞其術。語僕以赤手殺甲士之法。其法令人被擊。信手拊之。則死。又信手拊之。則活。余聞之曰。神矣哉。技也。嗚乎。是感而應之道耶。若信斯言也。茫茫之天。可以感焉。冥々之神。可以格焉。而況於人乎。感天有道曰。誠矣而已。格神有道。曰誠矣而已。動人有道。曰誠矣而已。天之不感。誠之不至也。神之不格。誠之不至也。人之不動。誠之不至也。詩曰。維此文王。小心翼翼。昭事上帝。聿懷多福。言文王盡誠而天感也。又曰。列文辟公。錫茲祉福。言辟公盡誠而神格也。書曰。祇載見瞽瞍。夔々齊栗。瞽亦允若。言舜盡誠而動也。由是觀之。至誠而不動者未之有也。誠其可不盡乎。嗚乎。余之所精者道也。故假技以明道。子之所精者技也。且因技而求道。精之精之。又重精之。可以通神矣。求之求之。又重求之。可以達道矣。嗚乎。是技也。而進乎道。

文亦有赤手殺甲士之手段

釈文

海賀某し秋月に歸るを送るの序

海賀某し秋月の人學問有りて、文章を喜しみての旁らここに拳法に精し。余は之れ肥後に相識る。謂うに魁偉の士である。某し郷に歸る一言乞うと余を過ぎる。余はそこで之れを告げる。

子は拳法を好み。吾に拳法を以て之れを論ず。邑の人川子道嘗て余に語る。藤井某しの拳法の妙は人や壁の後に立ちて、壁を離れて地を撃ち立ちて聲に應じて仆れ、暫くして又た地を撃ちて仆れて忽ち甦がえる。僕は異しく其の術を聞き求める。甲士殺しの法を赤手で僕に語る、其の法人に令けて堅く手に信せて之れを拊つ、則ち死す又た手に信せて之れを拊つ則ち活かす。余の聞く之れが神の技か、嗚乎是れ感じて應に之れ道若し斯の言を信じて、茫々の天以て感ず可し。冥々の神以て格す可し、況んや人に於て天に感ず道有りて誠かな、己に神に格す道有りて己に誠なり。天も感じせず誠も至らず、

神は格さず誠も至らず、人之れ動かず詩ここに。

維此文王

此の文王を維ぎ

小心翼翼

小心 翼翼たり

昭事上帝

昭らかに上帝を事として

聿懷多福

聿 多福を懷う

言う文王

誠 盡きて天 感ずなりと。又たここに。

列文辟公

辟公 文に列ねて

茲祉福錫

茲に祉福を錫わる

言う辟公は誠を盡くして神格す。書して祇だ載せて瞽瞍を見る。夔々として齊栗す瞽亦た允若言う、

至誠動かずして未だ之れ有りて誠は盡せず可き、嗚乎、余の精けし所道なり。故に技を假て以て道

を明かす。子はの精けす所は技なり。且つ技に因つて道を求める。精けの精け又た重くして之れ

を求め道に達して以て可し。嗚乎、是れ技なり、そして道に進む。

亦た赤手で甲子殺しの手段を文にする。

語釈

海賀某^{かいが} 海賀藤蔵^{かいが}、揚心流柔術家、揚心流柔術を家業とした、毎朝弘曉に起床し、道場に出て独修したが、その音響は開門を待つ門弟の耳朶を強く打ったという、又登城の途次には往来人のいないときを窺つて、四肢により城の石垣を匍匐し、梁の上からさまざまの姿勢で飛び降りるなどの修練を積んだといはれる、その長男市蔵か。秋月^{あきづき} 肥後秋月藩。旁ら^{かたは} 序でに。拳法^{けんぽう} 少林寺拳法、空手。精^{せい} 精を出す。後肥^{いひ} 肥後。蓋^{けだし} 思うに、なんぞ。魁偉^{かいい} 優れて偉い人。邑^{むち} くに、領地、むら、さと。川子道^{せんじどう} 長州の人。嘗て^{かつ} 以前、前に。撃^{げき} 攻撃、撃つ。仆^ふ 倒れる、倒れ伏す。少頃^{しょうこう} 暫くして。魁^そ 魁生、魁る。赤手^{せしや} 赤子の手、素手。甲士^{こうし} 甲をつけた強い士。殺^{ころ} 殺す。被令^{ひれい} 命令を受ける。拊^ふ 手を打つ、我が意を得たりと喜ぶ。斯言^{しげん} 此の道の言葉。茫々^{ぼうぼう} 広々と。神格^{しんかく} 神と同格。維^い これ、また。文王^{ぶんおう} 周の王。茲に^{こゝに} これ、この、茂る。祉福^{しふく} 幸福。幸い。錫^{せき} 錫、熟達、賜、僧や道士の持つ杖。小心^{しんしん} 気が小さい。翼々^{よくよく} うやうやしい。昭上帝^{せうじて} 聿^{りつ} 筆、書く。多福^{たふく} 幸多く。文辟公^{ぶんへくこう} 文公。祗^{ただ} 土地の神。載^{さい} 載せる。瞽瞍^{こそ} 老人の意、太古の聖天子舜の父の名。震々^{しんしん} 畏れ慎むさま。齊栗^{せいりつ} 畏れ慎むさま、敬懼。瞽^こ めしい、盲人。物事の道理を見分けられないこと。允^{いん} 君主、もと、まこと、許す。舜^{しん} 太古の聖天子。

感時花濺淚傷別鳥驚心是老杜之句也今及客後肥始覺此句之妙矣一日讀書于韞邨書屋已倦啓窓即櫻花爛然而華有鳥綿蠻于花際對之之際鄉心忽生客愁交集悲不自堪悵然噫花乎非悅於眼者歟鳥乎非娛於耳者歟而今也花愈媚而余之愁愈甚鳥愈囀而余之悲愈深人心之無常也如此夫心之為物虛而靈觸物而轉隨境以嘗非自操之其存幾何然則其愁人悲人者豈獨花鳥而已哉凡物皆然初余之入木門也所見皆異鄉之人所聞皆異鄉之語如侏儻缺舌者有之牙々雜都鄙者有之語言難通生面不親對其面聞其語適足以使予生鄉心動客愁而已既而日往月來向之不通者自通向之不親者自親則對文共論開口而笑交情益厚恰似同胞於是乎對面聞語皆足以慰吾懷余於是乎益感乎人心之無常矣天草中西子執將遊江門歲之五月告別於余且請一言余曰須磨明石佳麗之地也子泊舟於此豈能不思鄉乎芳林之花富岳之雪亦景之美者也子對此豈能不思鄉乎都者大都會也奇才異能之士以至于奇技謠巧之賤無所不有也其歌也有遏雲者有能不頤耳者耶其笑也有頤城者有能不注目者耶酒極美肴尽甘鮮禹王之所未知易牙之所未嘗有能不流涎者耶子逢此數者不知能塞耳而行

掩目而過乎嗚呼是皆無益乎子之身矣礼曰飲食男女人之大欲存焉故聖賢千言万語率皆戒之子能操心如今日勤學如今日確乎不可拔則每看花聽鳥輒淚潜然下之於是乎子亦始覺杜詩之所以妙矣而後子亦得驚人句如杜矣既得如杜之句又操心如金石則非獨不負江都之花月庶幾不雖然江愧於故鄉之朋友非獨不愧於故鄉之朋友幾不愧於古之人子其最称余之与子執非一朝一夕之交故於其行也道人心之所以無常以戒之

釈文

なかにしつゝもつちもと ゆう
中西子執江門に遊を送るの序

時に感じて花になみだを涙を濺涙をぎ、別れを傷んで鳥にも心を驚かす、是れ老杜（杜甫）の句なり、
今後肥に客（旅）するに及んで此の句の妙を始めて覚える、一日書を讀みここ韞邨書屋に己に倦れ啓窓（窓
辺にくつろぐ）既に櫻花爛然にして華に鳥に有り綿蛮（小鳥の鳴く声）、花際に対して之れ之際郷心忽ち客愁
を生じて、交も悲しみ集り自から堪えず帳で然りと窓を掩う、噫、花を悦びて眼に歟かに非らず
鳥を娛しむ眼に歟かに非らず、今花は愈よ娟くしく、余の愁い愈よ甚しく鳥愈よ囀ずりて、余の

悲しみ愈いよいよよ深く、人心無常むじょうなる今此れ心は物の虚うつろを為し、靈觸物れいにして転た境に随い以て憂は、
自あやつるから操に非ず其の幾何きか（どれほど）を存す、則ち其の愁い人の悲しみは豈獨り花鳥かちょう已かな、凡物ばんぶつ（およ
そのもの）は皆然り初めて余が木門もくもん（木下先生の門）に入りしところ、皆異郷の人々を見る聞く所皆異郷の語
は、侏あるかなる如く禽獸舌きんけつぜつ（意味の通じない言葉）は、之れ牙々がが雑まじり（女兒の愛らしい声）有り都て鄙者すべの、之の語言
通じ難くあり、生面せいめん（生き生きとした顔）親くせずその面に対して其を聞きその語の足に適い予れを使て
郷心きょうしんを生じ客愁かくしゅう（旅の愁れ）動き、既にして日往ゆき月来たてこれに向つて、通ぜずは自したしから親ましたしずは
自したしから親みて則ち文に対して共に論じ口を開いて笑つて、情を交えて益々寧んじて恰も同胞に似た
るは是れ、対面たいめんして語を聞き皆足を以て吾懷を慰める、余は是れ益々人心の無常むじょうを感じ、天草中西子執
將に江門まな（江戸）に遊ばんとする、歳さいの五月別れを告げて余に請う余は一言余は曰ことつく須磨明石は佳麗
の地なり、子は舟に泊すこれ豈能く郷を思わず、芳野の花富士の雪また景の美は子はこれに対して豈
思郷せず江門距こうもんへだつは極めて遠く故に言語は通ぜず、また猶我の入肥なる豈能く思郷せず、然るに江都
と雖もそれ大都会だいとかいなり、自きさいから奇才異能の士以て至り、奇技淫巧きぎいんこう（極めて贅沢な技巧、またその物）賤そそく所無く

有せず、其の歌雲を過ぎり能く有りて、願ろにせずそれ笑いなり、願ろ城（街のこと）は能く有り注目す
 るは、酒極めて醇美肴尽ず甘鮮これ、禹王の未知の所知らずの所、易牙（料理の名人）のところ未だ嘗て
 能く涎を流さずを有す、子は此れに逢い数ば知らず能く耳を塞いで行き目を掩いて過ぎり、
 嗚呼、是れ皆益無く、子の身に礼（敬意）して曰う飲食男女人これ大なる欲に存す、故に聖賢千言に万語
 率て皆之れを戒め子能く操心（何時も気を付ける）如今（現在）日勤學び如今日確かめて抜く可らず、則ち毎
 に花を看鳥を聴きて輒ち淚潜然として下る、これ亦た子始め杜甫詩の所以（原因、訳）妙後にして子亦
 た人を驚かす句杜の如くを得る、既に杜の句の如きを得て、又た操心金石の如く、則ち獨り江都の花月
 を負わずに非らず、庶幾（希望する）愧じず故郷の朋友獨り愧ずに非らず、故郷の朋友庶幾愧ず古の人、
 子其れ最も余の子執に与えるを称す、一朝一夕の交に非らず故に其の行なり、道人の心の所以無常
 以て之れを戒しめる。

語釈

中西子執〓人名。江門〓江戸。遊〓遊ぶ、遊學、旅。序〓端書き、順序を追って申し述べる。濺〓注ぐ、涙が流れ落ちる。傷心〓悲しい

心 傷ましい。老杜^{らうと}杜甫、盛唐の大詩人。句^く詩の最小の単位。後肥^{こうひ}肥後、熊本県。妙^{みょう}幼少、美しい、しなやか、精巧、人間の能力以上の働き、計り知れない、優れた働きがある。讀書^{どくしょ}書物を読む。于^うここに、これ、発字の助字、より、から、比較、場所を示す、おいて、か、かな、文末にあつて疑問、感嘆を示す。韃^{たい}韃^だ木下韃^{きげ}、五竹の師事する人。書屋^{しよおく}字舎、己^{すで}既に。倦^あき^き倦怠、怠い、疲れ。啓^{ひら}き^き啓蒙、開く。爛^{らん}爛漫、花が闌華^{はな}花。綿蛮^{めんばん}鳥が鳴くさま。郷心^{きやうしん}里心。堪^たえ^え堪える。悵然^{ちやうぜん}恨み嘆くさま、がっかりとしたさま。掩然^{えんぜん}覆つさま、庇つさま。噫^いああ、嘆息、驚嘆の声。悦^{えつ}悦ぶ、喜ぶ。歎^と気が安らか、か、や、疑問、推測、反語、感嘆の意を表す助字。娛^こ娛樂、楽しみ。愈^ゆいよいよ。娟^{けん}美しい、しなやか、姿態の美しいさま、体をくねらせる。囀^{しやう}る^る鳥が鳴く。無常^{むじやう}定めがない、人生の儚いさま。虚物^{きよぶつ}虚ろな物、偽物。靈^{れい}神、巫、精神、命、魂、靈魂。触^{ふれ}る^る触れる。嘗^{かつ}て^て以前、前に。操^{みさお}操る、使いこなす、節操、貞操。幾何^{いくばく}幾らか。愁^{うれ}う^う憂う。豈^{あた}どうして、疑問、反語の助字、なんと、感嘆の意を表す。花鳥^{かちょう}花や鳥。凡物^{ぼんぶつ}全てに物、並みの物。木門^{もくもん}木下門下。異郷^{いきやう}異なる國、里、郷。語^ご言葉。侏儻^{しゆたう}西方の蠻人の音楽、転じて外国語の意味不明なさま。馱舌^{たせつ}百舌の鳴き声。牙^が々^が女兒の愛らしい声。雜^{ざつ}雜多。都鄙^{とひ}都會と田舎。言語^{げんご}言葉。親^{しん}親身に。適^{かな}い^い適す。動客^{どうきやく}動く客。驚^{おど}く^く客。開口^{かいこう}開口一番、言い出す。交情^{かうじやう}友情。恰^{あた}も^も丁度、ぴったりと。同胞^{どうぼう}肉親、親兄弟。對面^{たいめん}面談、顔を会わせて。懷^{おも}い^い想い、思い。益^{ます}益々、いよいよ。無常^{むじやう}定めがない、人生の儚いさま。將^{まさ}に^に正に、当に。江門^{かうもん}江戸。須磨^{すま}兵庫県内。明石^{めいし}兵庫県内。佳麗^{かいれい}麗らかで美しい。歳^{さい}その年一言一言。請^こう^う要請、頼む。大都會^{だいたい}大都市。奇才^{きさい}才能。異能^{いのう}異なる能力。奇技^{きぎ}珍しく不思議な技。謠^{うた}い^い謠う、詠う、歌う。巧^{たくみ}巧み、工、上手。賤^{いや}し^し賤しい。遏^あす^す止める、とどめる、遮る、抑える、断つ。頤^き至る、懇ろ、長い、丈が高い。耶^やや、か、疑問、反語。極^{きつ}極致、極めて、とても。美肴^{びぎやう}美味しい酒の肴。甘鮮^{かんせん}新鮮で甘美。尽^{つく}す^す極める、悉く、終わる、尽きる。禹王^{うおう}夏の王朝を開いた聖王。易牙^{えきが}齊の桓公に仕えた宦官、料理の名人。嘗^{かつ}て^て以前、前に。流涎^{りゅうせん}涎を流す。塞^{ふさ}ぎ^ぎ塞ぐ。掩^{おほ}い^い覆う。嗚呼^{ああ}感嘆詞。無益^{むえき}得るところが無い。礼^{らい}礼記、五經の一つ。曰^{いわ}く^く云う。飲食^{いんじき}飲んだり食べる。男女^{だんじよ}男と女。大欲^{だいよく}大きな欲。焉^{えん}いづくんぞ、なんぞ、疑問、反語の意を表す、これ、ここに。聖賢^{せいけん}聖人と賢人。千言^{せんげん}千の言葉。万語^{まんご}万の言語。率^{りつ}引率、率いる、皆、戒め^{いじ}戒律、戒める。能^よ

く〓能つ、よい。操心〓心を操る、節操の心。勤學〓学問に勤勉。輟〓車のわきぎ、即ち、その度に何時も、容易く、専ら、忽ち。潜然〓涙の流れるさま。妙〓幼少、美しい、しなやか、精巧、人間の能力以上の働き、計り知れない、優れた働きがある。金石〓金と石。花月〓花と月、美しいものの代表。庶幾〓諸々の幾つかの。杜〓杜甫、閉ざす。愧る〓恥じる、慚愧。古〓昔。古代。与〓共に。子執〓中西子執。交〓交際。無常〓定めがないさま、人生の儚いさま。戒〓戒律、戒める。

33 贈甲田某遊後筑序

甲田某將遊後筑離酒已酣南子語之曰建臺以來而余年于今矣昇平之久聖君賢相之多民之浴雨露皆振古所無故余常以為物極必變自今以往昇平未可知也國之將興必有禎祥國之將亡必有殃孽我聞薩侯近辭東觀一不祥也洋夷窺邊二不祥也柳米二國構怨三不祥也有聖君賢相如此民之浴雨露如此而今聞三不祥者何耶然如前二不祥者或亦塗說也後一不祥者予聞之於柳藩之人某甚詳云某曰今茲二月日米藩之民與柳藩之屠者鬪爭民斧屠者傷頭殆死屠者大怒募其徒四方其徒大集以牛皮為冑幕于野鼓且盟于衆曰傷者死乎必得抵命柳藩不禁曰屠者之事我不知也或曰先是米藩曲堤詰之則曰是必屠者所為我不知也故柳藩今云爾或曰屠者至賤故兩藩常以度外待之其看殺之如殺禽獸然故有今日事云嗚呼屠者雖賤非亦天子之民耶況戒者國之大事豈以私怨忽大事而可乎以私怨忽大事雖三尺童子亦知其不可豈兩藩而不知耶余甚惑焉且也洋夷窺邊則兩藩不可不敵王愾也不幸有事於蕭牆則其奈我后然則向之言或小吏不識事體者之言也不然必有說焉子之遊筑若與其士大夫交則亦以余言語之若有說乎歸以告予然歟否歟祥歟不祥歟猶未可知也及子之歸也將其

論焉

釈文

甲田某後筑に遊ぶを送るの序

甲田某し將に後筑（現在の北九州）に遊ばんと欲す、離酒（送別会）己に酣たけなわ南子（南部五竹、本人）之れ語りて曰

う、建臺（弓は袋に刀は鞘にして戦わない）以来二百余年今まで、昇平（平和）これ久しく聖君（優れた天子）賢相（優

れた大臣）これ多くの民は雨露（恵み、恩恵）に浴し皆振古（昔から）故無き所、余は常に物極（世の中が行きすぎる）

必ず變ることとなる、これからも昇平（平和）が続くとは思われない、國を興すことは必ず禎祥（めでたい記し）

で國を亡すようなことは祲變（禍）ある、聞くところによれば薩侯（薩摩）近く東觀（江戸詰め）を辞めると云うが

これ一不祥なり、洋夷（あたり）が辺を窺は、二不祥なり、柳川藩と久留米藩の二國が構怨（恨みをもって仲違い）す

るは三不祥なる、聖君賢相の雨露に浴して此の如き三不祥は、何んぞや然るに二藩の不祥は、或は塗説（とせつ）

（立ち話をして聞いたことをすぐ受け売りして話す）なりか、後にこの不祥についてあらかじめを柳藩の人某し、甚だ

詳しく云つ、今茲こんじ（現在）二月 日久留米藩の民と柳藩の屠者とじや（屠殺場の連中、相手を罵る表現）は、鬨争どそう民たみ（騒がしく争う）に斧屠ふと（久留米藩のこと）は頭を傷めて大怒其の徒ともがらを募りて、四方に大集して徒ともがらは牛皮を以て胄ちすじを為し（屠殺された牛が怒り出したように）、野鼓且つ盟やこつちが（すさまじく生け贄の血を嘔りあつて団結するかのよう）に衆しやうは曰つ、傷者は死しても命をかけて必ず抵抗するだろう、柳藩は止めることなく、屠者の行為の事は我の知るところではないという、先ず是れは米藩を曲堤きよくてい（袋の鼠）に詰らせて屠者は必ず我が知らざるに為す、故に柳藩は云うのみ、屠者の賤しさに至るもので、故に両藩は常に度外に侍らせて、之れを看殺みころししにし禽獸きんじゆ（鳥や獣）を殺すが如くが、今日の事であると云つ。

嗚呼、屠者は賤しと雖も亦天子の民とは云い難く、況して戒しめるは國の大事なるを以て私怨しえん忽たちまち大事とすべきである。私怨しえん忽たちまち大事なり二尺童子にじちどうじ（判らずやを罵る表現）と雖も亦た其れを知る可きである、両藩をして知らず耶や、余は甚だ惑う且つ亦た、洋夷は辺を窺あたりっている時に両藩敵対している場合ではない。嘆くばかりである、事有りて幸とはならない。

蕭牆しやうきやう（内から起る心配事）の愁いである、それはどうしようも無いが此の言に向つて、或は小吏しやうしは識しるま

い事は之の言なり、そつだとせず必す説を有する、子の遊筑若し士大夫（高官の役人）と交わり余の言語のを説す若く有る、歸りて予め告げ然るにや不か祥か不祥か未だ知る可きもないが、子が歸るを待つて共に事について論ぜんとしよう。

語釈

贈る＝贈呈。甲田某＝甲田威郷。後筑＝筑後、福岡県。序＝はしがき、順序を追って申し述べる、次第。酣＝闌、盛り。南子＝南部五竹。建寧＝弓は袋に刀を鞘にしまい使わないこと。昭余年＝二百年余り。昇平＝世の中が穏やかに治まっていること、衰乱時代から抜け出て、太平に至るまでの上り坂の平和時代、太平。久＝久しい、長い。雨露＝雨と露。禎祥＝めでたく幸い。秧孽＝背の低い稲の苗とひこばえ、稲の切り株から新しく出た芽。薩侯＝薩摩侯。東觀＝参勤交代。辞す＝断る。洋夷＝静養の夷狄。辺＝我が国の周辺。窺う＝覗き見る。柳米＝柳川藩と久留米藩。怨＝怨む。構え＝身構える、用意する、抵抗する。聖君＝聖人、君主。賢相＝賢人、大臣。一不祥＝一つ幸せてない。塗説＝立ち話して、聞いたことをすぐ受け売りして話す。茲に＝此处に。与＝共に。鬪争＝騒ぎ争う、騒々しい喧嘩。斧、斧、斤。傷＝怪我、傷。負傷。殆ど＝大方、全て。大部分。怒り＝怒る。募せ＝増す。青幕＝甲冑。野鼓＝野太鼓。盟す＝盟約、同盟。于＝ここに、これ、発子の女児、と、接続、より、から、比較、場所、を示す、おいて、か、かな、文末の疑問、感嘆を表す。衆＝大衆、皆。抵れ＝抵触。米藩＝久留米藩。柳藩＝柳川藩。曲堤＝郭の堤。爾＝なんじ、その、この、然り、しかるに、のみ、ちかい。曰く＝云う。屠者＝殺す者、家畜の屠殺を業とする者。度外＝考えの外、問題にしない。侍し＝侍る。看殺＝見殺し。禽獸＝鳥や獸。嗚呼＝感嘆詞。雖＝けれども。賤＝卑賤。賤しい。天子＝天皇。況＝いわんや、まして。戒る＝戒律、戒める。私怨＝私的な怨み。忽ち＝忽然。童子＝童、子供。耶＝や、か、疑問、反語。惑う＝惑う、迷う。両藩＝柳川藩と久留米藩。王愜＝盛んな気概。有事＝旦緩急、

何事か起きた時に、蕭牆^{しょうきやう}＝門の内側、身内の、家庭内の。奈^な＝いかん、いかんせん、いかんぞ、どうにもしようがない。后^こ＝ひいて、後。小吏^{しょうじ}＝小役人、下級官吏。識^しらず＝知らない。体^{てい}＝体裁、ふり。遊筑^{ゆうちく}＝筑後に遊ぶ。士^し＝学徳のある人、男子の美称。大夫^{だいふ}＝周代、天子、諸侯に仕えた官吏の身分の一つ。歟^よ＝気が安らか、か、や、疑問、推測、反語、感嘆の意を表す助字。猶^{なほ}＝尚、直^{えん}焉^{えん}＝いずくんぞ、なんぞ。

34 送岳吉甫歸苓州序

吾友苓州岳吉甫愛業於後肥木先生丰姿秀麗長身而清癯鶴也余之游後肥也一見異其骨相以為必才子也吉甫一日持文稿來示余乞正文章流暢井井有法立論亦出人意表殆如老成人詩則似李長吉奇句往往驚人問其年即曰十有七年矣余曰果然他日樹赤幟於一方者必此人也吉甫亦以為知己者每文章若有疑義輒以以質于余余亦以為畏友云歲六月余將游溫岳時吉甫將省親乞從焉於是相携登溫岳時吉甫將南子歌於前竹子和於後歌聲震谷白雲為遏天風吹衣飄々乎欲仙甚快矣既而入苓州至富岡与吉甫分手至崎陽遍探西肥名山過後豐至日薩隅囊空衣弊蕭然而還再問輶邨書屋則吉甫先生焉相視各賀無恙乃謂吉甫曰与君携手登溫岳也流汗如滴葛衣尚熱恍乎如昨而今則雨雪霏々歲云暮矣名山常在會心之友難常得此游豈可復余也衣弊矣游亦倦矣將歸也吉甫曰僕亦彈劒已久矣請以一言為贈余曰平生見人不為少如子不易得之才哉平生交人也多莫逆如子亦少矣是別也不可不以賸傷哉貧也囊已空矣無以賸雖然余也貧於財耳於道則富矣請嘗為子述之余少也孤家貧而不自給平生好讀書久而頻有得乎道矣然才拙命薄欲立己仆欲行先躡乃以謂宿志不成命也如

何如其道則不可易也於是乎游鎮西欲探名山觀民風以為一家書嗟乎窮人無適而不窮游西肥則遭疾疫入東肥則中風寒至薩日隅前後豐則逢米価騰躍囊中為之空噫天之餒吾体膚空乏吾身一何至於此耶雖然余之窮乏既非一日而溝壑自分仆而復起百敗不撓以至於今日者唯有富貴不能謠貧賤不能移威武不能屈者在焉可以語君不可以贈君也君歸而求之自得之矣求之有道養之有法勿如宋人然求之以漸養之以緩日求月養游焉息焉勿有間斷庶幾乎得之夫人世知糾繩焉知富之不為貧賤之不為貴若素富貴而弗謠者有乎否素貧賤而弗移者有乎否逢威武而弗屈者有乎否若弗謠於富貴弗移於貧賤屈於威武則己有得焉君果有得焉乎則幸來問吾於錦水之浜示吾以其所得夫錦水之流清瑩可鑿水上之山秀麗可掬雖不及温岳亦得復奇矣沿流隨柳詠而歸不亦一快事乎行矣吾將刮目待之也

釈文

たけきちほ れいしゅう
岳吉甫 苓州に歸るを送るの序

れいしゅう
吾が友 苓州（天草、今の苓北町） 岳吉甫 業を愛し後肥に於て木先生丰姿秀麗 長身にして清癯鶴如なりと、

余の後肥うしろあそに遊ぶとき、一見異なる其の骨相こつそうは必ず才子さいし為すと、吉甫きちほ一日文稿ぶんこうを持して来たりて示し余に正しく文章の流暢りゅうちやうを乞こう。

物事の筋道を立て乱れることなく法を得て論を立て亦た出入の意表も殆ど老成人の詩の如し、以て中唐の詩人李長吉りちやうきち（李賀）は鬼才といわれ象徴的幻想的の詩が多く奇句往々にして人を驚かし、問えば十七歳という、余は曰う果して然り、他日樹たじつに赤い幟はたなるは必ず此の人なりと、吉甫亦た以て余の心や胸の中を良く知って呉れる人なり、毎に文章を成し疑義あるが若くその度に、質ただして余の敬服すべき友とを以て為云う。

歳の六月温岳きんたけに遊びしとき吉甫は、他郷に出ている者が故郷に帰り、父母を見舞うが如く従うを乞い、相携あいたずさえて温岳に登る、南子歌う、前竹子これに和わし後に歌声谷に震ひびき、白雲遏はくうんとどめるを為す天風は衣を吹いて飄々ひょうひょうと、仙人のようであつた甚だ快なり、既にして苓州れいしゅうに入り富岡に至り、吉甫と手を分けて崎陽きやうに至り、遍あまねく西肥せいひの名山めいざんを探し前後豊ぜみへうを過かり、日薩隅にちさくぐに至り囊空ふたこころむなしく、衣は弊やぶれ蕭然しょうぜん（物寂しく）として還また再び韞邨書屋いそんしよおくを問とい、吉甫と先生相視きちほ せんせい あいみて恙つつが無きをを賀がしてくれり、吉甫に謂いう、

君と手を携たずさえて温岳おんだけに登り、流れる汗は葛衣かついに滴るが如く尚お熱さは恍昨けつ（うっとり昨日）の如くに
して、今は雨雪甚だしく霏ひ々と降る、歳としの暮名山常くれめいざんに會心かいしん在りこの友は常には得ることは難かしい、
余も復た弊くしく再びこのように遊びは出来るものではない、吉甫きちほは曰う僕は亦た弾劒だんけん已に久しく、一
言の贈りを請こうと、余は曰う、平生人を見るを為さず少まれに子の如くに易きは可からずしてこの才さいを得
たる、平生は人に交り多くする莫なかれ、逆に子の如く亦た少まれに是れ別れて可からず、以て贍義じぎ（饑に送る）
かな。貧しく囊ふくろ己に空しく、以て贍はなむけ無く然ると雖も、余は亦た貧しく賤しくも道に於て富を請
い嘗かつて妻子を為し是れ予め少なる、孤り家は貧しくして自給せず、平生讀書を好み久しく、頻る
得るを有し道は、然れども才拙さいせつにして命薄く立ちて、己に仆れんとしている、行先躓ゆくさきづまずくを以て謂う、
宿志成らず命いのちまた、如何いかに（どうだろう）に其の如き道則ち易き可からず、是れ於て鎮西ちんせいに遊び、名山めいざんを探
し民風を以て一家書いっかしょを為している。
嗟ああ、窮人きゆうじん（生活の苦しい人）適てきする無くして窮きゆうせず、西肥せいひに遊びて疾疫しつえき（悪性の流行病）に遭あい、東肥とうひに入り中
に風寒く薩日隅前後豊に至りて、米価騰躍べいかとうやくに逢あい囊中のうちゆうは空しきを為し、噫ああ、天は吾に餒り皮膚は空

しく、乏しく吾が身は一つに何んぞや、ここに至るは然りと雖も余の窮乏既に一日にして非らず、溝壑（谷間）自から分り仆れて、復た起き百敗不撓以て今日に至る、唯だ富貴能はず貧賤を潤すも能はず、威武を移して屈するも能はず可し有り、以て君の語を可しとせず以て君に贈るなり、君歸りて之を求めこれを自得之を、求めるを有す道之れを養う法有るをせず、宋人の如く然るべく之れを求め以て漸らく養い以て緩月日を求めて游息して養い、間断せず庶幾うを有す、之れを得て夫れ人世の糾纏（纏わり）を知り、富の為さず知り貧賤を為さず貴きは若い富貴を潤さず、有否は素より貧賤に移らず有否は威武に逢い屈せず有否は潤さず若い富貴に移らず貧賤に屈せず威武則ち己に得るを有す、君果して得るをす、幸来たりて吾が錦水の浜に問い吾に示して錦水の流れ清瑩に鑑がみて水上の山秀麗を掬む可し及ばずと雖も温岳亦た復た奇を得る、流に沿うて柳に随いて詠じて帰るも亦た一快事行つよう、吾れ將に刮目（眼を擦って良く見る）して之れを待つなり。

語釈

岳吉甫 人名。 芴州 天章。 序 はしがき。 順序を追って申し述べる。 吾友 自分の友達。 業 学業。 木先生 木下韞邨。 丰姿 顔かた

ちが豊かなさま。秀麗＝秀でて麗しい。長身＝背が高い。清癯＝痩せていて清々しい姿。鶴＝鶴のよつな。遊ぶ＝遊ぶ、遊学、旅。後肥＝後、熊本。骨相＝顔の骨格。才子＝才能のある人。文稿＝文の下書き、草稿。乞う＝要請、頼む。流暢＝言語、文章等のすらすらと淀み無いこと、なだらか。井々＝物事に筋道が立っていて乱れないさま。法立論＝人の手本として守るべきもの。老成＝出来上がる。李長吉＝李賀、中唐の詩人。唐室の一族。奇句＝珍しく、不思議な句。往々＝常々、屢々、時々、まま、時として。曰く＝云う。赤幟＝赤い幟。樹て＝立てる、建てる。他日＝後日、又の日。一方＝一方、一角。吉甫＝人名。知己＝知人、古くからの知人。毎々、その度に。文章＝文、礼楽や制度など國の文化を形成しているもの、文字を連ねて一つの纏まった意味を述べたもの。疑義＝疑わしくて決定できない意味、疑問点。輶＝車の脇木、即ち、その度、何時も、容易く、専ら、忽ち。質す＝質問する。于＝ここに、これ、発字の助字、より、から、比較、場所を示す、おいて、か、かな、文末にあつてきもん、感嘆を示す。畏友＝敬服すべき友人。焉＝伊豆君ぞなんぞ疑問、反語の意を表す。相携え＝互いに手を取り。南子＝南部五竹。竹＝笛。子＝吉甫。和し＝合わせる。震せ＝振るわせ、震わせ。白雲＝白い雲。遏し＝止める、留める、遮る、抑える、断つ。衣＝衣服。飄々＝風に吹かれ翻るように。富岡＝天草。与＝共に。崎陽＝長崎の中国風の呼び方。遍く＝普遍、隅から隅まで。西肥＝西肥後。名山＝有名な山。過り＝立ち寄る、訪れる、去る。後豊＝豊後。日薩隅＝日向、薩摩、大隅。囊＝財布、懷中。空＝空。衣弊＝衣服も疲弊して。蕭然＝物寂しいさま。還り＝帰り。問う＝訪問。艸邨＝木下艸邨。書屋＝学舎。先生＝木下艸邨。相視る＝互いに見合う。恙無し＝無事である。賀す＝祝賀、喜ぶ。乃＝汝、即ち、そこで。謂う＝云う、述べる。葛衣＝葛糸で織った帷子。葛布。温岳＝雲仙。恍乎＝うっとりとする、気抜ける、臆気な。霏々＝雨や雪が甚だしく降るさま、雲の飛ぶさま。歳の暮、歳暮、年末。名山＝有名な山。會心＝心に適う。豈＝どうして、疑問、反語の助字、なんと。遊＝遊ぶ、旅、訪れる。倦＝倦怠、疲れる。弾劾＝剣の素振り。已に＝既に。請い＝要請、頼む。平生＝普段、常々。才＝才能。傷む＝悲しむ、傷む。贖＝贈り物、饒、饒別、贈る。雖＝けれども、たとい。讀書＝書物を読む。嘗て＝以前、前に。頻に＝頻繁に。才拙＝才能が拙劣、自分を卑下して云う。命薄＝薄幸、運命に恵まれない、薄命。仆れ＝倒れる、死ぬ。行先＝行く所。躓き＝躓く、倒れる、失敗する、しくじる。乃＝すなわち、そこで。謂う＝云う、述べる。自給＝自活、人に頼らず生きる。宿志＝前からの志、

宿望、夙に。命めい運命、天命。如何いかん如何、どうか。鎮西ちんせい九州。一家の書いっか一角の人の書。嗟さああ。窮きゆう窮まる。適かな適う。適合。西肥せいひ西肥後。疾疫しつえき
 流行病、悪性の流行病、疾病や疫病。遭あ遭う。遭遇、罹る。東肥とうひ東肥後。寒風かんとウ寒い風。薩日隅さつにぐ薩摩、日向、大隅。前後ぜんご豊とよ豊前と豊後。米価まいけ米
 の価格。騰とう高騰、高くなる。逢あ逢う。遭遇、逢う。囊中のうちゆう財布の中、懐中。躍おど躍り。躍る、空だから。空くう空、一銭もない。噫いああ。餓がい飢える、腐
 る。体膚たいひ体や皮膚。耶やや、か、疑問、反語。雖いえどもけれども、たとい。窮乏きゆうぱふ乏しく窮まる。溝壑こうかく深い谷、深い空堀、溝。仆たふれ倒れる、倒れ
 伏す、死ぬ。百敗ひゃくはい百の失敗。撓たふ撓ます。負お負けずに、弛ゆる弛まず。富貴ふき富と貴人。能あた能はず。出来ない。謡うた謡う。歌う、詠う。謡う。貧賤ひんせん貧しく賤しい。威武いぶ
 権威と武力、非常に勇ましい力。宋人そうじん宋の人。漸ようや漸く。漸次。緩ゆるや緩慢、緩やかに。遊ぶ。訪あそ訪れる、旅。間斷かんだん絶える間なく。庶幾しよいく諸々幾つか。
 弗ふつ払う、去る、あらず、ず。糾縄きうじよう罪を糾して縄を掛ける。貴賤きせん身分の高いと低いと、貴いと賤しい。若素じやくそ元々の素質。素そ素質。錦水きんすい錦川、
 錦帯橋の架かっている川。清瑩せいえい清らかな美しい石の名、玉の美しい色。鑿さく泉を鑿る。水上みずかみ上流、水の上。秀麗しゆれい秀でて麗らか。掬く掬む。推量、掬
 う。奇き珍しく不思議。妙。詠よ詠み。詠む、詠う。快事かいじ愉快な事。刮目かつもく目を凝らす、目を擦って良く見る。

35 送衛藤厚夫歸日州序

霧州之山自遠而望形如烏帽突天而立蒼氣鬱勃戊午秋余自後肥經佐土原至飫肥道過霧州之下植筇望之喟然而歎曰異哉山也是非帝王之起焉者耶磅礴之氣猶如未漠然其所鬱積或出磊落魁偉之人焉耶遂至飫肥還又歷佐土原過高鍋至延岡求耶謂磊落魁偉之人無得焉因又異名精靈鬱勃如此而不逢一異人何人也余足跡未遍而未逢其人邪既而又入後肥先是識日州衛藤厚夫于韃邨書屋歲四月相携登蘇岳自是交情愈密某聞余還則來告曰遲子世久矣僕之歸將在近幸賜一言贈余乃語以前所異且謂曰蓋有乃矣吾未之見也子若知之幸以告吾厚夫曰詩云維岳降神生甫及申名岳之降神自古有之雖然申甫之後復有幾人以僕觀之彼人也我也何借於岳神之手哉書曰維聖罔思為狂維狂思為哲僕也雖狂將思之世人則曰某也自岳降天也鳥為可及某也為列星命也鳥可企遂自奔而不自脩是以其狂愈狂而其愚益愚宜乎子之不逢一異人也余曰有是哉有是哉名山之氣果不漠然也孟子曰人皆可以為堯舜微子言人或不信焉行矣厚夫勿令人謂霧岳無靈曰州無人也

釈文

衛藤厚夫日州に帰るを送るの序

霧州の山遠くより形を望む、恰も隱者がかぶる頭巾の烏帽が、天を突くかの如くして、蒼氣鬱勃（草木がこんもりと茂るさま）として立っている。戊午の秋余は後肥より佐土原を経て、飫肥道に至り霧州の下を過りに節を植てて之を望む、喟然（嘆息するさま）歎きて曰う異しき山かな、是れ帝王（天の神）の起るに非らず、磅礴（満ち塞がるさま）の氣猶お未だ漠然として、其の所鬱積（籠もり塞がるさま）或は磊落（小事に拘らないさま）として偉丈夫（体が優れて立派な男）に魁て、遂に飫肥に至り還た、又佐土原を歴て高鍋を過りて延岡に至り、暇を求めて磊落魁偉を謂い得る無く又異名山精靈鬱勃此の如くして、一異人何人にも逢はずして、余は足跡未だ遍ずして、又後肥に入り先ずに識る、日州の衛藤厚夫ここ軒邨書屋歳四月相携えて蘇岳に登る、是れより交情は愈よ密となる某し余に聞き、還たまみえ来りて告げて曰う、子は世に遅れること久しく、僕の歸り將に近くに在り一言贈るを賜るを幸とする、余は語を贈る以前異き且つ謂う、これ有するを曰う吾れ未だ之を見ず、子若し之れを知るならば幸いとする、以て厚夫

吾に告げて詩に曰う、岳やまを維つぎて降り神は生れしめに及び、申して名岳いにしえに降し古より之れ有すると
 雖も、然るに申して甫はじめし後に復た幾人か有り、以て僕われは之れを觀て彼の人また我は人なり、何んぞ
 岳を借りての神の手しむかな書いて曰う、維聖いせい（聖の始まり）罔思ぼうし（道理にないことをこじつける）狂維きやういを為す、狂思哲
 を為すは僕われなり、狂と雖も將にこの思い世人則ち曰う某それがしになり、岳やまより降天は鳥からすか某それがしに及ぶ
 なり、列星命を為す鳥からすなる可し、企からすだてて遂に自棄じき自脩じしうせず是れ以て、其の狂いよいよ愈いよいよ狂いよいよにして其の
 愚ぐは益々愚ぐ宜よしく、子の逢いはず一異人いじんなり、余は是れ有るかと曰う、是れ有るかな、名山の氣果して漠然ばくぜん
 （黙っている）とせず、孟子もつし曰く人皆以て為す可し、中国古代の聖天子と謂われた堯帝と徳のある天子の
 代表といわれた舜帝と殷の忠臣微子びしは曰く言う人は或は信ぜずを行う、厚夫人いいつけに令なくと勿なれ、霧岳きりだけ
 靈は無く日州にっしゅう無人かな。

語釈

衛藤厚夫えいとうこうふ 人名。日州にっしゅう 日向。序しよ はしがき、順序を追って申し述べる。霧州むしゅう 霧島。形かたち 形、型。烏帽えぼう 烏帽子。蒼氣そうき 青々と
 した氣。戊午ぼ 安政五年、一八五八。後肥ごひ 肥後。自より から、より。佐土原さどはら 宮崎県佐土原町。飢肥道うへいどう 飢肥街道。過あり 通過。箠き 杖にする竹、杖。
 植たて 立て。喟然き 嘆息するさま。帝王ていおう 天子。焉えん なんぞ、これ、ここに。耶や や、か、疑問、反語。磅礪ぽうりく 広大で限りのないさま、満ちふさがるさ

ま。漠然^{ばくぜん}静かなさま、廣くとりとめのないさま、明らかでないさま、ぼんやりと。鬱積^{うつせき}籠もり塞がる。飫肥^{おび}日向宮崎県。還る^{かえ}帰る。歴す^{れき}歴訪。
 過り^{よぎ}旅、訪れる、通過。高鍋^{たかぐへ}日向、宮崎県。延岡^{のべおか}日向、宮崎県。猶^{なほ}直、尚。耶^やや、かの疑問。磊落^{らいらく}心が大きく小事に拘らないさま。魁偉^{かいい}
 体が大きくて立派。因^{ちなみ}に理由、由来。訳。異名^{いみょう}異なる名、あだ名。精霊^{せいれい}魂、神、物の怪、死者の魂、不思議な氣、宇宙万物の根元。鬱勃^{うつぼつ}生氣
 や意氣の盛んなさま、草木のこんもりと茂るさま。異人^{いじん}普通より違う人、外国人。足跡^{そくせき}足跡、歩いた跡。謂^いつ云つ、述べる。遍^{あまね}く隅から隅ま
 で。邪^じ邪な。鞞^{いん}木下鞞。書屋^{しよべ}学舎。歳^{さい}その年。蘇岳^{そだく}阿蘇山。交情^{かうじやう}友情、交際。愈^ゆ益々。密^{みつ}親密。子^し衛藤厚夫。遅^{おそ}遅い。久
 し^{ひさ}久しい。相携^{あいたこ}え互いに手を取り。乃^{だい}そこで、なんじ、それがし、そこで、上を受けて下文を起こす助字、なんぞ、語調を整える助字。以前^{いぜん}
 この前、前から。蓋^{けだじ}思つに、不確かなことを推定する助字、これ、助字解説なんぞ、反語の助字。維岳^{これやま}この山。維^{これ}維、これ、また、ただ、綱、
 紐、繫ぐ。甫^ふ始め、始めて、大きい、父、野菜畑。申名岳^{しんめい}山名。降神^{かうじん}神が降りる。雖^{いふも}唯、助字解説、確定の助字、けれども、仮定の助字、た
 とい、としても、これ、発語の助字。申^{しん}もつす、のびる、かさねる、神。申^{さる}岳神^{がくしん}山の神。曰^{いわ}く云つ、申す。維聖^{いせい}此の聖。罔思^{ぼうし}物を知らない。
 罔^{ぼう}網、物を知らない、罪人を捕らえる法律、人を束縛する、道理に暗い。岳^{やま}山、山岳。哲僕^{てつぼく}明らか、賢人、物事も道理に明るい人、見識が高く道
 理を極めた人。命^{めい}運命。自奔^{じほん}自ら奔走。脩^{しゆ}ならず修まらない。愚^ぐ愚か。益^{えき}益々。宜^い宜い。漠然^{ばくぜん}静かなさま、黙っているさま、廣くとちと
 めのないさま、明らかでないさま、ぼんやり。孟子^{もうし}戦国時代の鄒省鄒県地方の人、王道、仁義を説いた亜聖といわれる。堯舜^{ぎやうしゆん}中国古代の聖天子で
 ある舜帝と舜帝。微子^{びし}殷の忠臣、紂王の庶兄で屢々紂王を諫めたが聞き入れられず、國を去つた、のちに周の武王に殷の後裔として宋に封じられた。
 焉^{えん}いずくんぞ、なんぞ、疑問、反語の意を表す、これ、ここに、これより、これに、句末に用いる助字、か、や、疑問、反語の意を表す。霧岳^{きりやま}霧島
 山。日州^{ひしゅう}日向、宮崎県。

苓之為州在西南海洋中真耶謂彈丸黑痣之地而其居民率皆蜑戶𪔐丁農人樵父之類耳其在蜑戶𪔐丁農人樵父之間卓然讀書學道有過人識者吾甲田威鄉耶余之謁木先生也與威鄉相得懽甚威鄉為木門高足為溫厚長于史學與之語古今成敗滾々如流語及洋夷事扼腕切齒為發大息大不類其平生蓋其中有確乎不可拔者而然矣歲之五月告予曰吾歸將有日乞一言贈余乃告之曰人之所貴在德不在地文王西夷人也殷紂中華人也德如文王夷而謂之華可惡如殷紂華而謂之夷可今中國之人奢靡輕薄殉世遂時人歌亦歌人舞亦舞脅肩哨口拳動皆視于人何与傀儡異哉近歲洋夷窺邊拳世大怖二三學火技者相率稱曰海防要器莫過西洋大砲焉於是劒客壳劒而鑄砲射者鬻弓以換硝劒客射者猶可自称儒流者被異服學蘭語成隊結伍以放巨礮大礮其声日震山岳亡何忽然絕響嗚乎是可謂無特操者矣豈得不謂之夷矣耶夫中國之廣土民之多索一人不殉世如威鄉者事亦不可得也亦宜矣可勝歎哉夫為大丈夫者當烈風迅雷不迷幽囚困阨不變臨大事遭離亂坦然不動心曹孟德在戎馬之間橫槊而賦詩諸葛亮葛巾羽扇于矢石之際未嘗戎服視百万貔貅不異木偶人自非坦然不動心焉能如

此哉今豈不能及二者而有少知大義不殉世者戮力一志以輔翼王室則假使洋夷拳國以來亦無所患獨恨世人畏犬如虎徒使夜郎王自大也頃者洋夷復來諸互市昔即在門今則入堂其勢已迫矣是實危急存亡之秋也吾曹不可不感激自奮勵節磨行以敵王愾也醴泉芝草不擇地而生安知苓州僻陋一小島不生卓偉奇傑之士以振勵天下之士氣耶威鄉聞斯言也蓋義形於色慨然而謂曰乞書且夕誦之以自勵遂書為贈

釈文

甲田威郷天草に歸るを送る

苓これ州しゅうを為して西南海洋の真中まんなかに在り、謂う彈丸黒痣くろし（黒痣）の地にして、其の居民率きょみんひきいて皆蟄戸たんこ（海上生活者や漁業）齟丁さちよう（塩作り）農人樵父たけいの類にして、其の蟄戸を嘗み齟丁農人に樵父しやうふの間に、卓然たくぜん（高く優れて）いる）と書を読み道を學び過すは、人の識しるところなるは吾が甲田威郷なり、余の謁まみえるは木先生もくせんせいと、威郷を相あひい權けんびを得る、威郷は甚だしく木門もくもんの高足こうそく（一番弟子）を為す、人は温厚おんこうを為して史学しがくに長て、古今の成敗を語れば滾々と流るが如く、洋夷やういの事に及んでは扼腕切齒やくわんせつし

(残念がったり喜ぶときは左手で右腕を強く握りしめる) 大息を発すること大にして、其れ平生に類せず其の中に有りて確乎(しつかりとしたさま) 抜くは可らずと、然り歳の五月予に告げて曰う、吾が帰り將に日は有らず一言賜りを乞うと。

余これに告げて曰う、人の貴き所は徳に在りて地に在らず「文王」は西夷の人なり、周の武王に滅ぼされた殷紂は中華人なり、徳は文王は夷の如しと云うに、是れ晋(文王の時代の名) 悪し可く殷紂の萃あつまるが如しと謂うは、之れ夷は今に可し中華の人は奢靡(贅沢ではない) 輕薄(真心がない) にして、世を殉時をい人は歌い亦た歌は人を舞い、脅肩(わざと敬い謹む態度) 亦た舞い口を咻め挙げて勤め皆視る、人は何んと傀儡(人の思うままに操られる) かな、近歳洋夷辺を窺い世を挙げて大に怖れている、二三火技を學び相率いて称して曰う、海防の要は西洋の大砲に過ぎる莫れ、是れ於て劔客は劔を売り、鎗砲射者は弓を鬻に換え、硝(火薬) 劔客者は、自から称える可し儒流者は異服を被て蘭語を學ぶ隊を成し、伍を結び巨礮大礮を放つて其の聲は日に山を震はせて、岳を亡さんと何んたる忽然絶響なる、嗚乎、是れう可し特に操者無く豈謂わざるは、之れ夷夫れ中華の之れ廣土の民の多きの一人索て世に殉る

は、威郷いききやうの如くのへ聳る亦た得るを可からず、亦た宜しく勝れるを歎かず、夫れ大丈夫だいじやうぶを為す、烈風迅雷れつふうじんらいに当り迷はず、幽しゆうに因よつて困阨こんあく（苦悩）変らず大事に遭あつて離、乱に臨み、坦然たんぜん（平らかなさま）不動心で、三国の魏ぎの武帝曹孟徳は戎馬じゆうば（軍馬）の子が国境で生まれ紛争が絶えず長い間国境で駐留していえう間に、槊ほこを横にして詩を賦ふす、諸葛亮は葛巾しよかつりやう（葛で作った頭巾）羽扇うせんで、矢石やせき（戦争）の際未だ嘗て戎服百を視みて万貔貅ひきゆう（猛獣の名で勇猛な軍隊のこと）と木偶もくぐ（木偶、木で作った人形）に異らずと自から坦然に非らずとも、不動心能く此の如し、今能はずと雖も二者に及び、少なくとも大義不殉を知るを有す、戮力りくりよく（力を合わせて協力志を二つにする）以て王室を輔翼ほよく（助け護る）仮にも洋夷やういをして拳國以來り亦た患うれい、獨り世人を恨むところは無し、犬を畏れる虎の徒に、夜郎自大やろうじだい（つまらぬ人が世間知らずを庇っている）王を使得自大なり、頃者けいしや（近頃）洋夷復た来たりて互市ま（開港して貿易）を乞う昔即ち門に在り、今則ち堂に入り其の勢い己に迫まる、是れ實に危急存亡の秋、吾曹ききゆうそんぼう（ともがら）感ぜざるは可からず自から激しく奮励節磨行ない以て敵王愾てきおうがい（諸侯が王の恨み怒る相手に立ち向かうの意で相手に對抗して打ち勝とうとする意気こみ敵愾心）なり、醴泉れいせん（甘味のある水）芝草ししやう（薬草）の地を擇えらばず、安んじて苓州僻陋れいしゆうへきろう（狭い辺鄙な所）の一小島を仮りて生きるを知り卓偉奇傑の士は生ぜず以て萬天下

223

「使い、使いの徒。夜郎王やろうおう」つまらぬ人間が世間知らずでいばる、漢代に夜郎國、今の貴州省野西境にいた未開部族が自分の國が一番大きいと思つていたことによる、その王。自みづかより、から。大だい大きい。頃者けいしや「この頃、此の所。復ふたび」再度。諸互市しよこし「諸々の通商。入堂にやう」堂に入る、江戸城中に登る。實じつに「洵に、真に。危急存亡ききふし」存続するか亡びるかが決まる大事なとき、秋は成熟のときであるから、大事な時の意、諸葛亮の出帥の表。曹そう曹操。感激かんげき「心に感じて奮い立つ、また人の心を奮い立たせる。奮励ふんれい」奮い励む。節磨せつま「節操を磨く。行おこな」行い、行動。王愷おうき「盛んな敵愾心。醴泉れいせん」甘酒、甘い水の出る泉、甘泉。芝草しはそう「芝や草。擇たくさず」選ばず、選択。苓州れいしゅう「天草。僻陋へくれう」土地が片田舎で風俗が田舎じみている。一小島いっせうとう「一つの小さな島。卓偉たくゐ」ずば抜けて優れている。奇傑きけつ「珍しく優れた人、とつても優れた人。振励しんれい」振るい励む、奮い励む。士氣しき「戦士の元氣、意氣、氣風武士の氣風、侍氣質。斯言しげん」この言葉、これらの言語。義形ぎけい「借り物の形、形骸、形だけ。慨然がいぜん」憤り嘆くさま、悲しみ嘆くさま、感慨、慷慨、憤慨。誦じゆし」唱える、暗誦。自励じれい「自らを励まし。遂ついに」終わりに。贈りおく贈呈。天下てんか「國中、世界、天と地。

余蚤聞豐之日出有西嶠先生者博雅君子也及得其文集而讀之壯其文辭而想見其德望欽慕仰止欲一謁之者久矣戊午之春余遊鎮西則先生墓木既拱矣以此行之不及其在世為憾也及至東肥見一少年於韞邨書屋於稠人之中眉宇清秀顏色皙白骨相不凡余奇而問焉則曰姓帆足名天民後豐之人也予怪而謂曰莫是西嶠先生之族耶曰然僕其義子也一日以其文稿請余一言受而閱之其文雄壯渾厚可觀乃謂之曰嗚乎何其文之似西嶠先生也螟蛉之似蜾蠃君之謂也余欲見先生而不能命也而与君萍水相遇亦命也有意于見而或不得見無意于見而或不得見無意于見而或得見嗟乎天地之間何其事皆出于意料之外耶雖然偶然相遇而得先生之後抑亦奇矣余雖不得見先生然得見其後亦幸矣愛人者及屋上之烏況君非屋烏乎君妙齡而儁才自今以往學日進德日成其所底止未可知也其不隕箕裘之業也必矣余既欽先生之為人又奇君之才於是乎書

釈文

帆足子徳文稿後に書す
ほあしとく ぶんこうい しょす

余は蚤(虱)に、早くより)に聞く、豊の日出に西嶺先生有り、博雅(学問が博く行いが正しい)君子なり、及んで其の文集を得て之れを読む、壮んにして其の文辞に想いを見る、其の徳望(徳が高く人望がある)欽慕(敬い慕う)の、止どめて一謁する久しきかな、戊午の春余は鎮西に遊び先生の墓木既に拱なり(亡くなられて既に年月が経たこと)、此れ行くに及ばず其の在世憾むを為して、東肥に至るに及び鞆邨学舎に一少年を見る、稠い人の中、眉宇清秀顔色皙白骨相凡にあらず、余は奇しくも問う、則ち曰う姓は帆足名は天民と曰う後豊の人なる、予は怪みて云うに、是れ西嶺先生の族やも曰う僕は其の義子なりと、一日請う閱て是れは其の文は雄壮渾て厚く観る可し、乃ち之れ西嶺先生に似たる、螟蛉これ蜾蠃に似たる(蜾蠃が青虫を捕つて運んで自分の子の餌にするのを昔の人は、その幼虫を自分の子として育てると想ったので言つ螟蛉子)君を謂うなり、余は先生を見えんと欲すれど能はも、運命なる君とともに萍水相逢う(浮き草が水のまにまに漂つようの意で、人が偶然に出会ふたとえ)も亦た運命なり、意有て或は見るを得ず、意無きして見えて見るを得る、嗟乎、天地の間何ん

ぞ其の事は皆干意、料らいの外を出ずるや、然るに偶然と雖も相過ぎる先生の後に抑も奇なり、余は先生に見えずと雖も然るに見えるを得たりその後亦た幸いにも、愛する人は屋上の烏に及ぶも況んや君は屋上の烏に非らず、君は妙齡にして雋才（才能に優れた人）今より以て往學日進徳日其の所成す底止（留まる）未だ知し可し、其れ隕ず箕裘（父祖の業を見習つて受け継ぐこと）の業必ずや、余は既に先生に欽みてこれ人の為す又君の才に奇しくも是れを書す。

語釈

帆足子徳ほあししよく 日出藩、家老帆足万里の養子。文稿ぶんこう 文の草稿。蚤さう 蚤は速いから転じて、早くから。以前から。豊ほう 豊後。日出ひじ 日出藩、豊臣秀吉の正妻ねねの方の甥木下家が初代藩主。西嶋さいじま 帆足万里。博雅はくや 学問が廣く、行いが正しい、またその人。君子くんし 才徳がある人。文集ぶんしゅう 一人或いは数人の文集を集めた本。文辞ぶんじ 文章の中の言葉。壮さう 雄壮。徳望とくぼう 徳が高く人望がある。欽慕きんぼ 敬い慕つ。想いおも 思い。一謁欲すいちやくつよく 一見会いたい。戊午ぼし 安政五年、いち八五八。鎮西ちんせい 九州。遊ゆう 訪れる、旅、行く。墓木ぼぼく 墓に植えた木。拱きよう 拱こまぬく、両手の指を組み合わせ敬礼する墓木既に拱なり 墓に植えた木が一抱えほどもあるに感じになったの意、人が死んでから多くの年月が経たこと。行な 行い、行く。旅。在世ざいせい 生前。憾かん 遺憾、残念。一少年いちせうねん 一人の少年。鞆邸たんてい 木下鞆邸。書屋しよおく 学舎。桐人ちゆうじん ぎつしりと集まっている多くの、多くの人が集まっている席。眉宇びう 眉の辺り、顔の中で眉の位置が、家での宇、軒、にあたるからいう、顔かたち。清秀せいしう 顔かたちが清く秀でている。顔色がんしよく 顔の容色。皙白せきぱく 明らかに輝く、はつきりしているさま。骨相こつしやう 骨組みの現れ、骨組みに現れた、二位の性格や運命、主として顔や頭の形についていう。凡ぼん 平凡、全て。奇き 珍しく不思議焉えん

「いづくんぞ、なんぞ、これ、ここに。東肥とうひ。東肥後。曰いわく。曰いわく述べる。帆足ほあし。姓な。名な。天民てんみん。後豊ごほう。豊後。怪あやしみ。訝うしろり。雄壮ゆうさう。雄大で壮大。渾こん身み。奮ふつて、全みて。観みる。見みる。乃だい。そこで、すなわち。螟蛉めいれい。青虫、蛾の幼虫、養子、じが蜂が青虫を運んで幼虫の餌にするのを見て昔の人は幼虫を自分の子として育てると思つたので云つ。蜾蠃から。じが蜂。繼つる。螟蛉子めいれいに通ず。似にる。似にている。謂いつ。云いつ、述べる。与とも。共に。萍水へいすい。浮き草、水草の一種。命めい。運命、天命。料はかる。推量、計る、図る。耶や。や、か疑問、反語、感嘆の意を表す助字。偶然ぐぜん。偶々、予期しない。相あい遇あい。会あい。会あつ。雖いふ。唯ただ。然しかり。其の通り。屋上の鳥。屋根の上の鳥、鴉、ある人に対する愛を他に及ぼすこと。況あ。状況、どうして、いわんや。屋おく。家。妙齡めうれい。年頃、年若い。偶才しゅさい。才能に優れた人。自よ。から、より。日進にっしん。日に日に進む。徳日とくじつ。日に日に徳を積む。隕おちず。墜おちちない。箕裘ききう。箕はまめがら、荻に似た草の一種、昔えびらを編む材料、裘は皮衣、獸類の皮で作つた着物、皮衣を着る。業ぎふ。学業。欽きん。敬きつ。奇き。珍しく不思議な、優れる。才さい。才能。

38 送川子道之長州序

周南之山。迤邐而達於赤關。是毛利公之所有耶。余之游鎮西也。植筇而望之。謂然而嘆曰。元就公之起安藝也。提三尺劍。略有十有三州。關西風靡。可謂盛矣。然金甌反落至賤至微。擊鞋奴之手矣。公之子孫。其所有。獨如此耳。而豐公亦安在哉。嗚乎。貴賤貧富壽夭盛衰。皆有天數存焉。非人力之所能為也。夫以區々之力。欲與造者爭。豈其非惑之甚矣耶。人皆有貴於己者。弗思焉耳。富貴不能淫焉。貧賤不能移焉。威武不能屈焉。是以。能泥塗軒冕。蔽屍天下也。文曰。確乎不可拔者。潛龍也。丈夫至乎此。可以稱英豪矣。滔滔天下。遺手內而殉手外。亦何心哉。川子道。遭世罔極。大不得志於當世。子道之趣長門也。有若不憚然者。故吾道天之數道之理。以告之。且賦詩以為贈。其辭曰

世溷濁兮麟鳳藏。時否塞兮鴟梟翔。澆季世兮不可居。高其事兮葆而光周之山兮多靈藥。未以餌兮可制魄。周之水兮多錦鱗。釣而游兮孔之樂。早歸來兮碧山阿。吾教女兮紫芝歌。

時年三十三

川子道せんしどうを長州ちようしゅうに送るの序

周南しゅうなんの山は迤邐いりして赤關あかぜきより達す。是れ毛利公の有する所なり。余の鎮西ちんぜいに遊びあそ箚つえを植りて之れを望み。謂然ぎぜんとして嘆んず。元就公の安藝あきを起す、堤三尺の劍は略ぼ十有三州有り。關西風靡ふうび盛んに謂う然るに金甌きんおう反落して賤はずかしきに至りて拏獲だかく鞋奴あいどの手。公の子孫其の有する所獨り此の如し。豐公も亦た安在なる哉。嗚乎。貴賤きせん貧富ひんふ壽夭じゆうせう盛衰せいすいみな皆天の數ほど存す有り。人力の能はたらきに為すに非らず。夫れ區々の之れ力を以て。造物に争そわんと欲す。其の惑の甚だしきは人皆己おのれを貴ぶ。思つてはならないことは。富貴淫りに能くよせず。貧賤移すを能わす。威武いぶに屈するを能わす。是れ以て能くよ泥を軒冕けんべんに塗る。蔽くつつて天下を雇する。文に云う確なるは抜く可らず。潜龍せんりゅう丈夫これここに至りて英豪えいこうと稱す以てす可し。滔々とうとう遺して手の外

に殉^{した}がうは亦^とた何んな心哉。川子道世^{せんじだうせい}の罔極^{いんごく}に遭い大きな志を当世に得ず。子道之れ長門^{ちやうもん}にき。不憚^{ふえん}のごとく然りあらば故に吾が天の數道の理を以て之れを告ぐ。且つ詩を賦して贈と為す。其の辭ここに。

世溷濁兮麟鳳藏

世は溷濁^{こんだく}して麟鳳^{りんほう}藏^{かく}る

時否塞兮鴟梟翔

時に否塞^{ひさく} 鴟梟^{しきよう}翔^{かけ}る

澆季世兮不可居

澆季^{きやうき}の世には居するは可からず

高其事兮葆而光

高く其の事 葆^ほ光^ひする

周之山兮多靈藥

周^{しゅう}の山 靈藥^{れいやく} 多し

未以餌兮可制魄

未^{らい}以^い餌^じし魄^{はく}を制し可し

周之水兮多錦鱗

周^{しゅう}の水には錦鱗^{きんりん} 多し

釣而游兮孔之樂

釣^{いづ}りして游^{あそ}ぶは孔子^{こうし}の樂しみ

早歸來兮碧山阿

早く歸^へり來^きたれ碧山^{へきさん}の阿^{くま}に

吾教女兮紫芝歌

吾は女に教む紫芝の歌

時年三十三

語釈

川子道せんしどう 人名。長州ちやうしやう 長門ちやうもん 周防の二州しゅうなん 周防しゅうなん 周防の南いり 迎邊むかえ 曲がりくねつてゐるさま。小さく連なるさま。赤關あかぜき 赤間関、下関。鎮西ちんせい

筑紫ちくし 九州きゅうしゅう 游ゆう 旅をする、遊ぶ。筇きやう 杖に適した竹。杖きやう 謂然いぜん 嘆く、嘆息するさま。安藝あき 広島県、安藝あき 備後の二州ふのび 風靡ふうび 風が草木を靡か

すように、靡き従わせる、風が靡く。金甌きんおう 金を入れる瓶、秀吉の馬印し、金の瓢箪ひょうたん。貴賤きせん 貴人と賤人。貧富ひんふ 貧者と富める者。壽夭じゅうよう 長寿と夭折。

盛衰せいすい 栄える者と衰える者。賤せん 卑賤。微孽びだ 小ざくとらえる。鞋奴けいと 草履取り。威武いゐ 武力、威力。潜龍せんりゅう 潜んで未だ天に昇らない龍、天子が未だ

位に就かない時の称、未だ世に出ない大人。英豪えいこう 優れた人物。滔々とうとう 洋々、水が広く沢山あり。屍し 沓、履き物。鞋ばい 草鞋。奴ど 奴。殉じゆん 國や主君

の為に命を捨てる。長門ちやうもん 長門。罔もう 網をかけるよう法律で罰する。惴然えきぜん 喜ぶさま。溷濁こんだく 混沌と濁る。麟鳳りんほう 麒麟と鳳凰、極めて立派な人物。藏ぞう

す 收藏、持っている。鳴臬しやうしやう 臬、凶悪な人のたとえ。翔しやう 飛翔、飛ぶ。澆季きやうき 人情、風俗の輕薄になつた末世。葆ほ 草が茂る。靈藥れいやく 靈驗あらた

かな葉。周しゅう 周防。未以らい 未を以て耕す。餌じ 食べる。魄はく 魂。錦鱗きんりん 魚。游ゆう 旅をする、遊ぶ。孔こう 孔子。碧山へきさん 緑の山。阿くま 隈。隅すみ 紫芝しせん 長生

きの仙薬。